三重県埋蔵文化財調査報告281

替田遺跡(第５次～第８次)発掘調査報告

2007(平成19)年３月

三重県埋蔵文化財センター

序

県都・津市は、伊賀・伊勢で三十二万四千石を領した藤堂氏の城下町です。その中心部を貫く安濃川は、流域に肥沃な穀倉地帯を形成し、伊勢湾に注ぎます。この安濃川は、下流部においては蛇行を繰り返すため、藤堂氏もその治水に腐心し、様々な施策を行いました。そのひとつが下流部の城下町を洪水から護るため、上流部で堤防を低くして大水が出た際にそこを切って水の逃げを確保した「三泗堤」といわれる堤です。現在もこの部分の堤防は低い高さに押さえられていて、津市街地に大量の水が浸入するのを防いでいます。

さて、今回報告する替田遺跡はちょうどこの三泗堤の下流側、安濃川の南岸に位置し、安濃川から引水して南側の岩田川に注ぐ小河川、三泗川沿いに展開しています。安濃川から岩田川にいたる低地部は、このようにいったん出水があったときは絶えず洪水の危険に晒される地域ですが、今回の調査によって、この地においても微高地を利用しての人間活動の活発な展開を確認することができました。まさに、自然と格闘しながら自らの生活の安定のために力を注いだ先人たちの日常が甦ってくるようです。

埋蔵文化財は、日本や日本人、あるいはそれぞれの地域が歩んできた営みを、先人が大地に残した生活の痕跡である遺構と日々の生活に使用した遺物、つまり具体的な造形物によって現代の我々に伝えてくれるものということができるでしょう。このように考えれば、埋蔵文化財とは、現代に生きる我々が過去の歴史を振り返り、現在立っている座標軸を確認して、明日への歩みを踏み出す方向を探るひとつの道標ともなりうるものといってよいのではないでしょうか。

最後になりましたが、本書が過去に学んで豊かな未来像を構築するための材料のひとつとして活用されることを期待いたしますとともに、県民の皆様の埋蔵文化財保存へのより一層のご理解とご協力を念願して序文といたします。

平成19年３月

三重県埋蔵文化財センター
所長　吉水康夫

例　　言

1　本書は、津市南河路に所在する替田遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、国道163号バイパス整備事業（国道163号国補特殊道路改良事業、国道163号南河路BP国補特殊道路改良事業）に伴うもので、最終の調査面積は5,521㎡である。

3　発掘調査および報告書作成は、次の体制で実施した。

〈平成13年度（発掘調査）〉
調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県埋蔵文化財センター
　　調査研究第一課　技師　大川操、研修員　黒田聖也
発掘作業　㈶三重県農業開発公社

〈平成14年度（発掘調査）〉
調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県埋蔵文化財センター
　　調査研究グループ　主査　筒井正明、主事　黒田聖也、研修員　野田有美、技術補助員　豊田祥三
調査作業　安西工業㈱

〈平成15年度（発掘調査）〉
調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県埋蔵文化財センター
　　調査研究グループ　主査　松田珠美
調査作業　国際航業株式会社

〈平成16年度（発掘調査）〉
調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県埋蔵文化財センター
　　調査研究グループ　主事　小倉整
調査作業　安西工業㈱

〈平成17～18年度（報告書作成）〉
（17年度）三重県埋蔵文化財センター支援研究グループ　主査　伊藤裕偉、調査研究Ⅰグループ　主査　穂積裕昌
（18年度）三重県埋蔵文化財センター調査研究Ⅰ課　主査　穂積裕昌、技師　石井智大・野嶌美沙子
　　技術補助員　川崎志乃・酒井巳紀子

4　遺構写真撮影は、調査担当者及び調査作業受託機関が行った（上記参照）。

5　調査にかかる諸費用は、三重県県土整備部が全額負担している。

6　発掘調査にあたっては、地元津市在住の皆様、津市教育委員会、県土整備部道路整備室、津地方県民局津建設部（当時）から多大な協力を受けたことを明記する。

6　報告書作成にあたっては、堀木真美子氏（愛知県埋蔵文化財センター）から有益なご教示を得ました。

7　本書で報告した記録類及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

8　当報告書の作成業務は三重県埋蔵文化財センターで実施し、平成17年度は支援研究グループ及び調査研究Ⅰグループ、平成18年度は調査研究Ⅰ課が主務として実施した。報告文の執筆は、穂積・伊藤・石井・野嶌・川崎・酒井が行い、目次及び文末に記した。遺物の写真撮影は酒井が行った。本書の編集は穂積が行い、酒井がこれを補佐した。

凡　　例

地図類

1　本書で使用した地図類は、国土地理院発行の１／25,000地形図、津市都市計画図である。

2　これら地図類は本書で報告した遺跡の位置は、国土座標第Ⅵ系を用いており、平成14年４月から施行されている世界測地系には対応していない。

3　挿図の方位はすべて座標北で示している。なお、真北は座標北の西偏０度16分、磁北は座標北の西偏６度40分である。

遺構類

4　土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版　標準土色帖』（日本色研事業株式会社　1967年初版）を用いた。

5　本書の遺構は連番となっているが、この番号は本報告書作成にあたって、新たに付与しなおしたものである。調査時の遺構番号との異同・関係は、本文および遺構一覧を参照されたい。

6　遺構は、調査区ごとに報告しているが、溝などで隣接区にまたがる場合は、初出部もしくは主要部分が確認されている調査区で代表して報告している。

7　掘立柱建物の方位は、南北主軸・東西主軸を問わず、すべて北からの振れで表記している。したがって、東西主軸の建物は、梁行をもとに方位を測った。

8　遺構名称については、下記の略記号を用いて表示したものがある。
竪穴住居：ＳＨ　　掘立柱建物：ＳＢ　　土坑：ＳＫ　　土坑墓・方形周溝墓：ＳＸ　　井戸：ＳＥ
溝：ＳＤ　　旧河道・自然流路：ＳＲ　　柱列：ＳＡ　　ピット：pit　　その他不明遺構：ＳＺ

遺物類

9　遺物番号は、調査年次、遺物の種別（土器や石器、木器など）に関わらず、本書内での通し番号で付与した。

10　本書での遺物実測図は、土器については実物の1／４を基本としたが、木器・木製品、石器はその都度指示している。

11　遺物観察表は、土器（瓦・金属器を含む）、石器（石製品を含む）、木器ごとに作成し、それぞれの遺物の特性に合わせて記載内容を若干変動している。以下、留意事項を簡単に記す。
・土器観察表の「胎土」は、混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で、混和材が認められる場合は確認できる最大の大きさを計測して表記した（「～○㎜」）。
・土器観察表の「色調」は、その遺物の代表となる色調を記載した。その表記は、前掲『新版　標準土色帖』に拠る。
・木器観察表の「樹種」は、整理の過程で樹種同定を経たもののみを記した。

写真図版

12　遺構写真は、最初に調査区の別に関わらず遺構全体図を配した後、個別遺構写真を配した。

13　挿図と写真図版の遺物番号は、報告書番号と対応している。

14　遺物の写真図版は、すべて縮尺不同である。

本文目次

第１章　前言 ……（穂積）…… 1
第１節　調査に至る経緯と経過 …… 1
第２節　調査の方法 …… 3
第３節　本書における調査区名・遺構番号の扱い …… 10

第２章　位置と環境 ……（穂積・酒井）……11
第１節　地理的環境 …… 11
第２節　歴史的環境 …… 13

第３章　旧地形と基本層序 ……（川崎）……17
第４章　発掘された遺構と遺物 ……（穂積）……37
第１節　Ｈ区の調査 …… 37
第２節　Ｉ区の調査 …… 37
第３節　Ｊ区の調査 …… 39
第４節　Ｋ区の調査 …… 49
第５節　Ｌ区の調査 …… 52
第６節　Ｍ区の調査 …… 88
第７節　Ｎ区の調査 …… 96
第８節　Ｏ区の調査 …… 101
第９節　Ｐ区の調査 …… 115

第５章　まとめ ……（穂積・石井・川崎・野嶌・伊藤）…199
第１節　遺構の変遷と画期 ……（穂積）……199
第２節　替田遺跡のおける弥生集落の様相 ……（石井）……200
第３節　弥生土器について ……（川崎）……203
第４節　替田遺跡出土古式土師器の位置付け ……（野嶌）……206
第５節　微地形と土地利用の変化について ……（川崎）……208
第６節　中世の墨書土器について ……（川崎）……211
第７節　古代末から中世の替田遺跡 ……（伊藤）……213

第６章　調査の総括と学術上の課題 ……（穂積）…214

挿図目次

第1図　遺跡地形図 ……2
第2図　調査区配置図 ……4
第3図　H区小地区割図 ……6
第4図　Ｉ区小地区割図 ……6
第5図　Ｊ区小地区割図 ……6
第6図　K区小地区割図 ……7
第7図　L区小地区割図 ……7
第8図　M区小地区割図 ……8
第9図　N区小地区割図 ……8
第10図　N－２区小地区割図 ……8
第11図　O区小地区割図 ……9
第12図　P区小地区割図 ……9
第13図　替田遺跡と周辺の主要遺跡 ……12
第14図　津市内出土銅鐸 ……12
第15図　替田遺跡と近傍の遺跡 ……14
第16図　土層断面模式図 ……16
第17図　K区東西土層断面図 ……21～22
第18図　Ｊ区土層断面図 ……21～22
第19図　M区南北土層断面図 ……21～22
第20図　L区東西土層断面図 ……21～22
第21図　P区東西土層断面図 ……23～24
第22図　O区東西土層断面図 ……23～24
第23図　H区実測図 ……25
第24図　F・Ｉ・Ｊ区西側実測図 ……26
第25図　F・Ｉ・Ｊ区東側実測図 ……27
第26図　G区実測図 ……28
第27図　L区実測図 ……29～30
第28図　K区実測図 ……31
第29図　M・N・O区西側実測図 ……32
第30図　O・N区実測図 ……33
第31図　O区東側・N・P区西側実測図 ……34
第32図　N・P区実測図 ……35
第33図　N・P区東側実測図 ……36
第34図　ＳＤ362実測図 ……38
第35図　ＳＤ361実測図 ……38
第36図　ＳＸ119実測図 ……38
第37図　ＳＸ115・122実測図 ……38
第38図　ＳＢ154実測図 ……38
第39図　ＳＲ601・606・607・609実測図 ……40
第40図　ＳＲ121実測図 ……40
第41図　ＳＥ112・ＳＫ113・Ｓ４pit10実測図 …41
第42図　ＳＫ114実測図 ……41
第43図　ＳＫ103実測図 ……41
第44図　Ｐ４pit５実測図 ……41
第45図　ＳＤ116・117・118実測図 ……42
第46図　ＳＥ105実測図 ……42
第47図　ＳＡ631・ＳＢ624実測図 ……44
第48図　ＳＥ106実測図 ……45
第49図　ＳＢ155実測図 ……46
第50図　ＳＢ156実測図 ……47
第51図　ＳＢ158実測図 ……47
第52図　ＳＢ157実測図 ……47
第53図　Ｎ１pit２・４、Ｎ３pit14、Ｎ２pit15、
Ｍ３pit７位置図 ……50
第54図　Ｕ７pit２位置図 ……50
第55図　Ｒ４pit17位置図 ……50
第56図　Ｒ６pit５位置図 ……50
第57図　ＳＤ124・127実測図 ……51
第58図　ＳＤ124遺物出土状況図 ……51
第59図　ＳＫ123実測図 ……51
第60図　ＳＨ207実測図 ……53
第61図　ＳＨ219実測図 ……53
第62図　ＳＨ230実測図 ……54
第63図　ＳＨ251実測図 ……54
第64図　ＳＨ303・ＳＫ301・302実測図 ……55
第65図　ＳＨ311実測図 ……55
第66図　ＳＨ333実測図 ……56
第67図　ＳＨ322実測図 ……56
第68図　ＳＨ330実測図 ……56
第69図　ＳＫ201実測図 ……58
第70図　ＳＫ204実測図 ……58
第71図　ＳＫ211実測図 ……58
第72図　ＳＫ205実測図 ……59
第73図　ＳＫ202実測図 ……60
第74図　ＳＫ220実測図 ……60
第75図　ＳＫ234実測図 ……60
第76図　ＳＫ221実測図 ……61
第77図　ＳＫ223実測図 ……61

第78図　ＳＫ242実測図 ……61
第79図　ＳＫ239実測図 ……61
第80図　ＳＫ233実測図 ……62
第81図　ＳＫ252実測図 ……62
第82図　ＳＫ275実測図 ……62
第83図　ＳＫ238実測図 ……63
第84図　ＳＫ244実測図 ……65
第85図　ＳＫ253・254実測図 ……66
第86図　ＳＫ260実測図 ……66
第87図　ＳＫ240・285実測図 ……67
第88図　ＳＫ277実測図 ……67
第89図　ＳＫ288実測図 ……68
第90図　ＳＫ312実測図 ……69
第91図　ＳＫ309実測図 ……69
第92図　ＳＫ284実測図 ……69
第93図　ＳＫ312遺物出土状況図 ……69
第94図　ＳＫ292実測図 ……70
第95図　ＳＫ304実測図 ……70
第96図　ＳＫ310実測図 ……70
第97図　ＳＫ307実測図 ……70
第98図　ＳＫ314実測図 ……70
第99図　ＳＤ313実測図 ……71
第100図　ＳＫ326実測図 ……71
第101図　Ｃ２pit３位置図 ……71
第102図　Ｆ８pit６位置図 ……71
第103図　ＳＤ317実測図 ……71
第104図　Ｃ11pit11位置図 ……73
第105図　Ｃ13pit３位置図 ……73
第106図　ＳＫ241実測図 ……73
第107図　Ｅ13pit３位置図 ……73
第108図　Ｄ10pit13位置図 ……73
第109図　ＳＫ222実測図 ……73
第110図　ＳＢ343実測図 ……75
第111図　ＳＢ344実測図 ……75
第112図　ＳＢ345実測図 ……76
第113図　ＳＢ348実測図 ……76
第114図　ＳＢ350実測図 ……76
第115図　ＳＢ346実測図 ……76
第116図　ＳＢ349実測図 ……76
第117図　ＳＢ351実測図 ……77
第118図　ＳＢ347実測図 ……77
第119図　ＳＫ270実測図 ……77
第120図　ＳＤ256実測図 ……77
第121図　ＳＤ208実測図 ……78
第122図　ＳＤ279実測図 ……78
第123図　ＳＤ209実測図 ……78
第124図　Ｄ10pit23・Ｄ11pit６位置図 ……78
第125図　Ｅ３pit１位置図 ……78
第126図　ＳＥ324・327実測図 ……80
第127図　ＳＥ299・ＳＫ300実測図 ……80
第128図　ＳＥ267実測図 ……80
第129図　ＳＢ352実測図 ……81
第130図　ＳＸ229実測図 ……81
第131図　ＳＥ266実測図 ……81
第132図　ＳＸ286実測図 ……81
第133図　ＳＥ259実測図 ……82
第134図　ＳＫ250実測図 ……82
第135図　ＳＥ258実測図 ……82
第136図　ＳＥ263実測図 ……82
第137図　ＳＫ265実測図 ……83
第138図　ＳＤ237実測図 ……83
第139図　Ｂ11pit２・Ｂ12pit４位置図 ……89
第140図　Ｄ10pit２・６・18位置図 ……89
第141図　Ｃ10pit６・13、Ｃ11pit１位置図 ……89
第142図　ＳＢ159実測図 ……89
第143図　ＳＢ161実測図 ……89
第144図　ＳＢ162実測図 ……90
第145図　ＳＢ160実測図 ……90
第146図　ＳＡ163実測図 ……90
第147図　ＳＡ164実測図 ……90
第148図　ＳＡ165実測図 ……90
第149図　ＳＡ166実測図 ……90
第150図　ＳＥ129実測図 ……91
第151図　ＳＫ132実測図 ……91
第152図　ＳＫ131実測図 ……91
第153図　Ｍ区ＳＤ・ＳＲ位置図、
東壁断面模式図 ……93
第154図　ＳＲ137実測図 ……95
第155図　Ｈ11pit１位置図 ……95
第156図　Ｈ３pit５位置図 ……95
第157図　Ｈ６pit12、Ｈ７pit25位置図 ……95
第158図　Ｈ８pit４位置図 ……95

第159図　ＳＫ409実測図 ……95
第160図　ＳＸ425実測図 ……95
第161図　ＳＤ401実測図 ……97
第162図　ＳＫ440実測図 ……97
第163図　ＳＺ441実測図 ……97
第164図　ＳＤ404実測図 ……97
第165図　ＳＤ408実測図 ……97
第166図　ＳＤ405実測図 ……99
第167図　ＳＤ433実測図 ……99
第168図　ＳＤ435実測図 ……99
第169図　ＳＫ424・423実測図 ……99
第170図　ＳＺ443実測図 ……99
第171図　Ｇ９pit１、Ｆ９pit３、Ｇ10pit12、
　　Ｆ11pit３位置図 ……99
第172図　Ｇ18pit２位置図 ……100
第173図　Ｇ５pit１、Ｇ６pit２位置図 ……100
第174図　Ｇ14pit２・３・４位置図 ……100
第175図　Ｂ７pit１位置図 ……100
第176図　ＳＸ540実測図 ……100
第177図　ＳＢ549実測図 ……100
第178図　ＳＤ502・503・518・545実測図 ……102
第179図　ＳＤ501・507・ＳＺ535位置図 ……103
第180図　ＳＺ535遺物出土状況図 ……103
第181図　ＳＤ516・519実測図 ……103
第182図　ＳＤ514・515・520実測図 ……103
第183図　ＳＤ504実測図 ……104
第184図　ＳＤ508・512実測図 ……104
第185図　ＳＫ547実測図 ……104
第186図　ＳＫ536実測図 ……104
第187図　ＳＤ513実測図 ……104
第188図　ＳＤ544実測図 ……104
第189図　ＳＤ514遺物出土状況図 ……105
第190図　ＳＤ517実測図 ……106
第191図　ＳＤ517遺物出土状況図 ……106
第192図　ＳＤ532実測図 ……106
第193図　ＳＤ521実測図 ……106
第194図　ＳＫ529実測図 ……108
第195図　ＳＫ510実測図 ……109
第196図　ＳＫ531実測図 ……109
第197図　ＳＫ533実測図 ……109
第198図　ＳＫ534実測図 ……109
第199図　ＳＫ541実測図 ……109
第200図　ＳＸ537実測図 ……111
第201図　ＳＥ538実測図 ……111
第202図　ＳＫ525実測図 ……111
第203図　ＳＫ530実測図 ……111
第204図　ＳＤ816遺物出土状況図 ……116
第205図　ＳＤ802・803実測図 ……116
第206図　ＳＤ804・806実測図 ……117
第207図　ＳＤ814実測図 ……117
第208図　ＳＤ816実測図 ……118
第209図　ＳＫ819実測図 ……118
第210図　ＳＤ812実測図 ……118
第211図　出土遺物実測図 ……127
第212図　出土遺物実測図 ……128
第213図　出土遺物実測図 ……129
第214図　出土遺物実測図 ……130
第215図　出土遺物実測図 ……131
第216図　出土遺物実測図 ……132
第217図　出土遺物実測図 ……133
第218図　出土遺物実測図 ……134
第219図　出土遺物実測図 ……135
第220図　出土遺物実測図 ……136
第221図　出土遺物実測図 ……137
第222図　出土遺物実測図 ……138
第223図　出土遺物実測図 ……139
第224図　出土遺物実測図 ……140
第225図　出土遺物実測図 ……141
第226図　出土遺物実測図 ……142
第227図　出土遺物実測図 ……143
第228図　出土遺物実測図 ……144
第229図　出土遺物実測図 ……145
第230図　出土遺物実測図 ……146
第231図　出土遺物実測図 ……147
第232図　出土遺物実測図 ……148
第233図　出土遺物実測図 ……149
第234図　出土遺物実測図 ……150
第235図　出土遺物実測図 ……151
第236図　出土遺物実測図 ……152
第237図　出土遺物実測図 ……153
第238図　出土遺物実測図 ……154
第239図　出土遺物実測図 ……155

第240図　出土遺物実測図……156
第241図　出土遺物実測図……157
第242図　出土遺物実測図……158
第243図　出土遺物実測図……159
第244図　出土遺物実測図……160
第245図　出土遺物実測図……161
第246図　出土遺物実測図……162
第247図　出土遺物実測図……163
第248図　出土遺物実測図……164
第249図　出土遺物実測図……165
第250図　出土遺物実測図……166
第251図　出土遺物実測図……167
第252図　出土遺物実測図……168
第253図　出土遺物実測図……169
第254図　出土遺物実測図……170
第255図　出土遺物実測図……171
第256図　出土遺物実測図……172
第257図　出土遺物実測図……173
第258図　出土遺物実測図……174
第259図　出土遺物実測図……175
第260図　替田遺跡弥生時代遺構配置図……201
第261図　替田遺跡出土弥生土器の変遷(1)　……204
第262図　替田遺跡出土弥生土器の変遷(2)　……205
第263図　替田遺跡出土古式土師器の
　　編年的位置……207
第264図　替田遺跡調査区と周辺の小字……210

挿表目次

第1表　　替田遺跡基本層序一覧表……16
第2表　　土層名一覧……19
第3表　　土層名一覧……20
第4～10表　遺構一覧表　……120～126
第11～33表　遺物観察表　……176～198
第34表　　替田遺跡墨書一覧表　……212
第35表　　里前遺跡ほか墨書一覧表　……212

写真・図版目次

写真1　建設中の国道163号線ＢＰ……2
写真2　建設中の国道163号線ＢＰ……2

図版1　遺跡全景/遺跡東半部全景　……217
図版2　調査前風景/H区北側全景　……218
図版3　H区東側全景/Ｉ区全景　……219
図版4　Ｊ区北西側全景/Ｊ区南東側全景　……220
図版5　K区北側全景/Ｌ区全景　……221
図版6　Ｌ区全景/Ｌ区西側近景　……222
図版7　Ｌ区中央部近景/Ｌ区東側近景　……223
図版8　M区北側/M区東側　……224
図版9　N区上層全景/N区下層全景　……225
図版10　N区南への派生トレンチ上層全景/
　　N区南への派生トレンチ下層近景……226
図版11　N区東端部全景/O区西側全景　……227
図版12　O区全景/Ｐ区全景　……228
図版13　ＳＫ103/ＳＥ105/ＳＸ122/
　　ＳＥ106枠材検出/ＳＥ106枠材埋土掘削/
　　ＳＥ106掘形と枠材/
　　ＳＥ106枠材内遺物出土状況/
　　ＳＥ106横桟組方……229
図版14　ＳＫ201/ＳＫ202/ＳＫ204/ＳＫ205/
　　ＳＨ207/ＳＨ207近景/ＳＫ220/
　　ＳＫ221……230
図版15　ＳＫ222/ＳＫ222近景/ＳＫ223/
　　ＳＫ244/ＳＫ244/
　　ＳＨ251石斧（139）出土状況/ＳＫ252/
　　ＳＫ252遺物（190）出土状況　……231
図版16　ＳＫ285/ＳＫ285遺物出土状況/
　　ＳＫ304/ＳＤ340/
　　ＳＥ327（左）・ＳＥ324（右）/ＳＥ324/
　　ＳＥ327/ＳＥ327完掘状況　……232
図版17　Ｌ区全景/ＳＫ204/ＳＸ229/ＳＨ230/
　　ＳＫ233/ＳＫ233遺物出土状況/
　　ＳＨ251/ＳＫ252　……233

図版18　ＳＥ259埋土半裁/ＳＥ269/ＳＥ267/
ＳＥ299/ＳＨ311/ＳＫ312/
ＳＫ312遺物出土状況/ＳＫ315 ……234
図版19　ＳＥ324/ＳＥ327/ＳＥ327遺物出土状況/
ＳＨ333/ＳＫ335/ＳＢ343/
ＳＫ234・ＳＫ235/ＳＢ344……235
図版20　ＳＤ124/M区南端調査区/ＳＥ129/
Ｊ区Ｐ４pit５遺物出土状況/
ＳＤ514/ＳＤ516・518・519 ……236
図版21　ＳＫ529/ＳＫ533 ……237
図版22　ＳＤ514遺物出土状況/ＳＸ537/
ＳＸ537/ＳＫ525/
ＳＤ517網代出土状況 ……238
図版23　ＳＤ806/ＳＤ802/ＳＤ803下駄出土状況/
ＳＤ802掘削中/ＳＤ503東側 ……239
図版24　出土遺物18・81・116・179 ……240
図版25　出土遺物181・182・227・228 ……241
図版26　出土遺物10・10・37・40・67・117…242
図版27　出土遺物124・125・149・180・183・
186 ……243
図版28　出土遺物190・196・197・199・204・
211 ……244
図版29　出土遺物229・232・445・500・745・
1003 ……245
図版30　出土遺物９・12・23・53・56・62・68・
72・73・77 ……246
図版31　出土遺物91・118・119・121・122・
143・144・145 ……247
図版32　出土遺物147・148・162・163・164・
164・167・168・169・189 ……248
図版33　出土遺物210・212・214・215・226・
233・254・357 ……249
図版34　出土遺物369・370・371・376・379・
382・383・402 ……250
図版35　出土遺物404・407・411・414・415・
417・425・422・426・469 ……251
図版36　出土遺物430・431・443・444・448・
490・501・510 ……252
図版37　出土遺物536・537・538・539・547・
548・551・560・575・667・686・
700 ……253
図版38　出土遺物720・736・739・741・854・
856・859・1007 ……254
図版39　出土遺物１・４・５・11・27・34・36・
63・75・93・103・129 ……255
図版40　出土遺物142・159・161・166・194・
201・205・206・207・221・225・242・
243 ……256
図版41　出土遺物255・256・257・255・261・
261・401・412・416・439・506・441・
446・461・524 ……257
図版42　出土遺物577・583・601・604・606・
749・633・761・770・1144・840・
842 ……258
図版43　出土遺物687・883・884・688・701・
885・886・887・1146・1147・1238・
1238 ……259
図版44　出土遺物376・377・530・622・623・
624・643・676・677・678・707・708・
709 ……260
図版45　出土遺物710・781・782・783・784・
785・786・787・788・789・790・
791 ……261
図版46　出土遺物792・793・794・795・796・
797・798・799・800・801・802・803・
804 ……262
図版47　出土遺物805・806・807・809・810・
868・869・896・921・960・972・
974 ……263
図版48　出土遺物976・993・1024・1025・
1026・1027・1028・1029・1030・
1031・1083・1084 ……264
図版49　出土遺物1085・1086・1087・1088・
1089・1090・1091・1092・1093・
1095・1096・1174 ……265
図版50　出土遺物1175・1225・1226・784・
785・786・787・794・798 ……266
図版51　出土遺物589・588・1268・594・998・
998・1155・1156・1273・1274・
1275・1276 ……267
図版52　出土遺物273・287・289・291・298・
306・307・310・327・326・330・334・

342・337・349 ……268
図版53　出土遺物348・713・909・909・910・
910……269
図版54　出土遺物1171・1239・1240・1241・
1242・1243・1244・1247・1251・
1257・1258……270
図版55　出土遺物1263・1264・1266・1267・
1269・1272……271
図版56　出土遺物6 ・80・88・112・113・114・
115・131・132・133・134・137・
138・140・139・141・151・152・
153・158 ……272
図版57　出土遺物165・174・177・178・203・
223・231・237・249・250・251・
252・454 ……273
図版58　出土遺物455・457・456・458・460・
534・535・591・565・718・893・
1148・1149・1150・1151・1152・
1153・1154……274

第１章　前言

第１節　調査に至る経緯と経過

１　替田遺跡の確認と調査に至る経緯

替田遺跡を含む津市南河路・野田の安濃川右岸堤防から岩田川間の沖積部一帯を南北に縦断するかたちで都市計画道路の中勢バイパスが決定されたのは昭和58年４月のことであった。この地域に関しては、既に三重県考古学の先達、故鈴木敏雄氏によって現在の南河路集落付近における弥生～古墳時代遺物の出土が報告されており（鈴木敏雄『安東村考古誌考』、私家版）、古くから遺跡の存在が注意されてはいた。しかし、行政上で替田遺跡が遺跡として認識されたのは、昭和58年に三重県教育委員会が実施した中勢バイパス建設に伴う事前の分布調査からであった。

この中勢バイパス建設計画にかかる範囲確認調査が新たに組織された三重県埋蔵文化財センターによって替田遺跡を含む範囲を対象として実施されたのは平成元年のことで、これによって中勢バイパス路線内に替田遺跡として7,900㎡の面積が報告された。中勢バイパスに伴う替田遺跡の調査は、平成８年から調査が実施され、最終的に10,060㎡が調査されるに至った（替田遺跡１次～２次調査）。

さて、この中勢バイパスに直交するかたちで国道163号線のバイパス建設事業（平成14年度は国道163号国補特殊道路改良事業、15年度は国道163号南河路ＢＰ国補道路特殊改良事業と事業名称変更、以下では「国道163号線バイパス」として略記）が計画され、その事業照会を受けて埋蔵文化財の範囲確認調査が路線計画地内を対象として実施されたのは平成11年１月のことであった。

一方、津市南河路・野田の安濃川右岸堤防から岩田川間の沖積部一帯は、ほ場整備事業の未整備地域であり、替田遺跡を含む津中部地区を対象とした県営圃場整備事業が平成９年度以降に順次実施されることが計画された。そこで、平成９年度より範囲確認調査が行われ、替田遺跡が含まれる部分は平成10年度（中勢道路以東対象）と11年度（中勢道路以西対象）に実施された。

これら県事業（国道163号線バイパス建設の実施主体は県）の範囲確認調査の結果を受け、まず平成11年度より県営かんがい排水整備事業と県営圃場整備事業（経営体育成基盤整備事業）とに伴う替田遺跡の調査が実施されたのを皮切りに、16年度まで国道163号線バイパスと経営体育成基盤整備事業（旧称県営圃場整備事業）・県営かんがい排水整備事業という県事業に伴う替田遺跡にかかる埋蔵文化財の発掘調査が相次いで実施されることとなった。

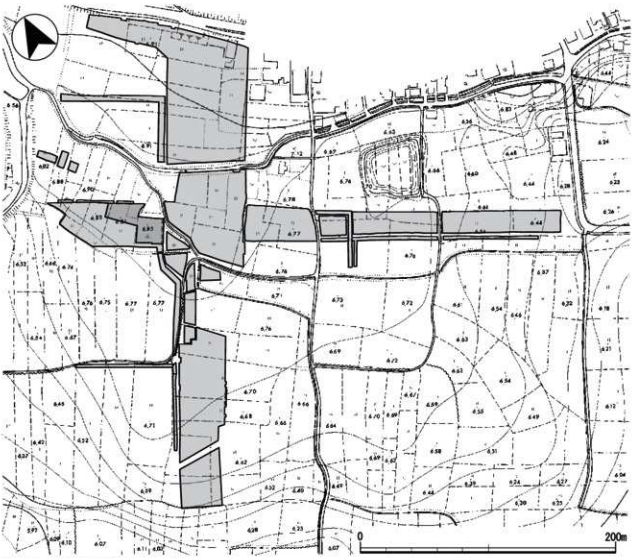
２　調査経過

前述のように、県事業に伴う替田遺跡の調査は、平成11年度から平成16度までの都合６年にわたって実施した（12年度は当該調査なし）。これらの調査は、既に調査を終えた中勢道路に伴う２ヵ年の調査（１次調査・２次調査）の調査次数を引き継いで行われ、調査次数は11年度を除き、年度単位で付与している。すなわち、11年度調査は、かんがい排水整備事業による発掘調査を３次調査、県営圃場整備事業による発掘調査を４次調査としたが、13年度の５次調査から16年度の８次調査は同一年度であれば原因事業が異なっていても調査次数としては同じとして次数換算している。

このうち、平成11年度の３次調査と４次調査は、既に報告書として刊行している（三重県埋蔵文化財センター『神戸遺跡（第２次）・替田遺跡第３次発掘調査報告～三重県津市南河路所在～』2001、同『替田遺跡（第４次）発掘調査報告』2004）。

ここでは、平成13年度の５次調査以降について、調査経過の整理をしておこう。

13年度の５次調査は、稲刈りが終了した10月より開始した。調査は、国道163号線バイパス建設に伴うものと、県営ほ場整備事業に伴うものがある。前者に伴う調査は、平成11年度４次調査区（Ｆ地区）の東側隣接地（中勢道路以西）を対象とし、Ｊ地区として935㎡の調査を行っている。後者は替田遺跡でも南側、弐ノ坪遺跡に隣接する部分をＨ地区とし



第１図　遺跡地形図（１：3,000）

写真１　建設中の国道163号線ＢＰ（西から、奥は津市街）

写真２　建設中の国道163号線ＢＰ（東から、奥は長谷山）

て173㎡、中勢道路以東の13年度分をⅠ地区として344㎡を行った。

14年度の６次調査は７月より開始した。調査は、県営ほ場整備事業に伴うものと国道163号線バイパス建設に伴うものがある。前者は中勢道路を挟んだ東西で1258㎡（うち下層234㎡）、後者は中勢道路以東の1600㎡（うち下層263㎡）を対象として調査を実施した。

15年度の７次調査と16年度の８次調査はいずれも国道163号線バイパス建設に伴うもので、前者で1403㎡、後者で1583㎡の調査を行った。

3　文化財保護法にかかる諸通知

文化財保護法等にかかる諸通知は、以下により県教育長宛に行っている。

・文化財保護法に基づく三重県文化財保護条例第48条第１項（県教育長宛）

平成12年３月８日付　道整674号（文化庁官宛）

平成14年５月31日付　県土第08－44号

平成15年５月６日付　津建第107号

平成16年５月25日付　県土第08－39号

・文化財保護法第58条の２第１項（県教育長宛）

平成13年９月14日付　教理184号

平成14年６月26日付　教理88号

平成15年６月５日付　教理75号

平成16年５月20日付　教理72号

・遺失物法による文化財発見・届出通知（津警察署長宛）

平成15年１月７日付　教委12－６－９号（県教育長通知）

平成16年２月３日付　教委12－９－８号（県教育長通知）

平成16年９月17日付　教委12－４－21号（県教育長通知）

第２節　調査の方法

1　調査区の設定

三重県埋蔵文化財センターの調査では、調査区内を４ｍ×４ｍの方眼（小地区）に分割し、それを調査の基本単位となるグリッドの１単位として調査を行っている。その際、グリッド名の表記はアルファベットと数字を組み合わせて行い、通常グリッドの北西隅を表示の原点としている。

今回の替田遺跡の調査は、調査トレンチが年度や原因事業によって分断され、結果として隣接しつつも複数の独立したトレンチを個別に調査することとなった。この際、調査の当初に小地区設定にかかる統一した取り決めがなされていなかったため、小地区付与は結果としてトレンチ毎の任意設定で行われた。また、この小地区設定にあたっても、各調査区の主軸が国土座標の整数値から大きくずれていたため、国土座標に沿った設定は行わず、現地調査の作業効率を優先して調査区形状に合わせて設定した。

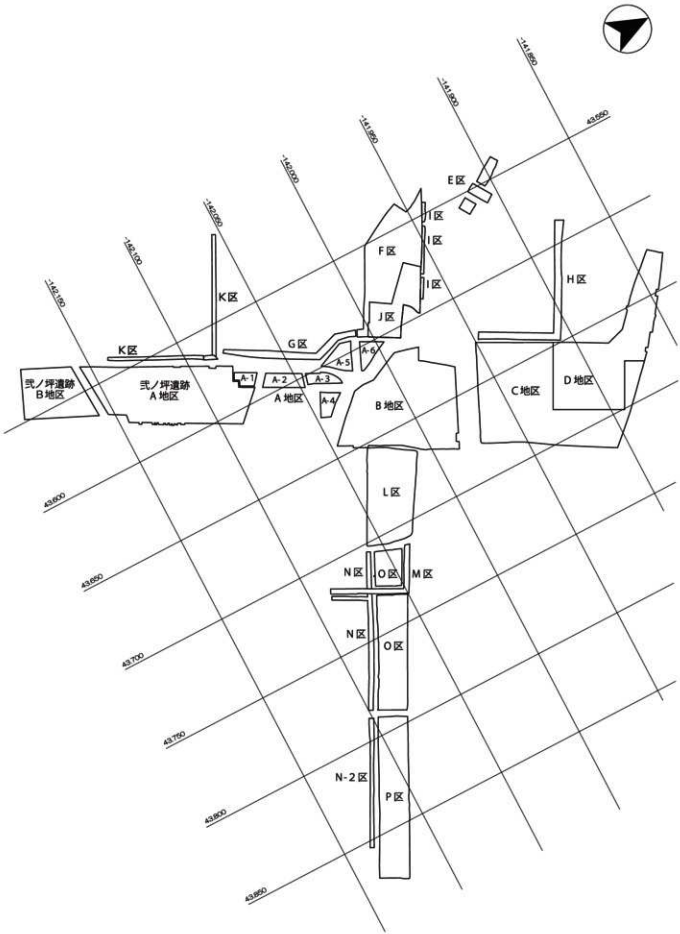
そのうえで、遺構実測の段階で、国土座標（旧座標）を調査区に付与し、調査区全体の位置関係を座標レベルで把握できるようにした。

なお、13年度５次調査と14年度６次調査では、調査トレンチ毎にトレンチ名称としての地区名（例えば「A地区」や「F地区」など）を冠している（15年度と16年度は独立したトレンチ名称は特に付与していない）。このうち、５次調査はそれまでに行われた中勢道路や県事業のトレンチ名称（ちなみに中勢道路ではＡ～Ｄ地区の名称を使用）を引き継ぎ、ひとつの遺跡でのトレンチ名称の重複を避けたが、６次調査ではそれらを踏襲せずに新たにＢ・Ｃ・Ｄ地区の名称を用いた。このため、調査区名においても、替田遺跡として年度や事業枠を越えた統一的なトレンチ名称の付与は実現されなかった。

ここでは、以上を念頭に置いたうえで、13年度５次調査以降の替田遺跡調査における調査区と小地区設定の具体的手順を述べておきたい。なお、以下の調査区名称は、本書において新たに付与した調査区名を用い、調査時の旧調査区名はカッコ内に付記した。具体的には、本章第３節１を参照されたい。

（平成13年度５次調査）　調査区は、国道163号線バイパスに伴うＪ区（Ｊ地区、以下、括弧内は調査時調査区名称）と、ほ場整備事業に伴うＫ区（５次調査Ｈ地区）とＭ区（５次調査Ｉ区）がある。

各々の地区における小地区の設定は、Ｊ区は前年度４次調査Ｆ地区・Ｇ地区の東隣接地であるが、４



第２図　調査区配置図（１：2,000）

次調査F・G地区の小地区の番号は踏襲しないうえで、東西軸は西から東へアルファベットを、南北軸は北から南へ数字を付与している（第5図）。

一方、ほ場整備事業に伴う調査区のうち、前年度4次調査G地区と一部重複するかたちでその南側に広がるK区も、4次調査G地区の小地区とはリンクさせずに、トレンチの形状に沿って東西軸は西から東へアルファベットを、南北軸は北から南へ数字を付与している（第6図）。

また、M区も、調査区の形状に合わせてその部分のみを対象とした小地区の設定を行い、トレンチ形状に合わせて東西軸は西から東へアルファベットを、南北軸は北から南へ数字を付与している（第8図）。

（平成14年度6次調査）　調査区は、国道163号線バイパスに伴うL区（6次調査C区）、ほ場整備事業に伴うH区（6次調査D1・D2区）・I区（6次調査D3区）・N区（6次調査B2～B4区、なおB2区は本書ではL区に包含している）がある（なお、この年度はA地区を立花堂遺跡、E地区を里前遺跡の地区名に充てている）。

各々の調査区における小地区の設定は、①L区（旧C地区とその南側に接続する旧B1地区）、②N区のうちの旧B2地区～旧B3地区、③N区のうちの旧B4地区、④H区（旧D1・D2地区）、⑤I区（旧D3区）という5つの区分で独立して行っている。

まず、①は、調査区の形状に合わせて東西軸は西から東へ数字を、南北軸は南から北へアルファベットを付与している（第7図）。②は、①の東側隣接部であるが小地区の設定は②として独立して行っており、調査区形状に合わせて東西軸は西から東へ数字を、南北軸は南から北へアルファベットを付与している（第9図）。③・④もトレンチ形状に合わせて東西軸は西から東へ数字を、南北軸は南から北へアルファベットを付与している（第10図・第3図）。一方、⑤は、調査区形状に合わせて東西軸に数字、南北軸にアルファベットを付与したのは同様であるが、アルファベットは①～④と異なって北から南へ順に付与している（第4図）。

全体として、本年度調査は、13年度や後述の15・16年度調査とは数字・アルファベットの付与が全く逆になっていることに注意されたい。

（平成15年度7次調査）　東西に並ぶ2ヶ所のトレンチがあるが（トレンチの間は13年度I地区が貫入する）、本書においては両トレンチを合わせて「O区」とした。13年度5次調査同様、小地区設定は調査区の形状に合わせて東西軸は西から東へアルファベットで、南北軸は北から南へ数字で表示している（第11図）。なお、15年度と16年度は、個別のトレンチ名称は用いていない。

（平成16年度8次調査）　前年度の7次調査区の東側に連続する部分で、本書ではP区として扱った。本調査区も前年調査区とは連動せずに、調査区の形状に合わせて独自設定が行われている。すなわち、東西軸は西から東へアルファベットで、南北軸は北から南へ数字で表示している（第12図）。

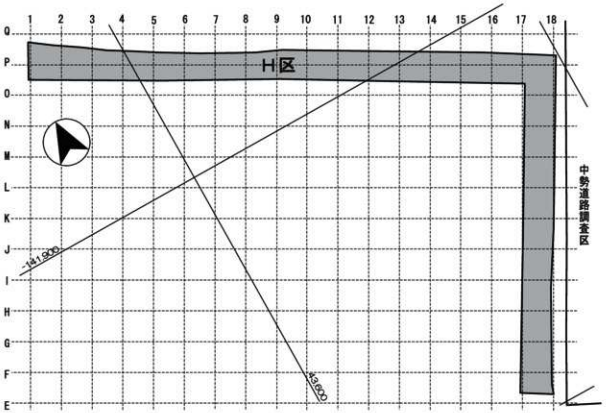
2　調査方法

表土除去　包含層より上位は、重機（バックフォー）による表土除去を実施した。さらに、上層面調査終了後の下層面へ移行する際も、重機を利用した。

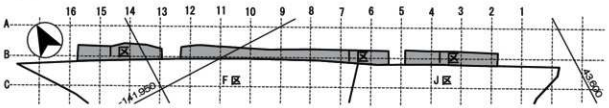
検出・掘削　表土除去後、人力による包含層掘削を実施し、その後、遺構検出を行った。遺構検出によって確認された遺構は、遺構カードに概要を記入した後、手スコップ等を用いて掘削を行った。

遺構カード　小地区を単位として1/40で作成し、略図・埋土土質・切り合い等を記すとともに、遺物が出土した遺構については取り上げにおける遺構番号の注記台帳としても使用した。

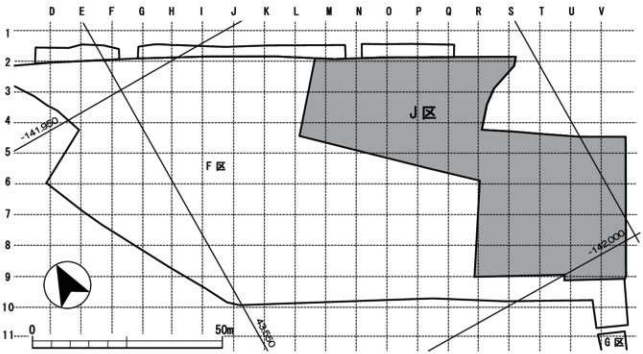
調査における遺構番号の付与　当センターが基本としている発掘調査における遺構番号付与は、ピット以外は遺構種別を越えた遺跡毎の通し番号で付与する方式である。しかし、本遺跡においては、それに従った年度もある一方、平成13年度5次調査では遺構種別毎の通し番号、14年度6次調査では調査地区が異なればその地区毎の通し番号を付与したように、年度によって異なった番号付与方法となっていた。そのため、本書の報告にあたっては、調査時に付与した遺構番号をそのまま使用すると煩雑なうえに同一遺構番号が多出して混乱をきたす恐れがあることから、遺構番号を替田遺跡全体での通し番号に変更した（詳細は後述）。ただし、遺物注記は現地調査中ないしは現地調査後速やかに終了しており、煩雑を避けるため遺物取り上げ時の名称のままとし



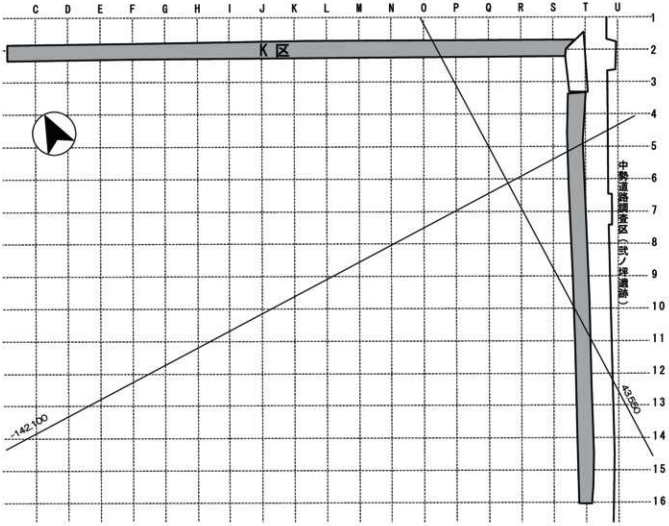
第３図　Ｈ区小地区割図（１：1,000）



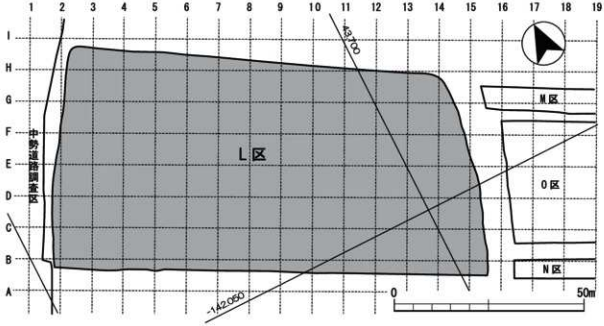
第４図　Ｉ区小地区割図（１：1,000）



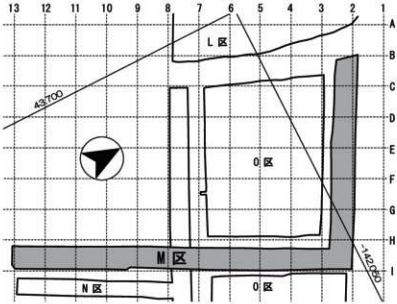
第５図　Ｊ区小地区割図（１：1,000）



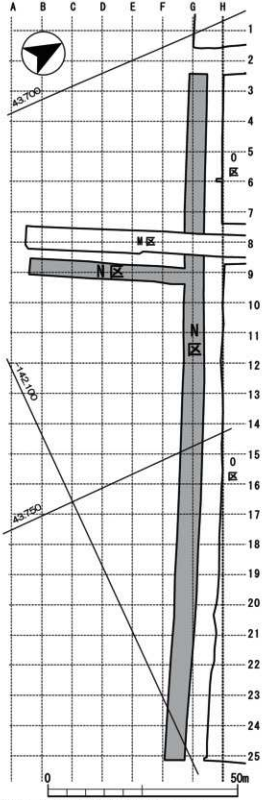
第６図　Ｋ区小地区割図（１：1,000）



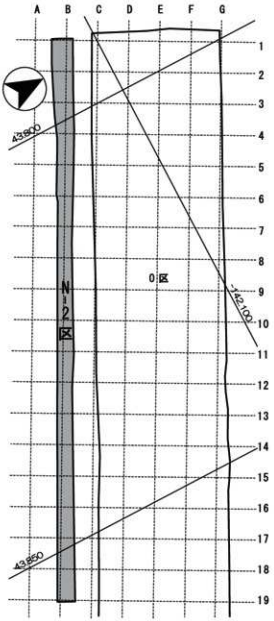
第７図　Ｌ区小地区割図（１：1,000）



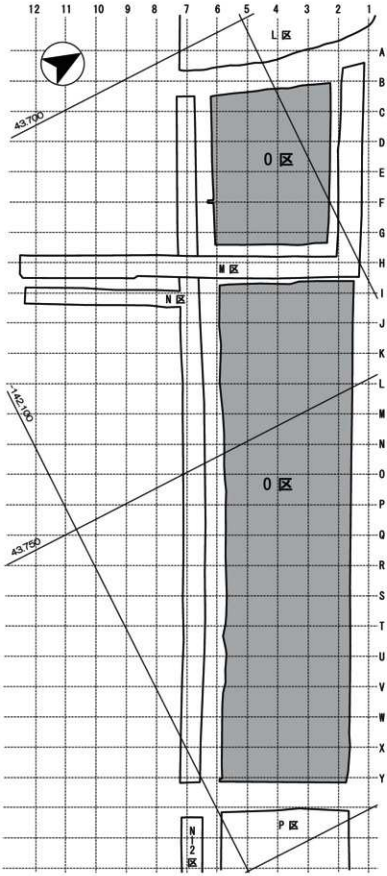
第８図　Ｍ区小地区割図（１：1,000）



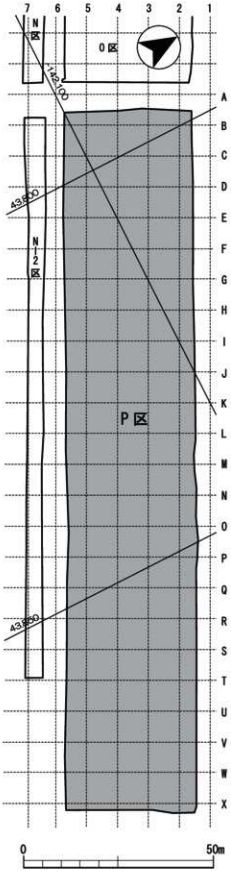
第９図　Ｎ区小地区割図（１：1,000）



第10図　Ｎ－２区小地区割図（１：1,000）



第11図　O区小地区割図（1：1,000）



第12図　P区小地区割図（1：1,000）

ている。

なお、三重県の調査方式上致し方ないが、基本的に遺物出土遺構はその量や性格に関わらず一律に遺構番号が付与されるため、報告段階で不要と認めた遺構も番号が残る一方、重要性があっても遺物の出土がなければ現場段階では遺構番号が付与されない場合も生じる。このため、本書においても、前者に関しては遺構番号があっても本文中で説明がない遺構があるとともに、整理段階で新たに付与した遺構があることを明記しておきたい。

以上の対応関係は、遺構一覧表に記したので参照されたい。

実測　土層や、詳細な図化が必要と認められた遺構は、実測を行った。調査区土層は1/20、遺物出土状況や個別遺構の実測図は1/10作図を基本とし、基本的に手描き実測により作成した。また、調査区全体の遺構実測も手描きとし、この場合は1/20作図を原則とした。

遺構写真撮影　基本的に４×５インチ判ないしは６×９インチ判の白黒ネガ・カラーリバーサルで撮影し、補助・メモ的に35㎜判白黒ネガおよびカラーリバーサルも使用している。なお、平成14年度調査は、４×５判以外に６×７判も利用している。

遺物写真撮影　報告書掲載遺物から任意に選択し、基本的にブローニー判白黒ネガで撮影した。その他、弥生土器の完形品など大きな遺物は４×５インチ判白黒ネガも適宜使用した。これらは、基本的に報告書写真図版の掲載時の大きさを考慮して使用の版を決定した。

第３節　本書における調査区名・遺構番号の扱い

１　調査区（調査トレンチ）名称の変更

遺構番号と並び、現地調査で使用したＡ地区やＩ地区などといった調査区名称は、国及び県の各事業を越えて替田遺跡というひとつの枠で統一して付与されておらず（中勢道路の調査時における地区名自体、たんに年度による調査区の区切りを示すもの）、それぞれが任意に付与されたものである。そのため、調査区名称の付与方法も扱いや基準が統一されておらず、そのままの名称を用いると同一名称が混在するなど混乱が大きい。

そこで、本書では、第２節１でも簡単に触れたが、中勢道路調査部分との整合も図り、かつ県公共事業調査部分も含めた替田遺跡調査のトレンチ名称を通し番号とするため、これまでの調査トレンチ名を一部変更し、後述の調査時付与の遺構番号との整合も図りつつ、以下に記したように調査区（トレンチ）名称の変更を行った（第２～12図参照）。

新	旧（調査時）
Ａ～Ｄ地区	中勢道路関係調査区（調査時名称踏襲）
Ｅ区	県営かんがい排水整備事業に伴う調査区（３次調査）
Ｆ区	４次調査Ｆ区（調査時名称踏襲）
Ｇ区	４次調査Ｇ区（調査時名称踏襲）
Ｈ区	６次調査Ｄ１区・Ｄ2区
Ｉ区	６次調査Ｄ3区
Ｊ区	５次調査Ｊ区（調査時名称踏襲）
Ｋ区	５次調査Ｈ区
Ｌ区	６次調査Ｃ区・Ｂ1区
Ｍ区	５次調査Ｉ区
Ｎ区	６次調査Ｂ2～Ｂ4区
Ｏ区	７次調査トレンチ
Ｐ区	８次調査トレンチ

なお、前述のように４ｍを単位とした小地区は調査トレンチ毎に独立して付与され、遺物取り上げや遺物注記もそれに基づいて行っている。そのため、旧トレンチ名称も原資料類や遺物注記においてはそのまま引き継いでいるので、本報告書を今後の資料活用の際の媒介として利用する必要がある。

２　遺構番号の変更（再交付）

前述のように、替田遺跡の調査では、遺構番号は調査年次毎に他の調査年次とは全く連動せずに独立して与えられ、また同一年度であっても調査区が異なれば遺構番号が通し番号化されていない年度も存在する。

しかし、こうした調査時の遺構名称をそのまま踏襲すれば、替田遺跡のなかに同一遺構番号が重複して存在するものも出てくるため、まことに都合が悪

い。そのため、報告においては、遺構番号にかかる混乱を避け、替田遺跡としての遺構番号の統一性を図る必要性に迫られた。

そこで、本書の報告にあたっては、既刊の報告書（平成11年度の３次調査・４次調査の報告書）において決定された遺構番号はそのまま踏襲し、かつ現地調査で付与した番号（調査年度や調査区毎に与えられていた番号）も一定程度は踏襲しつつ、全体として通し番号となるように、新たに通し番号で再交付することとした。

具体的には、以下のように遺構番号の再交付を行った。

新遺構番号	対象
001～	３次調査（調査時番号踏襲）
101～	５次調査
201～	６次調査
501～	７次調査
601～	４次調査Ｆ区（調査時番号踏襲）
701～	４次調査Ｇ区（調査時番号踏襲）
801～	８次調査

新遺構番号を付与した５次調査以降のうち、７～８次調査は、調査時の遺構番号が通し番号であったため、調査時番号にそれぞれ700と800を加算した。調査区毎の通し番号である６次調査は、Ｌ区遺構に200を加算したうえでＨ・Ｉ区遺構はそれに続く通し番号を、Ｎ区は400を加算した。５次調査は小地区毎の通し番号であったので、新たに再交付した。

なお、ピットについては、調査時に付与したピット番号をそのまま踏襲することとした。

３　本書における報告方法

以上の調査区名及び遺構番号の通し番号化による再整理を経たうえで、本書において新たに付与した調査トレンチ毎に遺構・遺物を報告することとした。ただし、全体の遺構実測図については、レイアウトの都合上、必ずしもトレンチ毎のレイアウトになっていない（隣接するトレンチと合わせて掲載）のでご留意されたい。（穂積）

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

替田遺跡（１）は、津市を東西に貫いて伊勢湾に注ぐ安濃川右岸の標高6.6m～７mの自然堤防およびそれに続く微高地上に位置する。

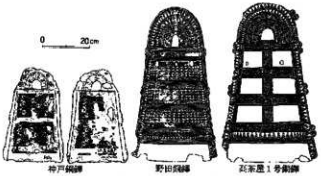
この安濃川は、鈴鹿山脈錫杖ヶ岳付近に源を発し、伊賀に連なる布引山系の東側を画する独立峰、長谷山の北麓を流れる穴倉川などを合流しつつ、流域に肥沃な沖積平野を形成する。安濃川によってもたらされたこの沖積平野は、西側を経ヶ峰から長谷山にいたる山塊、北側を長岡丘陵（見当山丘陵）、南側を半田丘陵によって画されて地理的なひとつのまとまりと見ることが可能で、巨視的には北側（長岡丘陵）から南側（半田丘陵）に向かって低くなっていく地形をなす。すなわち、長岡丘陵南麓を流れる美濃屋川は、南側へ小流路を派生させて安濃川北岸の水田を潤し、最終的に美濃屋川本体も含めて安濃川へ排出される。また、安濃川南岸の水田は、安濃川から南へ派生した三泗川は安濃川南岸の水田を潤しつつ、半田丘陵北麓を流れる岩田川に集まり、伊勢湾へと注ぐ。

さて、替田遺跡からみてやや北西側は、北西から南東へ向かって流れてきた安濃川が、伊勢湾に向かって向きを転じて東流を開始する部分に相当している。この地で安濃川から派生し、岩田川へ注ぐ三泗川は、普段はさほど大きな流路ではない。しかし、大雨時には津城下町を洪水から護るため安濃川の水を岩田川へ排出する機能を負っており、非常時はかなりの水量を受け持つ（この部分の安濃川堤防自体、現在も洪水時の南側への分水を前提として低い）。そのため、三泗川沿いの水田部は、洪水時には水没するような低地となっている。

替田遺跡は、この三泗川の左岸（東側）にあって、地籍上、津市南河路の「替田」「又口」「結縁寺」

第13図　替田遺跡と周辺の主要遺跡（1：50,000）　国土地理院1：25,000「津西部」「津東部」

1 替田遺跡
2 式ノ坪遺跡
3 黒板遺跡
4 勢作遺跡
5 神戸遺跡
6 立花窯遺跡
7 納所遺跡
8 長遺跡
9 山籠遺跡
10 森山東遺跡
11 松ノ木遺跡
12 藤田遺跡
13 仮田遺跡
14 鈴鹿遺跡
15 上村遺跡
16 高松遺跡
17 安養寺遺跡群
18 高茶屋大垣内遺跡
19 亀井遺跡
20 浄土寺南遺跡
21 神戸銅鐸出土地
22 野田銅鐸出土地（詳細位置不明）
23 板本山古墳群
24 平田古墳群
25 長谷山古墳群
26 殿村1号墳
27 君ケ口古墳
28 鎌切・稲葉古墳群
29 池ノ谷古墳
30 藤谷埴輪窯
31 久居古窯跡群
32 法ケ広埴輪窯



第14図　津市内出土銅鐸（三重県『三重県史資料編考古1』2005）

「八反田」という４つの小字にまたがっている。このうち、替田遺跡でも北西部の小字「替田」に含まれる部分が最も高く、安濃川の形成した自然堤防上に相当し、現南河路集落も基本的にこの自然堤防上に立地する。この小字「替田」部分を頂点に、地形的には南側及び東側へ向かって緩やかに落ちていく地形をなすが、替田遺跡の範囲部分は西・南・東の３方向からからみれば、50cm前後高い方形の微高地状を呈している。起伏の少ない沖積低地に形成された集落遺跡であるが、そのなかでも自然堤防から続く僅かな微高地を利用して占地された状況が窺える。

第２節　歴史的環境

替田遺跡が含まれる津地域は、その中心域が安濃川水系となる地域であり、安濃川上流の旧安濃町と旧芸濃町の一部と合わせて旧の郡域は安濃郡にあたる。ここでは、安濃郡のなかでも、替田遺跡の所在する安濃川下流部の遺跡を中心に、その展開を概観してみよう。

〈縄文時代〉　縄文時代はまだ沖積部への進出・開発は未活発であるが、安濃川右岸の蔵田遺跡[1]（12）では後期末葉の土坑、松ノ木遺跡[2]（11）では晩期の河道と竪穴住居が確認されており、既に縄文時代後晩期段階には僅かではあるが開発が沖積低地へも及んでいたことが知られる。

〈弥生時代〉　弥生時代になると、安濃川流域でも一気に遺跡形成が進む。このうち、最も注目すべき事象は、納所遺跡[3]（７）の出現である。納所遺跡は、安濃川下流左岸の自然堤防上に立地し、替田遺跡からは直線距離で1.5kmほど下流となる。納所遺跡では、既に弥生時代前期の自然河道から各種農具類をはじめとする木製品も多数出土している。このことは、水稲耕作に基盤を置く弥生文化が当地域への波及当初から基本的な生活用具類を装備した状態で伝播していることを示していよう。納所遺跡は、中期に最盛期を迎え、各種原材や未成品も出土するなど伊勢湾西岸域を代表する弥生集落として、物資流通の核となったいわゆる拠点遺跡として機能したとみられる。ただし、後期を迎える頃には急速に衰退し、流路程度しか明瞭な遺構が確認できないようになる。

前期の集落は、沖積部だけでなく丘陵部にも進出しており、納所遺跡の出現よりは遅れるが半田丘陵の上村遺跡[4]（15）でも多数の前期弥生土器の出土がある。

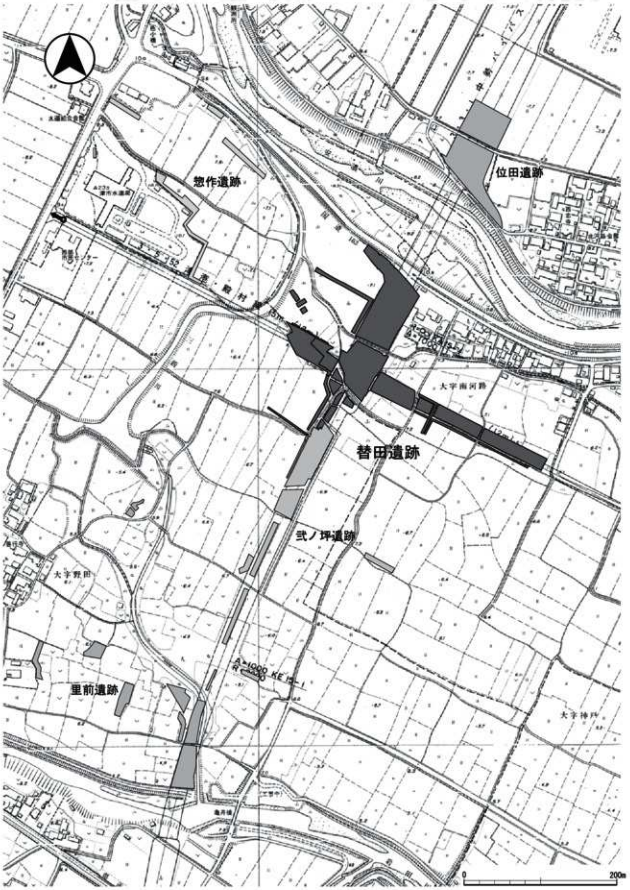
中期になると、遺跡数はさらに増加し、替田遺跡やその南の弐ノ坪遺跡（２）でも遺構が確認されているほか、安濃川左岸の沖積部では蔵田遺跡（12）（掘立柱建物、集落域）・松ノ木遺跡[5]（11）（方形周溝墓、墓域）・森山東遺跡（10）（水田、生産域）など多数の遺跡が形成される。これら遺跡は、遺構密度としては納所遺跡にはるかに及ばず、納所遺跡の後方に展開する衛星集落的な様相を呈するが、この時期の活発な低地進出の動きは特筆に価する。

中期後葉には丘陵部への遺跡形成がさらに進展し、長岡丘陵には長遺跡[6]（８）（竪穴住居100基以上）や山籠遺跡[7]（９）（竪穴住居10基）など狭い範囲に多数の竪穴住居が集中して営まれた集落が出現する。これら遺跡は、後期を迎える頃には廃絶し、あたかも納所遺跡の盛衰とほぼ軌を一にした状況は注目される。つまり、安濃川下流域に形成された弥生中期集落は、地域の拠点集落たる納所遺跡の動向と、少なからぬ関係を有しながら存在した可能性が考えられる。

後期に入ると、岩田川左岸の半田丘陵を中心に新たな集落形成の動きが広がるとともに、方形台状墓などの墳墓が造営された。また、半田丘陵に入り込んだ谷筋からは、銅鐸が出土している（神戸銅鐸出土地、21）。

〈古墳時代〉　安濃川水系の古墳時代の集落は、現在知られているものに関してはさほど大規模なものは知られておらず、比較的遺構密度も薄いものが中心である。古墳・墳墓に関しても、古墳前期のものは岩田川水系の坂本山古墳群[8]（23）があるが、規模としては小規模である。また、安濃川左岸の位田遺跡[9]（13）や右岸の高松Ｃ遺跡[10]などにも古墳時代初頃の墳墓（方形周溝墓）が営まれるが、これらのあり方は弥生時代の墳墓群の延長にある。

安濃川水系の明瞭な首長墓は、中期中葉頃になっ



第15図　替田遺跡と近傍の遺跡（1：5,000）

て中流域右岸に出現する旧安濃町明合古墳[11]（全長81mの造出付き方墳）の築造を嚆矢とする。また、水系的には安濃川水系とは言い難いが、前期末葉頃には半田丘陵から東側へ続く台地の縁辺に中勢地域最大の前方後円墳、池ノ谷古墳[12]（29）が築造された。これらのことから、当地域における首長墳は、５世紀頃を境に明瞭に把握できるようになる。

この後、５世紀後葉以降も、安濃川水系では半田丘陵や長谷山から派生した丘陵部を中心に前方後円墳の築造が続き、小規模ながら安定した首長墓の系譜をみることができる。ただし、これら首長墳の母体として対比しうる集落遺跡は、池ノ谷古墳がさらに南方側の台地上に展開する高茶屋大垣内遺跡[13]（18）との関係が考慮される以外、まだ不明な部分が大きい。

前方後円墳の廃絶後も、首長墓に連なる古墳[14]が確認されており、そのひとつが安濃川下流左岸の長岡丘陵端部に所在する家形石棺を内包した横穴式石室墳、鳥居古墳[15]である。初葬時か追葬時かはともかく、金銅装磚仏等注目すべき出土品があり、初期仏教の地方浸透を考える上でも重要である。

（穂積）

〈古代〉　安濃川水系は古代の安濃郡に含まれるが、現在のところ、安濃郡衙に相当するような官衙遺跡や確実に奈良時代以前に遡る古代寺院は本地域内では未確認である。この点、同じ津市域であっても、正方位を指向したコの字形配置の大型疵付掘立柱建物が確認された六大Ｂ遺跡[16]などを擁する北部の志登茂川右岸域（古代には安濃郡に属する）の状況とは対照的である。

しかし、納所遺跡などから断片的ではあるが古代瓦の出土がみられるほか、長岡丘陵の東端部に近い津市広明町からもかつて軒丸・軒平瓦が発見[17]されており、広明町瓦窯跡（四天王寺瓦窯跡）として瓦窯の可能性が考えられている。前述の鳥居古墳からも近い位置にあり、郡家や古代寺院を含む古代安濃郡の中枢施設に関わる遺跡の確認は、今後に残された大きな課題である。

安濃川水系の古代集落は、宮ノ前遺跡や藏田遺跡、それに替田遺跡などで奈良時代までの集落が、また平安時代以降の集落は位田遺跡や弐ノ坪遺跡、安濃川を少し遡った安濃町浄土寺南遺跡[18]（20）などで確認されている。このうち、浄土寺南遺跡は規則性をもつ建物配置を採っており、円面硯や緑釉陶器の出土とあわせ、公的機能をもった性格も考えられている。

また、安濃川流域は近年まで条里制の方格地割の残存が認められており、N30度Eの条里プランの復元[19]が提示されている。これまでの発掘調査の結果からも、弐ノ坪遺跡[20]の平安時代前期の掘立柱建物など条里プランに沿った方向の遺構が確認されており、残存地割の起源が古代に遡る可能性を示した。

〈中世〉　当地域においても、替田遺跡をはじめ、中世の遺構・遺物が確認された遺跡は数多いが、まず注目できるのは替田遺跡の南方に広がる里前遺跡である。里前遺跡[21]（３）は、岩田川左岸にあって、三泗川が岩田川に流れ込む合流点の内側（北西側）に位置する。集落の中心域と目される微高地部分は大部分が調査区外であるが、三泗川沿いの調査区からは未使用を含む大量の墨書山茶椀が出土しており、岩田川を遡上して内陸へ物資を荷揚する内水運の拠点地としての性格や、墨書内容から年貢集配に関わる機能などが想定されている。

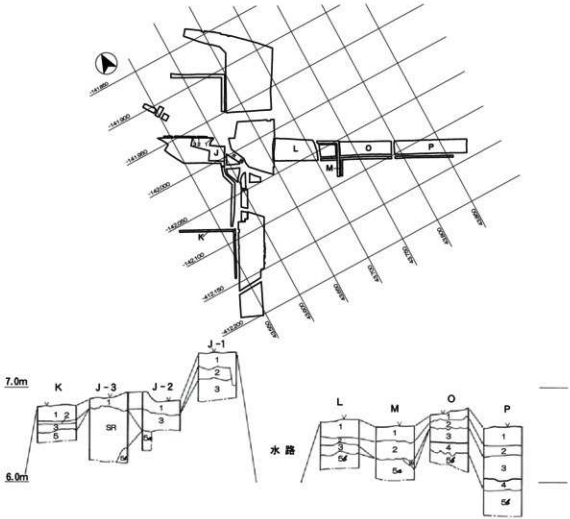
さて、替田遺跡が含まれる範囲ないしはその近傍は、中世には神宮領荘園が存在していたようで、13世紀初頃頃成立の『神宮雑令集』には「野田御薗」、14世紀後半に成立したとされる『神鳳鈔』には「野田御厨」として書出す[22]。これに相当する集落の比定はまだ定まったものはないが、これまで行われた安濃川流域の発掘調査の結果とも総合して、今後、より豊かな地域像が提示されることが期待される。

また、一部が替田遺跡の範囲に含まれる津市南河路字結縁寺の地は、中世に結縁寺（けちえんじ）が存在したとされる地で、熊野信仰が行われた痕跡が認められている。替田遺跡から出土した中世前期の山茶椀に仏教系文言の存在を認め、墨書内容の解釈に仏教信仰との関わりを認める説[23]も提起されている。　（酒井）

註

（１）三重県埋蔵文化財センター『藏田遺跡発掘調査報告』1999

（２）三重県埋蔵文化財センター『松ノ木遺跡・森山東遺



第16図　土層断面模式図

層名		遺構等の確認	利用時期
1	表土(耕作土)	↑攪乱	圃場整備後
2	耕作土	↑攪乱	圃場整備以前
3	包含層	↑遺構　△遺構 ↓溝(旧河道)	↑中世前期　△弥生中期 ↓弥生中期
4　(J区西部・O・P区)のみ		↑遺構 ↓遺構	↑古墳時代？ ↓古墳時代
5a	5b層の土壌化層	―	―
5b	砂層	―	―

第１表　替田遺跡基本層序一覧表（↑上面、△層内、↓下面検出を示す）

跡・太田遺跡発掘調査報告』1993
(3) 三重県教育委員会『納所遺跡－遺構と遺物』1980
(4) 津市教育委員会『上村遺跡発掘調査報告』1972
(5) 前掲註(2)
(6) 三重県埋蔵文化財センター『長遺跡発掘調査報告』2000
(7) 三重県埋蔵文化財センター『大古曽遺跡・山籠遺跡・宮ノ前遺跡発掘調査報告』1995
(8) 津市教育委員会『坂本山古墳群・坂本山中世墓群』1970
(9) 三重県埋蔵文化財センター『位田遺跡発掘調査報告』1993
(10) 津市教育委員会「高松C遺跡発掘調査報告」『津市埋蔵文化財センター年報』3　1999
(11) 安濃町史編纂委員会『安濃町史資料編』1994
(12) 藤田充子「津市池の谷古墳出土の円筒埴輪」『三重の古文化』81　1999
(13) 三重県埋蔵文化財センター『高茶屋大垣内遺跡（第3・4次）発掘調査報告』2000
(14) 鎌切古墳群など。
(15) 浅生悦生「鳥居古墳と押出仏」『津市の文化財』津市教育委員会　1989
(16) 三重県埋蔵文化財センター『六大B遺跡発掘調査報告』2006
(17) 鈴木敏雄『三重県古瓦図録』1933、三重県の古瓦刊行会『三重県の古瓦』1997
(18) 三重県教育委員会『昭和55年度県営圃場整備事業地城埋蔵文化財発掘調査報告』1981
(19) 仲見秀雄・谷岡武雄編『伊勢湾岸地域の古代条里制』東京堂出版　1979
(20) 三重県埋蔵文化財センター『弐ノ坪遺跡発掘調査報告』2005
(21) 三重県埋蔵文化財センター『里前遺跡発掘調査報告』2002
(22) 平凡社『日本の地名』1988
(23) 小倉整「三重県津市南河路「小字結縁寺」についての一考察」『Mie　history』vol.16　2005

第３章　旧地形と基本層序

替田遺跡における中勢道路と国道163号線ＢＰはほぼ十文字に交差する。それぞれの道路主軸の方位は、正方位には乗らないが、以下の記述では、中勢道路に平行する部分を南北、国道163号線ＢＰに平行する方向を東西として記述を進めていきたい。

替田遺跡においては、巨視的に見ると中勢道路による調査区が南北方向に、本事業（国道163号線ＢＰ）に伴う調査区が東西方向に大きなトレンチを開けた様相を呈する。

前言のとおり、替田遺跡の調査では調査区別に独立した調査が実施されたために、全調査区を通した基本層序による分層が行われていなかった。従って、本報告による基本層序は、報告書作成段階で新たに作成したことをあらかじめ断っておく。

報告書作成段階に作成した基本層序は、調査区別に独立した土層断面図を元に、各時期の遺構が切り込む層序を検討して作成した。沖積平野では、層相の色調や粒度が側方変化することが一般的である。替田遺跡においてはＪ区北東部に現在も水路（以後、現水路と表記する）が存在しており、調査区に近接して堆積物の供給源が存在し、層相変化の激しいことが想定されたために色調や粒度を用いた細分は行わなかった。

上記を基に作成した基本層序（第１表・第16図参照）は次のとおりである。

１層　圃場整備後の表土（耕作土）である。

２層　圃場整備以前の耕作土層である。

３層　調査時に包含層として把握されていた層序をまとめたが、後述のように一部の地区では４層として細分した。

各調査区において、上部から中世前期の遺構が切り込まれる状態で確認されており、Ｌ区では、層内から弥生時代中期前葉の遺構が確認されている。また弥生時代中期前葉の遺物が包含されるＪ区のＳＲ601は下部から掘り込まれている。つまり、弥生時代中期前葉には３・４層の形成が始まっており、土

地が利用されていることが分かる。

Ｊ区は現在の北東部と南西部の比高差が0.5mに及ぶ（第18図）が、これはＪ区北東部の水路の自然堤防帯に相当する。Ｊ－１地点では３層より下部の掘削を行っていないためにその形成時期は不明であるが、3層段階においては確実に自然堤防状の高まりが存在する。

M区は中世前期の遺構がＳＺ138上面で検出されている。ＳＺ138は５ａ層上面と３層下面の間に存在する砂層であり、北部から南部に向かって粒度が細かくなる特徴をもつ。調査時に自然流路として把握されていたことから遺構番号を付したが、自然流路として平面形態を捉えることが困難である。このことから基本的には北部から南部方向に流れた洪水堆積物として把握する。この点では基本層序の4層に相当する可能性もあるが、０区では層相の粒度記載のないため比較が困難であり、独立させて報告した。

４層　Ｊ区北東部の現水路から遠ざかるＯ・Ｐ区では、層厚が厚く包含層が細分されており、３・４層間にも遺構が存在する。具体的には、Ｐ区西部の断面では３・４層間に高まりを両側に保有し、砂を包含する溝（畎畦？）が存在する。出土遺物が極めて稀少であることと併せて、水田であった可能性が考えられる。このために３層から独立させたが、基本的には同層として把握できる。

５層　土壌化の有無で、５ａ・５ｂ層に細分した。上面での平面調査は実施されていない。Ｊ区北東部の現水路に近い地点で砂と表記されており、最も遠いＰ区ではシルトと表記されていたことから、この段階でもＪ地区北東部に谷状地形が存在しており、洪水堆積物が流出したと考えられる。

地層の形成と調査の矛盾点

以上から、替田遺跡の基本層序はＪ区北東部の現水路地点に谷状地点が存在しており、そこからの氾濫した洪水堆積物によって形成されたことが分かる。

５層の形成時期は不明であるが、弥生時代中期前葉の遺物を包含する（４次調査区）水路ＳＲ601が３層下部で確認されている。完全に充填された後、３層上部には中世の遺構が検出されていることから、弥生時代中期前葉には包含層として認識された３・４層の形成が開始されており、同時に土地が利用されていたことが分かる。

Ｊ区北東部の現水路地点に隣接するＪ－１地点（自然堤防帯）では３層下部で平面検出が実施されていないために判然としないが、基本的には現水路との相対的な位置関係で遺構密度と層位が変化する。具体的には、Ｌ区やＪ区西部では弥生時代中期前葉から中世前期までの遺構が接近した高さで確認されているのに対し、元々標高の低かったＯ区やＰ区では堆積土量が多く、３層を細分できる地点も存在する。

これらの層位的な特徴からみると、Ｏ・Ｐ区では一面で平面調査を実施することが困難であるにもかかわらず、一面での平面調査を実施するために、３層をかなり下げた高さでの平面検出を行なっている。従って、Ｏ・Ｐ区では断面図に表現されている３層上面から掘り込まれていた遺構を平面図で確認することが不可能となっている。替田遺跡の遺構については、以上のてんに留意する必要がある。

（川崎）

K区

層名(番号)	土質	色調	その他
1	褐灰色粘質土	5YR4/1	表土(耕作土)
2	明褐色粘質土	7.5YR5/6	
3(包含層)	にぶい褐色粘砂土	7.5YR5/4	
SD124			
SD127	にぶい黄褐色砂質土	10YR5/4	
5b	黄褐色粘砂土	2.5Y5/3	西部は砂質度が高い

J区

層名(番号)		土質	色調	その他
1		オリーブ黒色砂質土	5Y3/1	表土(耕作土)
2		褐色砂	10YR4/4	
3(包含層)		灰黄色粘砂	2.5Y6/2	ブロック状に混じる
		褐色砂	10YR4/4	
4(包含層)		3層 黒褐色粘砂土	7.5YR3/2	ブロック状に混じる
Pit	-1	にぶい褐土	7.5YR5/4	
	-2	褐灰色(やや砂質)	5YR4/1	
	-3	黒褐土(やや砂質)	7.5YR3/1	
SR606・607	-1	黒褐粘砂土	7.5YR3/2	ブロック状に混じる
		褐色砂質土	7.5YR4/4	
	-2	暗褐色砂礫		
	-3	黄砂		
	-4	にぶい黄褐粘砂	10YR5/3	
	-5	灰黄褐色砂礫	10YR4/2	
	-6	暗赤灰砂礫	7.5R3/1	
	-7	灰黄褐粘砂土	10YR4/2	
	-8	黒褐粘砂	10YR3/2	
	-9	暗灰黄粘砂	2.5Y4/2	
	-10	暗赤灰砂礫	7.5R3/1	
	-11	暗赤灰細砂	7.5R3/1	
	-12	暗赤褐砂礫	5YR3/2	
	-13	暗赤灰砂礫	7.5R3/1	
	-14	暗赤褐砂礫	5YR3/2	
	-15	黒褐粘砂	2.5Y3/2	ブロック状に混じる
		灰粘砂	5Y4/1	
	-16	褐色砂礫	10YR4/4	
	-17	黒褐細砂	2/5Y3/2	
	-18	黒褐色砂質土	7.5YR3/1	
SR601	-1	にぶい黄褐砂礫	10YR4/3	
	-2	明褐粘質土	7.5YR5/8	
	-3	にぶい黄褐砂礫	10YR4/3	ブロック状に混じる
		黄灰細砂	2.5Y5/1	
	-4	オリーブ褐砂	2.5Y4/4	ブロック状に混じる
		黄灰砂	2.5Y4/1	
	-5	灰オリーブ粘土	5Y6/2	
	-6	暗灰黄細砂	2.5Y5/2	ブロック状に混じる
		褐砂	10YR4/6	
	-7	黒褐粗砂	2.5Y3/2	
	-8	明黄褐砂質土	10YR6/6	
	-9	明褐砂礫	10YR3/4	
	-10	暗灰黄細砂	2.5Y5/2	
	-11	褐灰粘砂	7.5YR4/1	ブロック状に混じる
		暗灰黄砂	2.5Y4/2	
	-12	灰オリーブ砂	5Y5/2	
	-13	明黄褐砂質土	10YR6/6	
	-14	明褐砂礫	10YR3/4	
	-15	暗青灰粘砂	10BG4/1	
	-16	にぶい黄粘砂	2.5Y6/4	
	-17	にぶい褐色砂	7.5YR5/3	ブロック状に混じる
		褐灰細砂	7.5YR5/1	
	-18	褐色砂礫	10YR4/4	
	-19	黒褐粗砂	2.5Y3/2	
	-20	明赤褐粘土	5YR5/8	
	-21	灰粗砂	10Y5/1	
	-22	灰粗砂	10Y5/1	ブロック状に混じる
		オリーブ黒	5Y3/1	
	-23	灰オリーブ細砂	5Y6/2	ブロック状に混じる
		暗灰黄細砂	2.5Y5/2	
5a		黒褐砂		
5b		暗灰黄細砂	2.5Y5/2	

L区

層名(番号)	土色		その他
1	黒褐色	2.5Y3/2	表土(耕作土)
遺構	灰黄褐色	10YR4/2	
2	暗褐色	10YR3/3	
Pit	暗褐色	10YR3/3	
3	にぶい黄褐色	10YR4/3	
SD313	にぶい黄褐色	10YR4/3	
SK284	黒褐色	10YR3/2	
5b	灰黄褐色	10YR4/2	

M区

層名(番号)		土質	色調	その他
1		褐灰粘質土	5YR4/1	表土(耕作土)
2		にぶい褐灰粘質土	7.5YR4/1	ブロック状に混じる
		明褐粘質土	7.5YR5/6	
Pit	-1	灰褐粘砂	7.5YR4/2	
	-2	褐灰粘砂土	10YR4/1	
	-3	褐灰粘砂	7.5YR4/1	
	-4	明褐粘質土	7.5YR5/6	ブロック状に混じる
		褐灰粘土	7.5YR4/1	
SD152		にぶい黄褐粘質土	10YR5/4	
SD151	-1	暗灰黄砂質土	2.5Y4/2	
	-2	オリーブ褐粘砂	2.5Y4/3	
SK132		褐灰粘質土	5YR4/1	ブロック状に混じる
		明褐粘質土	7.5YR5/6	
SR136	-1	黄灰色土	2.5Y4/1	
	-2	褐灰色土	10YR4/1	
	-3	褐灰色土	5YR4/1	
SD545	-1	にぶい黄褐色細砂	10YR5/3	
	-2	にぶい褐色細砂	7.5YR5/4	
	-3	灰黄褐色土	10YR5/2	
	-4	褐灰色粘砂	5YR5/1	
SD503	-1	褐灰色粘砂	5YR6/1	
	-2	褐灰色細砂	5YR6/1	
	-3	褐灰色細砂	7.5YR5/1	
	-4	褐灰色粘砂	5YR5/1	
	-5	灰色細砂	N5/0	
	-6	褐灰色粘砂	5Y6/1	
SD140		にぶい赤褐色土	5YR5/4	
SD150		灰色土	5Y5/1	
3		灰褐色土	5YR4/2	
SD148		褐灰色粘砂	5YR5/1	
SZ138		褐色粘砂	7.5YR4/6	南部に向かって細かくなる
5b(SZ139)		黒褐粘砂	7.5YR3/1	砂質度高い

第２表　土層名一覧

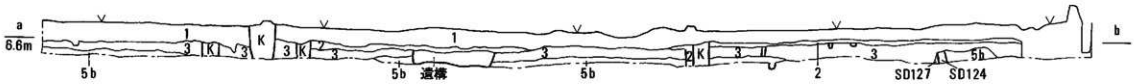
O区

層名(番号)		土色		その他
1		黒色土	5YR1.7/1	表土(耕作土)
SD545		灰白色土	5YR3/1	径1mm～3mmのマンガンブロックと砂粒か
2		明灰色土	5YR4/1	径5mm程のマンガンブロックを少量、多量のシルトを含む 粘質はあるが砂質でしまりはない
SK528	-1	黄褐色土	5YR4/1	
	-2	暗灰褐色土	5YR4/1	径5mmのマンガンブロックを多量に含む しまりあり
	-3	暗灰褐色土	5YR4/1	径5mmのマンガンブロックを多量に含み砂粒を少量含む しまりなし
	-4	茶褐色土	5YR4/1	径5mmのマンガンブロック径1mm～3mmの砂粒を少量含む
	-5	暗灰褐色土	5YR4/1	径5mmのマンガンブロックを多量に含み砂粒を少量含む しまりなし
	-6	茶褐色土	5YR4/1	径1mm～3mmのマンガン粒子を多量に含む まだらに黒色土を少量含む しまりあり
SD517	-1	暗褐色土	5YR3/1	径3mmのマンガン粒子を多量含む 径1mm程度の炭化ブロックを微量に含む
	-2	暗褐色土	5YR3/1	径3mmのマンガン粒子を多量に含む
SD	-1	明灰褐色土	5YR3/2	マンガンブロックの混入が少ない
	-2	赤褐色土	5YR4/1	径5mmのマンガンブロックを多量に含む、しまりあり
	-3	明灰褐色土	5YR4/1	径5mmのマンガンブロックを少量 多量の砂粒を含む、しまりあり
	-4	明灰褐色土	5YR3/2	径1mm～3mmのマンガン粒子 径5mmのマンガンブロックを多量に含む、しまりあり
	-5	明茶褐色土	5YR3/1	径1mm～3mmのマンガン粒子を少量含む 径1mm以下の砂粒を多量に含む
	-6	茶褐色土	5YR3/3	径5mmのマンガンブロック、ジャリを多量に含む、しまりあり 粘質なし
	-7	暗茶褐色土	5YR3/2	径5mmのマンガンブロック、径1cmのジャリを多量に含む、しまりあり 粘質なし
	-8	暗茶褐色土	5YR3/2	径5mmのマンガンブロック、径1cmのジャリ砂粒を大量に含む、 しまりあり 粘質なし
	-9	暗褐色土	5YR1/2	径5mmのマンガンブロック、径1cmのジャリを多量に含む、しまりあり
Pit	-1	茶褐色土	5YR3/1	径3mmのマンガン粒子を多量に含む
	-2	明茶褐色土	5YR3/1	径3mm～5mmのマンガン粒、1mm以下の砂粒を少量含む
	-3	明茶褐色土	5YR3/2	径5mmのマンガン粒子を少量含む、しまりあり
	-4	茶褐色土	5YR3/2	径5mmのマンガン粒子、径1mm以下の砂粒を少量含む、しまりあり
遺構1		黄褐色土	5YR3/2	径1mm～3mmのマンガン粒子を少量含む、しまりあり
遺構2		暗褐色土	5YR3/1	径3mmのマンガン粒子を多量含む しまりあり
3		赤灰色土	5YR3/2	径5mm程のマンガンブロックを多量に混入する また1mm以下のマンガン粒子も 多量に混入する しまり粘質あり
4		赤灰褐色土	5YR3/1	径5mm程のマンガン粒を多量に含む 径1mm以下のシルトを多量に混入また、 粘質もある
5		暗灰褐色土	5YR3/2	径1mm以下の砂が多量に混入する 灰色の粘土を多量に混入する 粘質あり。 またマンガン粒子も多量に含む

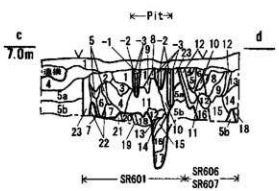
P区

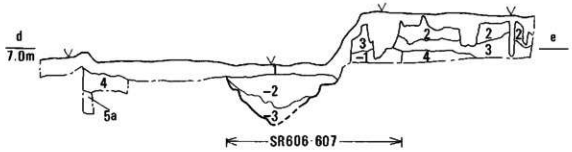
層名(番号)		土質	色調	その他
1		灰黄粘質土	2.5Y6/2	表土(耕作土)
2		黄褐粘質土	2.5Y5/3	
遺構1		にぶい黄褐粗砂含む	10YR5/3	
Pit		にぶい黄褐砂質土	10YR5/3	粘土ﾌﾞﾛｯｸ混じり
3	-1	にぶい褐色粘砂土	7.5YR5/4	
	-2	暗褐粘質土	10YR3/4	
	-3	褐灰粘質土	10YR5/1	炭少量含
遺構2		暗灰黄粘質土	2.5Y4/2	細砂含
4		にぶい黄褐粗砂	10YR5/3	
SD507		にぶい黄褐粘質土	10YR4/3	
SD516	-1	褐灰細砂粘質含む	10YR5/1	
	-2	褐灰細砂粘質多く含む	10YR6/1	
	-3	灰黄褐粘質土	10YR4/2	
5a		黒褐シルト	10YR2/3	
5b		灰黄褐シルト	10YR4/2	

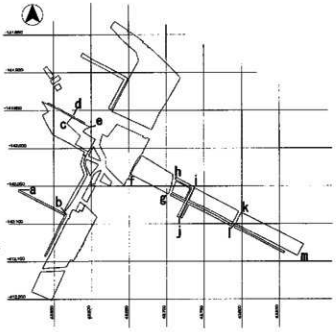
第３表　土層名一覧



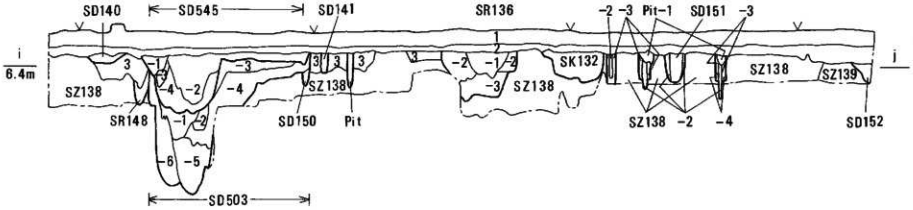
第17図　K区東西土層断面図（縦１：40、横１：200）



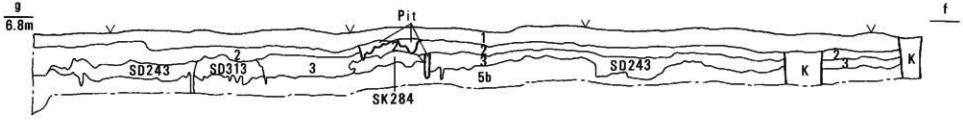




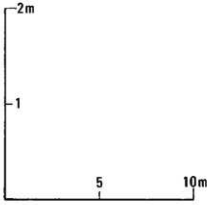
第18図　J区土層断面図（縦１：40、横１：200）

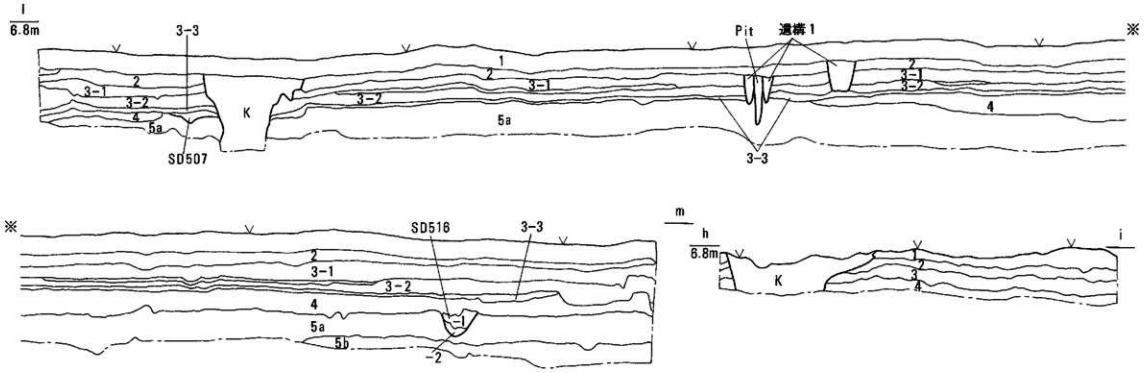


第19図　M区南北土層断面図（縦１：40、横１：200）

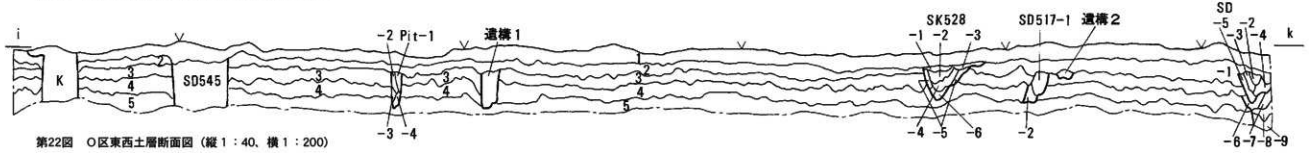


第20図　L区東西土層断面図（縦１：40、横１：200）

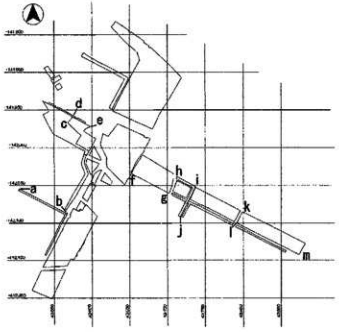


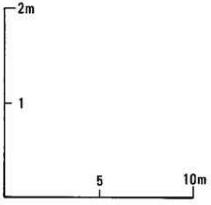


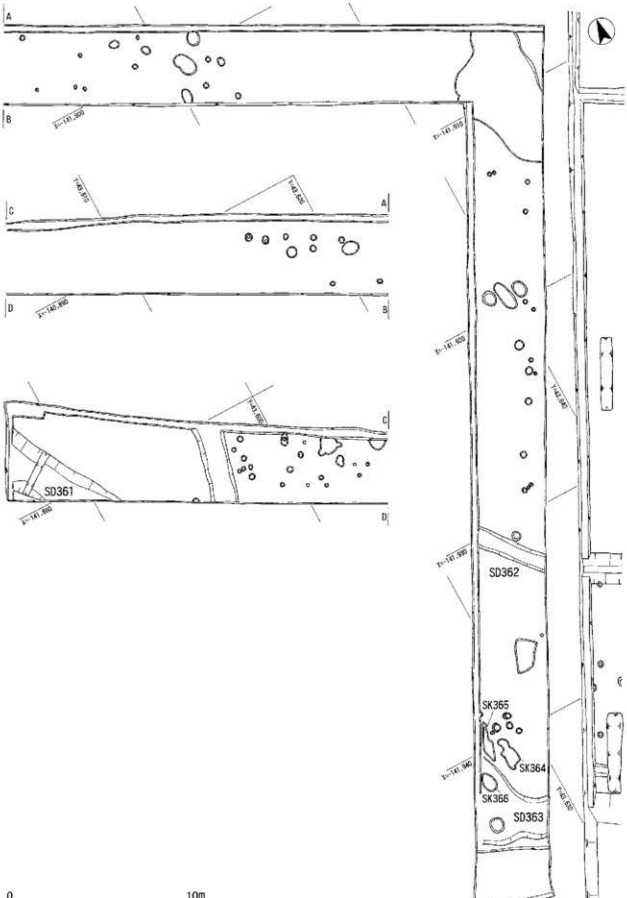
第21図　P区東西土層断面図（縦1：40、横1：200）



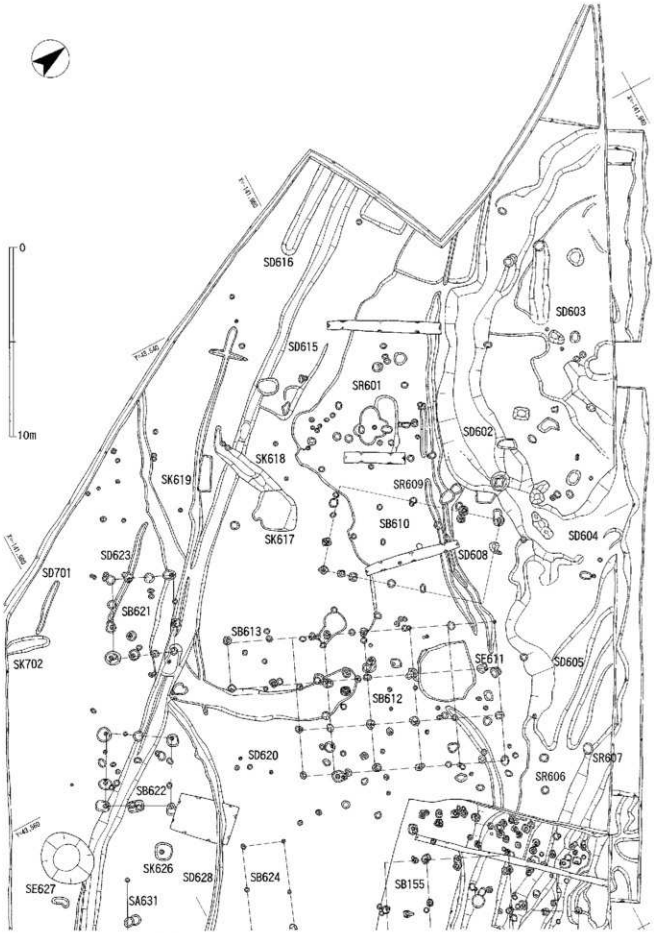
第22図　O区東西土層断面図（縦1：40、横1：200）



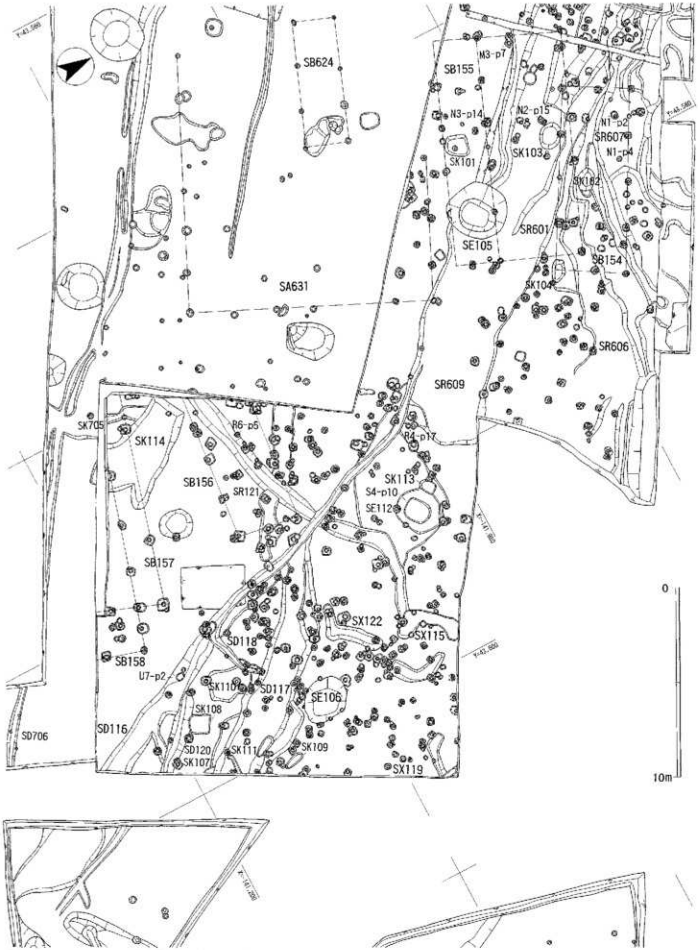




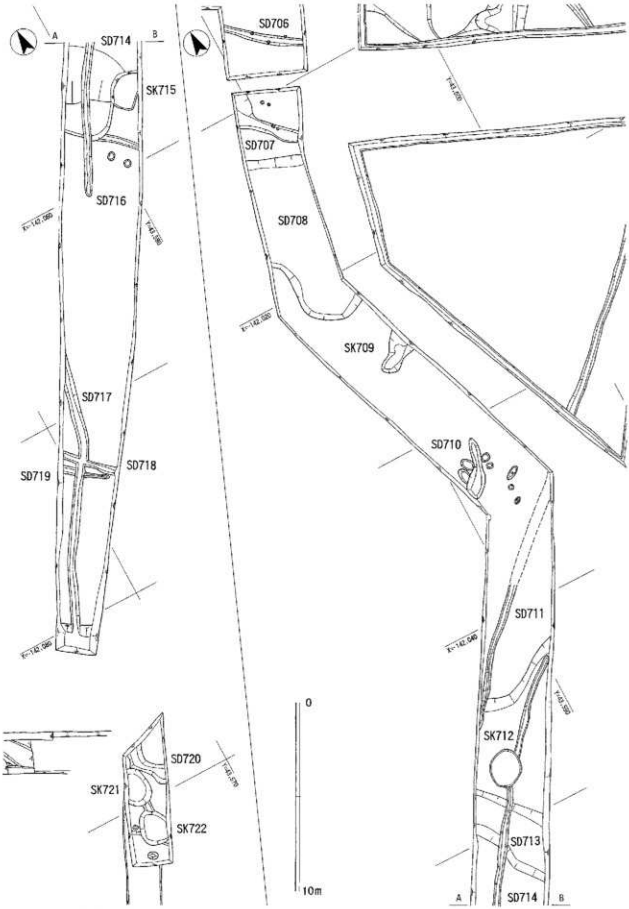
第23図　H区実測図（1：200）



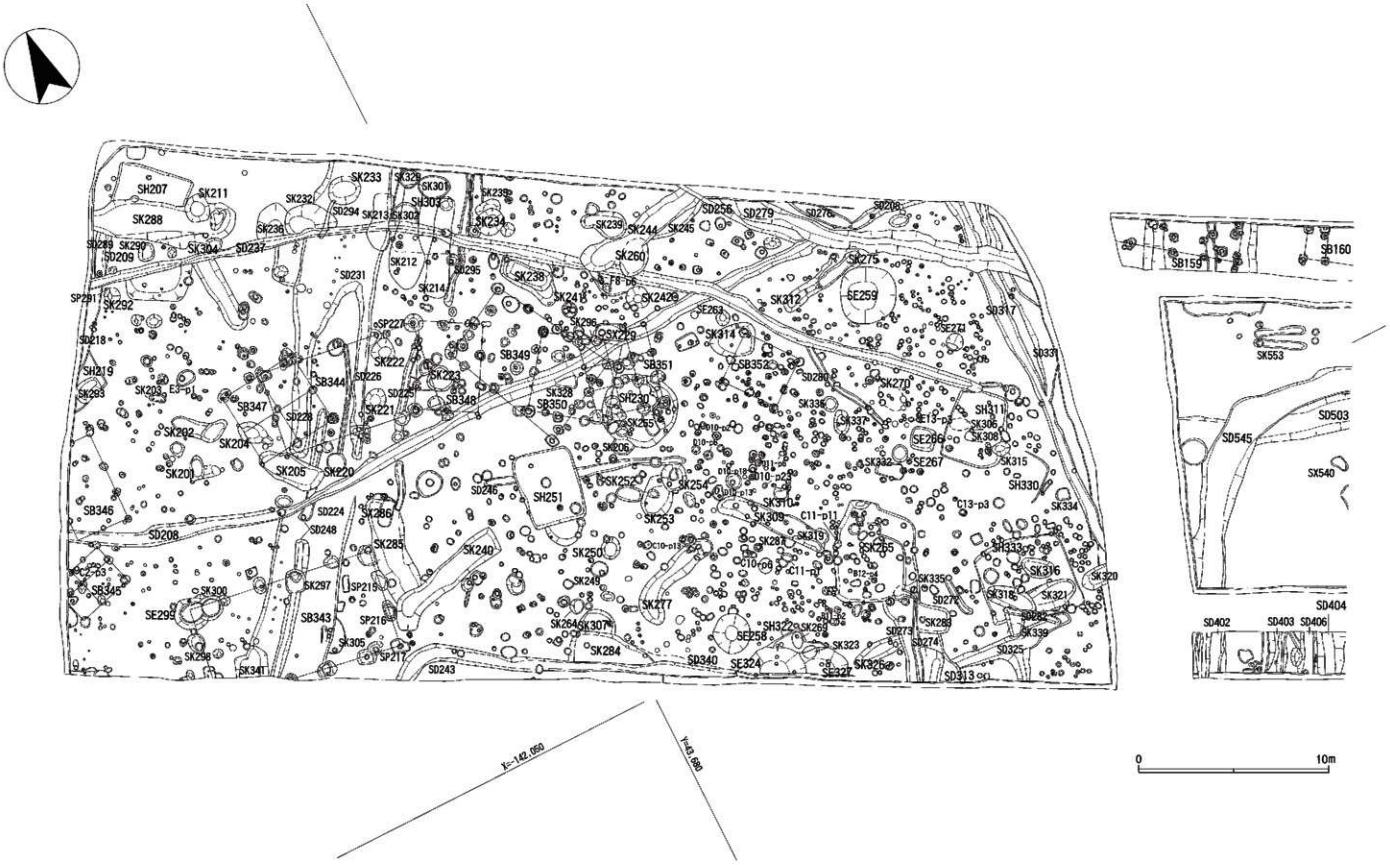
第24図　F・I・J区西側実測図（1：200）



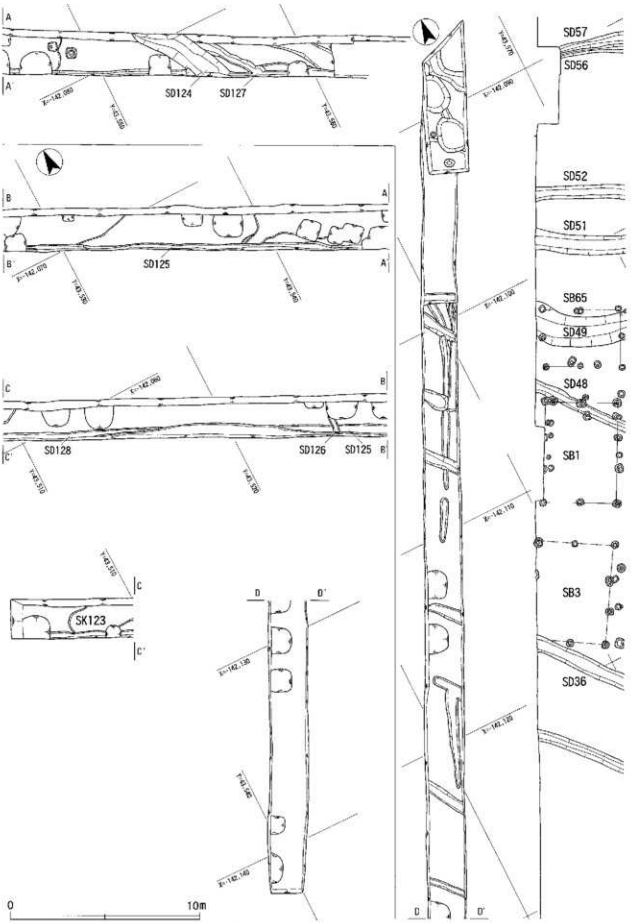
第25図　F・I・J区東側実測図（1：200）



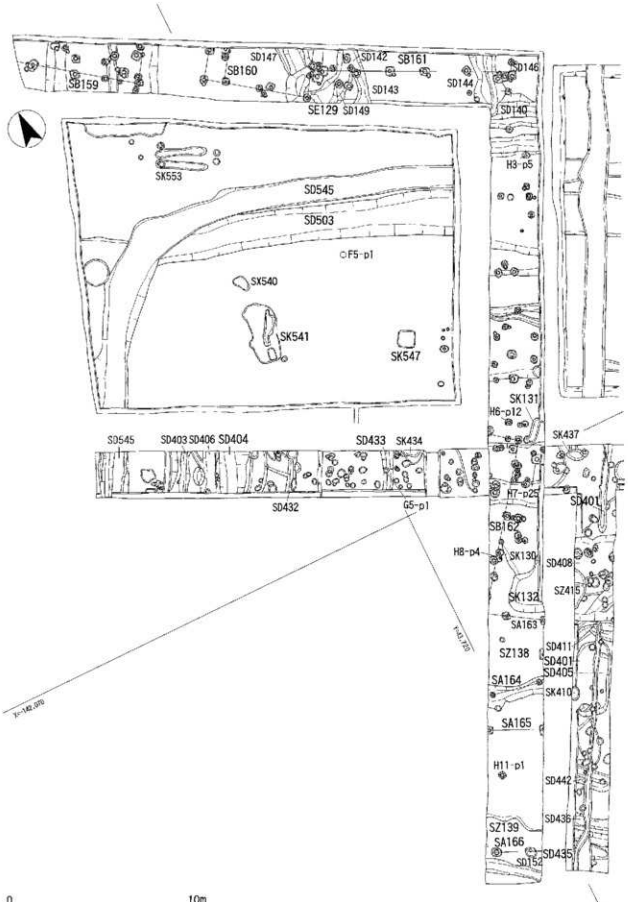
第26図　G区実測図（左下はK区）（1：200）



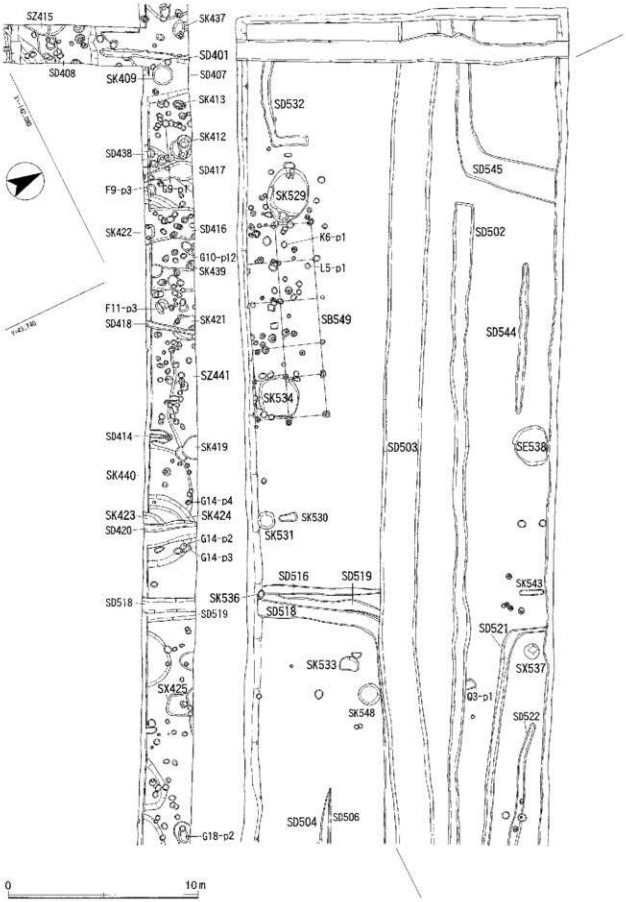
第27図　L区実測図（1：200）



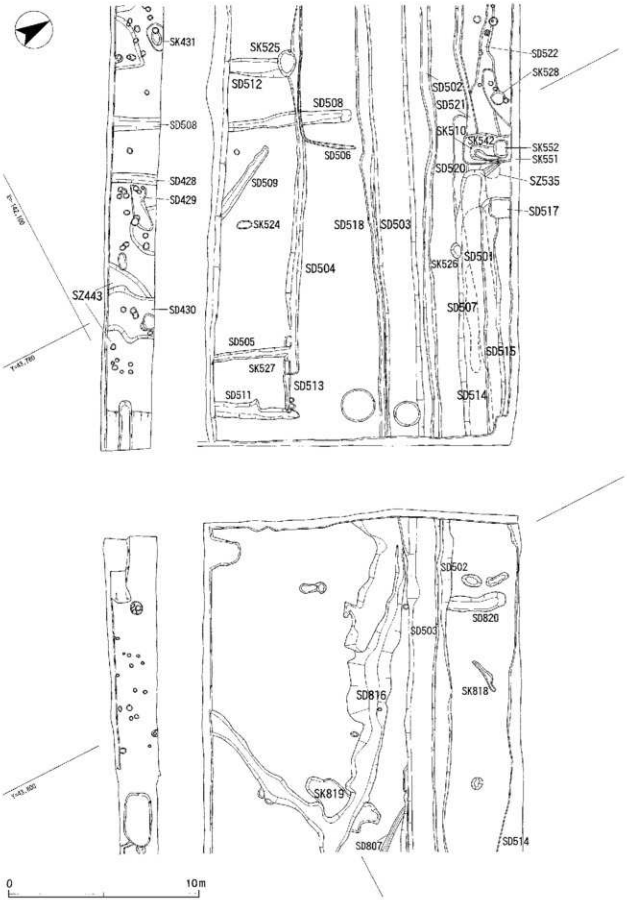
第28図　K区実測図（1：200、右端は中勢道路部分）



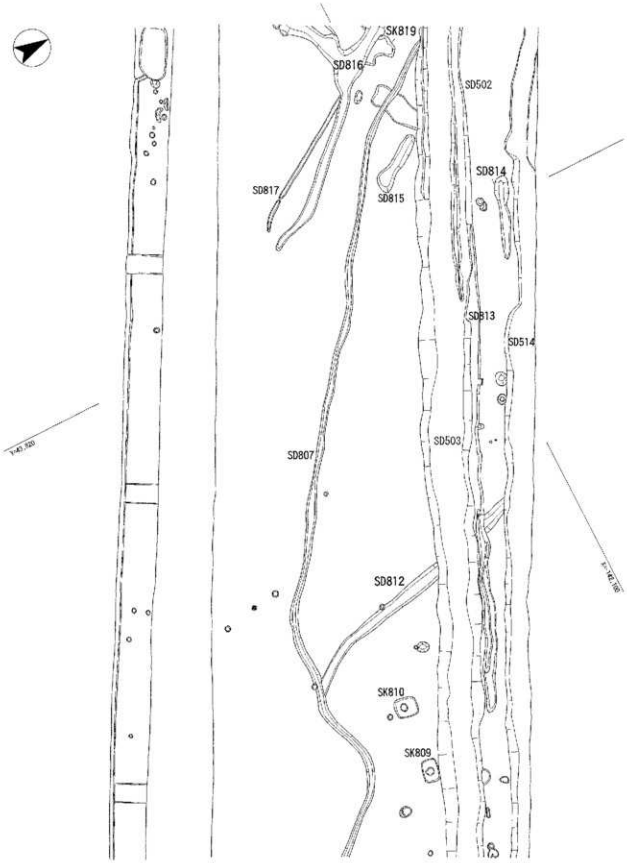
第29図　M・N・O区西側実測図（1：200）



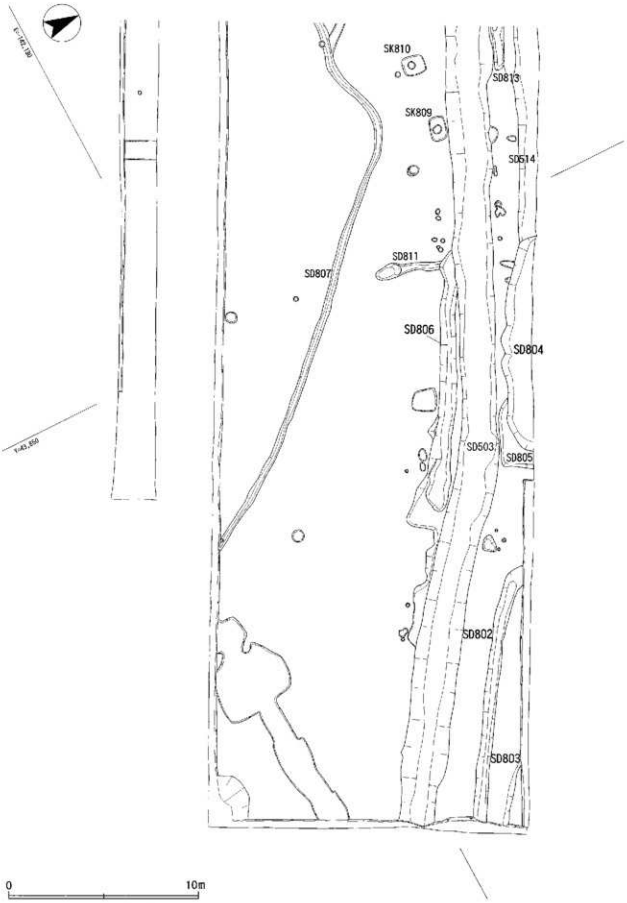
第30図　O・N区実測図（1：200）



第31図 O区東側・N・P区西側実測図（1：200）



第32図 N・P区実測図（1：200）



第33図　N・P区東側実測図（1：200）

第４章　発掘された遺構と遺物

前言でも述べたように、三重県埋蔵文化財センターの調査では、調査区内を４m×４mの方眼（小地区）に分割し、それを調査の基本単位となるグリッドの１単位として調査を行っている。その際、グリッド名の表記はアルファベットと数字を組み合わせて行い、通常グリッドの北西隅を表示の原点とするのが原則である。しかし、替田遺跡の調査では、全調査区を通した統一的な小地区の設定が行われなかったのみならず、調査年次もしくは調査区によって、小地区の設定方法や遺構番号の付与方法が異なっている。そのため、出土遺物への遺構注記も、調査時点の番号が付与されており、現在三重県埋蔵文化財センターに収蔵されている替田遺跡の出土遺物注記も、調査時点のものが注記されたままである。そこで、本報告においては、調査区名称や遺構番号は前述したように本報告用として新たに改変した新番号を付与したものの、遺構と遺物の記述は、無用の混乱を避けて個別に行われた小地区設定の具体的手続きも説明するため、各調査区毎に報告することにする。

なお、調査時遺構番号（遺物注記連動）と本書の遺構名称等の異同は、遺構一覧や遺物観察表で確認されたい。

第１節　Ｈ区の調査

１　概要

Ｈ区は、幅わずか４m弱、総延長89mの独立した逆Ｌ字状の調査区形状を示す。連続する同一トレンチであるが、調査時は東西方向を「Ｄ１区」、南北方向を「Ｄ２区」というトレンチ名称を付与している。

東接する中勢道路に伴う調査区でも北と南の遺構密集部分に比べると遺構密度が薄くなる部分であり、特にピットや土坑といった生活臭のある遺構に乏しく、少量の溝や旧河道が確認されたにとどまる。

２　小地区設定方法

Ｈ区では、国土座標に則らず、トレンチ形状に合わせるかたちで小地区設定を行った。具体的には、東西軸は西から東へ数字を付与しているものの、南北軸は三重県の小地区設定の原則とは異なって、南から北へアルファベットを付与している（第３図）。

３　遺構

ＳＤ361（第35図）　幅2.5m、深さ30cmの溝である。東側の中勢道路調査区でその延長が出ているが、その所見も勘案すると、大きな弧を描きながら東南方向から北西方向へ流れる溝である。

ＳＤ362（第34図）　東接する中勢道路調査区に続く溝で、幅１m、深さ30cmを図る。中勢道路部分も含めると、総延長6.4m分確認でき、形状的には緩やかな弧状を呈する。

ＳＤ363（第23図）　これも東接する中勢道路調査区に続く溝である。中勢道路部分も含めると、総延長62m、幅4.6m、深さ48cmを測るが、ちょうど本調査区で幅が急激に減じ、2.2m程度となっている。

その他　上記以外に若干の土坑や溝、ピットがある。断片であっても遺物が出土した遺構は遺構番号を付与しており、遺構一覧で概略を確認されたい。

４　出土遺物

Ｈ区の出土遺物は極めて少なく、実測しうるほどのものはない。

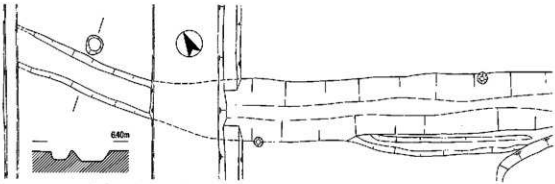
第２節　Ｉ区の調査

１　概要

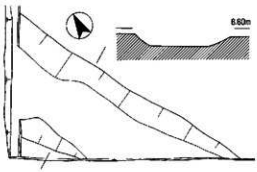
５次調査Ｆ区、６次調査Ｊ区に北接する幅1.5m、東西延長55m（途中２mの調査不能部分あり）の細長い調査区である。

２　小地区設定方法

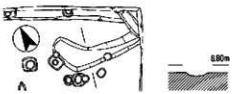
国土座標には則らずに調査区形状に合わせた地区設定ながら、三重県埋蔵文化財センターの小地区付与の基本原則にならわず、西北方向を表示の基準として、調査区形状に平行させて東西軸に東から西へ算用数字、南北軸に北から南へアルファベットを付与した（第４図）。



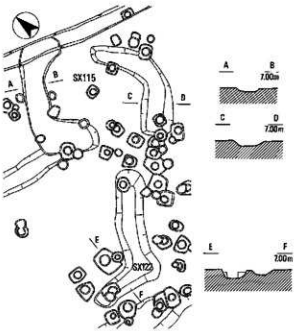
第34図　ＳＤ362実測図（１：100）



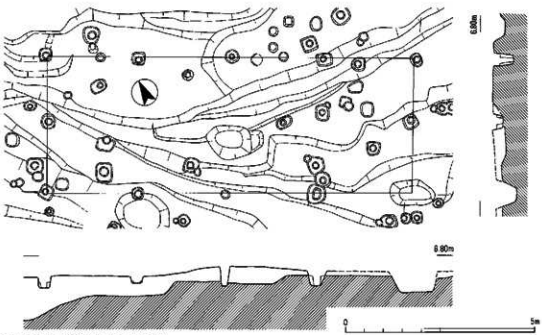
第35図　ＳＤ361実測図（１：100）



第36図　ＳＸ119実測図（１：100）



第37図　ＳＸ115・122実測図（１：100）



第38図　ＳＢ154実測図（１：100）

3　遺構

調査区全体に攪乱が多く、明瞭な遺構はあまりない。南接するＪ区から続く旧河道は確認されているが、これについては次節で説明する。

4　出土遺物

Ｈ区同様、出土遺物は極めて少なく、実測しうるほどの遺物もなかった。

第３節　Ｊ区の調査

1　概要

Ｊ区は、５次調査のＦ区に東接し、Ｇ区に北接する調査区である。やや歪な調査区形状であるが、弥生時代から中世の遺構・遺物が良好に出土した。

2　小地区設定方法

Ｊ区では、前年度に調査を実施した４次調査Ｆ区・Ｇ区に連続する部分であるが、４次調査Ｆ・Ｇ区の小地区番号は踏襲せずに、Ｊ区独自の小地区設定が行われている。具体的には、三重県の遺構番号付与の基本原則に従って、東西軸は西から東へアルファベットを、南北軸は北から南へ数字を付与している（第５図）。

3　遺構

a　弥生時代の遺構

ＳＲ601・606・607・609（第39図）　Ｊ区北西部に所在し、４次調査のＦ区から連続する旧河道群である。北からＳＲ607、ＳＲ606、ＳＲ601、ＳＲ609と並ぶ。ＳＲ606が最も深く、これら流路群の主流路と想定される一方、ＳＲ609は極めて浅く、ＳＲ601やＳＲ606が氾濫した際の派生流路と想定される。また、ＳＲ607は調査区北端を弧状に流れ、Ｉ区へ続く。

これら旧河道群の出土遺物は少ないが、埋土中からは主に弥生土器が出土していることから、これらの形成が弥生時代に遡ると判断される。しかし、例えばＳＲ606からは古墳時代須恵器なども出土しており、完全に埋没する時期はかなり新しいものと思われる。

ＳＫ113（第41図）　長径0.9m×短径0.6m、深さ20cmの略長方形を呈した小土坑で、ＳＥ112に切られている。埋土より弥生土器が出土している。

ＳＸ115（第37図）　調査区の北東隅に平面形状が「く」字形あるいは「コ」字形に屈折する溝状の遺構が集中している部分がある。いずれも小規模ながら、埋土から弥生土器が出土することや、形状の特徴から群集する小型の方形周溝状遺構（方形周溝墓？）群の可能性が考えられ、ＳＸ115・119・122として把握した。このうちＳＸ115は、「コ」字形溝と「く」字形溝で形成された、長径４m×短径3.3mのやや歪な形状を示す小型の方形周溝遺構である。図示しうるほどの遺物は出土していない。

ＳＸ119（第36図）　調査区の隅に存在するため、全体形状は不明であるが、屈折して途切れる幅70cm程度の溝状遺構で、ＳＸ115同様の方形周溝遺構と考えた。その場合、周溝はコーナーで切れず、溝中央寄りの部分で途切れることとなる。

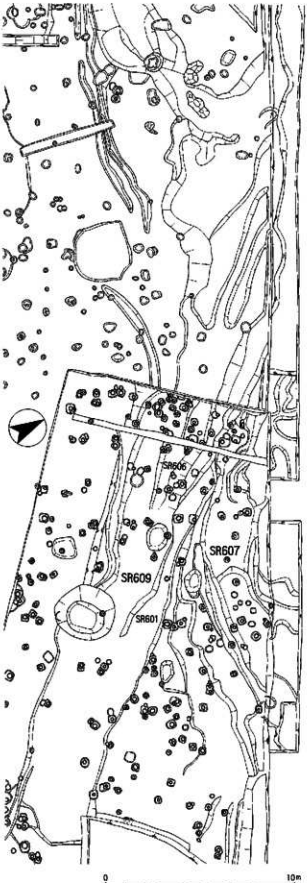
ＳＸ122（第37図）　ＳＸ115の南側に連続して存在する歪な「く」字形の溝で、形状的にはＳＸ119と共通する。屈折の方向から、方形周溝遺構とすると東側の溝に相当するが、対応すべき西側溝は検出されていない。残存部も深さ10cm程度しかないため、削平を受けたものと判断される。埋土から、弥生土器の壷の小片が出土している。

ＳＤ116（第45図）　古墳時代の溝であるＳＤ118に重複されているため起点部分の状況は不明だが、位置関係からおそらく後述のＳＤ117を水源としてそこから南側へ派生させた溝と推定される。直線的な形状を示し、そのまま中勢道路調査区へも続いていることが確認できる。Ｊ区内における最大幅は1.4m、深さ40cmを測る。埋土から出土する土器には弥生土器のほか古墳時代のものも含まれており、溝埋没後も窪み程度には残存していたのかもしれない。

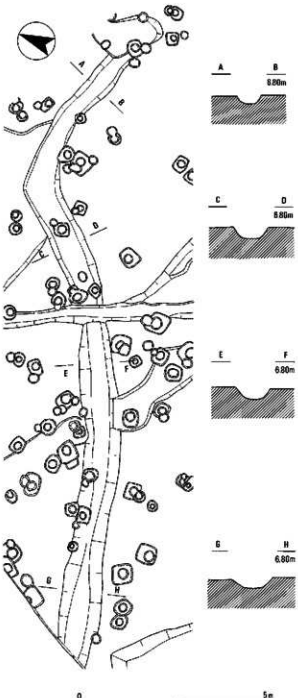
ＳＤ117（第45図）　検出された長さ20m×幅2.5m、深さ50cmの自然流路であるが、隣接するＦ区や中勢道路調査区では未検出である。埋土から弥生土器の小片が出土している。

b　古墳時代の遺構

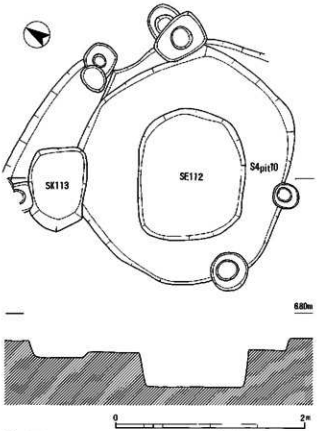
ＳＫ103（第43図）　長径1.4m×短径1.1mの楕円形状を呈し、深さ42cmを測る。底部は平らで、明



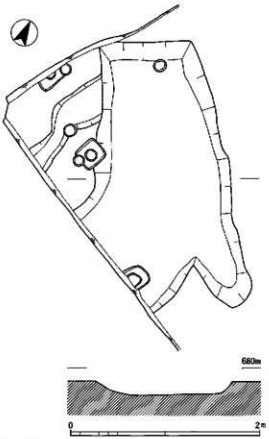
第39図　ＳＲ601・606・607・609実測図（１：200）



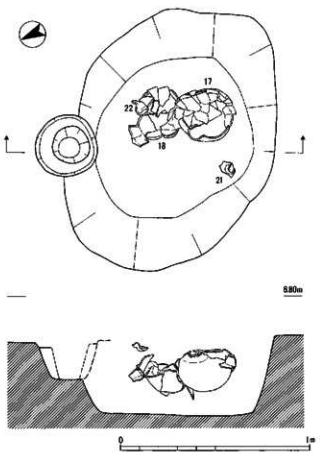
第40図　ＳＲ121実測図（１：100）



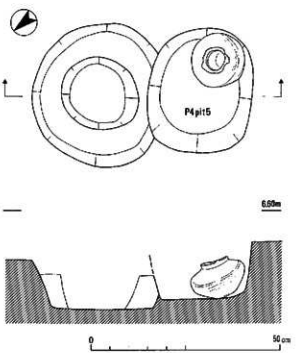
第41図　ＳＥ112・ＳＫ113・Ｓ４pit10実測図（１：40）



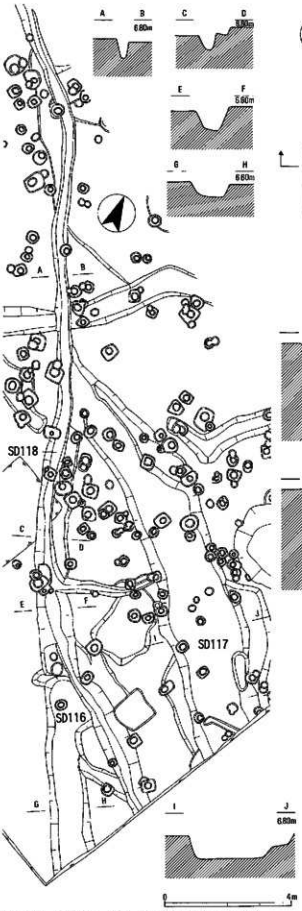
第42図　ＳＫ114実測図（１：40）



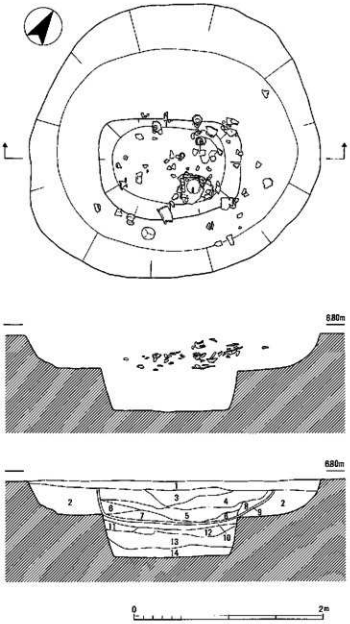
第43図　ＳＫ103実測図（１：20）



第44図　Ｐ４pit５実測図（１：10）



第45図　ＳＤ116・117・118実測図（１：120）



1　2.5Ｙ４／１黄灰色粘砂土
2　５Ｙ４／１灰色粘砂土、
　　7.5ＹＲ４／６褐色砂質土粒含む
3　7.5Ｙ４／１灰色粘砂土、
　　7.5ＹＲ４／６褐色砂質土粒含む（炭化物含む）
4　５Ｙ４／１灰色粘砂土、
　　10ＹＲ４／４褐色粘砂土ブロック含む（炭化物含む）
5　Ｎ３／暗灰色砂質土（炭化物含む）
6　10ＹＲ４／１褐灰色砂質土
7　10ＹＲ３／２黒褐色粘砂土（炭化物含む）
8　10ＹＲ４／２灰黄褐色粘砂土
9　10ＹＲ７／１灰白粘土、
　　7.5ＹＲ６／８橙色粘質土ブロック含む
10　Ｎ４／灰色粘土、7.5ＹＲ６／８橙色粘土ブロック含む
11　Ｎ３／暗灰粘砂土、7.5ＹＲ６／８橙色粘砂土
12　Ｎ５／灰色粘砂土（やや砂質強い）
13　５ＰＢ４／１暗青灰色粘砂土（やや砂質強い）
14　Ｎ７／灰白色砂

第46図　ＳＥ105実測図（１：40）

瞭な掘り込みを持って形成されたため土坑断面形は急角度の逆台形状を呈する。溝底から10cm程度浮いたレベルから、二重口縁壺をはじめとする土器類がまとまって出土している。

ＳＥ105（第46図）　円形の掘形（外周に形成された段）直径3.1m、湧水部が上部で1.5m（底部1.2m）、深さ82cmを測る井戸状の遺構である。湧水部は底部から急角度で一直線に立ち上がっており、本来ここに板状の木材があてがわれていた可能性が高い。下層部となる14層は砂層で、ここが湧水層であったと推定される。その後、一旦埋没が進んだが（10層～12層の粘性土）、その埋没過程で再掘削され、長径1.9mの浅い土坑として再利用されたと推定される。その時の底部が９層の薄い灰色粘土層で、滞水によって形成されたものと思われる。以上をまとめると、ＳＥ105は、当初２段に掘り込まれた井戸として形成され、埋没途中で再掘削されて浅い土坑として再利用されたものと思われる。埋土からは、多数の古墳時代土師器が出土したが、そのほとんどは再利用時の土坑部分からの出土である。

ＳＤ118（第45図）　南北18.5m、南端で東側へ３mほど直角に屈折するＬ字形状の溝である。幅・深さともに50cmを測るシャープな掘り込みをもち、ＳＤ117やＳＤ121を切って存在している。平面プランからは何らかの区画溝的な機能が想起されるが、溝屈折の内側（北東側）では特に区画・囲繞対象となる遺構は確認されていない。埋土から土師器杯が出土した。

ＳＲ121（第40図）　緩やかに蛇行する東西方向の溝で、長さ18m、幅1.1m、深さ30cmを測るが、隣接するＦ区では未検出である。埋土から7世紀代の須恵器杯身が出土している。

ＳＡ631・ＳＢ624（第47図）　これらの遺構はその大部分がＦ区に所在し、個別には既に報告済である。今回のＪ区では、ＳＡ631に連続すると考えられる柱列が新たに確認された。この結果、Ｆ区報告段階ではこれら遺構はセットで存在するという認識はなかったが、ＳＡ631はＳＢ624を囲む柱列（柵）である可能性が高まったので、あらためて報告する。

ＳＢ624は、梁間１間、梁行３間の掘立柱建物で、建物方向はＮ22度Ｅである。ＳＡ631は、このＳＢ624を「コ」字形に取り囲む柱列で、建物の東西主軸の東側延長部には柱穴はなく、柱列の開放部となっている。このことから、ＳＢ624は東側妻入りの建物と推定される。ただし、ＳＡ631はＳＢ624を等分に取り囲んでいるのではなく、東側開放部を基準にすると、北に１間、南に３間分存在する。つまり、ＳＢ624はＳＡ631内の北寄りに存在し、南側にスペースを持っていることになる。なお、ＳＡ631の西および北西側の柱穴は未検出で、状況的に不明な部分が残っている。

Ｆ区報告段階では時期不明とされていたが、ＳＡ631を構成する柱穴のひとつは古墳時代中期の土師器直口壺（67）が出土したピット（５次Ｐ４pit５、第44図）に切られており、古墳時代中期以前の所産と考えられる。

ｃ　古代～中世の遺構

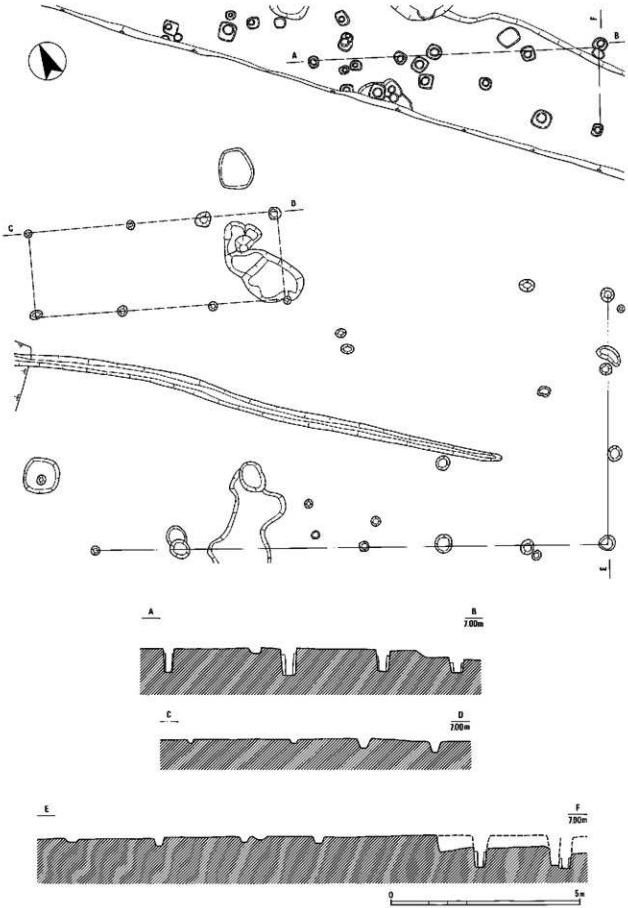
ＳＫ114（第42図）　南側が歪な形状になっているが、長径2.9m×短径1.4mの長方形土坑で、深さ12cmを測る。埋土から土師器皿（47）や志摩式製塩土器（48）が出土した。

ＳＥ106（第48図）　底部に３枚の底板を敷き、長方形板材を縦方向に組んで井戸側とした井戸である。立板は、各辺５枚で形成され、内外に横板を渡してそれをコーナーで組合せて固定している。そのため、各辺の隅に位置する立板の外側には、横板両端を嵌め込むために方形の抉りが入れられている。掘形は2.5m×2.1mの楕円形、井戸側は0.7m×0.6mを測る。井戸の掘形や井戸枠内からは、多数の遺物が出土しているが、その多くは古代の遺物（49～66）である。

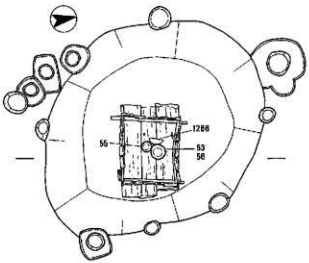
ＳＢ154（第38図）　桁行４間（9.8m）×梁行２間（3.6m）の側柱建物で、柱間寸法は桁行2.45m等間、梁行は1.8mで、柱掘形は直径30～40cmの方形を基本とする。建物方向は、Ｎ29度Ｅである。

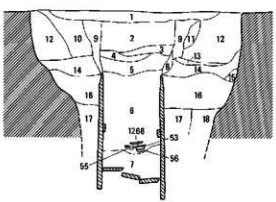
ＳＢ155（第49図）　桁行５間（12m）×梁行３間（6.8m）の東西棟の掘立柱建物で、梁の南側一間分は庇（南庇）となる。柱穴は、長径30～40cmの隅丸方形もしくは隅丸長方形で、ＳＲ601やＳＥ105を切って存在している。建物方向は、Ｎ20度Ｅである。

ＳＢ156（第50図）　西側のＦ区に延びる部分など検出されていない柱穴もあるが、位置的に西側妻



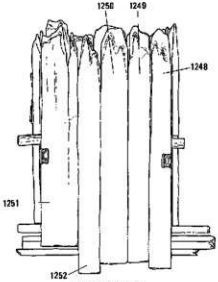
第47図　ＳＡ631・ＳＢ624実測図（１：100）



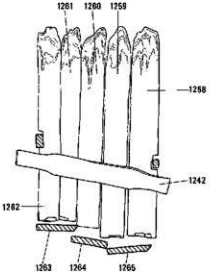


1　５Ｙ５／２灰オリーブ色細砂、7.5ＹＲ３／１黒褐色細砂・10ＹＲ５／６黄褐色細砂ブロック含む
2　7.5ＹＲ５／２灰褐色粘砂土、7.5ＹＲ３／１黒褐色細砂・10ＹＲ６／８明褐色細砂ブロック含む
3　10ＹＲ４／１褐灰色粘砂土、7.5ＹＲ５／６明褐色細砂・10ＹＲ３／２黒褐色細砂ブロック含む
4　7.5ＹＲ４／１褐灰色粘砂土、7.5ＹＲ６／８橙色細砂・10ＹＲ３／１黒褐色細砂ブロック含む
5　５ＹＲ４／１褐灰色粘土、５ＹＲ４／６赤褐色粘土・10ＹＲ３／１黒褐色細砂ブロック含む
6　Ｎ３／暗灰色粘砂土、10ＹＲ４／３にぶい黄褐色粘質土ブロック含む（礫物量体多く含む）
7　Ｎ２／黒色粘土（粗砂混じる）
8　Ｎ５／灰色粘土、５ＹＲ５／８明赤褐色粘質ブロック含む
9　５ＹＲ３／２黒褐色粘砂土、7.5ＹＲ４／１褐灰色粘砂土ブロック含む
10　10Ｙ５／１灰色粘砂土、５ＹＲ５／８明赤褐色細砂ブロック含む
11　2.5Ｙ４／２暗灰黄色粘砂土・2.5Ｙ７／６明黄褐色粘砂土ブロック含む
12　10Ｙ５／１灰色粘砂土、５ＹＲ５／８明赤褐色細砂ブロック含む（９層より粘性弱い）
13　５ＹＲ５／８明赤褐色粘砂土
14　2.5Ｙ５／１黄灰色粘質土、10ＹＲ５／８黄褐色粘土（やや砂質帯び5）ブロック含む
15　10ＹＲ６／４にぶい黄橙色粘砂土
16　５Ｂ４／１暗青灰色粘質土、10ＹＲ５／８黄褐色粘土・Ｎ６／灰色砂ブロック含む
17　Ｂ３／１暗青灰色粘土
18　Ｎ３／暗灰色粘砂土

0　2m



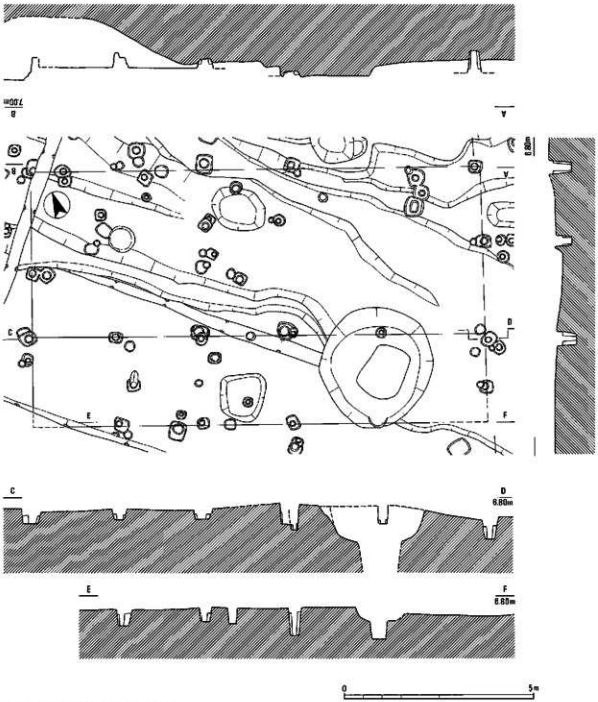
井戸枠南側外面



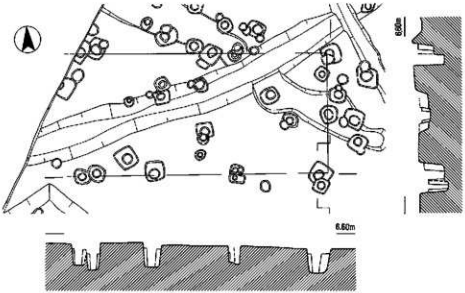
井戸枠西側内面

0　1m

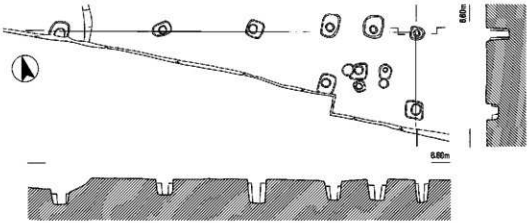
第48図　ＳＥ106実測図（平面・断面１：40、井戸枠１：20）



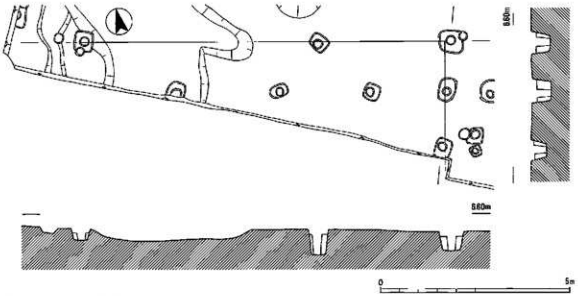
第49図　ＳＢ155実測図（１：100）



第50図　ＳＢ156実測図（１：100）



第51図　ＳＢ158実測図（１：100）



第52図　ＳＢ157実測図（１：100）

柱と推定される柱穴が存在したので桁行４間（9.2m）×梁行２間（3.5m）の東西棟の側柱建物と把握した。建物方向はN20度Eで、建物を構成する柱穴の掘形はいずれも１辺50cm程度の方形である。

ＳＢ157（第52図）　ＳＫ114との重複部分の柱穴が未検出のほか、隣接するＦ・Ｇ区でも延長部の柱穴が未検出であるが（Ｆ・Ｇ区の検出高が低い可能性）、桁行３間以上×梁行２間の側柱建物と思われる。柱穴掘形は、直径50cmほどの方形であるが、隅柱は直径60cm強と若干大きい。

ＳＢ158（第51図）　本建物も、隣接する調査区であるＦ・Ｇ区では未検出であるが、桁行４間以上の側柱建物であろう。柱掘形は、隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈し、建物方向はN17度Eである。

４　出土遺物

ａ　弥生時代遺構出土の遺物

ＳＲ601出土遺物（１～３）　直口壺（１）・甕（２～３）がある。２は口縁部、３は脚台部である。

ＳＲ606出土遺物（４～７）　弥生土器としては壺（４～５）があるが、この他、古墳時代の滑石製有孔円板（６）、須恵器高杯蓋（７）がある。広口壺の口頸部である４は、頸部に直線文を密接施文しており、沈線間に刺突を充填した５ともども、中期初頭の所産と思われる。

ＳＲ607出土遺物（８）　弥生土器の小形の甕である。口縁部は外側へ短く、かつ緩やかに屈折する。体上部はほとんど張らず、調整もナデないしは板ナデを基本としている。

ＳＫ113出土遺物（９）　弥生土器の壺の胴底部片である。胴部は下膨れ形状を呈し、最も膨らんだ部分に隆帯を貼付している。

ＳＤ116出土遺物（10～14）　弥生土器のほか、古墳時代以降の遺物も混じる。弥生土器甕（10）・壺胴部（11）、須恵器杯蓋（12）・土師器杯（13～14）がある。11は破片であるが、胴部は文様帯とミガキによる無文部を段状に連続させるもので、文様帯は沈線間にヨコハケを充填して部分的にタテハケでアクセントを付けている。中期前半の所産であろう。

ＳＤ117出土遺物（15）　弥生土器の壺の破片である。頸部片で、櫛描文が入る。

ＳＸ122出土遺物（16）　弥生土器の壺の破片である。櫛描による流水文が施されている。

ｂ　古墳時代遺構出土の遺物

ＳＫ103出土遺物（17～22）　いずれも土師器で、壺胴部（17）・二重口縁壺（18）・小形Ｓ字甕口縁部（19）・高杯（20～21）・小型平底壺（22）がある。二重口縁壺18は、平底で、口縁部の開きが弱く、ナデ調整の粗製化したものである。

ＳＥ105出土遺物（23～44）　いずれも土師器で、二重口縁壺（23～25）・小形丸底壺（27～28）・小型平底壺（29）・高杯（26・30～36）・Ｓ字甕（37～44）がある。二重口縁壺は、いずれも大きな一次口縁に小さな二次口縁の付くナデ調整のものである。高杯のうち、30～36はいわゆる屈折脚高杯で、脚部内面をナデ調整している。26は、ハケによる調整痕を顕著に残した分厚い異形の高杯である。Ｓ字甕は、いずれもＤ類以降のものである。

ＳＤ118出土遺物（45）　土師器杯である。口縁端部を面取りし、全体をナデ調整で仕上げている。

ＳＲ121出土遺物（46）　須恵器杯身である。いわゆる古墳時代型であるが、口縁部の立ち上がりが極めて短い退化形態を示す個体で、底部のロクロケズリもみられない。７世紀後半の所産であろう。

Ｐ４pit５出土遺物（67）　小型の土師器直口壺である。胴上部にはミガキも認められるが、体下半部はケズリ痕跡をそのまま残す。

ｃ　古代～中世遺構出土の遺物

ＳＫ114出土遺物（47～48）　土師器皿（47）と志摩式製塩土器（48）を図示した。土師器皿は、口縁部がヨコナデによってやや外反気味となっている。製塩土器は、やや小振りである。

ＳＥ106出土遺物（49～66・1239～1267）　土器では、土師器の皿（49～52）・杯（53～57）・甕（58～60）甑（61）・鉢（62、斎宮でいう「盤Ａ[3]」）、黒色土器の円形板（63）・須恵器杯蓋（64）・灰釉陶器椀（65～66）、木製品では、井戸横桟（1239～1242）・井戸縦板（1243～1262）・井戸底板（1263～1265）・曲物底板（1266）・横櫛（1267）がある。

土師器皿49は、内面に螺旋状暗文を僅かに残す。土師器杯のうち、53や55は底部と胴部の境に明瞭な稜が入り、ロクロ使用の可能性が残る。土師器甕は、いずれも口縁端部にヨコナデによる面を形成する。

全体に平安時代のものが主体を占めると思われるが、土師器甕などは口縁部外面に面をもつなどやや古い要素を残し、若干の時間幅がある。なお、63は砥の可能性がある。木製品のうち横桟は横位で出土したが、レイアウトの都合上、縦位で配置した。

ＳＢ154出土遺物（68～69）　土師器椀（68）と山茶椀（69）がある。土師器椀は、黒色土器椀の形状にも似るが、黒色化はなされていない。

Ｊ－Ｎ１pit２出土遺物（70）　ロクロ土師器の小皿で、柱状高台をもつ。

Ｊ－Ｎ１pit４出土遺物（71）　高台付きのロクロ土師器であるが、器種は不明である。

Ｊ－Ｒ６pit５出土遺物（72～73）　山茶椀（72）と土師器小皿(73)がある。山茶椀は瀬戸・猿投系[2]、土師器小皿はいわゆる「ての字小皿」で、京都系を模倣した在地産である。

Ｊ－Ｓ４pit10出土遺物（74～75）　山茶椀（74）と土師器甕（75）である。山茶椀は渥美系である。

Ｊ－Ｕ２pit２出土遺物（76）　土師器甕である。法量の小さい外面ハケ調整の甕で、口縁外面にヨコナデによる面を有する。

Ｊ－Ｒ４pit17出土遺物（77）　ロクロ土師器の皿である。口縁内面に沈線が入る。

Ｊ－Ｎ３pit14出土遺物（78）　黒色土器の椀で、内面を黒化したＡ類である。

Ｊ－Ｎ２pit15出土遺物（79）　灰釉陶器椀で、猿投系である。

Ｊ－Ｍ３pit７出土遺物（80）　凝灰岩製の砥石である。撥形形状を呈するが、片側を欠損する。

ｄ　Ｊ区包含層等出土遺物

遺構以外から出土した遺物に関して、表土掘削時出土なども含めて報告する。

81～87は弥生土器で、81～84は甕、85～87は壺である。

このうち、甕81は、底部を穿孔する土器であるが、整形・調整自体は「体部外面タテハケ・口唇部刻み・口縁内面ヨコハケ」手法で特徴付けられるもので、同手法をもつ甕は替田遺跡出土の弥生中期の甕で最も一般的な存在である。そこで、以下では同特徴を「Ａ調整」、Ａ調整から口唇部刻みを省略して口唇部ヨコナデ仕上げのものを「Ｂ調整」と呼称して記述を進めることとする（その他の特徴のものは別途、個別に記述する）。

そのほか、小形の甕83は、胴上部が張らず、口縁が水平近く開く。また、86は沈線によって区画された縄文帯をもつ。これらも含め、全体として中期前半に属するものが中心である。

88は石庖丁で、塩基性岩製である。

89～90は古墳時代遺物である。89は土師器杯、90は須恵器杯身である。90は、立ち上がりはしっかりしているが、法量は小さく、７世紀代の所産であろう。

91～93は古代の土器で、91は須恵器大甕、92～93は土師器杯である。92は口縁端部がわずかに開く粗製の杯、93は暗文こそ不明ながら、内外をミガキ調整した精製品である。

94～96は中世の土器で、94は青磁香炉、95～96は山茶椀である。94は、脚部に花文状の透孔が穿たれたもので、15世紀後半から16世紀前半頃の所産であろう。山茶椀は、95が瀬戸系、96が知多・猿投系である。

97～99は、鉄釘である。

註

（1）斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告』Ⅰ　2001

（2）伊藤裕偉氏のご教示による。以下、中世遺物に関しては、系統等の記述など伊藤氏のご教示による。

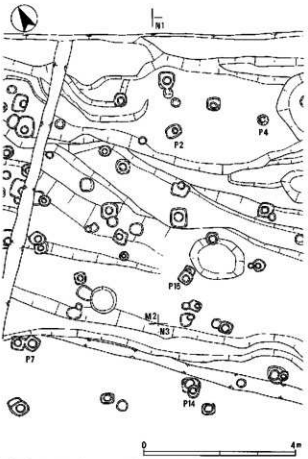
第４節　Ｋ区の調査

１　概要

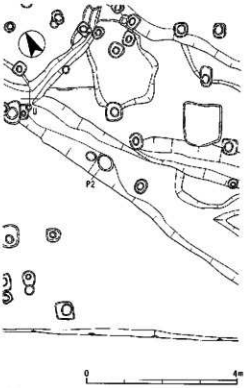
Ｋ区は、幅2.2m、総延長127mの細長い調査区である。北側の東西方向のトレンチと、その東端から南に延びる南北方向のトレンチからなるが、南側の南北トレンチは厳密には弐ノ坪遺跡の範囲に含まれる。なお、両トレンチの屈折部８ｍ分は、平成12年度に実施された第4次調査時にトレンチ調査されている（Ｇ区の一部）。

２　小地区設定方法

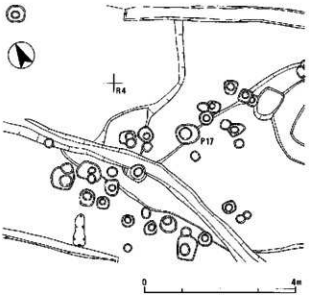
Ｋ区は、４次調査Ｇ区に続く部分であるが、Ｇ区



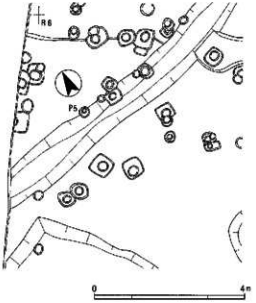
第53図　N 1pit 2・4、N 3pit14、N 2pit15、
M 3pit 7 位置図（1：100）



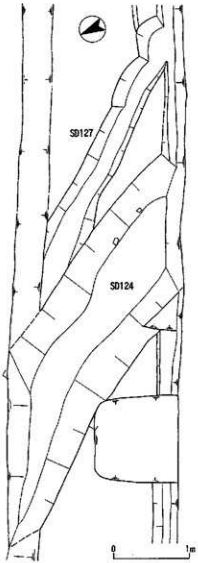
第54図　U 7pit 2 位置図（1：100）



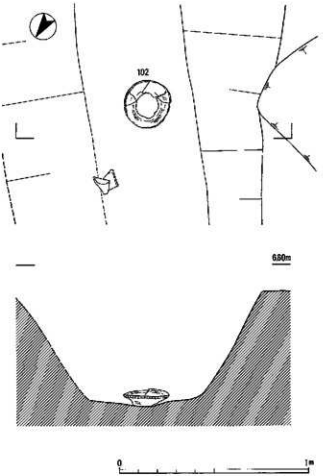
第55図　R 4pit17位置図（1：100）



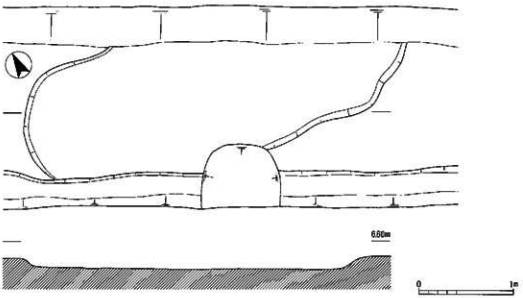
第56図　R 6pit 5 位置図（1：100）



第57図　ＳＤ124・127実測図（１：50）



第58図　ＳＤ124遺物出土状況図（１：20）



第59図　ＳＫ123実測図（１：40）

の小地区とはリンクさせずに、K区として独立して行っている。すなわち、三重県埋蔵文化財センターの小地区付与の基本原則に則って北西隅を表示の基点とし、トレンチの形状に沿って東西軸は西から東へアルファベットを、南北軸は北から南へ数字を付与している（第6図）。

3　遺構

遺構密度も乏しく、報告すべき数も少ないので、本地区は時期別に分けずに一括して説明を加える。

ＳＫ123（第59図）　調査区の幅が狭いため全体形状は不明だが、長径４m以上×短径1.6mの楕円形の土坑で、深さは10cm程度と浅かった。埋土からは土錘２個（100～101）が出土したが、明瞭な時期を示すものではない。

ＳＤ124（第58図）　調査区幅が狭いため全体形は示しえないが、幅1.4m、深さ60cmを測るしっかりとした溝である。埋土から弥生土器が出土している。

その他（素掘り小溝遺構、第28図）　南側の南北トレンチの遺構は、出土遺物も乏しく、報告しうるほどの遺構はないが、南側の南北トレンチには素掘り小溝があり、そのいくつかは中勢道路調査区の式ノ坪遺跡にも連続する。

4　出土遺物

ＳＫ123出土遺物（100～101）　土師質の土錘である。101は、中央部が膨らむ菱形形状をとる。

ＳＤ124出土遺物（102～109）　弥生土器で、102～107は壺、108～109は甕である。102は広口壺で、口縁端部に刻目刺突を入れた中期の土器である。104は、頸部に縄文を施した細頸壺である。

K区包含層等出土遺物（110～115）　須恵器杯蓋（110）・転用硯（111）・土錘（112～115）である。転用硯は薄手であるが、須恵器からの転用である。

第５節　Ｌ区の調査

1　概要

Ｌ区は、西接する中勢道路調査区Ｂ地区と並んで替田遺跡で最も遺構の濃密な部分である。発掘調査では、上層と下層とに分層して調査したが、整理の結果、必ずしも遺物がそのようには分別されなかった。このことは、結果として遺構埋土の濃淡によってより上面で検出できた遺構と、少し削り込まなければ検出できなかった遺構とが出たが、実際には「下層面」検出の遺構も本来は上面で把握されるべき遺構であったことを示している。実際、調査区壁の土層観察からは、「上層／下層」の別は存在しなかった。以上を鑑み、ここでは両者を一括して報告する。

2　小地区設定方法

本地区の小地区は、国土座標には則らずに調査区の形状に合わせて東西軸は西から東へ数字を付与したが、西北隅を表示の基本とする三重県原則に拠らずに、南北軸は南から北へアルファベットを付与している（第７図）。

3　遺構

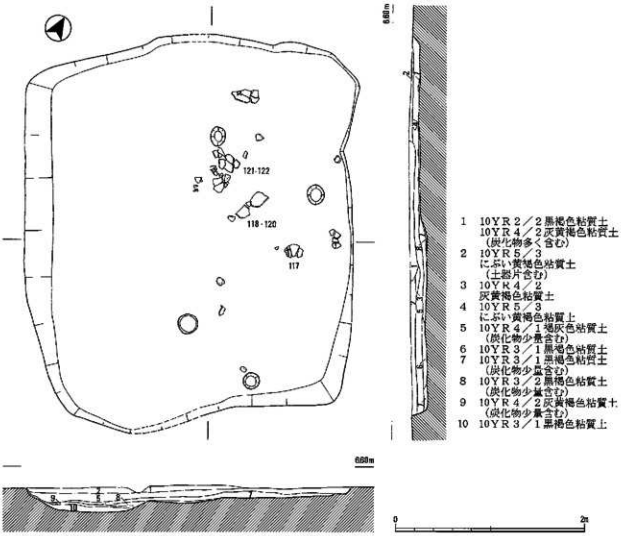
a　弥生時代の遺構

ＳＨ207（第60図）　長径5.1m×短径4.3mの方形竪穴状遺構で、深さ26cmを測る。周溝や主柱穴が未確認のため竪穴住居と確定するには疑問も残るが、遺構の平面形から竪穴住居と推定した。住居南側はＳＫ288をはじめとする他遺構との切り合いによって、詳細な形状が掴みづらい。埋土から、中期前葉の土器（116～130）や石鏃等の石器（131～134）が多く出土している。

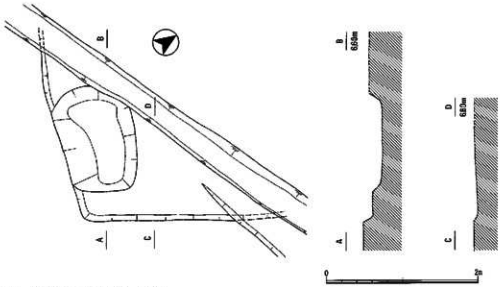
ＳＨ219（第61図）　調査区際で検出されたため、住居東南隅の一部を検出したのみである。1.8m以上×1.7mの方形竪穴住居と推定したが、西側の中勢道路調査区では未検出のため、疑問も残る。南壁に接して、長径1.4m×短径1m、深さ23cmの土坑があり、貯蔵穴かと推定される。図示しうるほどの出土遺物はなかった。

ＳＨ230（第62図）　4.1m×3.9mの規模を有する替田遺跡唯一の略円形の竪穴住居で、深さ29cmを測る。ＳＢ351をはじめとする重複遺構のため、遺構自体の残りは悪い。壁柱穴かと推定される小穴が住居東側の壁に見られるが、住居を全周するほどは検出できなかった。主柱穴は方形に配された４柱と推定されるが、１本が未確認であった。埋土から、中期の土器（135～136）が出土した。

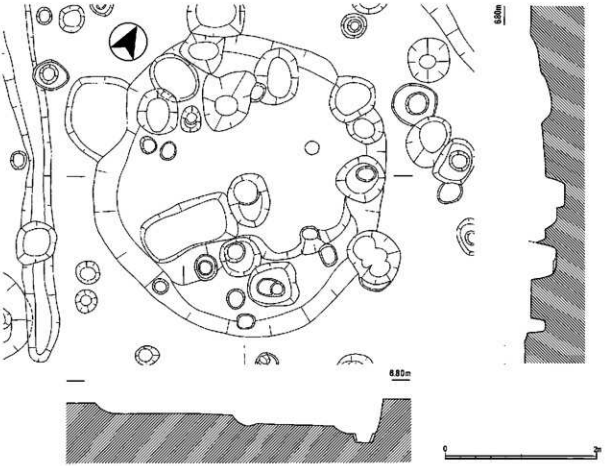
ＳＨ251（第63図）　長径4.3m×3.8mの長方形の竪穴住居で、深さ25cmを測る。他遺構との重複が



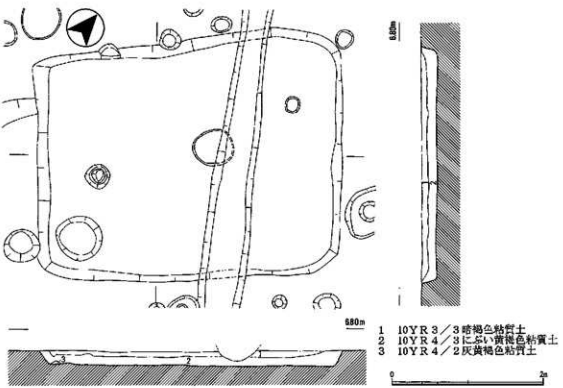
第60図　ＳＨ207実測図（１：40）



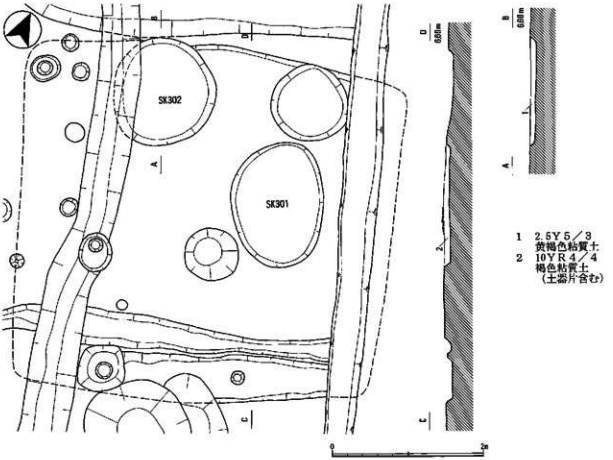
第61図　ＳＨ219実測図（１：50）



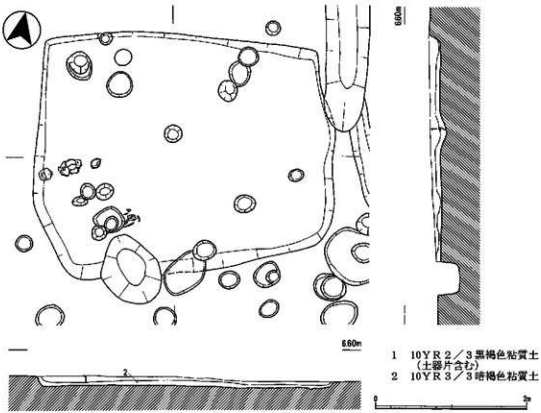
第62図　ＳＨ230実測図（１：50）



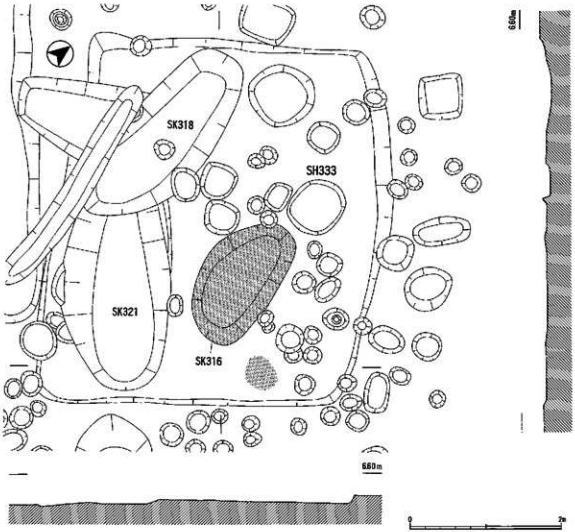
第63図　ＳＨ251実測図（１：50）



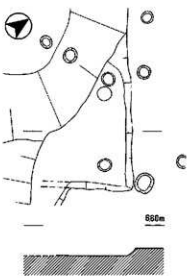
第64図 ＳＨ303・ＳＫ301・302実測図（１：50）



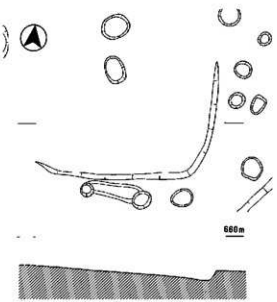
第65図　ＳＨ311実測図（１：50）



第66図　ＳＨ333実測図（１：50）



第67図　ＳＨ322実測図（１：50）



第68図　ＳＨ330実測図（１：50）

ほとんどない状態で検出されたが、周溝や主柱穴は明瞭でない。調査精度に起因するのか、上屋構造自体が極めて貧弱なものであったためかは判然としない。埋土からは、図示しうるほどの土器は出土しなかったが、石鏃や柱状片刃石斧等の石器類（137～141）が出土している。なお、埋土の洗浄等は実施していない。

ＳＨ303（第64図）　長径５ｍ×短径4.6m以上、深さ９㎝を測る竪穴住居であるが、残りは悪い。この住居も周溝や主柱穴は不明であるが、住居ほぼ中央の床面に炉跡が確認されている。埋土から中期前半の土器（142～146）が出土している。

ＳＨ311（第65図）　北東隅がやや流出しているが、長径４ｍ×短径3.2m、深さ５㎝の長方形プランの竪穴住居である。周溝は確認できなかったが、主柱穴は確認している。埋土から中期前葉の土器（147～150）や石鏃などの石器（151～153）が出土している。

ＳＨ322（第67図）　調査区の縁辺に所在するため一部しか検出していないが、一辺4.3m以上の方形ないしは長方形の竪穴住居である。ＳＥ324やＳＥ327の重複を受け、残存状況は悪い。埋土から図示しうるほどの遺物は出土しなかった。

ＳＨ330（第68図）　削平や流出のため、住居の東北隅のみが残存しただけであるが、2.2m以上×1.6m以上の方形もしくは長方形の竪穴住居と推定される。埋土から図示しうるほどの遺物は出土しなかった。

ＳＨ333（第66図）　長さ4.8m×幅4.4mの略方形の竪穴住居で、深さ10㎝を測る。周溝は未確認であるが、住居のほぼ中央に1.1m×0.9m、深さ12㎝の焼土の詰まった部分があり、炉跡と推定される。ほぼ炉跡に接する楕円形土坑、ＳＫ316は別遺構である。埋土から図示しうるほどの遺物は出土しなかった。

ＳＫ201（第69図）　長さ1.5m×幅0.8mの楕円形土坑であるが、残存の深さは17㎝とかなり浅い。埋土から中期の土器（154）が出土した。

ＳＫ202（第73図）　東側に別土坑が重複するが、長さ2.5m×幅1.1mの楕円形土坑で、深さ42㎝を測る。中期の土器が出土したが、図示しうるほどのものはなかった。

ＳＫ204（第70図）　長さ1.6m×幅1.1mの楕円形土坑で、深さ26㎝を測る。埋土全体に炭を多く含む。埋土から中期前半の壺（155）が出土した

ＳＫ205（第72図）　長さ3.6m×幅1.5m、深さ25㎝を測る大型の長楕円形土坑で、埋土に炭を多く含む。中期前葉の土器が出土しているが小片であり、図示しうるものとしては土錘（156～157）がある。

ＳＫ211（第71図）　1.2m×1.1mの略円形の土坑で、深さ25㎝を測る。埋土から中期の甕（159）が出土した。

ＳＫ220（第74図）　直径1.1mの円形土坑で、深さ15㎝を測る。埋土より弥生土器が出土したが、図示しうるほどではなかった。

ＳＫ221（第76図）　長径1.1m、短径１ｍの円形土坑で、深さ31㎝を測る。埋土に混じるかたちで中期初頭の甕（160）が出土した。

ＳＫ223（第77図）　他遺構との重複などもあってややかたちは崩れているが、長径1.4m×短径1.3mの円形土坑である。床面は浅い擂鉢状になっており、深さ15㎝を測る。埋土から中期前葉の土器（161～162）が出土した。

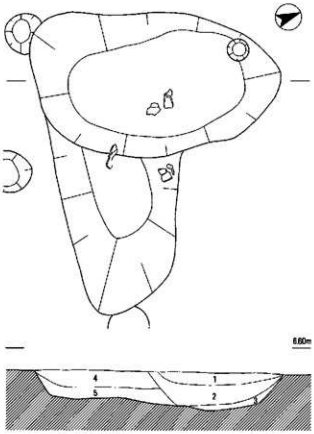
ＳＫ233（第80図）　長径1.5m×短径0.9mの楕円形土坑である。逆台形状の掘り込みを有し、深さ30㎝を測る。埋土から中期初頭の甕（163～164）が出土している。

ＳＫ234（第75図）　長径1.8m×短径1.2mの楕円形土坑で、深さ33㎝を測る。図示しうる遺物では軽石（165）がある程度だが、出土遺物から弥生時代の所産と思われる。

ＳＫ238（第83図）　長さ3.7m×幅2.5mの歪な楕円形土坑で、深さ23㎝を測る。２段に掘り込まれており、下段は箱状の断面形を呈する。東南側に隣接するＳＫ244とセットとみて方形周溝墓周溝の可能性も考えられたが、溝主軸が通有の方形周溝墓とはかなりずれていて無理があり、単独の土坑とみるのが妥当である。埋土からは中期前葉の土器（166～170）が出土している。

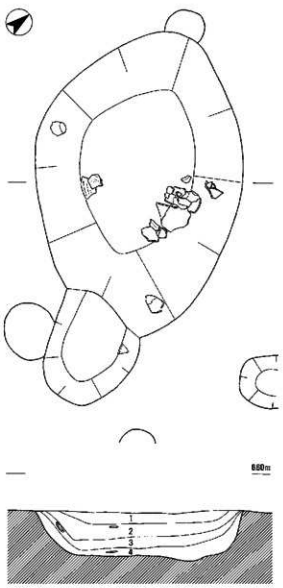
ＳＫ239（第79図）　長さ２ｍ×幅1.5mの片端部が幅広となる土坑で、深さ50㎝を測る。埋土から中期前葉の甕（171～172）が出土した。

ＳＫ240（第87図）　長さ７ｍ×幅1.5mの細長い溝状の土坑で、深さ43㎝を測る。土坑は直線では



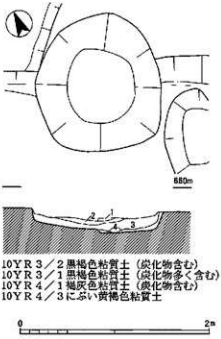
1　10ＹＲ３／２黒褐色土
2　10ＹＲ２／２黒褐色土
3　10ＹＲ４／２灰黄褐色細砂
4　10ＹＲ３／３暗褐色土
5　10ＹＲ４／１褐灰色土

第69図　ＳＫ201実測図（１：20）



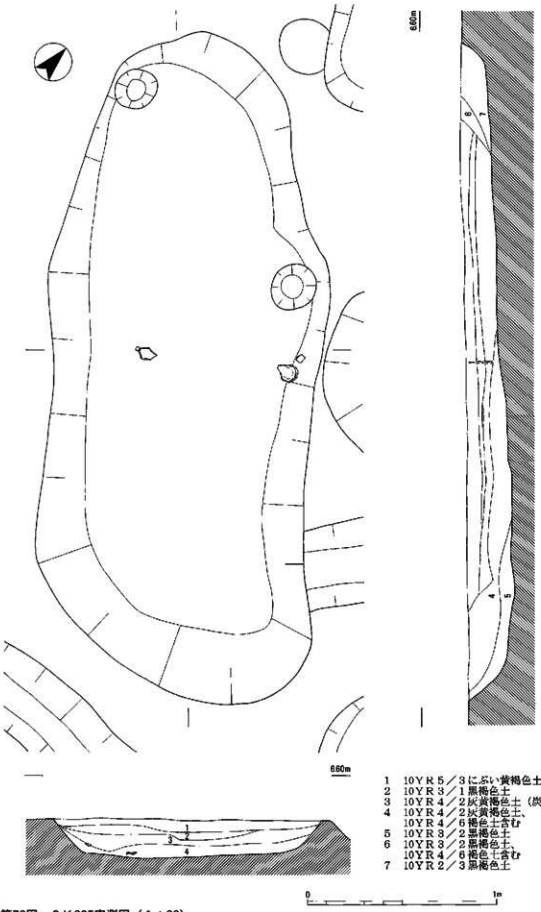
1　10ＹＲ４／３にぶい黄褐色粘質土（土器片含む）
2　10ＹＲ４／２灰黄褐色土
3　10ＹＲ３／１黒褐色粘質土（炭化物多く含む）
4　10ＹＲ４／１褐灰色粘質土

第70図　ＳＫ204実測図（１：20）

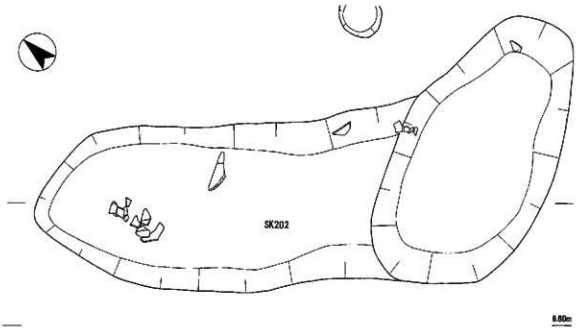


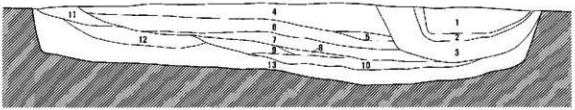
1　10ＹＲ３／２黒褐色粘質土（炭化物含む）
2　10ＹＲ３／１黒褐色粘質土（炭化物多く含む）
3　10ＹＲ４／１褐灰色粘質土（炭化物含む）
4　10ＹＲ４／３にぶい黄褐色粘質土

第71図　ＳＫ211実測図（１：40）



第72図　ＳＫ205実測図（１：20）

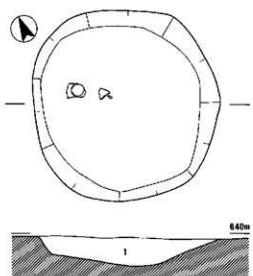




1　10ＹＲ５／３にぶい黄褐色土粘質土
2　10ＹＲ４／１褐灰色粘質土
3　10ＹＲ２／３黒褐色粘質土（炭化物含む）
4　10ＹＲ４／２灰黄褐色粘質土
5　10ＹＲ５／３にぶい黄褐色粘質土
6　10ＹＲ４／３にぶい黄褐色粘質土（炭化物含む）
7　10ＹＲ５／２灰黄褐色粘質土（炭化物含む）
8　10ＹＲ５／１褐灰色粘質土（炭化物含む）
9　10ＹＲ４／１灰褐色粘質土（炭化物含む）
10　10ＹＲ２／２黒褐色粘質土（炭化物多く含む）
11　10ＹＲ５／３にぶい黄褐色粘質土
12　10ＹＲ４／２灰黄褐色粘質土
13　2.5Ｙ６／２灰黄色粘質土

0　1m

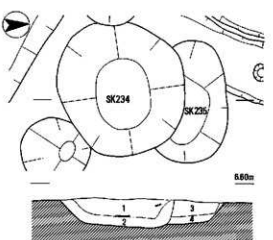
第73図　ＳＫ202実測図（１：20）



1　10ＹＲ３／２黒褐色土

0　1m

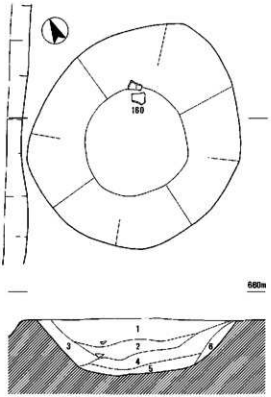
第74図　ＳＫ220実測図（１：20）



1　10ＹＲ４／３にぶい黄褐色粘質土（炭化物少量含む）
2　10ＹＲ４／２灰黄褐色粘質土（炭化物少量含む）
3　10ＹＲ４／４褐色粘質土
4　10ＹＲ４／２灰黄褐色粘質土（炭化物少量含む）

0　2m

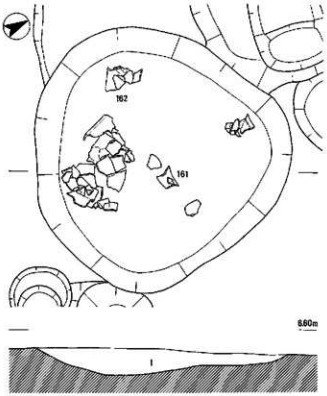
第75図　ＳＫ234実測図（１：40）



1　10ＹＲ３／２黒褐色土
2　10ＹＲ２／２黒褐色土
3　10ＹＲ２／２黒褐色土
4　10ＹＲ３／２黒褐色土（炭化物含む）
5　10ＹＲ３／１黒褐色土
6　10ＹＲ４／４褐色土

0　1m

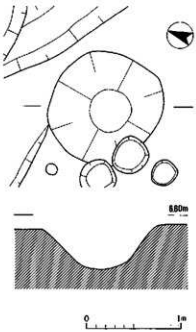
第76図　ＳＫ221実測図（１：20）



1　10ＹＲ３／２黒褐色土

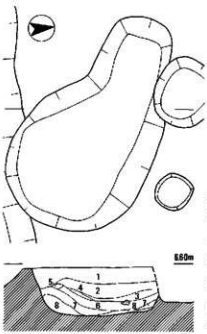
0　1m

第77図　ＳＫ223実測図（１：20）



0　1m

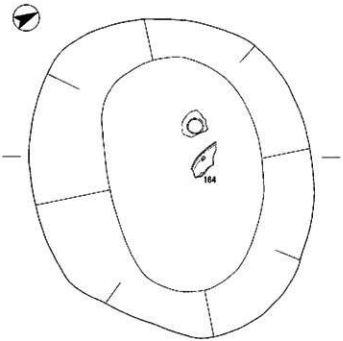
第78図　ＳＫ242実測図（１：40）



1　10ＹＲ４／４褐色粘質土
2　10ＹＲ３／３暗褐色粘質土
3　10ＹＲ４／２灰黄褐色粘質土（炭化物多く含む）
4　10ＹＲ３／２黒褐色粘質土（炭化物多く含む）
5　10ＹＲ４／２灰黄褐色粘質土（炭化物多く含む）
6　10ＹＲ４／１褐灰色粘質土（炭化物少量含む）
7　10ＹＲ５／３にぶい黄褐色粘質土
8　10ＹＲ５／２灰黄褐色粘質土

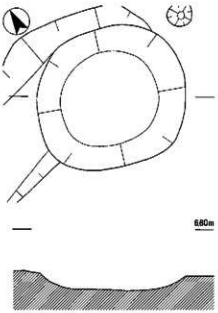
0　1m

第79図　ＳＫ239実測図（１：40）

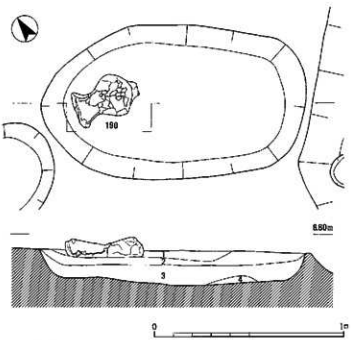


1　10ＹＲ４／３にぶい黄褐色粘質土（炭化物少量含む）
2　10ＹＲ４／２灰黄褐色粘質土（炭化物少量含む）
3　2.5Ｙ４／１黄灰色粘質土

第80図　ＳＫ233実測図（１：20）

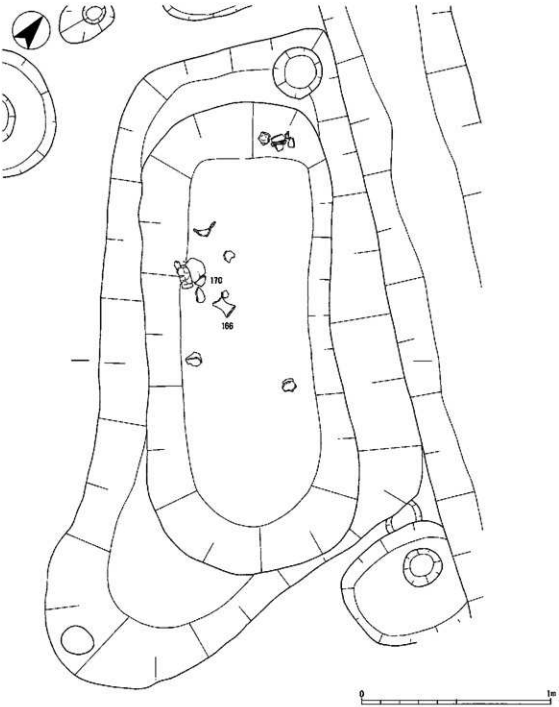


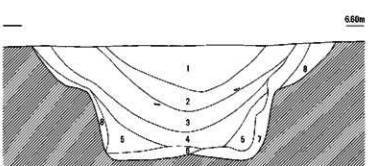
第82図　ＳＫ275実測図（１：20）



1　10ＹＲ３／３暗褐色粘質土
2　10ＹＲ３／２黒褐色粘質土（炭化物少量含む）
3　10ＹＲ３／４暗褐色粘質土
4　10ＹＲ４／３にぶい黄褐色粘質土

第81図　ＳＫ252実測図（１：20）





1　10ＹＲ３／３暗褐色土
2　10ＹＲ２／２黒褐色土
3　10ＹＲ３／２黒褐色土
4　10ＹＲ３／１黒褐色土
　　10ＹＲ５／６黄褐色土含む
5　10ＹＲ３／１黒褐色土
6　10ＹＲ３／２黒褐色土
　　（炭化物含む）
7　10ＹＲ４／３にぶい黄褐色細砂
8　10ＹＲ５／４にぶい黄褐色細砂

第83図　ＳＫ238実測図（１：20）

なく、一方の端部が僅かに屈折気味の形状を呈するが、後述のＳＫ277ほどではない。切り合い関係からＳＫ285より新しい。埋土から中期前葉の甕（173）や石錐（174）が出土した。

ＳＫ242（第78図）　1.3m×1.2mの円形土坑で、深さ52㎝を測る。掘り込みはしっかりしているが、明瞭な底面を形成せず、緩やかに丸みをもった底面を呈する。埋土から、中期前半の土器（175～176）や石鏃（177～178）が出土した。

ＳＫ244（第84図）　長さ6.7m以上×幅1.5m、深さ51㎝を測る溝状の土坑である。調査時点では複数の土坑が集合したものと認識されていたが、埋土に差異がなく、溝状の土坑として認識できたことから単独の遺構として扱った。片側端部が調査区外へ逃げるため、溝の可能性も捨てきれないが、形状や規模がＳＫ240や後述のＳＫ309など細長い土坑と共通するため、土坑としている。掘り込みは明瞭で、逆台形の断面形を呈する。切り合い関係から、ＳＫ260よりも古い。埋土からは、いくつかのまとまりで中期前葉の土器（179～189）が出土している。

ＳＫ252（第81図）　長さ1.3m×幅0.7mの略長方形を呈する土坑で、深さ18㎝を測る。土坑端部に寄った部分から、中期前葉の壺（190）が横たわった状態で出土している。床面からは15㎝ほど浮いた状態であるが、土坑長軸に沿ったかたちで埋置されており、土坑内に供献されたものと推定される。さすれば、本遺構の上面は、かなり流出ないしは削平を受けていると判断され、本来はもう少し深かったものと思われる。土層観察からは木棺痕跡などは確認できないことから、単独の土坑墓であった可能性がある。

ＳＫ253・ＳＫ254（第85図）　重複する２基の土坑で、切り合い関係からＳＫ254のほうが新しい。ＳＫ253は、長さ2.5m×1.5m、深さ35㎝を測る隅丸長方形を呈した土坑で、埋土から甕や壺の底部（191～192）や土錘（193）などが出土した。一方、ＳＫ254は、長さ1.5m×幅1.2m、深さ37㎝を測る土坑で、図示しうるほどの土器は出土していない。

ＳＫ260（第86図）　前述のＳＫ244に重複する土坑で、長さ1.6m×幅1.1mの楕円形を呈し、深さ52㎝を測る。埋土から中期中葉の土器（194～195）が出土している。

ＳＫ275（第82図）　長径0.8m×短径0.6mの略円形の土坑で、深さ49㎝を測る。擂鉢状の掘り込みを有し、床面はほぼ平らになる。埋土から、中期前葉の土器（196～197）が出土した。

ＳＫ277（第88図）　長さ4.8m×幅1.2m、深さ38㎝を測る溝状の土坑であるが、土坑片側端部がＬ字状に短く屈折する。一見すると、方形周溝墓の周溝状を呈するが、方形周溝墓とした場合にこれとセットになって組み合う溝がなく、単独の土坑として理解した。埋土のかなり床面に近い部分から壺の体下半部が出土している。

ＳＫ284（第92図）　南側が調査区外となることや、ＳＤ243に重複されているため遺構の一部のみの検出である。長さ５m以上×幅1.7m、深さ17㎝を測る。前述のＳＫ240やＳＫ277などと同じ溝状の土坑と推定される。埋土から中期の甕（200～202）やスクレイパー（203）が出土した。

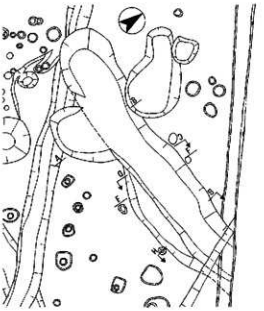
ＳＫ285（第87図）　南側をＳＫ240に切られているため全体形は不明だが、長さ5.5m×幅1.5m、深さ65㎝の溝状の土坑である。埋土から中期前葉の壺（204）が出土した。

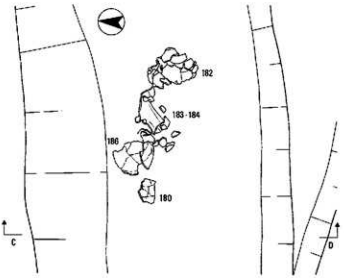
ＳＫ288（第89図）　西側が調査区外へと延びるが、遺構の閉じ具合から遠からず遺構端部があると推定される。長さ7.5m以上×幅1.8mの長楕円形状で溝状を呈した土坑で、深さ46㎝を測る。ＳＨ207を切って存在している。土坑埋土からは、上層から下層にかけて比較的まんべんなく中期前葉の土器（206～213）が出土している。

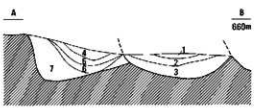
ＳＫ292（第94図）　0.8m×0.7mを測る円形土坑で、深さ8㎝を測る。掘り込みは緩やかなレンズ状を呈しており、上部がかなり削平を受けて流失している可能性がある。埋土から中期前葉の甕（214）が出土した。

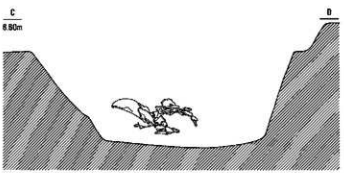
ＳＫ304（第95図）　長径0.8m×短径0.7mの隅丸方形土坑で、深さ15㎝を測る。掘り込みは緩やかでレンズ状の断面形を呈する。埋土から中期前葉の土器（215～216）が出土している。

ＳＫ307（第97図）　南側をＳＫ284と重複しているため（切り合い不明瞭）全体形は不明だが、２m×1.2m以上の規模を有し、円形ないしは隅丸方形状の平面形プランをもつと推定される。深さは８㎝

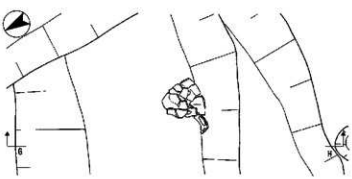


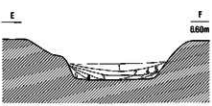






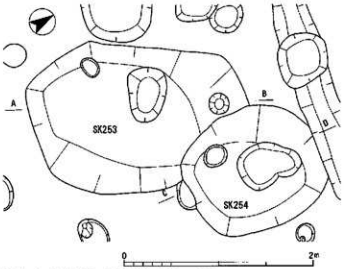
1　10ＹＲ４／４褐色粘質土
2　10ＹＲ３／３暗褐色粘質土（土器片含む）
3　10ＹＲ２／２黒褐色粘質土（炭化物多く含む）
4　10ＹＲ３／３暗褐色粘質土（炭化物少量含む）
5　10ＹＲ４／２灰黄褐色粘質土

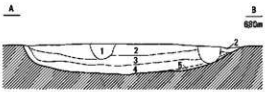




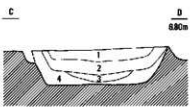
1　10ＹＲ４／３にぶい黄褐色粘質土
2　10ＹＲ３／３暗褐色粘質土（炭化物少量含む）
3　10ＹＲ４／１褐灰色粘質土
（炭化物少量含む、土器片含む）
4　10ＹＲ４／２灰黄褐色粘質土
（炭化物少量含む、土器片含む）
5　10ＹＲ４／４褐色粘質土
6　10ＹＲ４／１褐灰色粘質土（土器片含む）
7　10ＹＲ４／２灰黄褐色粘質土

第84図　ＳＫ244実測図（平面図１：100、土層断面図１：40、遺物出土状況図１：20）



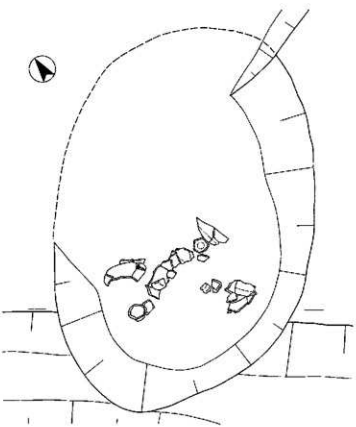


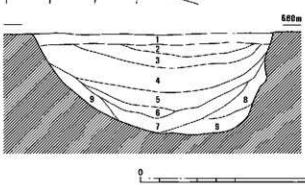
1　10ＹＲ３／２黒褐色粘質土
　（炭化物少量含む）
2　10ＹＲ４／２灰黄褐色粘質土
　（土器片含む）
3　10ＹＲ３／３暗褐色粘質土
4　10ＹＲ４／１褐灰色粘質土
5　10ＹＲ５／１褐灰色粘質土



1　10ＹＲ４／２灰黄褐色粘質土
　（炭化物少量含む）
2　10ＹＲ３／２黒褐色粘質土
　（炭化物少量含む）
3　10ＹＲ３／１黒褐色粘質土
4　10ＹＲ３／３暗褐色粘質土

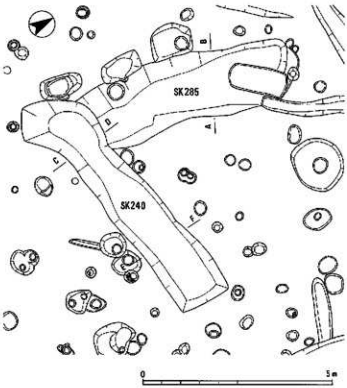
第85図　ＳＫ253・254実測図（１：40）

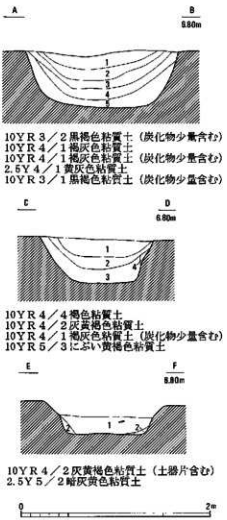




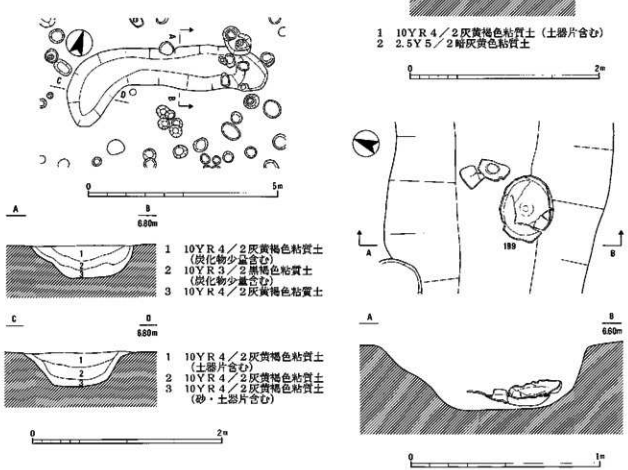
1　10ＹＲ４／４褐色粘質土
2　10ＹＲ４／６褐色粘質土
3　10ＹＲ３／３暗褐色粘質土
　（炭化物少量含む）
4　10ＹＲ４／３にぶい黄褐色土
　（炭化物少量含む）
5　10ＹＲ３／４暗褐色粘質土
　（炭化物少量含む）
6　10ＹＲ４／４褐色粘質土
7　10ＹＲ３／２黒褐色砂質土
　（炭化物少量含む）
8　10ＹＲ３／４暗褐色粘質土
9　10ＹＲ３／１黒褐色粘質土

第86図　ＳＫ260実測図（１：20）

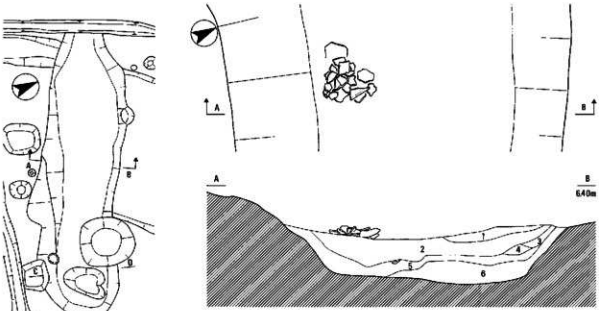




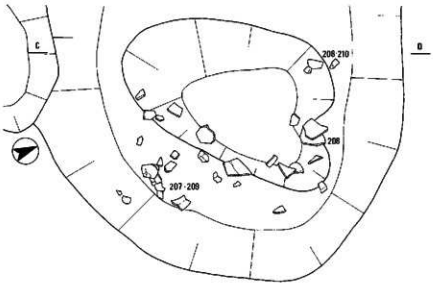
第87図　ＳＫ240・285実測図（平面図１：100、土層断面図１：40）



第88図　ＳＫ277実測図（平面図１：100、土層断面図１：40、遺物出土状況図１：20）



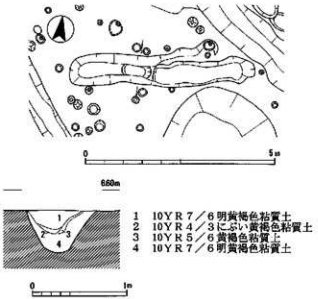
1　10YR３／２黒褐色土
2　10YR２／２黒褐色粘質土
3　10YR４／１褐灰色細砂
4　10YR４／２灰黄褐色細砂
5　10YR３／１黒褐色粘質土
6　10YR４／１褐灰色極細砂



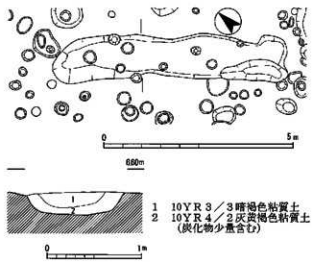
1　10YR３／２黒褐色土
2　10YR２／２黒褐色土
3　10YR３／２黒褐色土（炭化物含む）
4　10YR２／２黒褐色土（炭化物含む）

0　1m

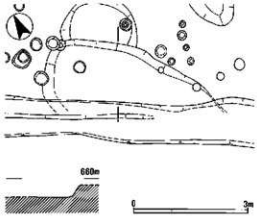
第89図　ＳＫ288実測図（平面図１：100、遺物出土状況図１：20）



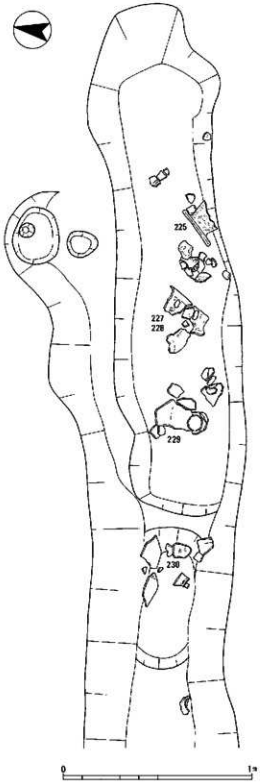
第90図　ＳＫ312実測図（平面図１：100、土層断面図１：40）



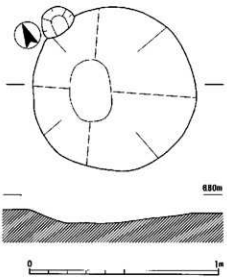
第91図　ＳＫ309実測図（平面図１：100、土層断面図１：40）



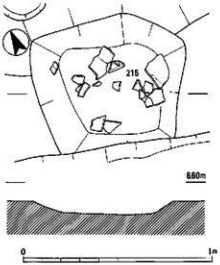
第92図　ＳＫ284実測図（１：100）



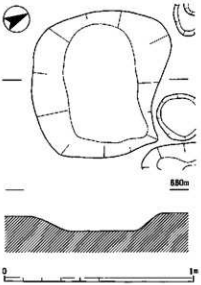
第93図　ＳＫ312遺物出土状況図（１：20）



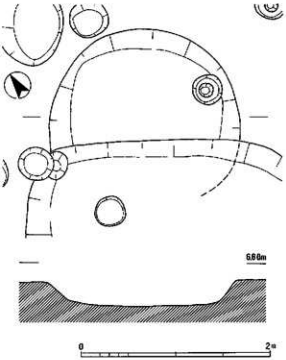
第94図　ＳＫ292実測図（１：20）



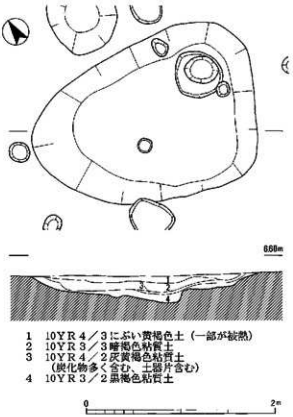
第95図　ＳＫ304実測図（１：20）



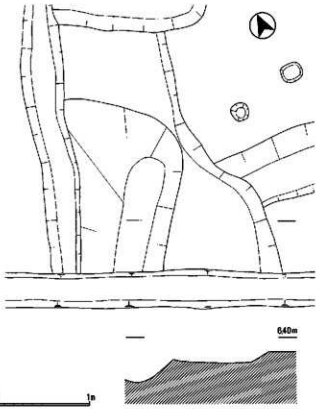
第96図　ＳＫ310実測図（１：20）



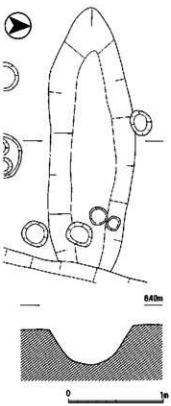
第97図　ＳＫ307実測図（１：40）



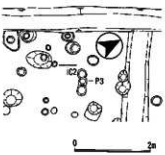
第98図　ＳＫ314実測図（１：40）



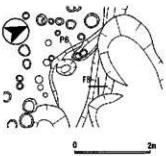
第99図　ＳＤ313実測図（１：40）



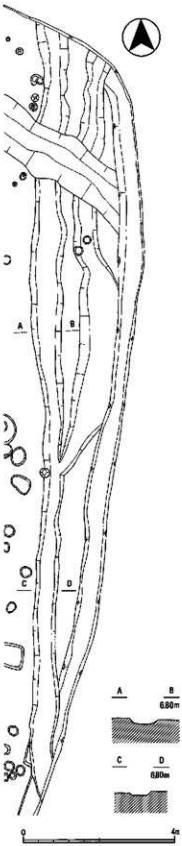
第100図　ＳＫ326実測図（１：40）



第101図　Ｃ２pit３位置図
（１：100）



第102図　Ｆ８pit６位置図
（１：100）



第103図　ＳＤ317実測図（１：100）

を測り、掘り込みは緩やかで、遺構の断面形は幅広の逆台形を呈する。埋土から中期前葉の甕（217）が出土したので弥生時代遺構に措定したが、手捏ね土器（259）も出土している。

ＳＫ309（第91図）　長さ6.6m×幅1.2mの直線的な溝状を呈した土坑で、深さ23cmを測る。埋土から中期前葉の土器（218～222）が出土した。

ＳＫ310（第96図）　長径0.75m×短径0.66mの隅丸方形を呈した土坑で、深さ９cmを測る。埋土から壺底部（224）や太型蛤刃石斧（223）が出土した。

ＳＫ312（第90図・第93図）　長さ4.9m×幅0.8mの溝状の土坑で、深さ48cmを測る。床面は凹凸がり、別遺構との重複の可能性も考慮されるが、平面プラン上は確認できず、単独の遺構として扱った。埋土から砥石（231）のほか、中期前葉の壺がまとまって出土している（225～230）。

ＳＫ314（第98図）　長径2.8m×短径2.1mの隅丸二等辺三角形状の土坑で、深さ34cmを測る。鋭角となる頂点部分から中央に向けて徐々に深くなり、底辺寄りの部分から立ち上がる。３層の灰黄褐色粘質土は炭化物を多く含んでいるほか、最上面にも被熱された部分がある。形状的には、近傍の蔵田遺跡ＳＦ１と同様の土器焼成遺構のような特徴を示すが、床面自体は被熱の痕跡がなく、確定するには至らなかった。埋土から中期前半の土器（232～235）や石器類（236～237）が出土した。

ＳＫ316（第66図）　ＳＨ333の炉脇で検出された土坑で、長さ1.7m×幅1.2mの楕円形土坑で、深さ36cmを測る。埋土から壺甕類の底部（238～240）が出土した。

ＳＫ326（第100図）　東側がＳＤ273に切られているが、長さ2.7m以上×幅0.5mの長楕円形の土坑である。土坑断面は半球状を呈し、深さ42cmを測る。埋土から中期前葉の土器（241～243）や叩石（244）が出土した。

ＳＤ313（第99図）　重複が激しく、残存は悪いが、確認長4.2m×幅1.2m、深さ５cmの極めて浅い流路で、南側へ広がりつつ延びていく。遺構としての安定性は低い。埋土から中期前葉の土器（245）が出土している。

ＳＤ317（第103図）　調査区の東端部を南北に横断する溝で、長さ20.5m以上×最大幅0.9m、深さ12cmを測る。溝の主軸は直線的で、埋土から壺の底部（246）が出土した。

ＳＤ340　調査区の南壁沿いにあることと、中世の溝ＳＤ243に重複されるため、ほとんど残っていないが、長さ５m程度の溝である。埋土から中期の壺と甕（247～248）が出土している。

ピットないしは小土坑　掘立柱建物としてはまとまらなかったが、埋土から弥生時代遺物が出土したピットがいくつかある。建物の柱穴以外にも、小さな土坑として存在したものも含まれると思われるが、ここではピットとして整理した。出土遺物から時期を判断しているが、後世のピットに弥生時代のものが混入した可能性も排除できない。なお、遺構番号は、調査時のものをそのまま踏襲している。

b　古墳時代の遺構

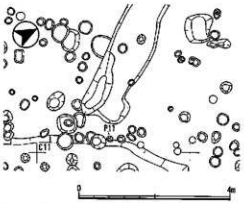
ＳＫ222（第109図）　直径1.2mの円形土坑である。浅い擂鉢状の掘り込みで、深さは10cmと浅いが、底面は一定でなく、南側に向かって徐々に深くなっていく特徴を示す。埋土から古墳時代前期の土器（255～257）が出土した。

ＳＫ241（第106図）　ピットの重複が激しいが、長径1.2m×幅0.8mの楕円形土坑で、深さ９cmを測る。埋土から７世紀頃の須恵器杯身（258）が出土した。

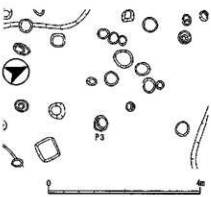
c　古代の遺構

奈良時代に属するとみられる遺構も含まれるが、遺構の中心は10～12世紀の平安時代にある。Ｌ区では「古代末～中世前半」に属する遺構が多いが、ここでは遺構から灰釉陶器や黒色土器などが出土する遺構を古代に措定した。なお、掘立柱建物については、出土遺物が僅少なことから時代を特定しきれないものが多いが、明らかに中世遺物が出土したＳＢ352のみを中世の遺構として扱い、他は古代に措定した。

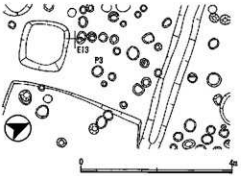
ＳＢ343（第110図）　桁行５間（10m）×梁行３間（5.4m）の東西棟の側柱建物で、柱間寸法は桁行２m等間、梁行1.8m等間である。建物方向はN10度Ｅで、後述のＳＢ344とほぼ同じである。柱掘形は、ややばらつきはあるものの概ね長径１m×短径0.8m前後の隅丸長方形で、検出面から40～60cm程度の深さが残る。Ｌ区で検出された掘立柱建物のなかでは最大の規模で、他遺構との切り合いなどもあ



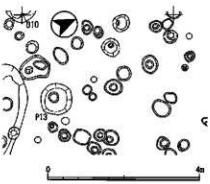
第104図　C 11pit 11位置図（1：100）



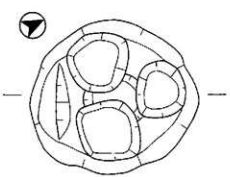
第105図　C 13pit 3 位置図（1：100）



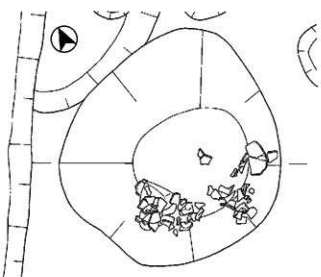
第107図　E 13pit 3 位置図（1：100）



第108図　D 10pit 13位置図（1：100）



第106図　ＳＫ241実測図（1：20）



1　10ＹＲ２／１黒色土　　2　10ＹＲ３／２黒褐色土

第109図　ＳＫ222実測図（1：20）

るものの、残りはよい。

ＳＢ344（第111図）　桁行４間（8.4m）×梁行２間（4.5m）の東西棟の側柱建物で、建物方向はＮ８度Ｅである。柱間寸法は、桁行が2.1m等間、梁行が2.25m等間である。柱掘形は、不定形のものもあるが長径0.6～１m の隅丸方形もしくは隅丸長方形のものが多い。建物全体の規模、柱掘形の規模とも、隣接する掘立柱建物ＳＢ343よりやや小振りになっている。ＳＢ344を構成する柱穴のひとつから平安末の灰釉陶器の破片が出土しており、古代末に比定できよう。

ＳＢ345（第112図）　調査区西端に所在するため全体規模は不明だが、東西２間（3.2m）以上×南北２間（2.4m）以上の総柱建物である。建物方向は、N19度Wである。柱間寸法は、東西は1.6m等間であるが、東西方向は不等間で、南から1.5m＋0.9m＋２mである。東西方向が桁行である可能性が高い。柱掘形は、長径60cm×短径50cmの隅丸方形のものが最大で、入側柱がやや小さい傾向をもつ。建物を構成する柱穴からは比較的まとまった出土遺物があり、概ね奈良時代に比定できるであろう。

ＳＢ346（第115図）　桁行３間（4.8m）×梁行２間（推定３m）の南北棟の側柱建物で、建物方向はＮ２度Ｅである。柱間寸法は、桁行が南から1.5m＋1.5m＋1.8m、梁行は西側柱列が不明なため確定できないが1.5m等間と推定される。柱掘形は、長径50cmの円形ないしは楕円形である。時期比定に足る遺物に乏しいが、柱間寸法が30cmでの完数値になっているため、古代以降の所産であろう。

ＳＢ347（第118図）　他遺構との重複も激しいが、２間（4.2m）×２間（4.2m）の正方形プランを呈した総柱建物で、柱間寸法はいずれも2.1m等間である。建物方向は、Ｎ７度Wで、ほぼ正方位を示す。柱掘形は、40～50cm程度の不整円形で、四隅の柱掘形が若干大きい傾向にある。時期決定できる遺物に乏しいが、切り合い関係からＳＢ344より新しい。

ＳＢ348（第113図）　桁行３間（4.8m）×梁行２間（3.3m）を測る南北棟の側柱建物で、建物方位はN32度Ｅである。柱間寸法は、桁行1.6m等間、梁行1.65m等間である。柱掘形は、径50cm～80cmの円形もしくは隅丸方形であるが、柱痕のみしか掘られていない柱穴もある。切り合い関係からＳＢ344よりも先行する。

ＳＢ349（第116図）　桁行４間（７m）×梁行２間（4.6m）の南北棟の側柱建物で、建物方向はＮ26度Wである。柱間寸法は、桁行東側柱列が南から1.6m＋1.6m＋1.8m＋2.0m、桁行西側柱列が南から2.4m＋1.8m＋1.8m＋1.0m、梁行は1.3m等間で、桁行については柱間寸法が不等間なうえに、東列と西列で不揃いとなっている。柱掘形は、長径50～70cmの隅丸長方形もしくは隅丸方形を基本としている。

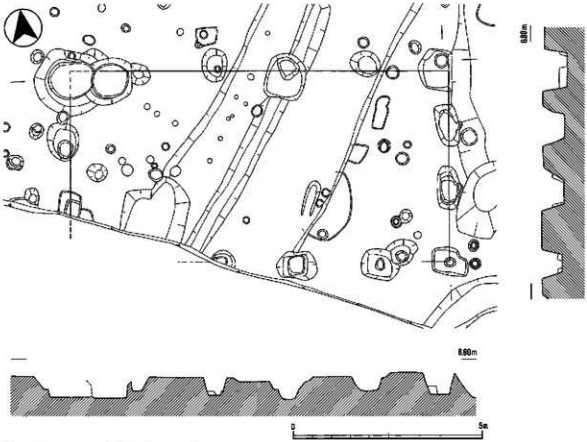
ＳＢ350（第114図）　３間（4.3m）×３間（4.2m）の略正方形プランの掘立柱建物で、建物方向はN37度Ｅである。柱間寸法は、不等間である。束柱は検出されなかったが、建物プランとしては総柱建物であった可能性を示しており、束柱は削平もしくは流出によって検出されなかっただけかもしれない。もしそうであるなら、ＳＢ350の束柱は、側柱に比べて深さ・深さともに小振りなものであったと推定される。

ＳＥ258（第135図）　長径2.2m、短径２mの円形土坑で、深さ57cmを測る。床は丸底で、平坦である。木材等の残存はないが、深さは浅いものの湧水があり、素掘りの溜井戸として機能していた可能性がある。埋土から土師器杯（405）が出土した。

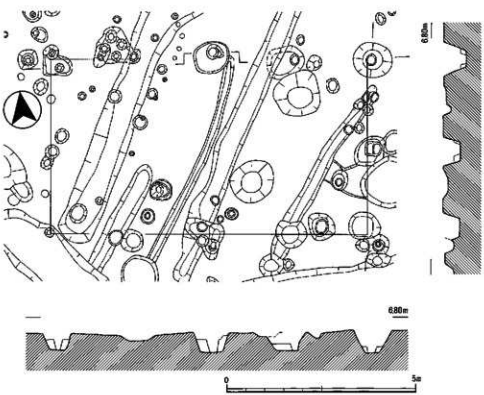
ＳＫ270（第119図）　長径1.6m以上×短径1.2mの楕円形土坑である。検出はできたものの、残りが非常に悪く、実測図作成段階で詳細な平面形が把握しきれなかった。埋土から土師器甕（359）が出土している。

ＳＥ324（第126図）　南側が調査区外となるため遺構北半しか掘削できなかったが、前述のＳＥ327を切って存在する掘形直径3.4mの円形井戸で、深さは168cmを測る。井戸の構造は、湧水点まで擂鉢状に掘り抜いてそこに曲物を設置し、井戸側は方形に縦板を組んで横方向の桟材で留める構造で、基本的にはＪ区のＳＥ106と同構造になるものであろう。ただし、調査区壁際で確認されたため、出土図面は作成されなかった。なお、井戸本体とは無関係の木材と思われるものも入っており、井戸の廃棄時に投棄されたものも多かったと推定される。埋土から須恵器杯（373）や灰釉陶器椀（374）などが出土している。374は10世紀前半頃の所産であろう。

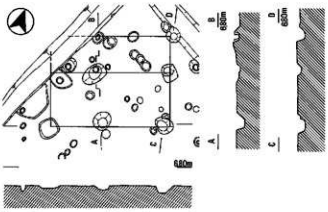
ＳＥ327（第126図）　調査区南壁に所在するた



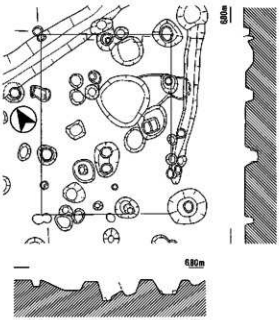
第110図　ＳＢ343実測図（１：100）



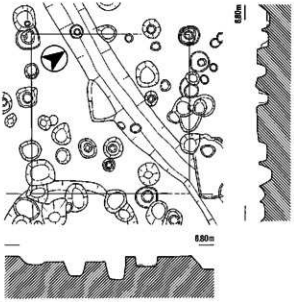
第111図　ＳＢ344実測図（１：100）



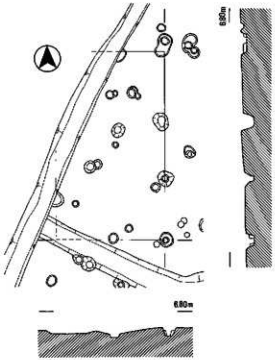
第112図　ＳＢ345実測図（１：100）



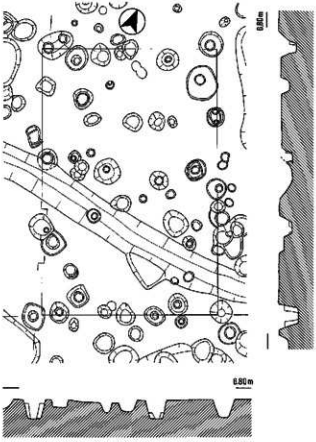
第113図　ＳＢ348実測図（１：100）



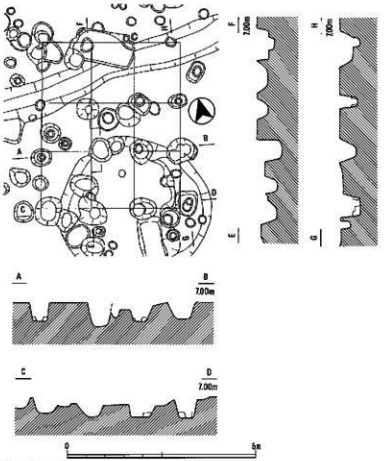
第114図　ＳＢ350実測図（１：100）



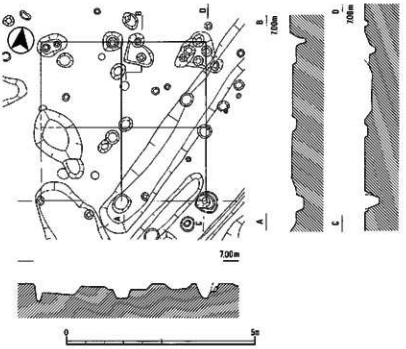
第115図　ＳＢ346実測図（１：100）



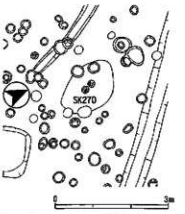
第116図　ＳＢ349実測図（１：100）



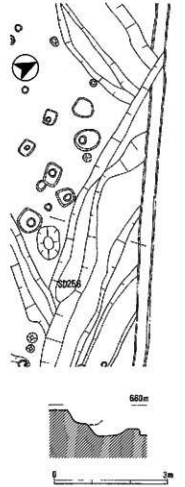
第117図　ＳＢ351実測図（１：100）



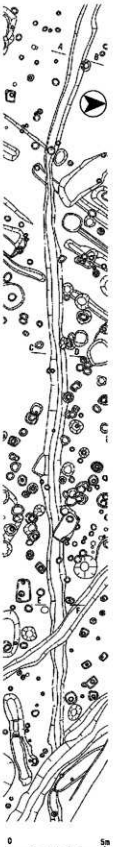
第118図　ＳＢ347実測図（１：100）



第119図　ＳＫ270実測図（１：100）



第120図　ＳＤ256実測図（１：100）

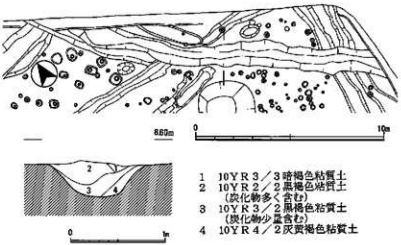


1　10YR３／２黒褐色土

1　10YR３／２黒褐色土
2　10YR３／２黒褐色土
　＋10YR４／６褐色土
3　10YR４／３
　にぶい黄褐色粘質細砂土

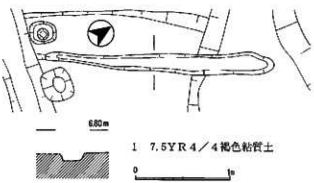
1　10YR４／２
　灰黄褐色粘質土
2　10YR４／３
　にぶい黄褐色粘質土

第121図　ＳＤ208実測図
（平面図１：200、土層断面図１：40）



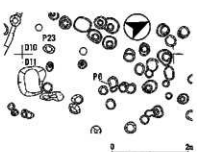
1　10YR３／３暗褐色粘質土
2　10YR２／２黒褐色粘質土
　（炭化物多く含む）
3　10YR３／２黒褐色粘質土
　（炭化物少量含む）
4　10YR４／２灰黄褐色粘質土

第122図　ＳＤ279実測図（平面図１：200、土層断面図１：40）

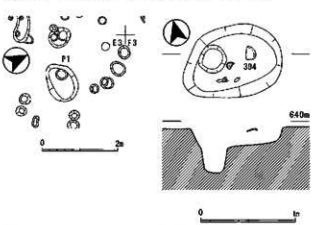


1　7.5YR４／４褐色粘質土

第123図　ＳＤ209実測図（１：40）



第124図　Ｄ10pit23・Ｄ11pit６位置図（１：100）



第125図　Ｅ３pit１位置図、実測図
（位置図１：100、実測図１：40）

め遺構の半分が調査区外となり、また西側はＳＥ324に重複されているため全体形は不明だが、2.2m以上×1.7m以上で深さ175cmを測る。木材の出土がないため、素掘り井戸であったと推定される。埋土からは、土師器の椀・杯類（260～262）が出土しているほか、床面から須恵器甕（461、写真図版19参照）も出土した。

ＳＤ208（第121図）　調査区を東西に走る溝で、Ｌ区内で長さ48m×幅0.8m、深さ35cmを測り、さらに中勢道路調査部分へも連続する。遺物は砕片で図示しうるものはないが、古代の土器が出土している他、切り合い関係からＳＤ209よりも先行する。

ＳＤ209（第123図）　ＳＤ218等との重複のため検出状況が悪く、明瞭なプランが把握しきれなかったが、最大幅0.4ｍ、深さ15cm程度の小さな溝である。埋土からは、古墳時代の遺物とともに平安時代頃の土師器杯（364）が出土した。

ＳＤ237（第27図）　調査区を東西に縦断する弧状の溝で、切り合い関係からＳＤ208よりも新しい。幅0.7m、深さ25cmの溝がＬ区内で長さ49m分あるが、東端は途切れている。埋土から平安時代初頭頃の土師器（365～367）などが出土している。

ＳＤ262・279（第122図）　ともに調査区の東北隅で確認された相互に重複する溝で、切り合い関係からはＳＤ279のほうが新しい。ただし、ＳＤ262・ＳＤ279を含めたこの周辺の溝群、ＳＤ256・276はいずれも相互に重複しながらほぼ同一方向（南北）に流れる溝であるが、遺構検出時の認識はかなり混乱しており（例えばＳＤ256とＳＤ262は名称こそ異なるが、それぞれＳＤ279を挟んで片側の肩しか確認されておらず、同一の溝の可能性が高い）、再掘削等による土層の色調の差異を別遺構として認識した可能性もある。遺物のうえからも、ＳＤ262とＳＤ279はともに埋土から黒色土器や灰釉陶器など10世紀後半から11世紀頃の遺物が出土しており（ＳＤ262：368～371、ＳＤ279：372～393）、切り合い関係として把握されるほどの年代差は認められない。

ＳＤ256（第120図）　ＳＤ279と重複しているためほとんど残ってないが、深さ40cm程度の溝である。埋土から灰釉陶器が出土しており、古代末の所産と思われる。前述のように、ＳＤ262と同一溝とみるのが妥当と判断されるが、現場レベルでは両者は別溝と認識されており、ここでも一応、出土遺物（427～428）は分けて掲載した。

Ｃ－Ｅ３pit１（第125図）　調査時はピットとして遺物取り上げがなされており、本書においてもその遺構名称を踏襲したが、平面形としては長径１m、短径0.7mの楕円形土坑ともいい得る遺構で、別ピットと重複がある。埋土から９世紀前半頃の遺物（394～396）が出土している。

Ｃ－Ｄ10pit23（第124図）　長径30cm×短径20cmを測る楕円形のピットで、埋土から黒色土器椀と土師器小皿（397～399）が出土している。

Ｃ－Ｄ11pit６（第124図）　長径40cm×短径20cmを測る隅丸長方形を呈したピットで、埋土から土師器杯（400）が出土した。

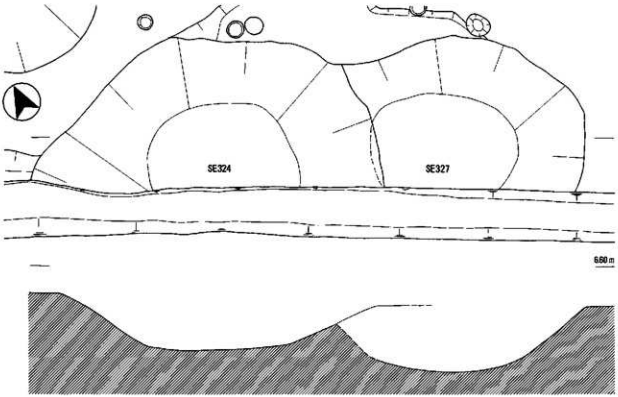
ｄ　中世の遺構

ＳＢ351（第117図）　桁行３間（4.2m）×梁行３間（3.6m）の南北棟の総柱建物である。建物方向はN16度Eである。柱間寸法は、桁行が南側より1.5m＋1.2m＋1.5m、梁行が西側より1.3m＋1.2m＋1.2mである。柱掘形は、長径50～80cmの隅丸方形ないしは楕円形である。切り合い関係からＳＸ229に後出する。

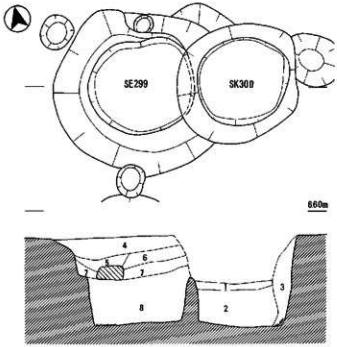
ＳＢ352（第129図）　桁行２間（３m）×梁行２間（2.8m）の略方形を呈した掘立柱建物で、柱間寸法は桁行が1.5m等間、梁行が1.4m等間である。建物方向は、Ｎ１度Wで、正方位を意識しているとみられる。正方形に近い建物平面からは、総柱建物に多い倉庫的な機能が想定されるが、中央に束柱は確認されなかった。

ＳＸ229（第130図）　長径1.3m×短径0.7mの長方形土坑で、深さ37cmを測る。切り合い関係からＳＢ351よりも先行する。焼土等は認められない。平面形から、中世の木棺墓と思われる。

ＳＫ250（第134図）　長径1.2m×短径１mの略円形を呈した土坑で、深さは79cmを測る。埋土からは弥生土器などの砕片も出土しているが、ロクロ土師器小皿（402～403）や山茶椀（404）が完形で出土しており、鎌倉時代の所産と思われる。井戸として機能していた可能性もある。

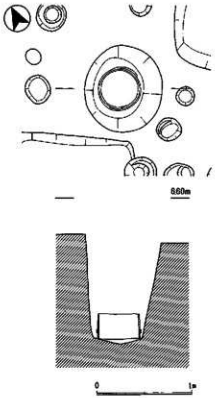


第126図　ＳＥ324・327実測図（１：40）

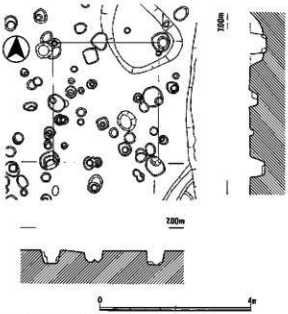


1　10ＹＲ６／４にぶい黄色砂質土（粘質土ブロック含む）
2　10ＹＲ６／６明黄褐色砂質土
3　５Ｇ４／１灰緑灰色砂質土（有機物含む）
4　10ＹＲ３／２黒褐色粘質土
5　2.5Ｙ３／２黒褐色粘質土
6　2.5Ｙ３／１黒褐色粘質土（炭化物少量含む）
7　10ＹＲ３／１黒褐色粘質土（炭化物少量含む）
8　2.5Ｙ３／１黒褐色粘質土

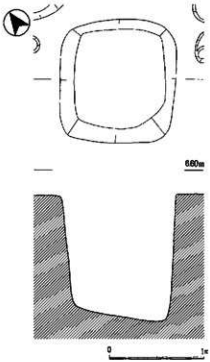
第127図　ＳＥ299・ＳＫ300実測図（１：40）



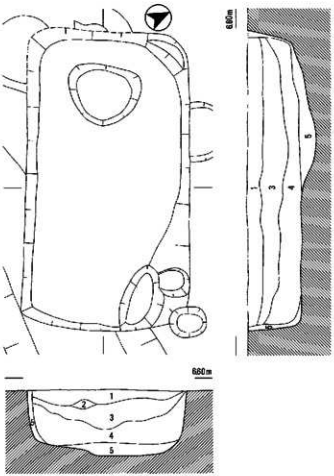
第128図　ＳＥ267実測図（１：40）



第129図　ＳＢ352実測図（１：100）

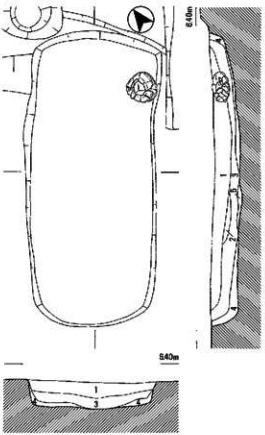


第131図　ＳＥ266実測図（１：40）



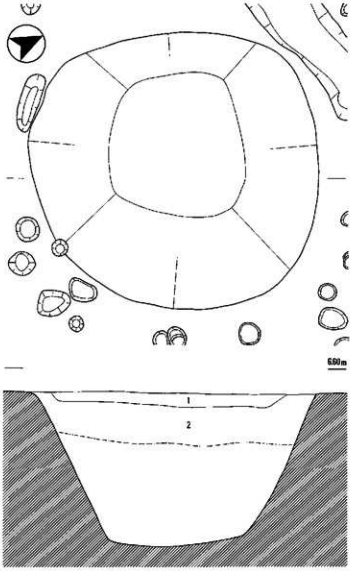
1　10ＹＲ５／４にぶい黄褐色粘質土
2　10ＹＲ４／３褐色粘質土
3　10ＹＲ４／２灰黄褐色粘質土
4　10ＹＲ３／２黒褐色粘質土（土器片含む）
5　10ＹＲ４／１黄灰色粘質土

第130図　ＳＸ229実測図（１：20）



1　10ＹＲ４／３にぶい黄褐色粘質土
2　2.5Ｙ４／１黄灰色粘質土（土器片少量含む）
3　2.5Ｙ４／２暗灰黄色粘質土（炭化物少量含む）
4　10ＹＲ４／２灰黄褐色粘質土
5　10ＹＲ４／２灰黄褐色粘質土（やや砂質）

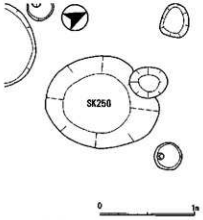
第132図　ＳＸ286実測図（１：20）



1　10ＹＲ４／３にぶい黄褐色粘質土（土器片少量含む）
2　10ＹＲ４／２灰黄褐色粘質土（土器片少量含む）

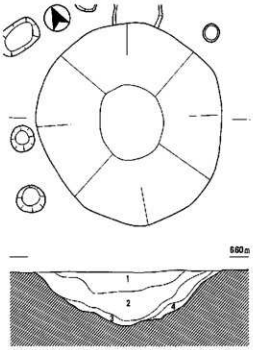
0　2m

第133図　ＳＥ259実測図（１：40）



0　1m

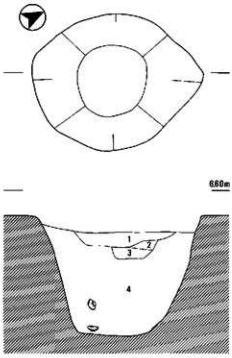
第134図　ＳＫ250実測図（１：40）



1　10ＹＲ３／３暗褐色粘質土（土器片含む）
2　10ＹＲ４／１褐灰色粘質土
3　10ＹＲ３／２黒褐色粘質土
4　10ＹＲ８／１黄灰色粘質土（砂含む）

0　2m

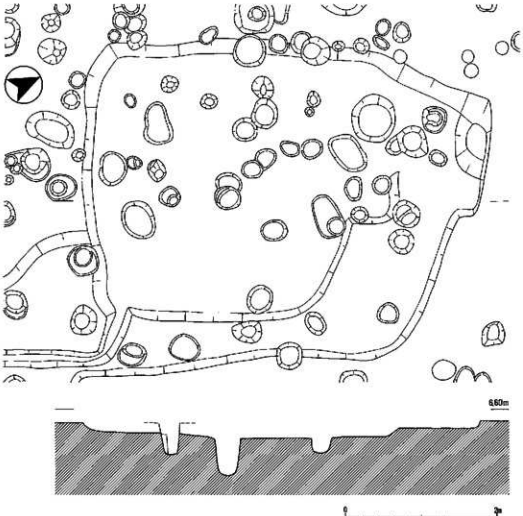
第135図　ＳＥ258実測図（１：40）



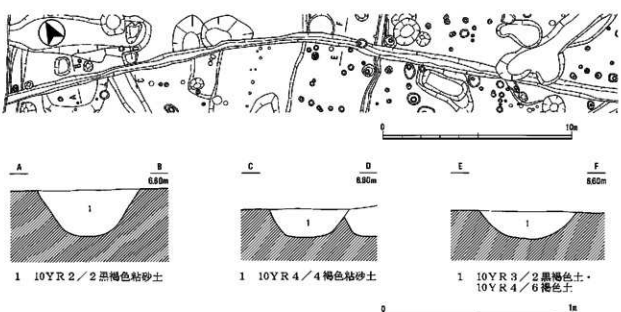
1　10ＹＲ３／３暗褐色粘質土（炭化物少量含む）
2　10ＹＲ３／２黒褐色粘質土
3　10ＹＲ３／３暗褐色粘質土
4　10ＹＲ４／２灰黄褐色粘質土（土器片含む）

0　1m

第136図　ＳＥ263実測図（１：20）



第137図　ＳＫ265実測図（１：50）



第138図　ＳＤ237実測図（平面図１：200、土層断面図１：20）

ＳＥ267（第128図）　直径0.9mの円形井戸で、深さ58cmを測る。図示しうるほどの遺物はないが、中世の所産である。

ＳＥ259（第133図）　直径3.2mの略円形の素掘り井戸で、深さは66cmを測る。替田遺跡の井戸の中では大型の部類に入る。埋土から山茶椀をはじめとする中世前期の遺物（406～418）が良好に出土している。

ＳＥ263（第136図）　直径0.8m、深さ64cmの小型円形素掘り井戸である。埋土から陶器小皿が出土している。

ＳＫ265（第137図）　２段に掘り込まれた方形土坑で、西壁及び南壁を共有する。上段は長径5.8m×短径4.3mで深さ17cm、内側の下段は長径3.7m×3.5mで深さ18cmを測る。下段の南東隅から幅20cm～40cmの溝が延びており、排水溝と思われる。いわゆる南東隅土坑かとも考えたが、本遺構を南東部に取り込む掘立柱建物は確認できなかった。埋土からロクロ土師器杯（421）や山茶椀（422）・小椀（423）が出土している。

ＳＥ266（第131図）　長径1.5m×短径1.3m、深さ51cmの小型方形井戸である。埋土から曲物の破片（424）が出土しており、一応、枠材等は存在したものと思われるが、詳細は分からない。検出面より緑釉陶器片（358）が出土しているが、出土位置はかなり上であり、中世の所産と思われる。

ＳＸ286（第132図）　弥生時代の土坑ＳＫ285を切って造られた長方形土坑で、長さ1.6m×幅0.6m、深さ17cmを測る。北側に土師器杯（425～426）を２枚重ねで埋納しており、中世墓と思われる。土坑平面からは、木棺墓など方形容器での埋設が示唆される。

ＳＥ299（第127図）　1.4m×1.3mの円形井戸で、深さ92cmを測る。上部は擂鉢状に掘り込まれた後、下部はほぼ垂直に掘り込まれており、木製構造材が存在したものと推定される。図示しうるほどの遺物はないが、中世の所産である。

Ｃ－Ｃ10pit13（第141図）　長さ40cm、幅30cmの楕円形のピットである。完形の山茶椀が２個体（430～431）出土しており、埋置されたものとみられる。したがって、性格としては掘立柱建物の柱穴を構成するピットとするよりは小土坑とするのが適当であろう。

Ｃ－Ｃ11pit１（第141図）　重複するピットがあるため全体形は不明だが、隅丸長方形を呈したピットで、埋土から土師器鍋（432）と杯（433）が出土した。

Ｃ－Ｂ12pit４（第139図）　ＳＫ265を切って形成されたピットで、埋土からロクロ土師器小皿（434）が出土した。出土遺物のうえでは、ＳＫ265とはほとんど時期差がない。

Ｃ－Ｄ10pit18（第140図）　長径45cm×短径40cmの隅丸方形のピットで、掘立柱建物を構成するピットであった可能性が高い。埋土から土錘（435）が出土した。

Ｃ－Ｄ10pit６（第140図）　径50cmほどの円形ピットである。埋土から土錘（436）が出土している。

Ｃ－Ｃ10pit６（第141図）　径35cmほどの円形ピットである。埋土から土師器鍋（437）が出土した。

Ｃ－Ｄ10pit２（第140図）　径40cmの円形ピットである。埋土から土師器小皿（439）が出土した。

Ｃ－Ｂ11pit２（第139図）　径20cmほどの小さな円形ピットである。埋土からロクロ土師器小皿（440）が出土した。

４　出土遺物

ａ　弥生時代遺構出土の遺物

ＳＨ207出土遺物（116～134）　中期前葉の壺（116～122）、甕（123～130）、サヌカイト製石鏃（131～133）と剥片（134）がある。壺には、太頸の広口壺（118～119）と中頸壺（116～117）、細頸壺（121～122）がある。このうち、広口壺119は、胴部に刻目の貼付突帯を付した前期の様相を残す。中頸壺（117は頸部より上が欠損のため推定）は、胴部が下膨れ形状で、胴部下位が算盤状に稜をもつ形状で、116は口縁部が受口状を呈し、胴部は横位帯状に施文した直線文の要所に縦アクセントを入れる。細頸壺はいずれも口縁部を欠損するが、胴部は縄文帯とミガキ調整の無文部を交互に配するもので、121は縄文部の上下に沈線を入れて文様部をより顕在化している。甕は、口縁内面ヨコハケ・体部外面タテハケ・口唇部刻みという替田遺跡でいう「Ａ調整」手法で作られたものを基本とするが、125

や127は口縁内面のヨコハケが明瞭でない。また、小型の130は口縁端部に刻みを入れず、そのまま丸く収めるB調整をもつ。石鏃はいずれもサヌカイト製で、131が凹基式の五角形鏃、132は平基式、133が凸基式である。

ＳＨ230出土遺物（135～136）　広口壺（135）と甕（136）がある。広口壺は、口唇部に波状文と刻目を施す。甕は口縁内面ヨコハケ・体部外面にタテハケを施すが口唇部が欠損のため不明である。

ＳＨ251出土遺物（137～141）　サヌカイト製の石鏃（137～138）とスクレイパー（140）、ハイアロクラスタイト製の柱状片刃石斧（139）、安山岩製の敲石（141）がある。石鏃は、137が平基式、138が凸基式である。柱状片刃石斧は、きわめて細身のもので、ノミ的な機能が想定される。

ＳＨ303出土遺物（142～146）　壺（142～144・146）と甕（145）がある。壺は細頸壺で、142と144は上下を沈線で区画した縄文帯と無文部を段状施文したもの、143は横位直線文上に縦直線文を重ねたものである。甕145は、口唇部をヨコナデで仕上げたB調整をもつ。

ＳＨ311出土遺物（147～153）　広口壺（147）、細頸壺（148）、壺（149）、甕（150）、石鏃（151～152）、磨製石斧破片（153）がある。広口壺は、頸部に直線文を密接施文し、口縁内面に瘤状突起を貼付する。細頸壺は、口縁部を有段（受口状）にしたものである。甕は、口縁部刻みをもつが、外面調整等は不明の部分が大きい。打製の石鏃はいずれもサヌカイト製、磨製石斧の破片はハイアロクラスタイト製である。

ＳＫ201出土遺物（154）　甕である。体部外面にタテハケ、口縁内面にヨコハケを施し、口唇部をヨコナデで仕上げたB調整である。

ＳＫ205出土遺物（156～157）　いずれも小型の土錘である。

ＳＫ204出土遺物（155）　有段の細頸壺である。口縁外面に波状文の痕跡が残る。

ＳＫ211出土遺物（158～159）　甕（159）とホルンフェルス製の打製石器（158）がある。甕は、口唇部刻み、口縁内面ヨコハケ、体部外面タテハケを施した典型的なA調整で、体部の膨らみは弱い。打製石器は、いわゆる石鍬であるが、身部から刃部への広がりに乏しい。

ＳＫ221出土遺物（160）　弥生土器の甕である。159同様、A調整をもつ。

ＳＫ223出土遺物（161～162）　広口壺（161）と甕（162）がある。広口壺は、頸部に直線文を密接施文し、口縁部の開きは弱い。甕は、A調整で、体部がやや膨らみ気味となる。

ＳＫ233出土遺物（163～164）　いずれも中期前葉の甕である。163はA調整、164は口唇部ヨコナデ仕上げ・口縁内面にヨコハケ、体部内外に斜ハケを施したもので、体上部の膨らみがなく、頸部から底部に向かってそのまま窄まる深鉢的な器形をなし、体上部に一対の把手をもつ。

ＳＫ234出土遺物（165）　軽石である。具体的な用途はわからない。

ＳＫ238出土遺物（166～170）　いずれも壺で、166は細頸壺、167～169の体部片も同一個体の可能性が高い。体部文様は、直線文の上に半円の扇状文を重ねて流水文としたものである。

ＳＫ239出土遺物（171～172）　ともに甕の口縁部小片であるが、171は条痕文系、172はB調整の甕である。

ＳＫ240出土遺物（173～174）　173は甕、174はサヌカイト製の打製石錐である。甕はA調整で、体上部がかすかに膨らむ。

ＳＫ242出土遺物（175～178）　細頸壺（175）、甕（176）、サヌカイト製の石鏃（177～178）がある。細頸壺は有段で、凹線こそないが屈折は強い。く字形甕は、体上部が膨らまず、口縁部から底部に向かって一気に窄まる形状をとる。石鏃は平基式（177）と凸基式（178）がある。

ＳＫ244出土遺物（179～189）　広口壺（179～180）、甕（181～189、184と189は底部のみ）がある。広口壺179は、口縁部を欠損するが、いわゆる遠賀川系の壺の頸部が長頸化して直線文が施された壺である。甕で口縁部も残るものは、183・185～188がA調整であるが、181と182は口唇部刻み、口縁内面ヨコハケをともに欠く。189は底部穿孔が施されている。

ＳＫ252出土遺物（190）　器面の残存は悪いが、

広口壷である。頸部が欠損するが、体部は下膨れで、頸部がやや長くなるものと推定される。

ＳＫ253出土遺物（191～193）　甕底部（191）、壷底部（192）、土錘（193）がある。191は壷の可能性もある。

ＳＫ260出土遺物（194～195）　甕の口縁部（194）と底部（195）である。194は頸部が緩やかに外反し、端部に刻みをもつ。195は焼成後穿孔を施している。

ＳＫ275出土遺物（196～197）　甕（196）と広口壷（197）がある。196は体部が緩やかに膨らみ、体上部に一対の瘤状隆起を貼付する。197は、やや長頸化した頸部と胴部に幅広の直線文を加えたもので、中期前葉に属しよう。

ＳＫ277出土遺物（198～199）　甕（198）と壷（199）」である、198はＡ手法、壷は下膨れでミガキ調整である。

ＳＫ284出土遺物（200～203）　甕（200～202）と掻器（203）がある。甕はＡ調整、掻器はサヌカイト製である。

ＳＫ285出土遺物（204）　広口壷で、頸部に幅広く直線文を施した中期前葉の土器である。

ＳＫ288出土遺物（205～213）　広口壷（205～206）と甕（207～213）がある。広口壷205は、口縁内面に瘤状突起を貼付する。甕はいずれも甕で、いずれも頸部から口縁部に向かって緩やかに外反する。調整はいずれもハケ調整と思われる。

ＳＫ292出土遺物（214）　甕である。体部を直線文や緩い波状文で加飾している。

ＳＫ304出土遺物（215～216）　甕（215）と壷底部（216）を図示した。215はＡ調整で、胴部があまり張らない。

ＳＫ307出土遺物（217）　甕で、風化のため調整は明瞭でないが、体部の膨らみは乏しい。やや器高が低い鉢的な土器になるかもしれない。

ＳＫ309出土遺物（218～222）　甕（218～219）、甕底部（220）、小形壷（221）、壷底部（222）がある。甕は、Ａ調整に似るが、体部外面のハケがやや横方向に流れる。220は、焼成後底部穿孔を施す。222は厚底である。

ＳＫ310出土遺物（223～224）　223はハイアロクラスタイト製の太型蛤刃石斧、224は壷底部である。223は非常に粗製で、刃部がかなり刃毀れしている。

ＳＫ312出土遺物（225～231）　225～229は広口壷、230は壷底部、231は砥石である。広口壷はいずれもやや頸部が長く、225と226は口縁内面に瘤状突起が付き、226～229は頸部ないしは体上部に直線文で加飾している。231は凝灰質砂岩である。

ＳＫ314出土遺物（232～237）　広口壷（232）、鉢（233）、甕（234）、甕底部（235）、サヌカイト製の剥片（236）と石鏃（237）がある。広口壷は、口縁内面に瘤状突起を貼付し、体部は上下を沈線で区画して内部を直線文で充填した文様帯をベルト状に配している。235の底部には、木の葉痕跡が残る。石鏃237は、凸基式である。

ＳＫ316出土遺物（238～240）　壷底部（238）と甕底部（239～240）がある。

ＳＫ326出土遺物（241～244）　壷（241～242）、甕（243）、敲石（244）がある。242は体部に沈線で区画された縄文帯をベルト状に施す。244は塩基性の閃緑岩製で、先端に敲打痕を残す。なお、244は遺構直上からの出土である。

ＳＤ313出土遺物（245）　甕の口縁部で、口唇部を刻んでいる。

ＳＤ317出土遺物（246）　壷の底部である。

ＳＤ340出土遺物（247～248）　壷（247）と甕（248）がある。壷は、胴部に刻目隆帯を貼付している。甕は、口唇部に波状文、口縁内面に刻み列を施すが、体部タテハケ、口縁内面ヨコハケの調整はＡ調整と照応している。

Ｃ11pit11出土遺物（249）　サヌカイト製の石鏃である。平基式の小型品で、端正な形状をなす。

Ｃ２pit３出土遺物（250）　サヌカイト製の石錐である。基部を欠損する。

Ｆ８pit６柱痕出土遺物（251）　敲石である。先端に僅かな敲打痕がある。砂岩製である。

D10pit13出土遺物（252）　側面に擦痕があり、敲石の可能性がある。泥岩製である。

Ｃ13pit３出土遺物（253）　小形の甕である。磨耗が激しく、口縁内面にヨコハケがある以外、調整不明である。

E13pit３出土遺物（254）　弥生土器の甕である。B調整のうえに、口縁内面を刻んでいる。

b　古墳時代遺構出土の遺物

SK222出土遺物（255～257）　土師器の直口壺（255）、小形丸底鉢（256）、S字甕底部（257）がある。直口壺は口縁部片で、間隔の空いた縦方向の細ミガキが施されている。

SK241出土遺物（258）　須恵器杯身である。ヘラ切り後未調整である。

SK307出土遺物（259）　土師器の手捏ね土器である。臼状の鉢形をなす。

c　古代遺構出土の遺物

SE327出土遺物（260～262・461）　土師器杯（260～262）と須恵器甑（461）がある。土師器杯260～261は半球状で内彎する古墳時代的な形状であるが、262は奈良～平安期の所産であろう。

SB344出土遺物（350～352）　土師器椀（350）、土錘（351～352）がある。

SB345出土遺物（353～356）　須恵器杯（353）、土師器甕（354）と皿（355）、鉄器釘（356）がある。皿の暗文は確認できなかった。

SB349出土遺物（357）　黒色土器の鉢である。底部から口縁部に向かってほぼ真っ直ぐ外側へ開く。磨耗のため調整等は不明である。

SE266出土遺物（358）　緑釉陶器の椀で、ロクロ調整による削り出し高台である。

SK270出土遺物（359）　土師器甕である。口縁上端に面をもつ。

SD208出土遺物（360～361）　土師器甕（360）と須恵器提瓶（361）がある。提瓶は、欠損部があるが非常に歪みが大きく、完成品かどうかも疑わしい。

SD209出土遺物（362～364）　土師器甕（362～363）と杯（364）がある。362は古墳期遺物の混入であろう。

SD237出土遺物（365～367）　土師器の杯（365～366）と甕（367）を図示した。杯はいずれも平底から外側へ直線的に体部が立ち上がる。

SD262出土遺物（368～371）　灰釉陶器椀（368～369）、黒色土器椀（370）、土師器甕（371）がある。368の底部には判読不明ながら墨痕がある。369は一見土師器を思わせるが、生焼けによると判断した。

SE324出土遺物（263～349・373～375）　土器では須恵器杯（373）と灰釉陶器椀（374）、木製品には井戸の構造材を含む杭（263～271）、曲物（272～274・348）、棒状材（275・324・326・332）、板材（276～323・325・327～331・333～347・349・375）がある。木製品は欠損等も多いため、杭と棒状具には流動的な側面も大きいが、275は柱状の形態を示す。375は、片側を欠損するが、もう一方の端部は２又に分かれている。すべての木製品が樹種同定されているわけではないが、わかる範囲で樹種をみてみると、杭ではシイ属やサカキ・シャシャンボがあり、棒状具ではスギやヤブニッケイがある。板材ではスギが多数を占めるがモミ属も含む。349が唯一のアスナロ属例で、これは何かの部材の破片であろう。個々の樹種名は観察表を参照されたい。須恵器373は焼成が甘く、生焼け状態である。

SD279出土遺物（372・376～393）　土錘（372）、灰釉陶器椀（376～380）、ロクロ土師器皿（381）・台付皿（382）、緑釉陶器椀(383)、黒色土器椀（384～386）、土師器皿（387）・杯（388～391）・甕（392～393）がある。376には「大」、377には「●」の墨書がある。また、黒色土器は、ハケ後ミガキの調整を施している。

SE258出土遺物（405）　土師器杯である。ナデ調整を施す。

C－E３pit１出土遺物（394～396）　土師器皿（394）・甕（395～396）がある。皿は、磨耗が激しく調整不明であるが、口縁部は僅かに内彎気味に立ち上がり、端部を内側に肥厚させる。

C－D10pit23出土遺物（397～399）　黒色土器椀（397～398）、土師器小皿（399）がある。土師器小皿は小片で、これは中世に属する。混入でなければ、このピット自体、中世の所産かもしれない。

C－D11pit６出土遺物（400）　土師器杯である。底部をヘラケズリし、体部ヨコミガキする精製品である。暗文の有無は不明である。

d　中世遺構出土の遺物

SB352出土遺物（401）　陶器小椀である。いわゆる山茶椀質である。以下、陶器小椀と呼称する

場合は山茶椀質のものを示す。

ＳＫ250出土遺物（402～404）　ロクロ土師器小皿（402～403）、山茶椀（404）がある。山茶椀には籾殻圧痕は付いていない。

ＳＥ259出土遺物（406～418）　山茶椀（406～411）、小椀（412～413）、小皿（414）、陶器（いわゆる山茶椀質）鉢（415）、陶器小壷（416）、土師器杯（417～418）がある。

ＳＥ263出土遺物（419～420）　陶器小皿（419）と小椀（420）である。

ＳＫ265出土遺物（421～423）　ロクロ土師器杯（421）、山茶椀（422）、小椀（423）がある。

ＳＥ266出土遺物（424）　曲物底板である。スギを使用している。

ＳＸ286出土遺物（425～426）　土師器杯である。底形態に差があり、425は丸底、426は平底である。

ＳＤ256出土遺物（427～428）　山茶椀（427）と灰釉陶器椀（428）がある。427も高台に籾殻圧痕が付着せず、器形も灰釉陶器の形態を残す猿投・知多系の山茶椀である。

ＳＤ237出土遺物（429）　鉄製釘である。先端が屈曲している。

Ｃ－Ｃ10pit13出土遺物（430～431）　ともに山茶椀である。底部が厚く、深めの形態を示す。

Ｃ－Ｃ11pit１出土遺物（432～433）　土師器鍋（432）と杯（433）である。鍋は、口縁端部が内斜面を形成する。

Ｃ－Ｂ12pit４出土遺物（434）　ロクロ土師器小皿である。

Ｃ－Ｄ10pit18出土遺物（435）及びＣ－Ｄ10pit６出土遺物（436）　共に土師質の土錘である。

Ｃ－Ｃ10pit６（437）　土師器鍋である。口縁内面が肥厚し、内斜面を形成する。

Ｃ－Ｂ12pit４出土遺物（438）　土師器小皿である。厚手で、ハケ調整痕を残す。

Ｃ－Ｄ10pit２出土遺物（439）　土師器小皿である。ヨコナデにより口縁端部が外側に突出する。

Ｃ－Ｂ11pit２（440）　ロクロ土師器小皿である。厚手で、形態的には438と類似する。

ｅ　Ｌ区包含層等出土遺物

縄文土器（441～442）　ともに縄文後期堀之内２式に相当しよう。441はバケツ状の器形で、口縁直下に刻目隆帯を有する。

弥生土器（443～453）　壷（443～446）、甕（447～450）、甕底部（451～453）がある。443は大型で、横方向３条・縦方向４条の刻目隆帯をＴ字状に貼付する。445は細頸壷で、口縁直下から胴部にかけて直線文を密接施文する。広口壷444は、口縁内面に瘤状突起を貼付している。

石器（454～460）　打製の石小刀（454）、打製石鏃（455～457）、石錐（458）、磨製の片刃石斧（459）、磨製石斧の転用品（460）がある。454～458はサヌカイト製、459～460はハイアロクラスタイト製である。460は転用されて側縁部が丸い。

古代・中世期遺物（462～477）　古代の遺物としては須恵器の杯身（462・474）、土師器の甕（463～465）・皿（468）・杯（469～471・475）がある。中世の遺物として山茶椀（472）・小椀（473）、土師器小皿（476～477）がある。474は転地逆となって、杯蓋の可能性もある。その他、時期不明の遺物として土錘（466～467）がある。山茶椀472は猿投系、477土師器小皿は２段ナデの京都系である。

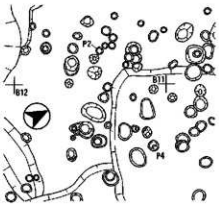
第６節　Ｍ区の調査

１　概要

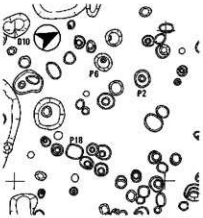
Ｍ区は、幅３ｍ、総延長72.5ｍの細長いトレンチである。Ｌ区東北隅から東へ34ｍ延びて直角に屈折し、南側へ44.5ｍ延びる。狭長な調査区ながら、遺構・遺物は濃密に出土している。しかし、隣接するＯ区の遺構検出面が本来存在したはずの面よりかなり削り込んで検出されたため、遺憾ながらこのＭ区で確認した掘立柱建物の柱穴などの連続性が隣接区で検証できない部分も生じた。

２　小地区設定方法

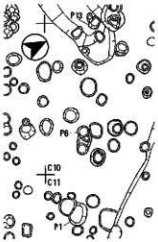
ここでもＭ区のみの独立した小地区の付与を行っている。すなわち、国土座標には則らず、調査区の形状に合わせて小地区の付与を行い、三重県の基本原則に従って北西隅を表示の基点とし、東西軸は西



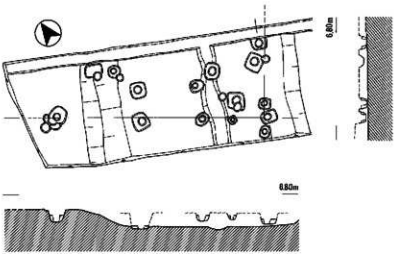
第139図　B 11pit 2 ・ B 12pit 4 位置図（1 ：100）



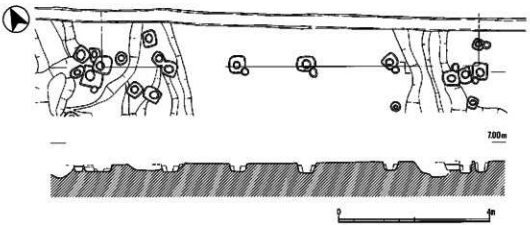
第140図　D 10pit 2 ・ 6 ・ 18位置図（1 ：100）



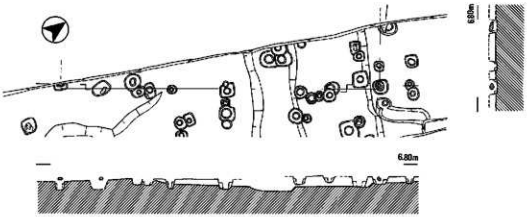
第141図 C 10pit 6 ・ 13 ・ C 11pit 1
位置図（1 ：100）



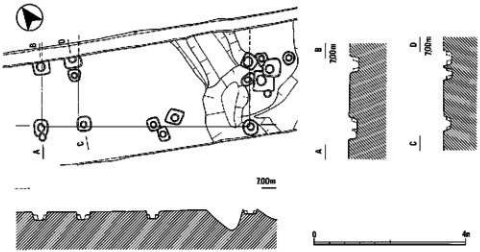
第142図　S B 159実測図（1 ：100）



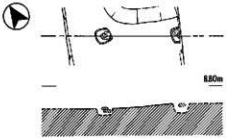
第143図　S B 161実測図（1 ：100）



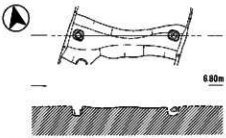
第144図　ＳＢ162実測図（１：100）



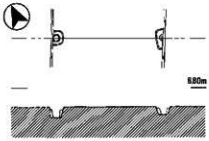
第145図　ＳＢ160実測図（１：100）



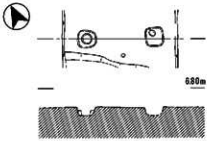
第146図　ＳＡ163実測図（１：100）



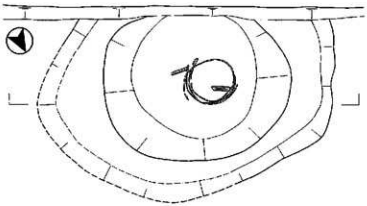
第147図　ＳＡ164実測図（１：100）

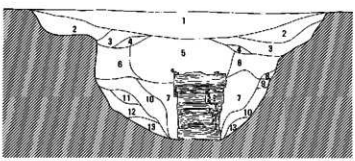


第148図　ＳＡ165実測図（１：100）



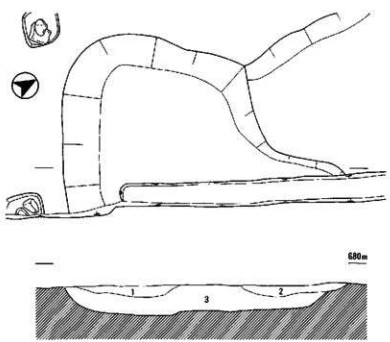
第149図　ＳＡ166実測図（１：100）





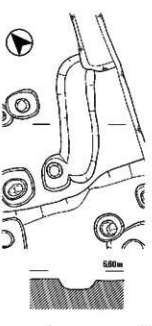
1　5Y4／1灰色土
2　5Y4／1灰色土
　(2.5Y4／1黄灰色土ブロック含む)
3　7.5YR3／3暗褐色土
4　7.5YR4／6褐色土・
　7.5YR5／6明褐色土（鉄分含む）
5　2.5Y5／1黄灰色粘土・
　2.5Y7／2灰黄色粘土
　(7.5YR5／6明褐色土ブロック含む)
6　10YR5／1褐灰色粘砂土
　(7.5YR4／6褐色土ブロック含む)
7　N4／灰色粘砂土
8　N5／灰色礫砂
9　2.5Y5／6黄褐色粗砂
　(N5／灰色細砂含む)
10　N5／灰色粗砂
11　10BG6／1青灰色粗砂
12　10BG5／1青灰色細砂
13　N5／灰色細砂
　(N3／暗灰色粘砂土ブロック含む)

第150図　ＳＥ129実測図（１：40）



1　5YR4／1褐灰色粘質土
　(7.5YR5／6明褐色粘質土ブロック含む・炭化物少量含む)
2　5YR4／1褐灰色粘質土
　(7.5YR5／6明褐色粘質土ブロック含む・炭化物多く含む)
3　5YR4／1褐灰色粘質土
　(7.5YR5／6明褐色粘質土ブロック含む)

第151図　ＳＫ132実測図（１：40）



第152図　ＳＫ131実測図（１：40）

から東へアルファベットを、南北軸は北から南へ数字を付与している（第８図）。

３　遺構

ＳＢ159（第142図）　調査区の制約のため３間（5.6m）×１間分（２m）のみが確認されただけの掘立柱建物である。柱掘形は直径50cm程度の方形である。なお、この場所には他にも掘立柱建物柱穴として適当な柱穴があり、もう１棟の別建物が重複していた可能性が高い。

ＳＢ160（第145図）　建物の南側部分が残存しただけであるが、西側１間分の庇を含めた梁行３間（5.5m）の掘立柱建物と推定される。ただ、柱筋に乗る梁行中央柱は柱間寸法が等間にならず、柱筋から１柱穴分外側に出た柱穴が等間になる。このことから、本建物は近接棟持柱を採用した掘立柱建物であった可能性も残る。

ＳＢ161（第143図）　桁行５間（10m）の東西棟建物の南側柱列のみを確認した。柱間寸法は、西側から３間分が1.8m等間、残り２間分が2.4m等間である。柱掘形は、直径50cm程度の方形である。建物方向は、N27度Eである。

ＳＢ162（第144図）　調査区の制約のためごく一部を検出しただけだが、４間（8.5m）×１間（1.8m）以上の建物と判断された。ただし、4間分については、柱筋に乗る柱穴がいくつかあり、建物およびそれを構成する柱穴の認定にはやや流動的な側面も残ることは否めない。また、建物方位は、N37度Eである。柱穴埋土から土師器鍋や土師器小皿、山茶椀などの鎌倉時代の土器（520～523）が出土している。

ＳＡ163（第146図）　柱痕の残存等より掘立柱建物を構成するピットと想定されたが、調査区の制約などから対応する柱穴が不明なため、一応、柱列として把握した。柱掘形は直径40cm１間分（2.1m）を確認しただけであるが、主軸方向はN57度Wであり、前述のＳＡ163と共通する。

ＳＡ164（第147図）　ＳＤ151と重複しているが、柱穴としてはしっかりしており、柱列として把握した。しかし、これも詳細は不明である。

ＳＡ165（第148図）　これも１間分しかないが、柱間寸法2.8mの柱列である。柱掘形の直径が40cm～50cmの方形を呈し、主軸方向はN64度Wである。ひとつの柱穴（H10pit４）から墨書山茶椀（530）が出土した。

ＳＡ166（第149図）　これも１間分しか確認できないが、柱間寸法1.8mの柱列である。柱掘形は、直径50～60cmの方形ないしは隅丸方形を呈し、主軸方向はN63度Wである。柱穴埋土から土馬（524）が出土した。

ＳＥ129（第150図）　調査区の制約のため北半分しか検出されなかったが、直径２m、深さ1.5m以上の円形井戸である。埋土から山茶椀（478～480）や曲物（1269～1271）が出土した。

ＳＫ131（第152図）　長さ1.4m、幅0.4mの長楕円形の土坑で、深さ10cmを図る。埋土から陶器小皿（481）が出土している。

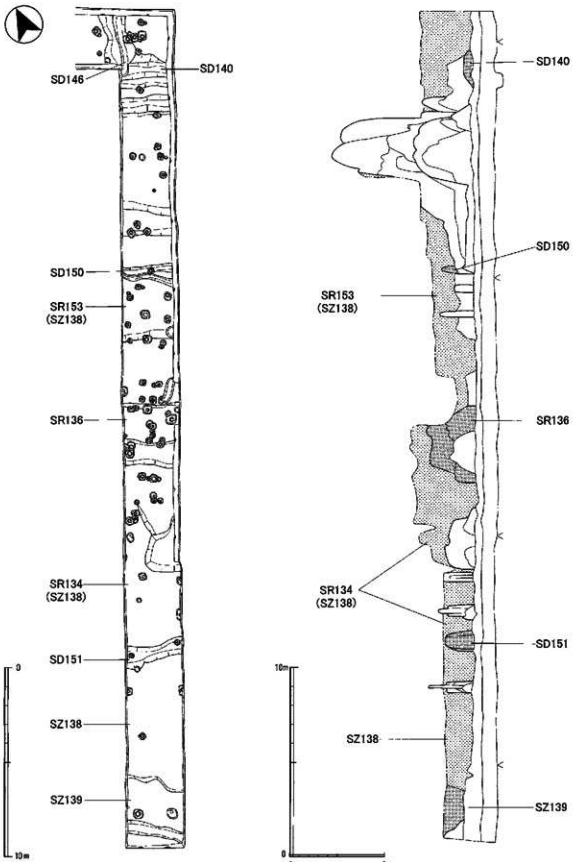
ＳＫ132（第151図）　東側のN区にも延びる遺構で、N区部分も含めて長径2.1m、短径1.5mの不定形状の土坑である。埋土から土師器鍋や山茶椀など多くの土器類（488～501）が出土した。

ＳＤ150（第153図）　幅0.5m、深さ12cmの細い溝である。埋土から山茶椀（502）が出土した。なお、本来続くはずのO区で検出されなかったのはそこまで延びずに溝が完結したのではなく、調査精度上の問題と思われる。

ＳＤ151（第153図）　幅1.2m、深さ11cmの溝である。東側に隣接するN区には楕円形の土坑状落ち込みがあり、あるいはここに連続する溝かもしれない。

ＳＲ137（第154図）　調査区の北西端で確認された幅2.6mの旧河道であるが、南接するO区では確認されていない。図示したのは中世の山茶椀（515）であるが、他の時期のものも混じる。

ＳＺ138（「ＳＲ134・ＳＲ136」・「ＳＺ138」）それぞれ間に細い溝（このうち「ＳＲ134」と「ＳＺ138」の間はＳＤ151）があるため調査時は別々の旧河道として認識・調査されたが、土層観察からは同一のものであることを示しており、ここは138をもって遺構番号に代表させた。しかし、この遺構が旧河道といえるかどうかは疑問があり、土層観察からは後述のＳＺ139に乗る土層であることが判明しており、遺構というよりは層序の変わり目の土質の差を「遺構」として認識した可能性が高い。ただし、



第153図 M区ＳＤ・ＳＲ位置図、東壁断面模式図（位置図１：200、断面模式図垂直方向１：40）

報告に当たっては、この部分をさしあたって不明遺構（ＳＺ）として扱っている。従って、「ＳＲ134」や「ＳＲ136」、「ＳＺ138」は、ＳＺ138に包含させたうえで、遺物出土地点の別を示すものとして扱った。なお、後述の「ＳＲ153」も、ＳＺ138と同一層の可能性がある（以上、第153図参照）。

埋土からは、「ＳＲ134」地点から山茶椀類や土師器類など（504～510）が、「ＳＲ136」地点からも山茶椀や土師器皿など（511～514）が、「ＳＺ138」地点からは山茶椀（516）や瓦器（517）が出土している。なお、ＳＡ166はここをベースに遺構が切り込まれている。

ＳＺ139（第153図）　これも不明遺構として認識されているが、替田遺跡の基本層序（第３章参照）の５ａ層そのものの可能性が高く、さらにその形状は土層観察から土手のように盛り上がる形状を呈していたらしい。埋土からは陶器片（518）が出土しているが、完掘されていないので上面出土遺物ということになろう。

ＳＲ153（第153図）　一見すると旧河道の様にみえるが、これも下位層上面の土質の変化を遺構として扱った可能性が高く、前述のＳＺ138と同一の土層の延長部であると思われる。埋土から土師器皿（519）が出土しているが、この土器をもって当層の時期が限定できるわけではない。

Ｈ７pit25（第157図）　直径35cmほどの円形柱穴で、埋土から山茶椀（525）と土師器小皿（526）が出土した。

Ｈ８pit４（第158図）　ＳＢ162の柱筋に乗る柱穴であり、ＳＢ162を構成する柱穴の可能性もある。埋土から山茶椀（527～529）が出土した。

Ｈ11pit１（第155図）　直径40cm程の方形のピットである。柱痕も確認できることから掘立柱建物の柱穴であろう。埋土から陶器小椀（531）が出土している。

Ｈ３pit５（第156図）　長径40cmの楕円形ピットである。埋土から山茶椀の底部（532）が出土している。

Ｈ６pit12（第157図）　長径35cm程の方形柱穴である。埋土からロクロ土師器小皿（533）が出土した。

４　出土遺物

ａ　遺構出土遺物

ＳＥ129出土遺物（478～480・1269～1271）
土器はいずれも山茶椀、木製品は曲物である。山茶椀のうち、478は知多・猿投系、479と480は猿投・瀬戸系である。478の内面には研磨は認められない。曲物は、いずれも側板である。

ＳＫ131出土遺物（481）　陶器小皿である。知多・猿投系である。

ＳＤ140出土遺物（482～486）　土師器鍋(482)、山茶椀（483・485）、陶器小皿（486）、白磁椀(484）がある。山茶椀はいずれも知多・猿投系、陶器小皿は渥美系である。

ＳＤ146出土遺物（487）　弥生土器の壺底部である。やや底部の立ち上がりが急である。

ＳＫ132出土遺物（488～501）　土師器の鍋（488～490）・小皿（491）・皿（492）、山茶椀（493～499）・陶器壺（500）・陶器鉢（501）がある。土師器の鍋と小皿、皿はいずれも南伊勢系である。山茶椀は、499が知多・猿投系である以外はすべて渥美系で、壺も渥美である。陶器鉢は高台を欠いた後、研磨を施している。全体に渥美系の割合が多いのが特筆される。

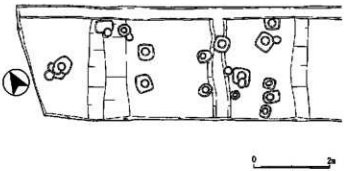
ＳＤ150出土遺物（502）　山茶椀である。瀬戸・猿投系で、高台はない。

ＳＤ151出土遺物（503）　山茶椀である。知多・猿投系である。

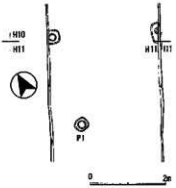
ＳＲ137出土遺物（515）　山茶椀の底部で、渥美系である。

ＳＺ138出土遺物（504～514・516～517）　山茶椀（505・511～513・516）、陶器小椀（504）・土師器皿（506・514）、ロクロ土師器小皿（507）、土師器小皿（508）、土師器甕（509）、瓦器椀（517）、土製小容器（510）がある。山茶椀・陶器小椀類は、504・512が猿投系、505・511・513が渥美系、516が知多・猿投系である。土師器小皿508は雲出島貫遺跡分類[1]の小皿ｂ２類、土師器皿514は口縁部に２段ナデを施した12世紀の所産である。山茶椀505は、底部内面に墨痕があり転用硯と思われる。

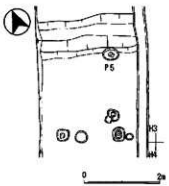
ＳＺ139出土遺物（518）　緑釉陶器椀である。焼成は土師質である。



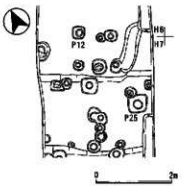
第154図　ＳＲ137実測図（１：100）



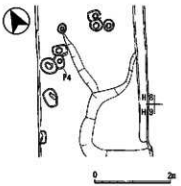
第155図　Ｈ11pit１位置図（１：100）



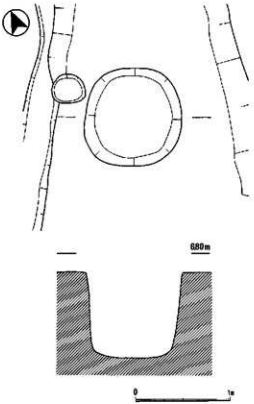
第156図　Ｈ３pit５位置図（１：100）



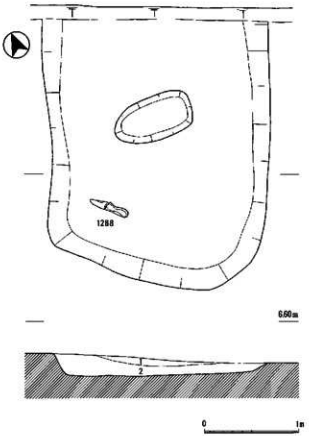
第157図　Ｈ６pit12、Ｈ７pit25位置図（１：100）



第158図　Ｈ８pit４位置図（１：100）



第159図　ＳＫ409実測図（１：40）



第160図　ＳＸ425実測図（１：40）

ＳＲ153出土遺物（519）　土師器皿である。

ＳＢ162出土遺物（520～523）　土師器甕(520)、山茶椀（521～522）、土師器小皿（523）がある。土師器甕は、口縁部を内側に折り返して内斜面を形成し、体部をナデ調整する鍋的な土器である。山茶椀は、521が渥美系、522が瀬戸である。土師器小皿は南伊勢系で、Ⅱｂ型式に相当する。

ＳＡ166出土遺物（524）　土馬である。焼成は土師質である。肢体は欠損し、頭部も欠くが、頭部を接合する際に頭部と胴部を繋ぐ連結補助材を噛ましたと推定される穿孔が残る。全体にナデ・オサエ調整がなされている。

ＳＡ165出土遺物（530）　陶器小皿で、猿投・知多系である。底部に「＋」墨書が施されている。

Ｈ７pit25出土遺物（525～526）　山茶椀（525）と土師器小皿（526）がある。山茶椀は知多系、土師器小皿は中北勢系である。

Ｈ８pit４出土遺物（527～529）　いずれも山茶椀で、527が渥美系、他は知多系である。

Ｈ11pit１出土遺物（531）　陶器小椀で、猿投・知多系である。

Ｈ３pit５出土遺物（532）　山茶椀で、知多・猿投系である。

Ｈ６pit12出土遺物（533）　ロクロ土師器小皿である。

ｂ　M区包含層等出土遺物（534～550）

534～535はサヌカイト製の石鏃、536～539は縄文土器深鉢、540～544は弥生土器壺、545～547は弥生土器甕、548は土師器Ｓ字甕、549は青磁椀、550は白磁小皿である。縄文土器はいずれも晩期の突帯文土器である。弥生土器の壺は、いずれも胴部片で、540が格子目文、541が櫛による擬似流水文を施す。同じく弥生土器甕はいずれもく字形甕で、このうち545はＡ調整を施す。白磁は、いわゆる口ハゲの小皿になるものであろう。

註

（1）三重県埋蔵文化財センター『鳴抜Ⅱ』　2000

第７節　N区の調査

１　概要

途中、用水路の存在などのため調査できなかった部分も含むが、幅2.8m、東西91mの細長いトレンチを主軸とし、そこから南側へ派生する南北20mのトレンチからなる。Ｌ区に連続する西側の調査密度は濃いが、東側にいくに従って遺構密度は薄くなり、トレンチ東端部ではほぼ遺構はなくなる。

２　小地区設定方法

平成14年度の６次調査の際、Ｌ区南側から東に延びるトレンチとして調査が実施されたが、小地区の設定はＬ区から独立して行っている。具体的には、国土座標には拠らずに調査区形状に合わせたかたちで小地区の付与を行い、東西軸は西から東へ数字を、南北軸は南から北へアルファベットを付与している。つまり、本調査区においては、北西方向を小地区表示の基点とする三重県原則には則らず、西南側を小地区表示の起点としている（第９図）。

３　遺構

ＳＸ425（第160図）　北側が調査区外となるが、長径1.3m以上×短径1.2mの長方形土坑である。埋土から土師器鍋（551）と刀子（1268）が出土しており、土坑墓であろう。

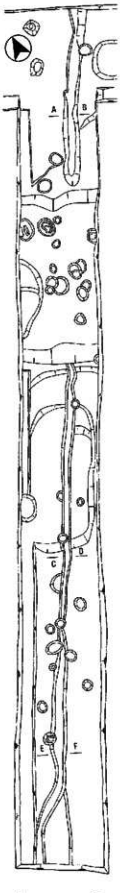
ＳＫ440（第162図）　直径70cmの小さな円形土坑で、深さ６cmを測る。埋土から土器類（554～557）のほか、曲物底板破片（558）が出土していることから、井戸として使用されたものと思われる。

ＳＫ409（第159図）　直径1.1mの円形土坑で、深さ93cmを測る。埋土から、陶器小皿（559）が出土した。

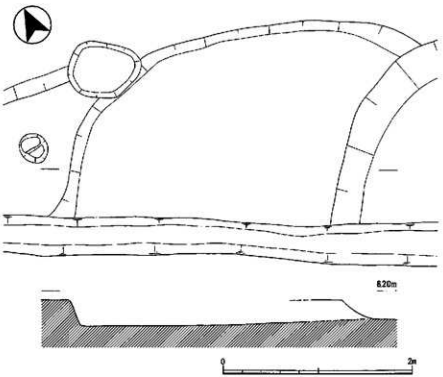
ＳＤ433（第167図）　幅0.6m、深さ18cmの南北溝であるが、北接するＯ区部分では未検出である。埋土から土師器甕（552～553）が出土した。

ＳＺ443（第170図）　ＳＤ430に切られている落ち込み状の遺構で、深さ21cmを測る。西側トレンチの東端で検出したが、東側トレンチでは未検出である。埋土から古墳時代の須恵器高杯（560）やロクロ土師器（561～562）が出土しており、時期的な限定ができない。

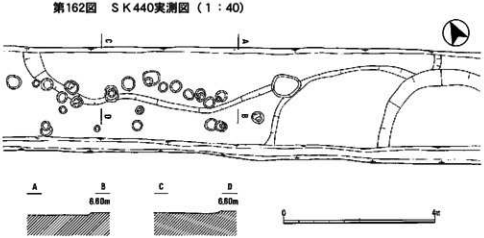
ＳＤ401（第161図）　途中別遺構の重複のため途切れる部分があるが、長さ11m以上×幅0.4cm、



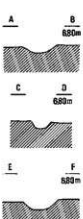
第161図　ＳＤ401実測図
（平面図１：100、断面図１：40）

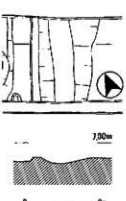


第162図　ＳＫ440実測図（１：40）

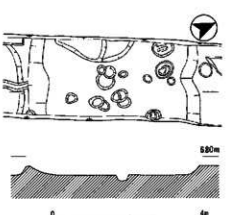


第163図　ＳＺ441実測図（１：100）





第164図　ＳＤ404実測図
（１：100）



第165図　ＳＤ408実測図（１：100）

深さ16㎝の細長い南北溝である。埋土から鉄製品（563～564）の出土があるほか、切り合い関係からＳＤ405やＳＤ411、ＳＤ442、ＳＤ335～336などよりも後出する。

ＳＤ404（第164図）　幅1.6m、深さ20㎝の南北溝であるが、北接するＯ区部分では遺構検出がなされていない。埋土から管玉（565）が出土した。

ＳＤ405（第166図）　西側が調査区外となるが遺構としては遠からず収束すると思われる。さすれば、長径3.9m×幅1.7程度の楕円形土坑で、深さは22㎝を測る。埋土から山茶椀（566）や土師器小皿（567～568）が出土している。

ＳＫ423・ＳＫ424（第169図）　中央部をＳＤ420に切られているが、南北に主軸をもつ楕円形状の落ち込みで、その北半部を検出している。土坑は二段に掘り込まれており、外周の落ち込みをＳＫ424、その床面で確認された内側の落ち込みをＳＫ423として現場段階では把握した。外側のＳＫ424は、短径0.6m・深さ28㎝、内側のＳＫ423は深さ28㎝を測る。ＳＫ423埋土からは山茶椀（571）、ＳＫ424埋土からは山茶椀（574）や常滑大甕（575）が出土している。

ＳＤ435（第168図）　重複が多く規模は確認できないが、幅0.7m、深さ19㎝程度の溝である。調査区の制約により端部が確認できないため確定できないが、楕円形の土坑状のものである可能性もある。埋土から山茶椀（572）が出土した。

ＳＺ441（第163図）　北側が調査区外となるため全体形は不明だが、現況で長さ11m、幅1.5m、深さ９㎝の不定形な落ち込みの南側部分を確認している。埋土から山茶椀（573）が出土した。

４　出土遺物

ａ　遺構出土遺物

ＳＸ425出土遺物（551・1268）　土師器甕と刀子である。土師器甕は口縁部を肥厚させて上端面を形成する。体部はナデ調整を施す。

ＳＤ433出土遺物（552～553）　いずれも土師器甕である。ともに口縁端部は外斜面を形成する。553は体部にハケ調整が残る。前述の551よりは古相を示す。

ＳＫ440出土遺物（554～558）　陶器小皿（554～555）、山茶椀（556～557）のほか、木製品としてヒノキ科アスナロ属の板材（558）がある。557は底部の内外に墨痕が認められ、転用硯として使用されたらしい。

ＳＺ443出土遺物（560～562）　須恵器高杯（560）、ロクロ土師器の台付皿（561）と小皿（562）がある。須恵器高杯はいわゆる古墳時代タイプで、混入であろう。

ＳＤ401出土遺物（563～564）　ともに鉄製品である。断面方形の釘であろうか。

ＳＤ404出土遺物（565）　管玉であるが、穿孔は不十分である。

ＳＤ405出土遺物（566～568）　山茶椀（566）と土師器小皿（567～568）がある。

ＳＤ408出土遺物（569～570）　須恵器杯蓋（569）、陶器大甕（570）がある。須恵器は、古代のもので、宝珠ツマミが欠損している。陶器大甕は、常滑である。

ＳＫ423出土遺物（571）　山茶椀である。

ＳＤ435出土遺物（572）　山茶椀である。

ＳＺ441出土遺物（573）　山茶椀である。

ＳＫ424出土遺物（574～575）　山茶椀（574）と陶器甕（575）がある。甕は、常滑である。

Ｇ18pit２出土遺物（576～579）　土師器甕（576）、黒色土器椀（577～578）、緑釉陶器椀（579）である。576は口縁端部が肥厚し、上端に面を形成する。

Ｇ５pit１出土遺物（580）　山茶椀である。

Ｇ６pit２出土遺物（581）　山茶椀である。

Ｇ10pit12出土遺物（582）　陶器小皿である。

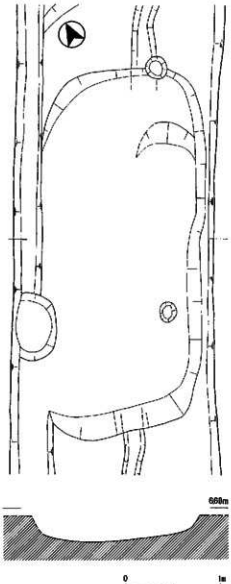
Ｆ９pit３出土遺物（583）　ロクロ土師器の台付皿である。体部内面にはハケ、外面にはオサエの痕跡が残り、高台は高い。

Ｇ14pit２出土遺物（584）　土師器鍋で、口縁端部を内側に折り返した南伊勢系である。

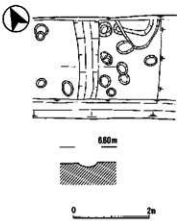
Ｇ14pit３出土遺物（585）　土師器小皿で、南伊勢系である。

Ｇ14pit４出土遺物（586）　土師器小皿である。

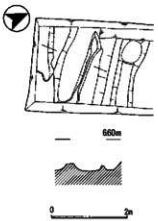
Ｇ９pit１出土遺物（587～588）　山茶椀（587）と鉄製の釘（588）がある。山茶椀には、墨書（「大」？）が存在する。



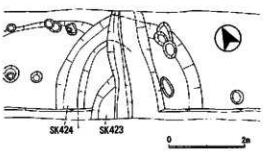
第166図　ＳＤ405実測図（１：40）



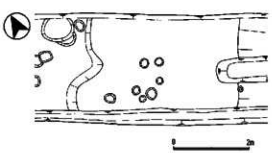
第167図　ＳＤ433実測図（１：100）



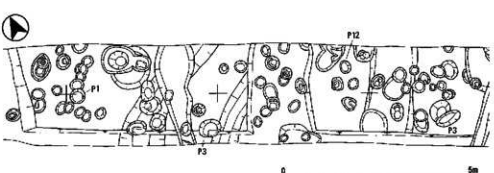
第168図　ＳＤ435実測図（１：100）



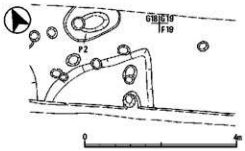
第169図　ＳＫ424・423実測図（１：100）



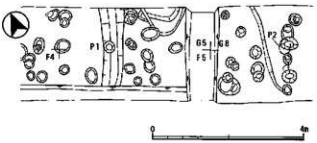
第170図　ＳＺ443実測図（１：100）



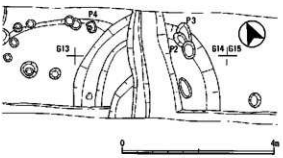
第171図　Ｇ９pit１、Ｆ９pit３、Ｇ10pit12、Ｆ11pit３位置図（１：100）



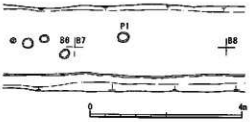
第172図　G 18pit 2 位置図（1：100）



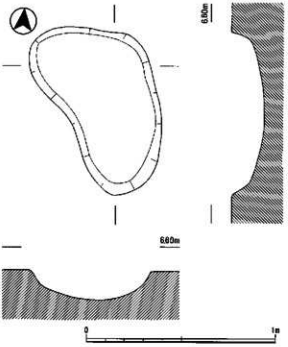
第173図　G 5pit 1、G 6pit 2 位置図（1：100）



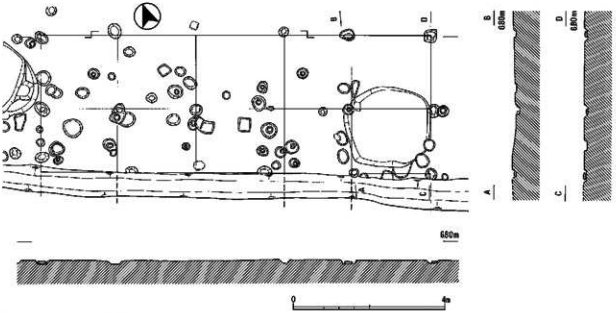
第174図　G 14pit 2・3・4 位置図（1：100）



第175図　B 7pit 1 位置図（1：100）



第176図　S X 540実測図（1：20）



第177図　S B 549実測図（1：100）

Ｆ11pit３出土遺物（589）　平面菱形を呈する鉄製品であるが、用途は不明である。片刃が付いており、利器の可能性がある。

Ｂ７pit１出土遺物（590）　青磁椀底部である。削り出し高台で、高台底にも施釉が及んでいる。

ｂ　ＮＫ包含層出土遺物

打製石器（591～592）　スクレイパー（591）と平基式の石鏃（592）があり、ともにサヌカイト製である。

縄文土器（593）　晩期の突帯文土器の深鉢である。刻目突帯で、条痕をもつ。

小刀（594）　鉄製の小刀の茎部と思われる個体で、２箇所の目釘孔をもつ。刃部は茎部から関などをもたずに移行する。

弥生土器（596）　壷の体部である。指頭圧痕による押圧隆帯が3条みられる。

古代の土器（603～604）　土師器甕（603）と黒色土器椀（604）である。黒色土器は、内面のみ黒色化された黒色土器Ａ類である。

中世の土器（597～603・605～606）　陶器鉢（597）、山茶椀（598）、陶器小皿（599～602）、ロクロ土師器小皿（605）、土師器小皿（606）を図示した。このうち、土師器小皿606は南伊勢系である。

第８節　Ｏ区の調査

１　概要

Ｏ区は、平成15年度の７次調査区を宛てた。この調査区は、国道163号線ＢＰに伴う幅18m、長さ約100mの調査区であるが、この区にはこの段階で既に調査が終了している14年度調査区（Ｍ区）が貫入していたため、トレンチとしてはＭ区を境に東西の２ヶ所に分断して実施した。

さて、Ｍ区や西接するＬ区、それに南接するＮ区ではかなり遺構密度が濃かったのに対し、Ｏ区では極端に薄かった。Ｌ区東端とＯ区西端の間には、幅4.5mの未調査区が介在するため、ここに何らかの区画施設があってＯ区の遺構密度が薄かった可能性も残るが、同条件のＮ区では相応の遺構が確認されており、調査方法上の問題に起因するかもしれない。

２　小地区設定方法

小地区設定は、国土座標には則らずに調査区の形状に合わせたかたちで独立して実施した。三重県の小地区設定における基本原則に従って東西軸は西から東へアルファベットで、南北軸は北から南へ数字で表示している（第11図）。

３　遺構

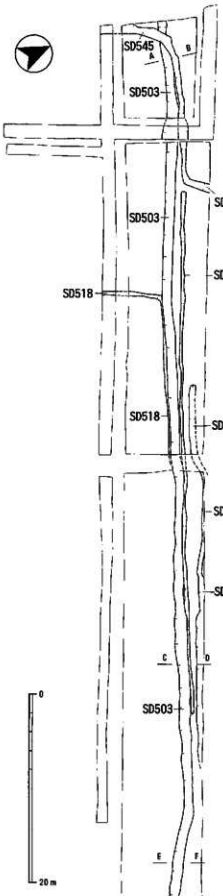
ＳＤ501（第179図）　東調査区東北隅に所在する落ち込み状遺構であるが、北側及び東側は調査区外、南側はＳＤ515、西側はＳＤ517と重複し、全体形状は不明である。埋土から山茶椀をはじめとする中世の遺物（607～618）が出土しているが、切り合い関係からはＳＤ515・517に後出する。

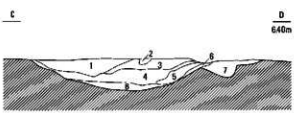
ＳＤ502（第178図）　東接するＰ区にも連続する長さ93m（Ｐ区含）×幅１m、深さ31cmを測る、ほぼ一直線に延びる細長い東西溝である。調査所見では、ほぼ同一場所を流れるＳＲ539とは別溝として扱っているが、ＳＤ502はＳＲ539を掘り直したものかもしれない。埋土からは、中世の遺物を中心に古墳～古代の遺物も混入して出土している。

ＳＤ503（第178図）　東接するＰ区にも続く溝であるが、西接するＬ区では未確認である。ただし、直接結合はしないものの、ＳＤ210はＳＤ503の西側延長部分に相当する部分に位置する。Ｏ区の西端部には攪乱土坑があるが、ＳＤ503はそのまま西側へ延びていく。東側はＰ区東端部よりさらに東側へ延びる。調査区内の総延長は90m、幅2.2m、深さ45cmを測る。切り合い関係からＳＤ518やＳＤ519などに後出する。大量の中世遺物が出土しており、代表的な77点（642～719）を図示した。

ＳＤ504（第183図）　長さ20m以上×幅0.7m、深さ16cmの東西溝である。切り合い関係からＳＤ508に後出し、ＳＫ525よりは先行する。埋土から中世前期を中心とした土器類（720～724、ただし724は須恵器）が出土した。なお、ＳＤ504の東側に直交するように位置するＳＤ511は、ＳＤ504とは約２m離れてあたかもＳＤ504とＳＤ511でＬ字状を呈するように存在している。

ＳＤ507（第179図）　切り合い関係からＳＤ514に後出し、ＳＤ515に先行する浅い溝であった。重複

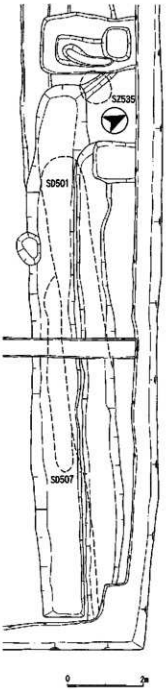




1　2.5Y５／２暗灰黄色粘質土（細粒砂を含む）
2　2.5Y５／３黄褐色シルト
3　2.5Y４／２暗灰黄色粘質土
4　2.5Y４／３オリーブ褐色極細粒砂
5　2.5Y４／１黄灰色粘質土（シルトを含む）
6　10Y５／１灰色シルト
7　2.5Y５／３黄褐色粘質土

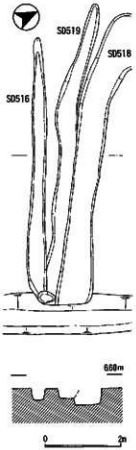
1　2.5Y４／２暗灰黄色粘質土
2　2.5Y５／２暗灰黄色極砂質土（粘質土含む）
3　2.5Y５／３黄褐色シルト（粘質土含む）
4　10YR４／２灰黄褐色粘質土（細粒砂含む）
5　10GB２／１青黒色粘質土

第178図　ＳＤ502・503・518・545実測図（全体図１：400、土層断面図１：50）

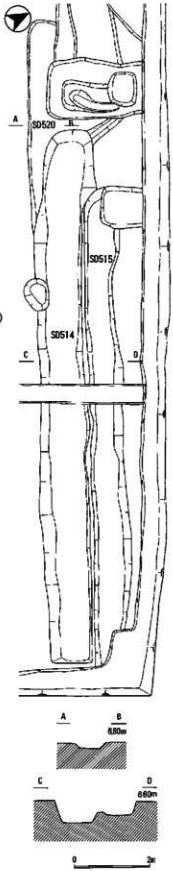


第179図　ＳＤ501・507・ＳＺ535
位置図（１：100）

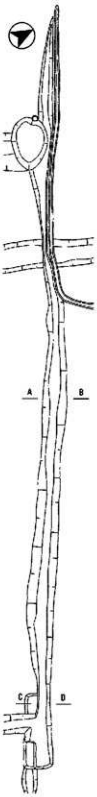
第180図　ＳＺ535遺物出土状況図（１：40）



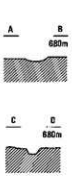
第181図　ＳＤ516・519実測図
（１：100）

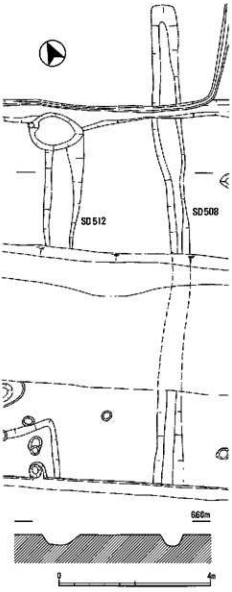


第182図　ＳＤ514・515・520
実測図（１：100）

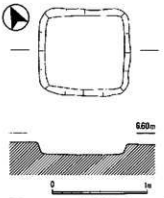


第183図　ＳＤ504実測図（１：100）

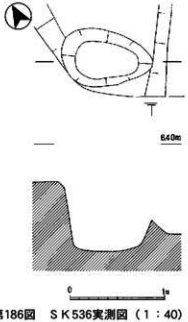




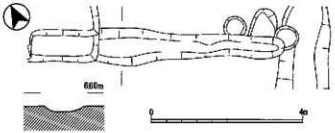
第184図　ＳＤ508・512実測図（１：100）



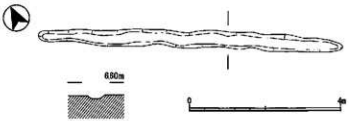
第185図　ＳＫ547実測図（１：40）



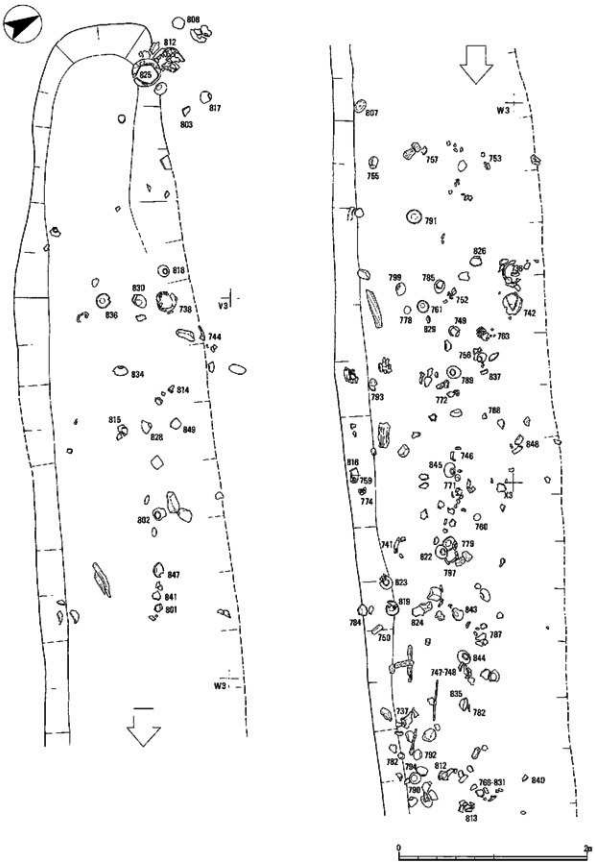
第186図　ＳＫ536実測図（１：40）



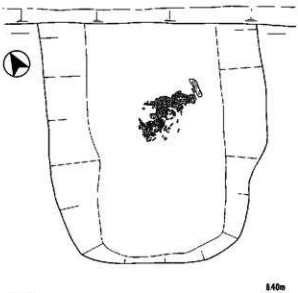
第187図　ＳＤ513実測図（１：100）

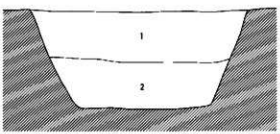


第188図　ＳＤ544実測図（１：100）



第189図　ＳＤ514遺物出土状況図（１：40）



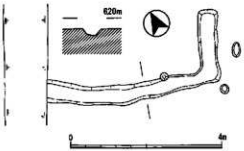


1　5Ｈ６／１青灰色粘質土
（径１～５㎜のマンガン粒を多く含む、しまり強い）
2　5Ｈ６／１青灰色粘質土
（径１～５㎜の炭化物を多く含む、しまり弱い）

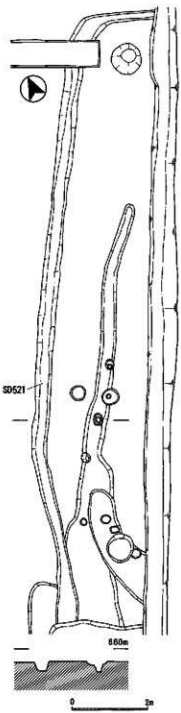
0　1m

第190図　ＳＤ517実測図（１：20）

第191図　ＳＤ517遺物出土状況図（１：８）



第192図　ＳＤ532実測図（１：100）



第193図　ＳＤ521実測図（１：100）

して存在するＳＤ514から出土遺物を峻別して取り上げたが、重複のため遺構のプラン等は明瞭でない。

ＳＤ508（第184図）　ＳＤ504に切られている南北溝で、南接するＮ区調査部分にも続いている。Ｎ区部分も含め、現況で長さ6.6m、幅0.8cm、深さ14cmを測る。埋土から緑釉陶器椀（731）が出土しており、平安時代の遺構とみられる。

ＳＫ510（第195図）　別遺構の重複のため全体形は不明だが、長さ2.1m以上×幅0.8m、深さ14cmの長方形土坑である。埋土から瓦器椀（732）や土師器鍋（733）の破片が出土した。ただし、調査区外へ延びるため、溝の可能性も否定できない。

ＳＤ512（第184図）　ＳＤ508の西側に平行して存在する幅１m、深さ26cmの溝であるが、南接するＮ区の調査では未確認である。埋土には須恵器甕（734）なども含むが、13世紀前半の山茶椀も出土しており、中世に下る遺構であろう。ＳＫ525に切られている。

ＳＤ513（第187図）　東西溝ＳＤ504東端部と南北溝ＳＤ511北端部を繋ぐように存在する長さ1.8m、幅0.4m、深さ７cmの小溝である。

ＳＤ514（第189図）　Ｏ区の東北隅に所在する幅0.7m、深さ65cmの溝で、Ｐ区の北側に所在する溝（調査時番号ＳＤ808）も同一溝の延長と推定される。両者をあわせると総延長は75m以上に及ぶ。完全な直線ではなく、僅かながら蛇行部分がある。東端（Ｐ区部分）はＳＤ804との重複のため延長部がわからないが、東側へは続いていかないためＳＤ804所在部で収束するか、あるいは北側へ屈曲している可能性がある。埋土からは、土器や瓦をはじめとする大量の遺物類（736～895）が出土している。

ＳＤ515（第182図）　切り合い関係からはＳＤ501に先行し、ＳＤ514に後出する東西溝である。重複が激しく、全体形は捉えにくいが、幅1.2m×残存長12m、深さ37cmを測る。埋土から、山茶椀類（896～898）や土師器の皿・鍋類（900～902）などが出土した。

ＳＤ516（第181図）　幅25cm～50cm、深さ43cmの南北溝である。切り合い関係からＳＤ519よりも後出する。なお、南接するＮ区では未検出である。埋土から山茶椀（903～904）が出土した。

ＳＤ517（第190・191図）　調査区端に所在するため、溝なのか土坑状のものなのかは明瞭でないが、調査段階では一応、溝に措定されており、ここでもその見解に従った。幅1.1m、深さ53cmを測る。ＳＤ514とほぼ直交し、切り合い関係ではＳＤ515に切られている。埋土からは漆器椀などの有機質遺物を含む遺物群（905～911）が出土した。網代編み物（写真図版22・55、遺物番号1272）も出土しており、個別実測図は作成できなかったが出土状況図（第191図）にて大まかな特徴を確認されたい。

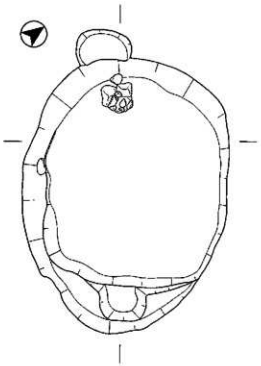
ＳＤ518・519（第178・181図）　Ｏ区東南部に位置する総延長44.4m以上を測る溝で、途中屈折してＬ字状を呈し、そのままＮ区にも連続する。切り合い関係で先行するＳＤ519がまずあり、その後、同じ位置にＳＤ518が掘り直されたと思われる。Ｌ字状溝の東西方向部分は、後出するＳＤ503よって切られているため溝幅等の情報は不明だが、ＳＤ518が屈曲して南北方向に流れる部分では幅0.8m、深さ43cmを測る。埋土から山茶椀類などの中世前期の土器類（912～920）が出土している。

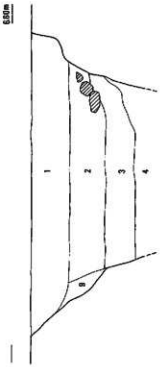
ＳＤ520（第182図）　切り合い関係ではＳＤ514を切る溝で、東側は調査区外のため不明である。幅0.8m、深さ14cmを測る。埋土から山茶椀片（932）が出土した。

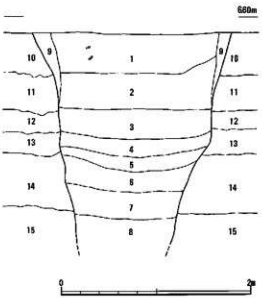
ＳＤ521（第193図）　東側は遺構の重複が多く不明だが、西側がＬ字状に屈折する幅0.4mの細い溝で、深さは35cmを測る。埋土から山茶椀の底部片（933）が出土した。

ＳＫ525（第202図）　切り合い関係からＳＤ512やＳＤ504よりも後出する土坑である。長さ1.4m、幅１mの楕円形を呈し、深さ30cmを測る。埋土から山茶椀（934）が出土した。

ＳＫ529（第194図）　長さ３m、幅2.2mの楕円形土坑で、深さ２m以上を測る。一見井戸を思わせるが、埋土には炭化物を多く含んでおり、また曲物等の出土もないことから井戸とするには疑問が残る。また、埋土からではないが、周辺部からは鉄滓小片など金属器加工に関わる遺物の痕跡が認められる。こうしたことから、やや根拠には弱い部分があるが、本遺構が金属器の鋳造に関わったものであった可能性が指摘される。なお、遺構埋土からは、山

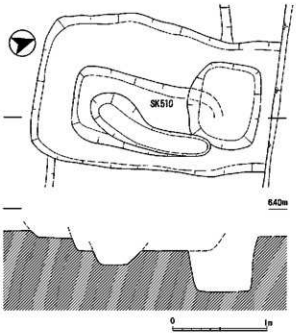




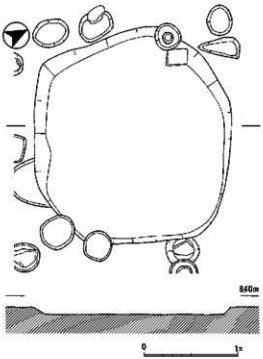


1　7.5YR５／２灰褐色砂質土
（径１～２cmのマンガンブロックを多く含む）
2　7.5YR４／２灰褐色砂質土
（径１～３cmのマンガンブロックを多く含む）
3　５PB６／１青灰色砂質土
（径１～５cmのマンガンブロックを多く含む。しまりかなり強い）
4　５B６／１青灰色砂質土
（３層より砂粒多く混じる。しまり弱い）
5　５B５／１青灰色砂質土
（黒色粘土を斑状に含む）
6　５B５／１青灰色砂質土
（５層より砂粒や黒色粘土を多く含む）
7　５B５／１青灰色砂質土
8　５B４／１暗青灰色砂質土
9　５PB６／１青灰色土（脆く容易に崩れる）
10　7.5YR６／４にぶい橙色土
（径１～２cmのマンガンブロックを多く含む）
11　7.5YR６／４にぶい橙色土（やや砂質）
12　５B５／１青灰色砂質土
13　５B４／１青灰色砂質土
14　５B５／１青灰色砂質土（水分を多く含む）
15　５B４／１青灰色砂質土（水分を多く含む）

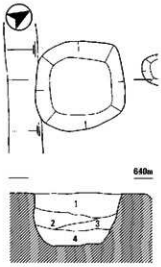
第194図　ＳＫ529実測図（１：40）



第195図　ＳＫ510実測図（１：40）



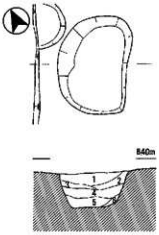
第198図　ＳＫ534実測図（１：40）



1　10Ｒ４／１暗赤灰色土
（径１㎜以下のマンガン粒を多く含む）
2　10Ｒ４／１暗赤灰色土
（茶色土を斑状に少量含む。炭化物を少量含む）
3　10Ｒ３／２暗赤褐色土
（茶色土を斑状に含む。炭化物を少量含む）
4　10Ｒ２／１赤黒色粘質土
（灰色粘土を少量含む）

0　1m

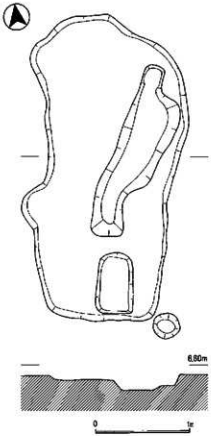
第196図　ＳＫ531実測図
（１：40）



1　10Ｒ４／１暗赤灰色土
（径１㎝のマンガンブロックを多く含む）
2　10Ｒ４／１暗赤灰色土
3　10Ｒ４／１暗赤灰色粘質土
（径５㎜のマンガンブロックを多く含む）
4　10Ｒ３／２暗赤褐色土
（径１㎝のマンガンブロックと径５㎝の灰色粘土を少量含む）
5　10Ｒ２／１赤黒色砂質土
6　10Ｒ２／１赤黒色土
（径１㎜以下のシルトブロックを多く含む）

0　1m

第197図　ＳＫ533実測図
（１：40）



第199図　ＳＫ541実測図（１：40）

茶椀や陶器、土師器類などの中世前期の土器群（935～948）が出土した。

ＳＫ531（第196図）　直径0.9mの円形土坑で、深さ62cmを測る。埋土から山茶椀（950～953）や土師器小皿（954～958）が出土した。

ＳＤ532（第192図）　ＳＫ529の西隣に所在する幅0.5m、深さ23cmの溝である。西側は途切れていて不明だが、東側はＬ字状に屈折し、現存部の総延長6.5mを測る。埋土には古墳時代のＳ字甕脚台部（967）なども混じるが、基本的には中世の土器類（963～966）が出土している

ＳＫ533（第197図）　長さ１m、幅0.8mの略楕円形土坑で、深さ38cmを測る。埋土から山茶椀（959～961）や土師器鍋小片（962）が出土した。

ＳＫ534（第198図）　長径2.2m×短径2.1m、深さ11cmの土坑である。ＳＢ549の東南部に所在するため、ＳＢ549に伴ういわゆる「南東隅土坑」の可能性もあるが、調査区の制約のためＳＢ549の南への広がりが不明で、ここでは可能性の指摘にとどめる。埋土から、山茶椀など中世前期の遺物が出土した。

ＳＺ535（第179・180図）　長さ１m、幅80cm程度の範囲で土器が集中して存在しており、土器集中として把握した。明瞭な掘り込みは確認できなかったので、遺構としての安定性には欠ける。山茶椀など中世前期を中心とする土器（972～992）が出土している。

ＳＫ536（第186図）　切り合い関係ではＳＤ516・518・519を切って存在する円形の土坑である。調査区の端で確認されたため全体形は不明だが、径1m内外と思われる。埋土から墨書を含む山茶椀（993～996）が出土した。

ＳＸ537（第200図）　深さ26cm・直径80cmの円形土坑の掘形に底部を穿孔した常滑大甕（1003）を据えた遺構である。大甕の内部から、木質部の残った小刀（998）や土師器小皿・皿類（999～1002）が出土しており、中世の甕棺墓と考えられる。

ＳＥ538（第201図）　直径2.2m、深さ1.3m以上の円形井戸である。埋土から曲物底板（997）が出土した。

ＳＲ539　調査区の東端でごく一端を押さえたが、ほとんどＳＤ502と重複しているため詳細は不明である。埋土からは、古墳～奈良時代の須恵器から黒色土器、土師器小皿や鍋などが出土したが、こうした状況はＳＤ502の所見と同じで、ＳＤ502のものが混入している可能性も否定できない。一応、調査時の遺物取り上げで分別されていたため、その所見を尊重した。なお、遺構の個別図はない。

ＳＸ540（第176図）　長さ1.9m、幅60cmの長方形土坑で、埋土に焼骨とみられる骨片が混ざっていたことから土坑墓と考えられた。

ＳＫ541（第199図）　西側調査区で出土したもので、長さ3.3m、幅1.3mの不定長方形の土坑で、深さ19cmを測る。埋土からは弥生土器（1057）が出土しているが、底部片であり、これのみで遺構の時期決定をしてよいか疑問が残る。

ＳＤ544（第188図）　長さ９m、幅0.4m、深さ９cmを測る東西方向の小溝である。埋土から土師器小皿（1058）が出土した。

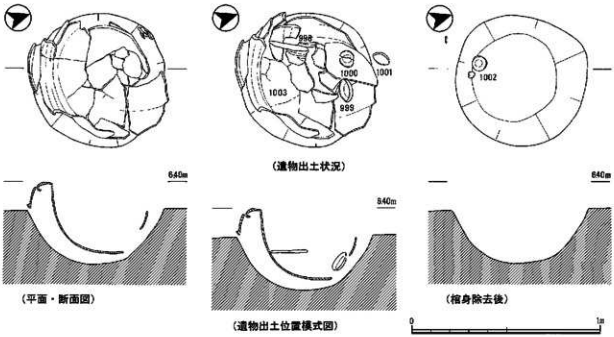
ＳＤ545（第178図）　２度クランク状に屈折する幅２m、深さ33cmの溝で、調査区内の総延長43mを測る。切り合い関係からＳＤ503を切って存在する。埋土から山茶椀や緑釉陶器、信楽擂鉢、瓦などの遺物（1059～1069）が出土した。

ＳＫ547（第185図）　一辺１mの正方形プランの土坑で、深さ12cmを測る。埋土からロクロ土師器の底部片が出土している。

ＳＢ549（第177図）　南側が調査区外となるため全体形は不明だが、桁行５間（２m）×梁行２間以上の総柱建物である。柱間寸法はやや不等間で、柱掘形は径20cm～30cmの円形を呈する。建物方向はＮ21度Ｅである。ＳＫ534は本建物に伴う「南東隅土坑」である可能性があるが、梁行（南北軸）が３間以上あった場合、建物の「南東」部にはならず、東側中央に所在することになる。なお、ＳＢ549周辺には、ＳＢ549の柱穴と同様のピットが他にも存在しており、確定しきれなかったがこの地点には他にも掘立柱建物が存在していたものと推定される。

Ｆ５pit１（第29図）　掘り込みはほとんど確認できないが、ほぼ完形の須恵器杯身（1071）が出土している。

Ｑ３pit１（第30図）　ＳＤ502に切られている溝である。埋土から山茶椀片（1072）が出土した。



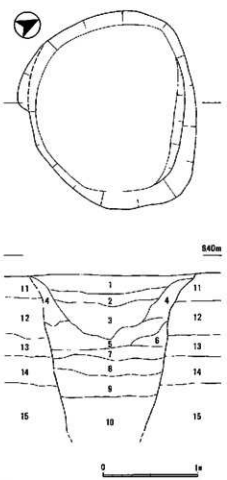
（遺物出土状況）

（平面・断面図）

（遺物出土位置模式図）

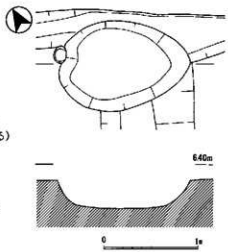
（棺身除去後）

第200図　ＳＸ537実測図（１：20）

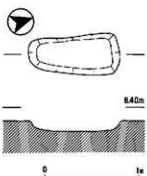


1　10ＹＲ４／３にぶい黄褐色粘質土（茶褐色土が斑状に混じる）
2　10ＹＲ６／１褐灰色土（１層よりも茶褐色土が多く混じる）
3　10ＹＲ４／２灰黄褐色土（灰色粘土が斑状に混じる）
4　10ＹＲ５／１褐灰色粘質土（砂粒多く含む。しまり弱い）
5　10ＹＲ３／３暗褐色土（灰色粘土が斑状に混じる。砂粒を少量含む）
6　10ＹＲ３／２黒褐色砂質土（５層より砂粒多く含む）
7　５Ｂ６／１青灰色砂質土
8　５Ｂ５／１青灰色砂質土（黒色土を斑状に含む）
9　５Ｂ５／１青灰色砂質土（８層より砂粒多く含む）
10　５Ｂ５／１青灰色砂質土
11　7.5ＹＲ６／４にぶい橙色土（径１～５㎜のマンガンブロックを多く含む）
12　7.5ＹＲ６／４にぶい橙色砂質土（11層より砂粒多く含む）
13　５Ｂ５／１青灰色砂質土
14　５Ｂ５／１青灰色砂質土（13層より粘性低い）
15　５Ｂ４／１暗青灰色土（青灰色粘土と黒色土を斑状に含む）

第201図　ＳＥ538実測図（１：40）



第202図　ＳＫ525実測図（１：40）



第203図　ＳＫ530実測図（１：40）

Ｌ５pit１（第30図）　ＳＢ549と同地点に存在する直径30cmの円形ピットである。埋土から山茶椀片（1073）が出土した。

Ｋ６pit１（第30図）　これもＳＢ549と同地点に所在する長径40cm×短径25cmの円形ピットである。埋土から土師器小皿（1074）が出土した。

４　出土遺物

ａ　遺構出土遺物

ＳＤ501出土遺物（607～618）　陶器捏鉢(607)、山茶椀（608～612）、黒色土器椀（613）、土師器皿（614）、土師器羽釜（615）、土師器鍋（616～617）、瓦（618）がある。鍋はともに南伊勢系、山茶椀は知多（608・611）、瀬戸（609～610）、渥美（612）と産地の統一はない。

ＳＤ502出土遺物（619～641）　灰釉陶器椀（619～620）、山茶椀（621～628）、陶器小椀（629）、白磁椀（630）、緑釉陶器椀（631）、土師器小皿（632）、陶器擂鉢（633）、土師器羽釜（634～635）、土師器鍋（清郷型、636）、黒色土器椀（637）、須恵器杯蓋（638）、須恵器甕（639～640）、磨石？（641）がある。621と622には底部外面に「大」の墨書が、623・624にも判読不明ながら底部外面に墨書がある。陶器擂鉢633は信楽焼で、筋目は3条と少なく、口縁端部も丸く収める古いタイプで、15世紀初頃前後の所産であろう。黒色土器椀637は、Ａ類である。

ＳＤ503出土遺物（642～719）　調査年次をまたぐ総延長90mにものぼる溝であり、区域毎（調査年次を反映）に出土遺物を確認しておく。

642～644は、ＳＤ503のＭ区部分からの出土である。陶器甕（642）、山茶椀（643～644）があり、陶器甕は常滑である。

645～663は、Ｏ区西側部分からの出土である。緑釉陶器椀（645～646）、灰釉陶器椀（647）、山茶椀（648～655）、須恵器大甕（656）、土師器甕（657～658）、土師器鍋（659）、土師器小皿（660）、陶器鉢（661）、須恵器壺もしくは杯底部（662）、白磁椀（663）を図示した。中世前期を中心としつつも、古代のものも含んでいる。

664～669は、Ｏ区東側部分からの出土である。山茶椀（664～666）、陶器小形脚付皿（667）、陶器鉢（668）、土錘（669）を図示した。山茶椀664は、底部外面にやや歪な「○」墨書がある。667は、脚の上に細長い変形の低平な皿を載せたものである。皿部上には焼成時の融着による別土器の破片がある。

670～690は、Ｐ区のなかでも上層・下層の分別なく取り上げたものを図示した。灰釉陶器椀（670～671）、土師器椀（672）、山茶椀（673～677・679～680）、陶器小皿（678・681）、土師器小皿（682）、陶器鉢（683）、陶器大甕（684）、瓦器椀（685）、土師器鍋（686）、軒丸瓦（687）、軒平瓦（688）、須恵器壺（689）、須恵器甑（690）がある。須恵器甑は古墳時代、土師器椀672や須恵器壺689は古代の所産と思われるが、全体としては中世前期の遺物が多い。山茶椀676と677、陶器小皿678は底部外面に墨書がある。また、山茶椀680は内面に炭化物が付着しており、灯明皿として使用された可能性がある。山茶椀は全体に瀬戸・猿投・知多系が多い。陶器大甕684は常滑であろう。

691～706は、Ｐ区部分のＳＤ503上層から出土したものを図示した。須恵器鉢（691）、須恵器器台？（692）、陶器小皿（693）、陶器椀（694）、土師器小皿（695）、土師器皿（696～698）、土師器鍋（699～700）、軒平瓦（701）、丸瓦（702）、平瓦（703～705）、方形有孔薄板材（706）を図示した。須恵器鉢691は、篠窯産の須恵器の可能性があり、11世紀代の所産と思われる。693はいわゆる山皿で、底部外面に墨書痕跡をもつ。694は施釉された古瀬戸平椀で、内面にトチン跡が残る。土師器皿類はいずれも中北勢系、鍋は南伊勢系である。

707～719は、Ｐ区部分のＳＤ503下層から出土した遺物である。土器では灰釉陶器椀（707）、山茶椀（708～710）、土師器小皿（711～712）、陶器椀の加工円盤（714）を、木製品では組合せ部材（713）、漆器椀（715～716）、板材（717）を、石製品では五輪塔（718～719）を図示した。灰釉陶器椀707は、２次被熱で変色したもので、この707と山茶椀はいずれも底部に墨書のあるものを図示した。708と709は知多・猿投系、710は猿投・瀬戸系である。瓦のうち、705は側面に水返しが付く。

ＳＤ504出土遺物（720～724）　土師器鍋(720)、ロクロ土師器椀（721）、山茶椀（722～723）、須

恵器杯蓋（724）がある。鍋は南伊勢系で13世紀頃の所産と思われる。724は混入であろう。

ＳＤ507出土遺物（725～730）　土師器皿（725～727）、土師器小皿（728）、山茶椀（729）、鉄製利器柄（730）がある。皿類は南伊勢系である。

ＳＤ508出土遺物（731）　緑釉陶器椀である。焼成は陶質である。

ＳＫ510出土遺物（732～733）　瓦器椀（732）と土師器鍋（733）がある。いずれも小片である。

ＳＤ512出土遺物（734）　須恵器甕の口縁部片である。

ＳＤ513出土遺物（735）　山茶椀である。知多・猿投系で、内面に煤が付着する。

ＳＤ514出土遺物（736～895）　大量の遺物が出土したので、大きく遺構の西側（７次調査分）と東側（８次調査分）に分けて報告する。

西側では、土師器鍋（736～744）、瓦質脚付土鍋（745）、土師器皿（746～759）、土師器小皿（760～775）、土師器小形鍋（776）、ロクロ土師器皿（777）、陶器小皿（778～782）、山茶椀（783～849）、陶器練鉢（850）、薄板材（851～852）を図示した。土師器の鍋・皿類はいずれも南伊勢系で、小形鍋も南伊勢系であろう。山茶椀類は墨書のものが非常に多いのが特徴で、「○」「十」「×」「上」「万」などの単純なものが多い。このうち784は、「○」を側面に、「十」ないし「×」を底面に墨書している。また、練鉢850は常滑である。

東側では、土師器羽釜（853～855）、土師器鍋（856～861）、土師器皿（862～866）、灰釉陶器（867）、山茶椀（868～876）、陶器小椀（877）、陶器小皿（878～879）、須恵器高杯（880）、陶器擂鉢（881～882）、軒丸瓦（883～884）、軒平瓦（885～887）、平瓦（888～890）、丸瓦（891～892）、五輪塔（893）、方形有孔板材（894）、柄付き角棒材（895）を図示した。羽釜は中北勢系、鍋は南伊勢系（856は南伊勢系Ｃ類、857は南伊勢系鍋２ｂ類、858～861は南伊勢系４ｃ類）である。ただし、こちらの土師器皿類は、少なくとも図示したものは中北勢系である。陶器擂鉢のうち、881は鉄釉がかかった片口、882は同じく片口の信楽である。894は、箱状容器の底部であろう。895は本体の断面が方形、出柄部分の断面が円形で、円形出柄部分に別材を挿入し、回転させて使用したものであろう。

ＳＤ515出土遺物（896～902）　山茶椀（896～898）、陶器鉢（899）、土師器皿（900）、土師器鍋（901～902）である。山茶椀896は、底部外面に「十」の墨書がある。陶器鉢は瀬戸で、山茶椀質である。

ＳＤ516出土遺物（903～904）　ともに山茶椀で、904は内面に煤が付着している。

ＳＤ517出土遺物（905～911・1272）　土器・土製品では、陶器壺（905）、山茶椀（906）、土師器鍋（907）、木製品には漆器椀（909～911）、網代籠状品（1272、写真提示のみ）がある。陶器壺は常滑、山茶椀は瀬戸、土師器鍋は南伊勢系である。また、漆器椀は見込み及び側面に絵が描かれている。網代の籠状品1272は、残りが悪く、写真図版のみの提示となったが、出土状況の写真に拠る限り、いわゆる「箕」状の製品だった可能性がある。

ＳＤ518出土遺物（912～920）　陶器小皿（912～913）、山茶椀（914～918）、土師器皿（919）、土師器羽釜（920）がある。912の底部外面には、「T」字形の墨書がある。

ＳＤ519出土遺物（921～931）　山茶椀（921～928）、陶器小皿（929）、土師器皿（930）と小皿（931）がある。921の底部外面には墨書が残る。山茶椀の産地は、923の渥美を含め、各系統が混在している。

ＳＤ520出土遺物（932）　知多系の山茶椀の口縁部片である。

ＳＤ521出土遺物（933）　知多系の山茶椀の底部である。

ＳＫ525出土遺物（934）　知多系の山茶椀である。

ＳＫ529出土遺物（935～948）　山茶椀（935～936）、陶器小皿（937）、土師器台付小形鉢（938）、土師器鍋（939）、土師器小皿（940）、土師器皿（941～943）、「下層出土」として山茶椀（944～946）、陶器大甕（947）、陶器練鉢（948）を図示した。一応、「下層出土」のものはレイアウト上分けたが、出土遺物を見る限り明瞭な時期差は認めがたい。土師器のうち、小皿は中北勢系、鍋と皿は南伊勢系である。陶器では、山茶椀・小皿の系統は産地が混在、大甕は常滑、練鉢は瀬戸と思われる。936の底部には墨書がみられる。

ＳＫ530出土遺物（949）　山茶椀の底部である。

ＳＫ531出土遺物（950～958）　山茶椀（950～953）、土師器小皿（954～955）と皿（956～958）がある。皿類はいずれも南伊勢系である。

ＳＫ533出土遺物（959～962）　山茶椀（959～961）と土師器鍋（962）がある。959と960には墨書がみられる。962は南伊勢系である。

ＳＤ532出土遺物（963～967）　陶器甕（963～964）、山茶椀（965～966）、土師器Ｓ字甕（967）がある。いずれも小片で、Ｓ字甕は混入であろう。963は常滑、965は猿投・知多系で内面に煤が付着する。966は瀬戸である。

ＳＫ534出土遺物（968～971）　山茶椀（968～969）、陶器小皿（970）、土師器鍋（971）がある。

ＳＺ535出土遺物（972～992）　山茶椀（972～984）、陶器小皿（985）、青磁椀（986）、白磁椀（987）、土師器鍋（988～989）、土師器羽釜（990）、土師器小皿（991～992）がある。山茶椀のうち、972～976は墨書がある。また、977・978・981は瀬戸系の未使用、979は瀬戸・猿投系の未使用、982は猿投系でこれも未使用の可能性がある。土師器鍋と小皿は南伊勢系、羽釜は中北勢系である。

ＳＫ536出土遺物（993～996）　いずれも山茶椀である。993は側面に「○」、底部外面に「×」の墨書があり、ＳＤ514出土の784・785などと共通する。996は内面に煤が付着する。

ＳＥ538出土遺物（997）　円形の薄板で、曲物の底板であろう。

ＳＸ537出土遺物（998～1003）　鉄製小刀（998）、土師器皿（999）、土師器小皿（1000～1002）、それに陶器大甕（1003）がある。小刀は、鞘の漆皮膜が残存し、また下地に使われた布状の物質も確認できたため、あえて錆を落とさずに保存処理を実施している。そのため、刀身本体部なりの原形状を知るのは難しい。皿類は、いずれも南伊勢系、大甕は常滑である。

ＳＲ539出土遺物（1004～1056）　出土遺物は多く、須恵器杯蓋（1004）、須恵器杯身（1005～1008）、黒色土器椀（1009～1011）、陶器小皿（1012・1048～1049）、ロクロ土師器小皿（1013）、土師器小皿（1014～1016）、土師器鍋（1017～1021）、土師器羽釜（1022～1023）、山茶椀（1024～1047）、陶器甕（1050）、青磁椀（1051～1052）、陶器練鉢（1053）、砥石（1054）、土師質の土製支脚（1055）、土錘（1056）を図示した。中世を中心とするが、古墳時代のものも混じる。須恵器杯身は、古墳時代の1005と古代に入る1006～1008がある。土師器小皿は、1014と1016が南伊勢系、1015が中北勢系である。鍋はいずれも南伊勢系である。山茶椀は、各産地のものが混在していて、墨書のものも多い。1050の陶器甕は常滑である。

ＳＫ541出土遺物（1057）　弥生土器壷の底部である。

ＳＤ544出土遺物（1058）　土師器小皿である。いわゆる京都系の「て」の字状口縁小皿（以下「て」の字小皿）である。

ＳＤ545出土遺物（1059～1069）　陶器擂鉢（1059）、緑釉陶器椀（1060）、山茶椀（1061～1066）、陶器壷（1067～1068）、丸瓦（1069）がある。擂鉢は信楽で、口縁端部のヨコナデは弱い。陶器壷のうち、1067は瀬戸美濃系で、玉縁口縁をもつ。

ＳＫ547出土遺物（1070）　ロクロ土師器の杯皿類である。

Ｆ５pit１出土遺物（1071）　古墳時代タイプの須恵器杯身である。

Ｑ３pit１出土遺物（1072）　知多・猿投系の山茶椀底部である。

Ｌ５pit１出土遺物（1073）　知多・猿投系の山茶椀である。

Ｋ６pit１出土遺物（1074）　土師器小皿である。

ｂ　Ｏ区包含層等出土遺物

古墳時代の土器（1075～1076）　土師器高杯（1075）と須恵器甑（1076）がある。高杯は、脚部に透孔をもってその上部に直線文を入れる東海系の有稜高杯である。

古代の土器（1077～1082・1096）　須恵器杯蓋（1077）、須恵器杯身（1078～1079）、須恵器鉢（1080）、須恵器長頸壷（1081）、緑釉陶器椀（1082）、それに器種不明の須恵器片（1096）がある。緑釉陶器は、陶質である。須恵器片1096は、外面に墨書をもつ。

中世の土器（1083～1095・1097～1138・1140

～1142）　山茶椀（1083～1095・1097～1109）、陶器小椀（1110～1111）、陶器小皿（1112～1117）、陶器鉢（1118～1120）、土師器鍋（1121～1124）、土師器羽釜（1125）、土師器清郷型鍋（1126）、ロクロ土師器椀（1127）、ロクロ土師器小皿（1128）、土師器小皿（1129～1133）、陶器大甕（1134～1136）、陶器甕（1137）、白磁椀（1138・1140）、青磁皿（1141）、陶器縁釉小皿（1142）、青磁椀（1144）がある。山茶椀のうち、ともに墨書のある1086と1093は焼成や質が酷似しており、同一個体の可能性がある。1097の内面には炭化物が付着している。土師器小皿1129の口縁内側には油脂分が付着している。また、1133は京都系の「て」の字小皿である。陶器大甕は常滑で、1135はやや生焼け焼成である。青磁椀1144には、花文が印刻されている。

近世の土器（1139・1143・1145）　陶器椀（1139）、陶器皿（1143）、陶器鉢（1145）がある。陶器椀は天目茶椀、陶器皿は灯明皿である。

その他（1146～1156）　軒丸瓦（1146）、平瓦（1147）・砥石（1148～1150）、泥岩製の砥石（1151）、土玉（1152）、土錘（1153～1154）、銅銭（1155～1156）がある。銅銭は、1155が皇宋通宝（初鋳年1253）、1156が至道元宝である。

第9節　P区の調査

1　概要

O区に東接し、替田遺跡として最も東側に位置する調査区である。遺構密度は全体に疎らになっており、集落の縁辺部の様相を呈している。

2　小地区設定方法

隣接するO区を受けての調査となったが、小地区の設定はO区とは連動せず、P区独自に行っている。すなわち、本調査区も国土座標には則らずに調査区の形状に合わせた小地区設定を行っており、具体的には三重県の調査区設定における基本原則に従い、東西軸は西から東へアルファベットで、南北軸は北から南へ数字で表示している（第12図）。

3　遺構

本調査区を東西に縦断する溝のうち、西接するO区にも連続する遺構（SD502・503・514）は既に報告した。古代末から中世の遺構が主体を占めるが、古墳時代から中世の遺構も少量確認でき、また中世遺構に混入するかたちで弥生土器等が出土している例も多い。以下、代表的な遺構について述べる。

a　弥生時代～古墳時代の遺構

SD812（第210図）　SD502やSD503、SD807などに重複される細長い南北溝で、幅0.7m、長さ13.4m以上、深さ14cmを測る。南側は、SD807に切られた部分で収束しており、一見すると同時存在のセットのようにも見えるが、現地調査の所見では切り合い関係（SD812→SD807）として捉えられている。埋土から、土師器高杯片（1185）が出土しており、古墳時代の所産と推定される。

SD816（第208図）　SD503に切られる長さ27m以上、幅2.2m、深さ19cmの溝であるが、西側への延長部分であるO区（平成15年度調査区）では未確認で、途中で途切れているものと思われる。埋土からは、弥生時代から古墳時代の土器が出土しており、P区としては古い時期の遺構と思われる。

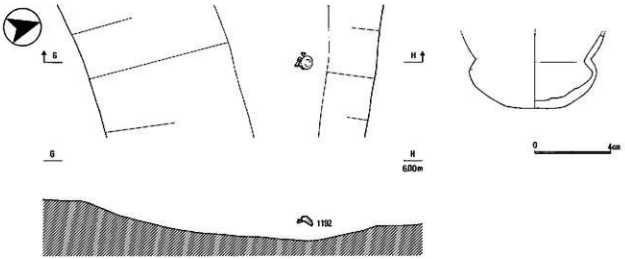
SK819（第209図）　中央部をSD816によって切られているが、長径4.4m×短径1.5m、深さ10cmの楕円形の土坑である。埋土から古墳時代前期の土器（1200～1202）が出土しており、古墳時代の所産である。このあたりまで来ると、弥生から古墳時代の遺構は疎らとなるが、全くないわけではないことが確認できる。

b　古代～中世の遺構

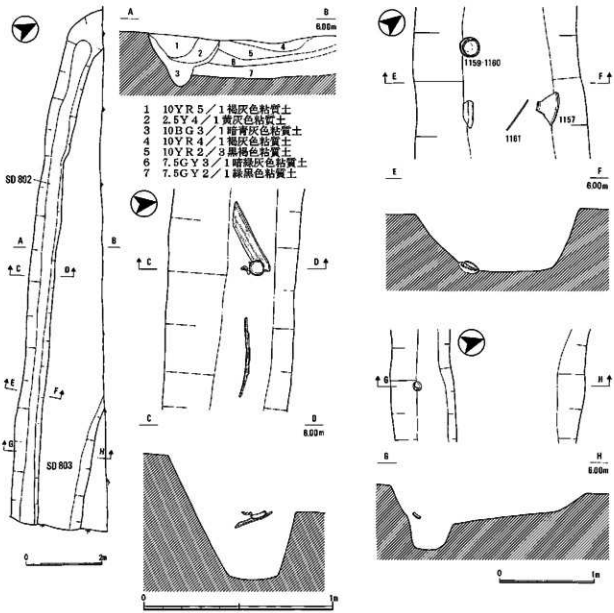
SD802（第205図）　調査区東北隅のため一部を検出しただけであるが、後述のSD803埋没後に掘削された溝で、幅40cm、深さ25cmを測る。埋土には、木片や土器を含んでおり、溝床面から土師器小皿が重なり合って出土した部分もある（第205図）。中近世の遺物が出土しており、代表的なものを図示した（1157～1161）。

SD803（第205図）　前述のSD802を切って作られた溝で、幅1.6m以上、深さ29cmを測る。埋土からは、下駄（1171）を含む有機質遺物を含む室町時代の遺物が出土した（1162～1172）。

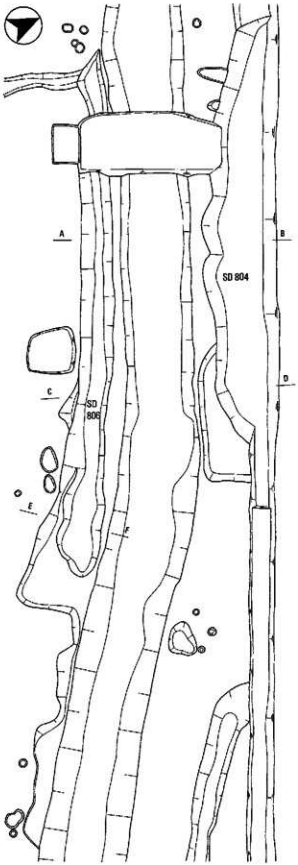
SD804（第206図）　調査区の北壁に存在する



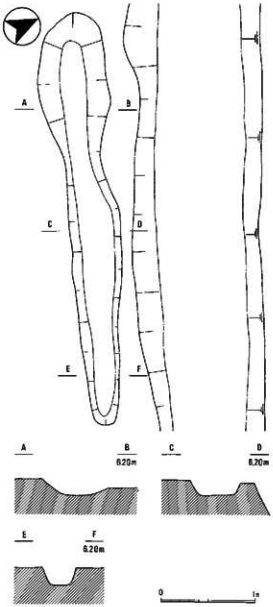
第204図　ＳＤ816遺物出土状況図（１：20）



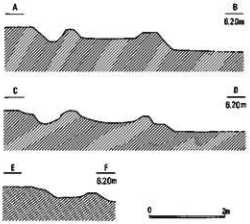
第205図　ＳＤ802・803実測図（１：20、ただしｇ－ｈ間のみ１：40）

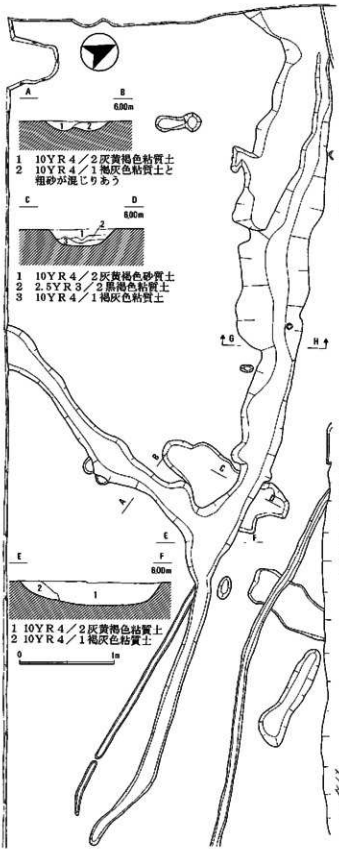


第206図　ＳＤ804・806実測図（１：100）

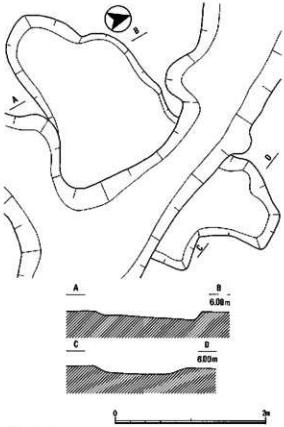


第207図　ＳＤ814実測図（１：40）

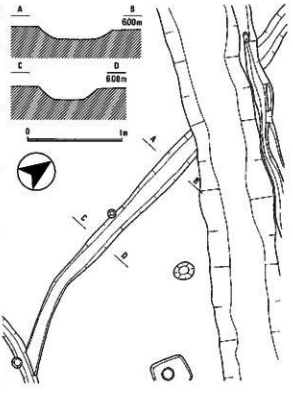




第208図　ＳＤ816実測図（平面図１：120、土層図１：40）



第209図　ＳＫ819実測図（１：50）



第210図　ＳＤ812実測図
（平面図１：120、土層図１：40）

ため、遺構南端の一部を検出しただけである。深さ50㎝の浅い落ち込み状の部分が緩やかな弧状を描いており、調査時点では溝と考えたが土坑状のものかもしれない。墨書山茶椀（1174～1175）のほか、7世紀代の須恵器甕（1173）も混じる。

ＳＤ806（第206図）　ＳＤ503によって重複されているため、ごく一部が確認できただけの東西溝で、幅1.8m以上、長さ21m以上、深さ36㎝を測る。埋土から古代末の遺物が出土している（1181～1184）。

ＳＤ814（第207図）　ＳＤ503とＳＤ514に挟まって存在する長さ4.4m、幅0.7m、深さ20㎝の小溝である。性格は明瞭でないが、埋土から土師器小皿（1186）が出土した。

4　出土遺物

a　弥生～古墳時代遺構出土の遺物

ＳＤ812出土遺物（1185）　脚裾部を欠損するが、古墳時代の土師器高杯の脚部である。小片のため詳細は分からない。

ＳＤ816出土遺物（1187～1199）　弥生土器高杯（1187～1190）、土師器高杯（1191）・小形丸底鉢（1192）・甕脚台部（1193～1194）・甕（1195～1197）、須恵器杯身（1198～1199）がある。古墳時代前期の土器を中心に、その前後の時代を含む。

ＳＫ819出土遺物（1200～1202）　古墳時代前期のＳ字甕（1200）と高杯（1201～1202）がある。Ｓ字甕はＣ類、高杯はいわゆる有稜高杯である。

b　古代～中世遺構出土の遺物

ＳＤ802出土遺物（1157～1161）　土器には常滑練鉢（1157）・弥生土器壺（1158）・土師器小皿（1159～1160）、木製品には棒状木製品（1161）がある。常滑練鉢は煤が付着しており、煮沸具として用いられた可能性がある。また、土師器小皿はいずれも南伊勢系である。

ＳＤ803出土遺物（1162～1172）　土器には山茶椀（1162）・土師器皿（1163～1165）・鍋（1166～1168）・茶釜（1169）・常滑の壺（1170）、木製品では下駄（1171）と薄板（1172）がある。山茶椀は渥美系、土師器皿と鍋は南伊勢系で、茶釜は中北勢系の可能性がある。下駄は、鼻緒孔が片側に寄らず中央部に位置するもので、薄板には刃物のあたり状の痕跡が全面に残る。

ＳＤ804出土遺物（1173～1180）　土器では須恵器甕（1173）・山茶椀（1174～1175）、木製品では薄板（1176）・栓ないしは楔状木製品（1177）・部材片もしくは残材（1178～1180）がある。山茶椀はいずれも渥美系で底部外面に墨書があり、1174は略押状の記号、1175は「○」と記されている。

ＳＤ806出土遺物（1181～1184）　灰釉陶器の壺（1181）と椀（1182）・土師器小皿（1183）とロクロ土師器台付皿（1184）がある。土師器小皿は11世紀前半頃の所産と思われ、灰釉陶器も含め全体に古代末の遺物で占められる。

ＳＤ814出土遺物（1186）　土師器皿である。南伊勢系で、器壁が極めて薄い。

c　Ｐ区包含層等出土遺物（1203～1238）

石器では石鏃（1203）、弥生土器には高杯（1204）、古墳時代土師器では高杯（1205～1206）・甕（1207～1208）・大形鉢もしくは把手付鍋（1217）、古墳時代須恵器では杯蓋（1209）・杯身（1210～1213）・横瓶（1214）・有蓋高杯蓋（1215）、古代から中世の遺物では土師器甕（1216）・灰釉陶器椀（1218～1219）・山茶椀（1220～1226）・陶器小皿（1227～1228）・ロクロ土師器椀（1229～1230）・清郷型鍋（1231）・土師器小皿（1232～1234）、石製品では五輪塔（1236～1237）、それに鬼瓦（1238）を図示した。

1207～1208はともにＳ字甕で、1207はＢ類である。灰釉陶器・山茶椀・陶器小皿は、瀬戸・猿投系が1218～1219・1221・1225～1227、瀬戸系が1222～1224、渥美系が1220、知多・猿投系が1228である。1224～1226の底部外面には墨書が残る。1224は「十」、1225と1226には記号がある。図示した土師器小皿は、いずれも中北勢系のいわゆる「て」の字小皿である。五輪塔は、1236が一石五輪塔、1237が組合せ式である。（穂積）

報告書遺構番号	報告地区	調査時遺構情報				時期	長さ	幅	深さ	備　考
		調査年次	調査地区	小地区	遺構		(m)	(m)	(cm)	
SR601	J	5次	J	M2～P2他	SR南	弥生	11以上	2.5	12	F区続き
SR606	J	5次	J	L1～Q1	SR北	弥生	20以上	2.5	17	F区続き
SR607	J	5次	J	L2～P2他	SR中	弥生	18以上	2.5	33	F区続き
SR609	J	5次	J	M2～R4他		弥生	24以上	4	42	
SA631	J	4次	J	F区P5～07		古墳	13.1	9以上	70	F区続き
SB624	J	5+4次	J	F区L5～N6		古墳	6.6	2.3	29	F区で報告済み N22° E 東西棟
SK101	J	5次	J	N3	SK1	－	1.3	1.2	6	
SK102	J	5次	J	O2	SK2	－	1.3	0.9	35	
SK103	J	5次	J	N2	SK3	古墳	1.4	1.1	42	
SK104	J	5次	J	P2	SK4	－	1.2	0.6	15	
SE105	J	5次	J	O3	SK5	古墳	3.1	3.1	82	
SE106	J	5次	J	V5	SK6	平安中～後期?	2.5	2.1	400以上	
SK107	J	5次	J	V6	SK7	－	0.6以上	0.4以上	4	
SK108	J	5次	J	V7	SK8	－	1.2	1	7	
SK109	J	5次	J	U5	SK9	－	1.1	0.4	14	
SK110	J	5次	J	U6	SK10	－	2.5	1.9	7	
SK111	J	5次	J	V6	SK11	－	1.2	0.5	14	
SE112	J	5次	J	S4	SK12	－	2.5	2.2	100	
SK113	J	5次	J	S4	SK13	弥生	0.9	0.6	20	
SK705	J	5次	J	R7～R8他	SK14	－	2.2以上	0.7	7	G区続き
SK114	J	5次	J	R7・R8	SK15	古代～中世	2.9	1.4	12	
SX115	J	5次	J	U4	SD1	弥生	3.2	0.8	15	
				T4	SD8	弥生	3.8	0.8	10	
SD116	J	5次	J	T6・U7・V7	SD2	弥生	9以上	1.4	40	
SD117	J	5次	J	V6	SD3	弥生	20	2.5	50	
SD118	J	5次	J	T6・U7・V7	SD4	古墳	21.5	0.5	50	
SX119	J	5次	J	V4	SD5	弥生	2.3以上	0.7	7.5	
SD120	J	5次	J	U7・V7	SD6	－	4.4以上	0.9	43	
SR121	J	5次	J	T4・S5・R6	SD7	古墳	18	1.1	30	
SX122	J	5次	J	T5	SD9	弥生	4.1	0.7	10	
SB154	J	5次	J	M1～P2		古代～中世	9.8	3.7	50	N29° E 東西棟
SB155	J	5次	J	L2～O3		古代～中世	14.2	6.8	70	N20° E 東西棟
SB156	J	5次	J	R6～S7		古代～中世	8.1	3.3	70	N5° E 東西棟
SB157	J	5次	J	R8～T8		古代～中世	10以上	3以上	70	N14° E 東西棟
SB158	J	5次	J	S8～U8		古代～中世	9.3以上	2.6以上	65	N17° E 東西棟
SK123	K	5次	H	C2・D2	SK1	古代	4以上	1.6	10	
SD124	K	5次	H	O2～Q2	SD1	弥生前期	4以上	1.4	60	
SD125	K	5次	H	G2～R2	SD2	－	43以上	0.4以上	16	
SD126	K	5次	H	H2	SD3	－	1以上	0.3	10	
SD127	K	5次	H	P2・Q2	SD4	弥生？	3.8	0.6	20	
SD128	K	5次	H	B2～E2	SD5	古代	13以上	0.3以上	11	
SE129	M	5次	I	E2・F2	SE0	鎌倉	2	1.5以上	72	
SK130	M	5次	I	H8	SK1	鎌倉？	1.5以上	－	12	
SK131	M	5次	I	H7	SK2	鎌倉	1.4	0.4	10	長楕円形土坑
SK132	M	5次	I	H9	SK4	鎌倉	2.1	1.5	23	不定形土坑
SR133	M	5次	I	H4・H5	SR1	鎌倉以前	2.5以上	5.4	－	O区続き SD545と同一？
SR134	M	5次	I	H7	SR2	鎌倉以前	2.8以上	9.6	－	SZ138に包含
SR135	M	5次	I	H3	SR3	鎌倉以前	2.5以上	2	－	O区続き SD545と同一？
SR136	M	5次	I	H3・H4	SR4	鎌倉以前	2.9以上	2.1	－	SZ138に包含
SR137	M	5次	I	B2・C2	SR5	鎌倉以前	2.8以上	2.6	－	
SZ138	M	5次	I	H8～H12	SR6	鎌倉以前	2.8以上	20.6	－	SR134・SR136と同一？
SZ139	M	5次	I	H12	SR7	鎌倉以前	2.9以上	2.5	－	

第４表　遺構一覧表

報告書遺構番号	報告地区	調査時遺構情報				時期	長さ	幅	深さ	備　考
		調査年次	調査地区	小地区	遺構		(m)	(m)	(cm)	
SD140	M	5次	I	H2・H3	SD1	－	2.5以上	1.7	28	
SD141	M	5次	I	H5	SD2	中世後期	2.7以上	0.3	10	
SD142	M	5次	I	F2	SD3	－	3.2以上	1	28	
SD143	M	5次	I	E2	SD4	－	3以上	0.7	20	
SD144	M	5次	I	H2	SD5	－	2.6以上	0.8以上	34	
SD145	M	5次	I	H2	SD6	－	2.5以上	0.8	13	SD140の下層
SD146	M	5次	I	H2	SD7	弥生	3.2以上	0.8	29	
SD147	M	5次	I	E2	SD8	弥生？	1.5以上	1.4	28	
SR148	M	5次	I	H3	SD9	－	2.5以上	0.9	－	
SD149	M	5次	I	F2	SD10	－	1.2以上	0.4以上	19	
SD150	M	5次	I	H5	SD11	鎌倉	2.6以上	0.5	12	
SD151	M	5次	I	H10	SD12	－	2.9以上	1.2	11	楕円形土坑状落ち込み
SD152	M	5次	I	H12	SD13	中世後期	2.9以上	0.7	9	
SR153	M	5次	I	H6	SR1	鎌倉以前	2.6以上	3	－	
SB159	M	5次	I	B2・C2	－	－	5.6以上	2以上	45	N36° E　東西棟
SB160	M	5次	I	D2・E2	－	－	5.5	2.6以上	20	N38° E　東西棟
SB161	M	5次	I	F2～H2	－	－	10	1.1以上	25	N27° E　東西棟
SB162	M	5次	I	H7・H8	－	鎌倉	8.5	1.8	25	N37° E　東西棟
SA163	M	5次	I	H9	－	－	3以上	－	25	N57° W
SA164	M	5次	I	H10	－	－	3以上	－	25	N81° W
SA165	M	5次	I	H10	－	－	3以上	－	30	N64° W
SA166	M	5次	I	H12	－	－	3以上	－	23	N83° W
SK201	L	6次	C	D3	SK01	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.5	0.8	17	重複土坑
SK202	L	6次	C	D3	SK02	弥生Ⅰ・Ⅱ	2.5	1.1	42	重複土坑
SK203	L	6次	C	E2	SK03	弥生Ⅰ・Ⅱ	0.9	0.4	20	楕円形
SK204	L	6次	C	D4	SK04	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.6	1.1	26	楕円形、炭を多く含む
SK205	L	6次	C	D4	SK05	弥生Ⅰ・Ⅱ	3.6	1.5	25	大型土坑、炭を多く含む
SK206	L	6次	C	D9	SK06	不明	0.9	0.9	4	円形、大型、浅い皿状
SH207	L	6次	C	G2～H3	SH07	弥生Ⅰ	5.1	4.3	26	方形住居跡　多量の遺物が出土
SD208	L	6次	C	C1～	SD08	古代	48	0.8	35	東西方向に走る長い溝
SD209	L	6次	C	G2	SD09	古代	4.8	0.4	15	北東から南西方向に走る短い溝
SD210	L	6次	C	F2～	SD10	弥生Ⅰ・Ⅱ	49以上	0.6	25	北東から南西方向に走る SD237と同一？
SK211	L	6次	C	G3	SK11	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.2	1.1	25	円形土坑
SK212	L	6次	C	G6	SK12	近世	4.8	1.9	24.9	大型土坑　床面に木板を有する
SK213	L	6次	C	G6	SK13	近世	3	1.1	16.5	大型土坑12・14と同類
SK214	L	6次	C	G6	SK14	近世	5.3	1.2	10.1	大型土坑12・13と同類
SP215	L	6次	C	B5	SP15	奈良・平安	1.1	0.4	52	大型建物の柱穴
SP216	L	6次	C	B6	SP16	奈良・平安	1	0.5	49	大型建物の柱穴
SP217	L	6次	C	B6	SP17	奈良・平安	0.6	0.6	36	大型建物の柱穴
SD218	L	6次	C	E2～G2	SD18	弥生Ⅰ・Ⅱ	7.5以上	0.7	25	北東側のSD209に継続する溝
SH219	L	6次	C	E1・E2	SH19	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.8以上	1.7	90	南辺の一部を検出
SK220	L	6次	C	D5	SK20	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.1	1.1	15	円形土坑
SK221	L	6次	C	E5	SK21	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.1	1	31	円形土坑
SK222	L	6次	C	E5	SK22	古墳前期	1.2	1.2	10	円形土坑
SK223	L	6次	C	E6	SK23	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.4	1.3	15	円形土坑
SD224	L	6次	C	A4～C5	SD24	中世	10以上	4	50	幅広い南東から北西に走る溝
SD225	L	6次	C	D6～F6	SD25	不明	5.3	0.4	10	北側のSD224と同類に平行する
SD226	L	6次	C	D5～F5	SD26	中世	9.5	0.9	10	SD224と同類の溝
SP227	L	6次	C	F5	SP27	古代	0.8	0.6	66	大型建物の柱穴
SD228	L	6次	C	E・F4，F5	SD28	中世	9.2	1.1	15	大型の溝、SD224と同類
SX229	L	6次	C	F8・9	SX29	中世	1.3	0.7	37	長方形の土坑墓
SH230	L	6次	C	D9・E9	SH30	弥生Ⅰ・Ⅱ	4.1	3.9	29	円形住居跡

第５表　遺構一覧表

報告書遺構番号	報告地区	調査時遺構情報				時期	長さ	幅	深さ	備　考
		調査年次	調査地区	小地区	遺構		(m)	(m)	(cm)	
SD231	L	6次	C	G5～H5	SD31	中世	7以上	4.3	13	SD228・224と同類
SK232	L	6次	C	G4	SK32	弥生Ⅰ・Ⅱ	2.1	1.5	22	北西側のSK236と同類
SK233	L	6次	C	H5	SK33	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.5	0.9	30	楕円形土坑
SK234	L	6次	C	G7	SK34	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.8	1.2	33	楕円形土坑SK235を切っている
SK235	L	6次	C	G7	SK35	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.1	0.4	18	楕円形土坑SK234に切られている
SK236	L	6次	C	G4	SK36	弥生Ⅰ・Ⅱ	2.1	2	10	楕円形土坑SK232を切っている
SD237	L	6次	C	F9・G8	SD37	古代	49以上	0.7	25	北西から南東方向に走る溝
SK238	L	6次	C	D7～9	SX38	弥生Ⅰ・Ⅱ	3.7	2.5	23	2段落土坑
SK239	L	6次	C	F8・9	SX39	弥生Ⅰ・Ⅱ	2	1.5	50	周溝内の土坑
SK240	L	6次	C	B・C6, C7	SX40	弥生Ⅰ・Ⅱ	7	1.5	43	
SK241	L	6次	C	F8	SK41	古墳	1.2	0.8	9	円形土坑
SK242	L	6次	C	F9	SK42	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.3	1.2	52	円形土坑
SD243	L	6次	C	A6～A10	SD43	古代	18以上	0.8	22	北西から南東方向に走る溝
SK244	L	6次	C	G9	SK44	弥生Ⅰ・Ⅱ	6.7以上	1.5	51	
SK245	L	6次	C	G9	SK45	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.3	1	14	
SD246	L	6次	C	D7～D9	SD46	不明	10.7	0.6	11	北西から南東方向に走る溝
SK247	L	6次	C	G・H9	SK47	弥生Ⅰ・Ⅱ	2.3	1.3	48	
SD248	L	6次	C	C4～E5	SD48	中世	6.1	0.5	12	SD228と同一方向に走る
SK249	L	6次	C	B・C8	SK49	弥生Ⅰ・Ⅱ	0.9	0.7	13	円形土坑
SK250	L	6次	C	C8	SK50	鎌倉	1.2	1	79	楕円形土坑
SH251	L	6次	C	C・D8	SH51	弥生Ⅱ	4.3	3.8	25	方形住居跡
SK252	L	6次	C	D9	SK52	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.3	0.7	18	長方形の土坑墓？ 北端に完形の壺埋葬
SK253	L	6次	C	C・D9	SK53	弥生Ⅰ・Ⅱ	2.5	1.5	35	長方形隅丸土坑
SK254	L	6次	C	D9	SK54	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.5	1.2	37	楕円形土坑
SK255	L	6次	C	D9	SK55	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.7	1.7	12	土坑墓？長方形 北部端に壺埋葬？
SD256	L	6次	C	G10・G11	SD56	古代	6.5以上	1.2	40	東西方向に走る 幅広く浅い
SD257	L	6次	C	E11～13	SD57	古代	49以上	0.6	33	SD237の南側に継続 SD210 と同一
SE258	L	6次	C	A・B11	SE58	古代	2.2	2	57	丸底素堀掘井戸
SE259	L	6次	C	F12	SE59	中世	3.2	3.2	66	大型井戸、円形
SK260	L	6次	C	G9	SK60	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.6	1.1	52	
SK261	L	6次	C	G9	SK61	弥生Ⅰ・Ⅱ	2.1	1.6	49	
SD262	L	6次	C	G11	SD62	古代	8以上	1.6	17	幅広く浅い溝 SD256と同一？
SE263	L	6次	C	F10	SE63	中世	0.8	0.8	64	小型素堀円形井戸
SK264	L	6次	C	B8	SK64	弥生Ⅰ・Ⅱ	0.8	0.7	40	楕円形土坑
SK265	L	6次	C	B12～C13	SK65	中世	上5.8 下3.7	上4.3 下3.5	上17 下18	方形土坑 南東隅土坑？
SE266	L	6次	C	D12・13	SE66	中世	1.5	1.3	51	方形小型井戸
SE267	L	6次	C	D12	SE67	中世	0.9	0.9	58	円形小型井戸
SK268	L	6次	C	G8	SK68	弥生Ⅰ・Ⅱ	2.2	1.6	49	
SE269	L	6次	C	B11	SK69	不明	0.9	0.5	?	楕円形土坑 写真図版あり
SK270	L	6次	C	E12	SK70	古代	1.6以上	1.2	?	楕円形土坑
SE271	L	6次	C	F13	SE71	中世	0.8	0.8	20	小型円形井戸
SD272	L	6次	C	B13	SD72	中世	2.4	0.3	14	細短い溝
SD273	L	6次	C	A・B12	SD73	中世	4.5以上	1.9	10	南東隅状土坑に伴う溝
SD274	L	6次	C	A・B12	SD74	中世	5.2以上	0.3	21	南東隅状土坑に付設する排水溝
SK275	L	6次	C	G12	SK75	弥生Ⅰ・Ⅱ	0.8	0.6	49	楕円形土坑 完形に近い壺埋葬
SD276	L	6次	C	G11・G12	SD76	古代	3.5以上	0.6	12	直軸溝 SD280手前で途切れる
SK277	L	6次	C	B9～C10	SX77	弥生Ⅰ・Ⅱ	4.8	1.2	38	L字状溝
SD278	L	6次	C	G13	SD78	中・近世	5以上	1.3	－	SD262に平行する幅広く浅い溝 痕跡として確認
SD279	L	6次	C	G10～G15	SD79	古代	15以上	0.5	71	SD262内にて検出 細長い溝

第６表　遺構一覧表

報告書遺構番号	報告地区	調査時遺構情報				時期	長さ	幅	深さ	備　考
		調査年次	調査地区	小地区	遺構		(m)	(m)	(cm)	
SD280	L	6次	C	E11・E12	SD80	古代	5.8	0.3	8	SD237に継続する溝 痕跡として確認
SK281	L	6次	C	C5・6	SK81	中世	1.6	0.6	17	後にSX286に変更した
SD282	L	6次	C	B14	SD82	中世	3.1	3.6	13	細い溝
SK283	L	6次	C	B13	SK83	中世	1.7	1.6	14	方形浅い土坑 南東隅土坑に付設
SK284	L	6次	C	A・B8	SD84	弥生Ⅰ・Ⅱ	5以上	1.7	17	周溝状の溝
SK285	L	6次	C	C5・6	SX85	弥生Ⅰ・Ⅱ	5.5	1.5	65	SK240に切られている
SX286	L	6次	C	C5・6	SX86	中世	1.6	0.6	17	長方形 北端に土師皿を重ねる埋葬
SK287	L	6次	C	C10	SK87	不明	0.9	0.7	－	楕円形土坑
SK288	L	6次	C	G2	SX88	弥生Ⅱ～Ⅲ	7.5以上	1.8	46	方形周溝墓状の溝
SD289	L	6次	C	G2	SD89	弥生Ⅰ・Ⅱ	7.5以上	0.6	9	西側のSD218に継続する
SK290	L	6次	C	G2	SK90	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.1	0.6	25	楕円形土坑
SP291	L	6次	C	F2	SP91	弥生Ⅰ・Ⅱ	0.3	0.2	－	SK292に付設する
SK292	L	6次	C	F2	SK92	弥生Ⅰ・Ⅱ	0.8	0.7	8	円形小型土坑
SK293	L	6次	C	E1	SK93	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.4	1	23	SH219竪穴住居跡内 長方形貯蔵穴？
SD294	L	6次	C	G5	SD94	不明	2.2	0.3	－	細長い溝
SD295	L	6次	C	G7	SD95	不明	7.2以上	0.2	7	細短い溝
SK296	L	6次	C	F8	SK96	不明	0.7	0.7	2	小型、円形土坑
SK297	L	6次	C	B4	SK97	古代	0.9	0.9	55	大型建物に伴う大型方形柱穴
SK298	L	6次	C	B3	SK98	古代	1.1	1	47	大型建物に伴う柱穴
SE299	L	6次	C	B3	SE99	中世	1.4	1.3	92	円形井戸
SK300	L	6次	C	B3	SK100	中世	0.6	0.7	97	小型円形井戸
SK301	L	6次	C	H6	SK101	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.7	1.2	8	竪穴住居跡SH303に伴う 楕円形土坑
SK302	L	6次	C	G6	SK102	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.8	1.4	7	竪穴住居跡SH303に伴う 楕円形土坑
SH303	L	6次	C	G6・H6	SH103	弥生Ⅰ・Ⅱ	5	4.6	9	方形住居跡
SK304	L	6次	C	G3	SK104	弥生Ⅰ・Ⅱ	0.8	0.7	15	隅丸方形土坑
SK305	L	6次	C	B5	SK105	不明	1.3	0.5	5	円弧を描く形状 SD242に切られている
SK306	L	6次	C	E13	SK106	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.4	0.7	－	楕円形土坑
SK307	L	6次	C	B8	SK107	弥生Ⅰ・Ⅱ	2以上	1.2以上	28	楕円形土坑 溝の可能性がある
SK308	L	6次	C	D13	SK108	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.6	0.6	60	楕円形土坑
SK309	L	6次	C	C10・11	SD109	弥生Ⅰ・Ⅱ	6.6	1.2	23	直線溝
SK310	L	6次	C	D11	SK110	弥生	0.75	0.66	9	楕円形
SH311	L	6次	C	D13～E14	SH111	弥生Ⅰ・Ⅱ	4	3.2	5	方形竪穴住居跡 四柱穴、炉跡有する
SK312	L	6次	C	F・G11	SD112	弥生Ⅰ・Ⅱ	4.9	0.8	48	直線状溝
SD313	L	6次	C	A・B13	SD113	弥生	4.2以上	1.2	5	南側に末広がりの溝 中央に細い溝を有する
SK314	L	6次	C	E・F11	SK114	弥生Ⅰ・Ⅱ	2.8	2.1	34	楕円形土坑 炭、焼土を含む
SK315	L	6次	C	D14	SK115	弥生Ⅰ・Ⅱ	1	0.7	80	楕円形土坑 写真図版あり
SK316	L	6次	C	B・C14	SK116	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.7	1.2	36	楕円形土坑
SD317	L	6次	C	G13～F14	SD117	弥生	20以上	0.9	12	直線状
SK318	L	6次	C	B14	SK118	弥生Ⅰ・Ⅱ	2.2	0.8	32	楕円形土坑
SK319	L	6次	C	C11	SK119	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.7	0.6	40	
SK320	L	6次	C	B・C15	SK120	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.4以上	1	46	楕円形土坑
SK321	L	6次	C	B14	SK121	弥生Ⅰ・Ⅱ	2.45	0.8	35	楕円形土坑
SH322	L	6次	C	A11～B12	SH122	弥生Ⅰ・Ⅱ	2以上	1.4以上	1.2	三角形状に検出 方形の可能性がある
SK323	L	6次	C	A11	SK123	不明	0.8	0.5	－	楕円形
SE324	L	6次	C	A11	SE124	古代	3.6以上	1.4以上	168(74)	円形井戸、仮枠あり
SD325	L	6次	C	A14	SD125	弥生Ⅰ・Ⅱ	6.5以上	0.8	0.23	二股に枝分かれ状
SK326	L	6次	C	A・B12	SK126	弥生Ⅰ・Ⅱ	2.7以上	0.5	42	舟形土坑

第７表　遺構一覧表

報告書遺構番号	報告地区	調査時遺構情報				時期	長さ	幅	深さ	備　考
		調査年次	調査地区	小地区	遺構		(m)	(m)	(cm)	
SE327	L	6次	C	A11～B12	SE127	古代	2.2以上	1.7以上	175	円形井戸 SE324に切られている
SK328	L	6次	C	E8	SK128	中・近世	1.2以上	0.7	15	土坑墓？
SK329	L	6次	C	H6	SH129	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.1	0.9	12	竪穴住居跡内の円形土坑
SH330	L	6次	C	D14	SH130	弥生Ⅰ・Ⅱ	2.2以上	1.6以上	7	方形竪穴住居跡
SD331	L	6次	C	E14～G14	SD131	不明	10以上	0.7	27	直線状
SK332	L	6次	C	D12	SK132	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.4	0.7	15	隅丸長方形土坑
SH333	L	6次	C	B14～C15	SH133	弥生Ⅰ・Ⅱ	4.8	4.4	14	正方形竪穴住居跡
SK334	L	6次	C	D14	SK134	弥生Ⅰ・Ⅱ	0.8	0.6	25	方形土坑
SK335	L	6次	C	B12	SK135	不明	0.8	0.4	－	楕円形土坑 焼土を大量に含む 写真図版あり
SK336	L	6次	C	E11	SK136	不明	0.7	0.65	17	円形土坑
SK337	L	6次	C	E11	SK137	不明	1.25	0.6	12	楕円形土坑
SD338	L	6次	C	G11・12	SD138	中世	2.5以上	0.88	－	痕跡として確認
SK339	L	6次	C	B14	SK139	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.2	1.06	16	楕円形土坑
SD340	L	6次	C	A・B9	SD140	弥生中期	5	1.53	5	細い蛇行溝 SD243と重複
SK341	L	6次	C	A4	SK141	不明	1.7以上	1.7	1.65	方形土坑
SD342	L	6次	C	A・B5	SD142	不明	2.1	0.33	1	SD224内の溝 痕跡として確認
SB343	L	6次	C	B4・5他	－	古代	10	5.4	55	N10°E　東西棟
SB344	L	6次	C	E4・5他	－	古代末	8.4	4.5	60	N8°E　東西棟
SB345	L	6次	C	B1・C2他	－	奈良	3.2以上	4.4以上	20	N19°W　東西棟
SB346	L	6次	C	C2・D1他	－	古代以降	4.8	3	35	N2°E　南北棟
SB347	L	6次	C	D4・E4他	－	古代末	4.2	4.2	45	N7°W　正方形
SB348	L	6次	C	E6・F6他	－	古代末	4.8	3.3	50	N32°E　南北棟
SB349	L	6次	C	F7・E8他	－	古代	7	4.6	50	N26°W　南北棟
SB350	L	6次	C	E7・8他	－	古代	4.3	4.2	60	N37°E　南北棟
SB351	L	6次	C	E8・9他	－	中世	4.2	3.6	60	N16°E　南北棟
SB352	L	6次	C	E10・11他	－	中世	3	2.8	35	N1°W　南北棟
SD361	H	6次	D1	P1・2	SD401	－	7以上	2.5	30	
SD362	H	6次	D1	I18	SD402	－	3.8以上	1	30	総延長約64m
SD363	H	6次	D1	F18	SD403	－	4以上	4.6	48	総延長約62m
SK364	H	6次	D1	F18	SK404	－	1.8	0.8	18	
SK365	H	6次	D1	F18	SK405	－	2以上	0.6以上	14	
SK366	H	6次	D1	F18	SK406	－	1	0.7	18	
SD401	N	6次	B3	A7～G8	SD301	－	11以上	0.4	16	
SD402	N	6次	B2	F・G1	SD302	－	2.1以上	0.7以上	15	
SD403	N	6次	B2	F・G2	SD303	－	2.2以上	0.5	13	
SD404	N	6次	B2	F・G3	SD304	－	2.2以上	1.6	20	
SD405	N	6次	B3	D7・8	SD305	－	3.9	1.7以上	22	
SD406	N	6次	B2	F2～G3	SD306	－	2.2以上	0.8	10	
SD407	N	6次	B2	F・G8	SD307	－	2.4以上	2	49	
SD408	N	6次	B3	E7～F8	SD308	－	2以上	4.5	15	
SK409	N	6次	B2	F・G8	SK309	－	1.1	1.1	93	
SK410	N	6次	B3	C・D7	SK310	－	0.7	0.4以上	55	
SD411	N	6次	B3	C8，D7・8	SD311	－	2.1以上	0.6	23	
SK412	N	6次	B2	G9	SK312	－	0.8	0.7	48	
SK413	N	6次	B2	G8	SK313	－	0.7	0.4	11	
SD414	N	6次	B2	F13	SD314	－	1	0.6	14	
SZ415	N	6次	B2	E7	SZ315	－	2.1以上	0.6以上	19	
SD416	N	6次	B2	F・G10	SD316	－	2.3以上	1.8	16	
SD417	N	6次	B2	F・G9	SD317	－	2.6以上	1	28	
SD418	N	6次	B2	F・G11	SD318	－	2.7以上	0.3	19	
SK419	N	6次	B2	G13	SK319	－	1.3	0.8以上	9	
SD420	N	6次	B2	F・G14	SD320	－	2.6以上	0.4	22	

第８表　遺構一覧表

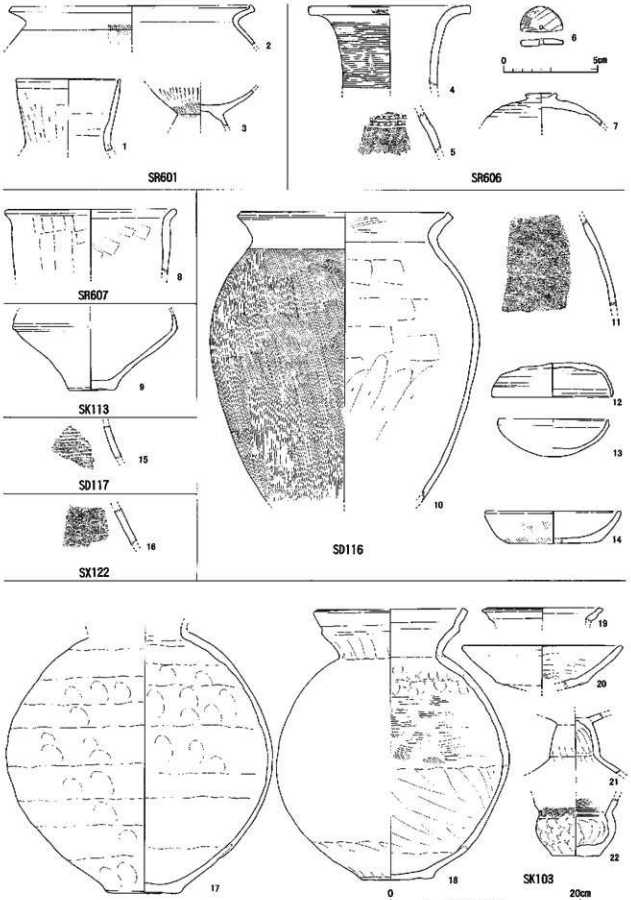
報告書遺構番号	報告地区	調査時遺構情報				時期	長さ	幅	深さ	備　考
		調査年次	調査地区	小地区	遺構		(m)	(m)	(cm)	
SK421	N	6次	B2	G11	SK321	－	1.2以上	1.3	16	
SK422	N	6次	B2	F10	SK322	－	1.1	0.5以上	8	
SK423	N	6次	B2	F・G14	SD323	－	1.1以上	0.6	28	
SK424	N	6次	B2	F・G14	SD324	－	2.5以上	3.8	20	
SX425	N	6次	B2	F・G16	SK325	－	1.3以上	1.2	－	痕跡のみ確認
SD426	N	6次	B2	F・G15	SD326	－	2.5以上	0.4以上	30	SD519と同一
SD427	N	6次	B2	F・G19	SD327	－	2.5以上	0.7	16	SD508と同一
SD428	N	6次	B2	F20	SD328	－	2.4以上	0.5	17	
SD429	N	6次	B2	F20・F21	SD329	－	2.6	0.8	22	
SD430	N	6次	B2	F21・F22	SD330	－	2.5以上	2.5	6	
SK431	N	6次	B2	F・G18	SK331	－	1.5	1	16	
SD432	N	6次	B2	G4	SD332	－	2以上	0.4	23	
SD433	N	6次	B2	G5	SD333	－	2.1以上	0.6	18	
SK434	N	6次	B2	G5	SK334	－	0.8以上	1.2	9	
SD435	N	6次	B3	A7	SK335	－	2以上	0.7	19	
SK436	N	6次	B3	A7	SK336	－	1.8以上	0.6	51	
SK437	N	6次	B2	G7	SK337	－	0.9	0.6	27	
SD438	N	6次	B2	G9	SD338	－	2.8以上	1.1	51	
SK439	N	6次	B2	G10	SK339	－	0.5以上	0.4以上	14	
SK440	N	6次	B2	F14	SK340	－	0.7	0.7	6	
SZ441	N	6次	B2	G12～14	SD341	－	11	1.5以上	9	
SD442	N	6次	B3	B7	SD342	－	2.2以上	1.2	43	
SZ443	N	6次	B2	F21	SZ343	－	－	6以上	21	
SD501	O	7次	I	U2～X2	SD1	中世	10以上	0.6以上	－	痕跡のみ確認 流路の残存部分か？
SD502	O	7次	I	L2～X2	SD2	中世	54以上	1	31	SD545に繋がる可能性
SD503	O	7次	I	Q2～X2	SD3	中世	90以上	2.2	45	
SD504	O	7次	I	S5～X5	SD4	中世	20以上	0.7	16	
SD505	O	7次	I	W5・6	SD5	中世	4以上	0.4	12	
SD506	O	7次	I	S5～U5	SD6	中世	10以上	0.2	16	
SD507	O	7次	I	V・W3	SD7	中世	6.7以上	0.4	－	痕跡のみ確認
SD508	O	7次	I	T5・6	SD8	中世	6.6以上	0.8	27	
SD509	O	7次	I	U6	SD9	中世	4.5以上	0.6	15	
SK510	O	7次	I	U3	SK10	中世	2.1以上	0.8	14	SK542に付随する
SD511	O	7次	I	X5・6	SD11	中世	4.4以上	0.8	11	
SD512	O	7次	I	T6	SD12	中世	3以上	1	26	
SD513	O	7次	I	X5	SD13	中世	1.8以上	0.4	7	
SD514	O	7次	I	U3～X3	SD14	中世	14以上	0.7	65	遺物が集中して出土 遺物溜まりか？
SD515	O	7次	I	U3～X3	SD15	中世	12以上	1.2	37	SD514にほぼ平行 遺物は少ない
SD516	O	7次	I	P5・6	SD16	中世	6.3以上	0.5	43	
SD517	O	7次	I	U2	SD17	中世	1.2以上	1.1	53	笊状遺物・家紋入り 漆製品出土
SD518	O	7次	I	P5・6	SD18	中世	33以上	0.8	43	
SD519	O	7次	I	P5・6	SD19	中世	6.4以上	0.6	26	
SD520	O	7次	I	T・U3	SD20	中世	5.4以上	0.8	14	
SD521	O	7次	I	P2～U3	SD21	中世	21以上	0.4	35	SR539の上を走る 区割りか？
SD522	O	7次	I	R3～T3	SD22	中世	11以上	1.1以上	20	SR539の上を走る 区割りか？
SK523	O	7次	I	W3	SK23	中世	－	－	－	遺物集中 遺構としては 認定取り消し
SK524	O	7次	I	V6	SK24	中世	0.8	0.4	8	
SK525	O	7次	I	S5	SK25	中世	1.4	1	30	
SK526	O	7次	I	V3	SK26	中世	0.8	0.5以上	45	
SK527	O	7次	I	X5	SK27	中世	2	0.3以上	5	ごく浅いくぼみ
SK528	O	7次	I	T3	SK28	中世	0.8	0.7	54	真円に近い

第９表　遺構一覧表

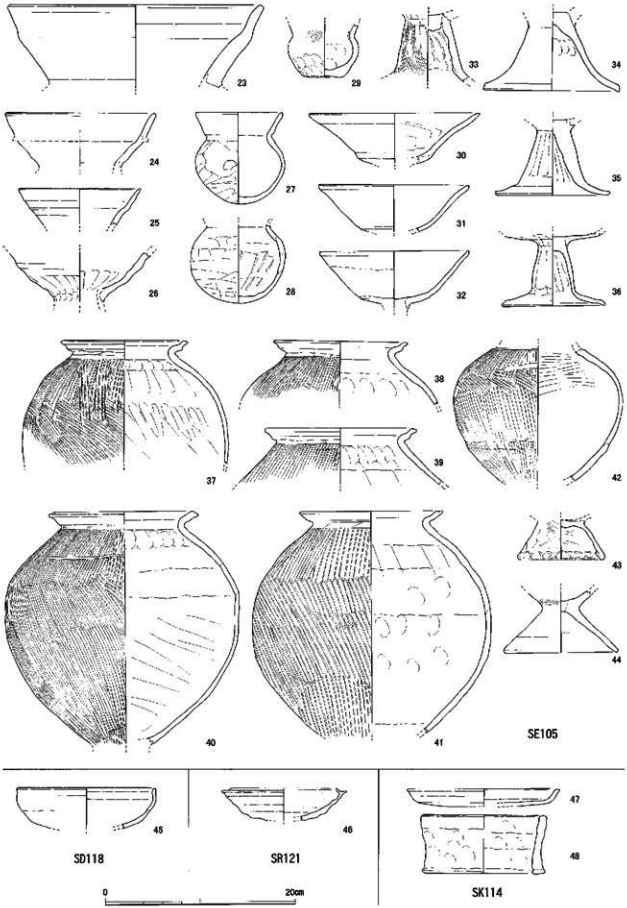
報告書遺構番号	報告地区	調査時遺構情報				時期	長さ	幅	深さ	備　考
		調査年次	調査地区	小地区	遺構		(m)	(m)	(cm)	
SK529	O	7次	I	K6	SK29	中世	3	2.2	200以上	埋められた井戸上に石組用途不明
SK530	O	7次	I	O6	SK30	中世	1	0.4	13	
SK531	O	7次	I	O6	SK31	中世	0.9	0.9	62	遺物を含む
SD532	O	7次	I	I6～J6	SD32	中世	6.5以上	0.5	23	
SK533	O	7次	I	Q5	SK33	中世	1	0.8	38	関係遺物出土
SK534	O	7次	I	M6	SK34	中世	2.2	2.1	11	浅いくぼみ、SK541と類似
SZ535	O	7次	I	U3	SZ35	中世	1	0.8程度	－	明瞭な掘り込みなし 遺物集中
SK536	O	7次	I	P6	SK36	中世	0.5	0.3	19	上部は溝に切られている
SX537	O	7次	I	Q2	SX37	中世	0.8	0.8	26	甕棺・鉄製品・人骨出土
SE538	O	7次	I	N3	SE38	中世	2.2	2.2	130以上	
SR539	O	7次	I	L3～X3	SR39	中世	推定31	－	－	立ち上がりはSD502に壊されはっきりしない
SX540	O	7次	I	D5	SX40	中世	0.9	0.4	17	小骨あり
SK541	O	7次	I	D6	SK41	中世	3.3	1.3	19	SK534に類似
SK542	O	7次	I	U2	SK42	中世	5.4以上	1.6	6	厠跡か？
SK543	O	7次	I	P2	SK43	中世	1.3	0.2	12	SD544の一部か？
SD544	O	7次	I	L3～P3	SD44	中世	9	0.4	9	
SD545	O	7次	I	B7～K3	SD45	中世	43以上	2	33	SD502と連続？
欠番	O	7次	I	B6～G6	SD46	－	－	－	－	SD503と同一
SK547	O	7次	I	F7	SK47	中世	1	1	12	
SK548	O	7次	I	Q6	SK48	中世	1.2	1.1	－	下層確認時に確認した土坑
SB549	O	7次	I	K7～M7	SB49	中世	10.3	4以上	13	N21° E　東西棟
欠番	O	7次	I	－	SB50	－	－	－	－	
SK551	O	7次	I	U4	SK51	中世	1.3	0.4	27	SK542に付随
SK552	O	7次	I	U4	SK52	中世	0.9	0.7	56	SK542に付随
SK553	O	7次	I	F5	SK53	中世	2.8	0.4	27	
SD801	P	8次	－	A4～V5	SD1	中世・近世	90以上	2.8	65	山茶椀・伊勢鍋・瓦・須恵器・青磁・常滑甕・灰釉など
SD802	P	8次	－	T3～V4	SD2	中世・近世	13以上	0.4	25	山茶椀・伊勢鍋・須恵器・漆塗り椀など
SD803	P	8次	－	T3～V4	SD3	中世	12以上	1.6以上	29	山茶椀・伊勢鍋・常滑甕・木製品など多数。墨書あり
SD804	P	8次	－	P3～R3	SD4	中世	11.3	1.6以上	50	山茶椀・伊勢鍋・須恵器・木製品など。墨書あり
SD805	P	8次	－	R3～S3	SD5	中世	3.6以上	1.2以上	34	土師器片、遺物少量
SD806	P	8次	－	P4～U5	SD6	中世か？	21	1.8	36	台付甕・須恵器・黒色土器
SD807	P	8次	－	E5～T7	SD7	古墳	64以上	0.5	13	古式土師(高杯脚)
SD808	P	8次	－	A3～P3	SD8	中世	59以上	1.6以上	58	瓦・山茶椀・伊勢鍋・火舎・須恵器・木製品など
SK809	P	8次	－	N4・O4	SK9	中世か？	1.2	0.8	22	めぢった遺物なし
SK810	P	8次	－	N5	SK10	中世か？	1.2	1	26	めぢった遺物なし
SD811	P	8次	－	P5	SD11	不明	3.3	0.8	27	めぢった遺物なし
SD812	P	8次	－	K4～M6	SD12	古墳	13.4	0.7	14	古式土師・須恵器
SD813	P	8次	－	A4～N4	SD13	中世・近世	50以上	0.9	26	山茶椀・清郷鍋？ 黒色土器・木製品など
SD814	P	8次	－	G3～H4	SD14	中世	4.4	0.7	20	中世土師皿・伊勢鍋
SD815	P	8次	－	F5・G5	SD15	不明	3.3	0.9	18	めぢった遺物なし
SD816	P	8次	－	A5～H7	SD16	古墳	27以上	2.2	19	古式土師・須恵器
SD817	P	8次	－	F6～G7	SD17	古墳	8.4以上	0.2	7	古式土師
SK818	P	8次	－	C3・C4	SK18	不明	1.9	0.4	7	めぢった遺物なし
SK819	P	8次	－	E5・E6	SK19	古墳	4.4	1.5	10	古式土師・須恵器
SD820	P	8次	－	B3・B4	SD20	不明	3.1	0.9	16	めぢった遺物なし

※トーンは本書において個別報告した遺構である。

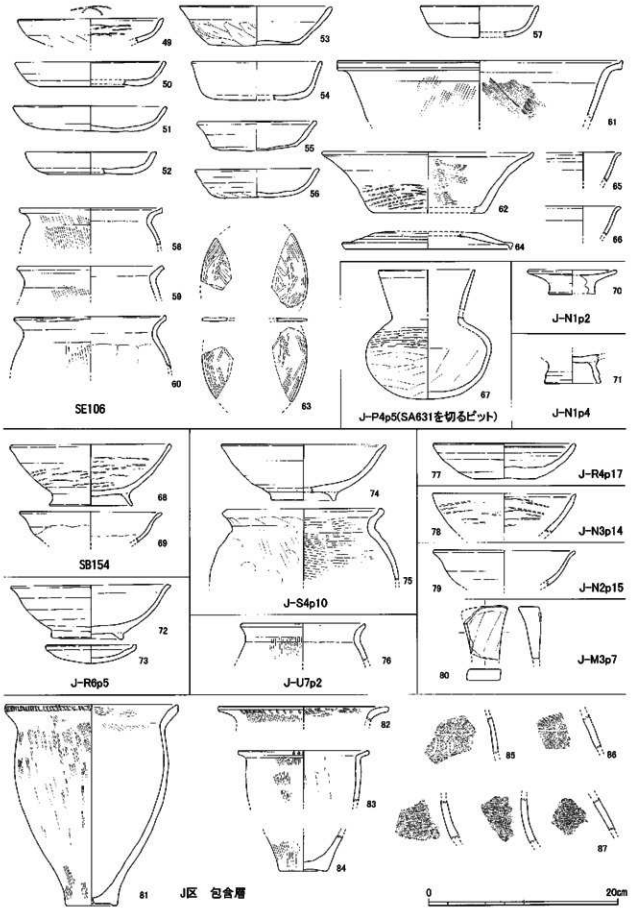
第10表　遺構一覧表



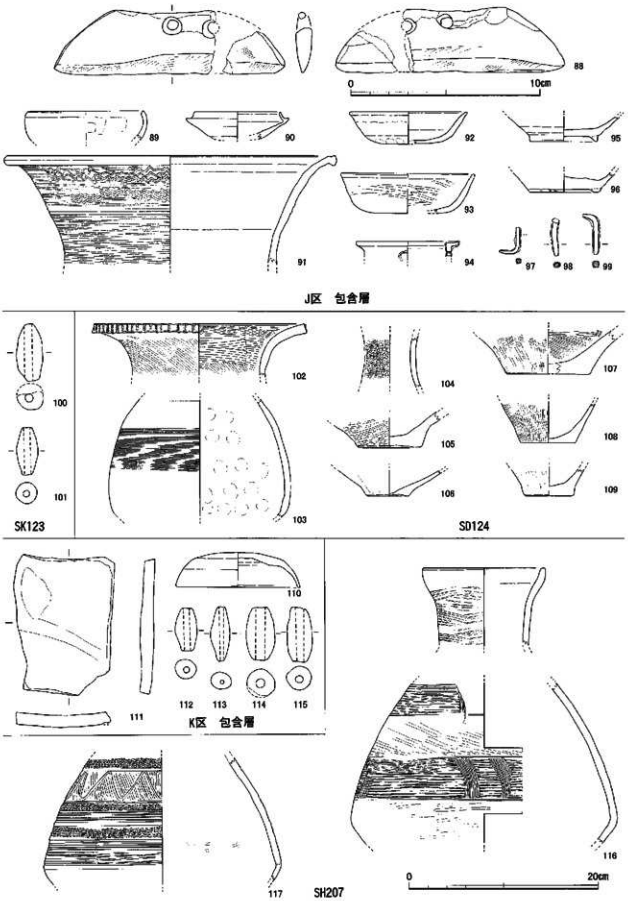
第211図　出土遺物実測図（6のみ1：2、その他1：4）



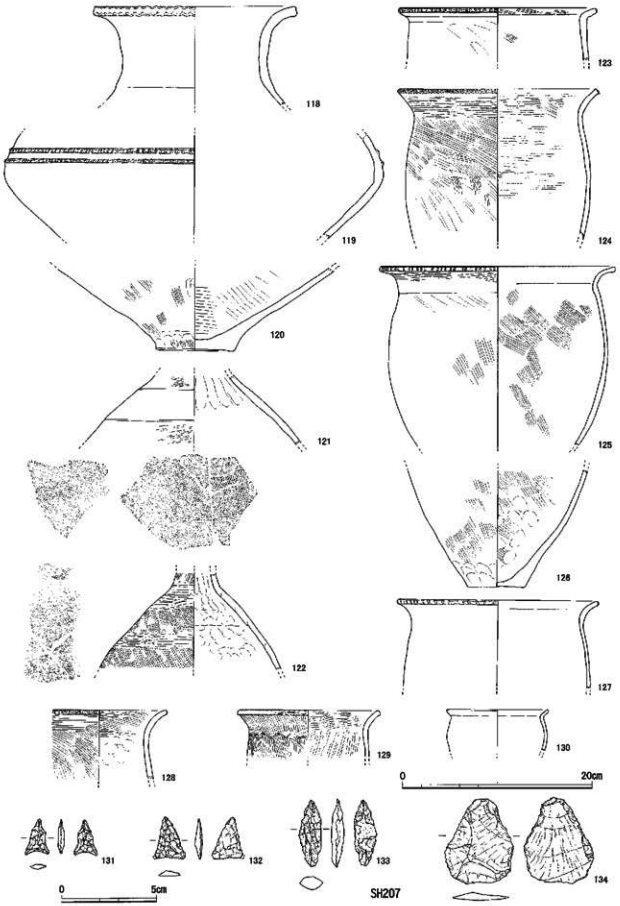
第212図　出土遺物実測図（1：4）



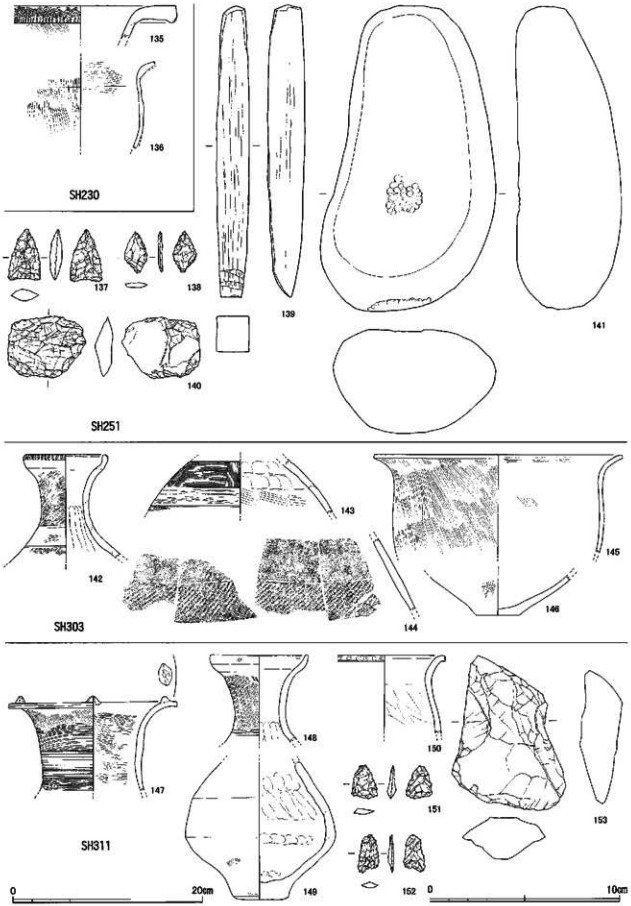
第213図　出土遺物実測図（1：4）



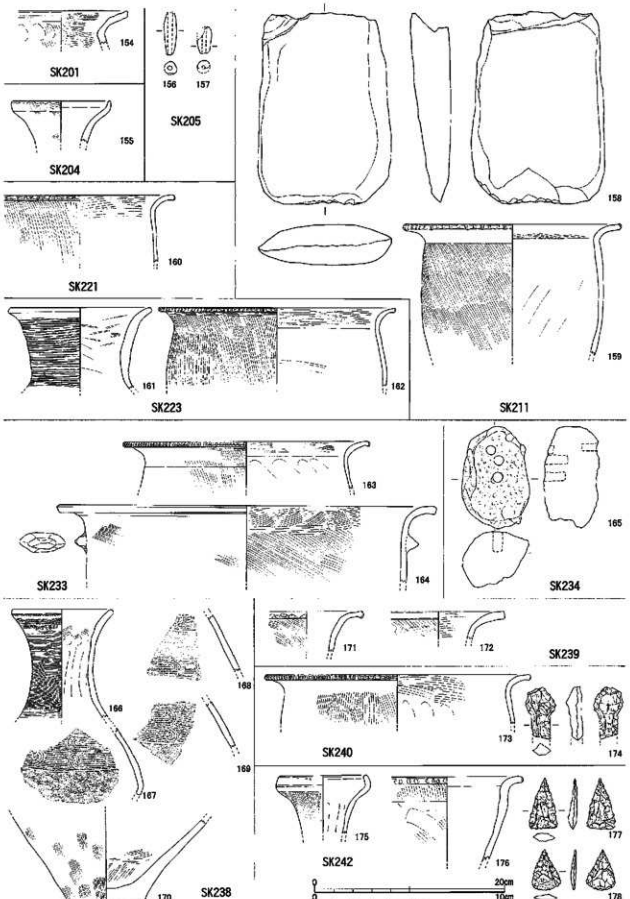
第214図　出土遺物実測図（88のみ１：２、その他１：４）



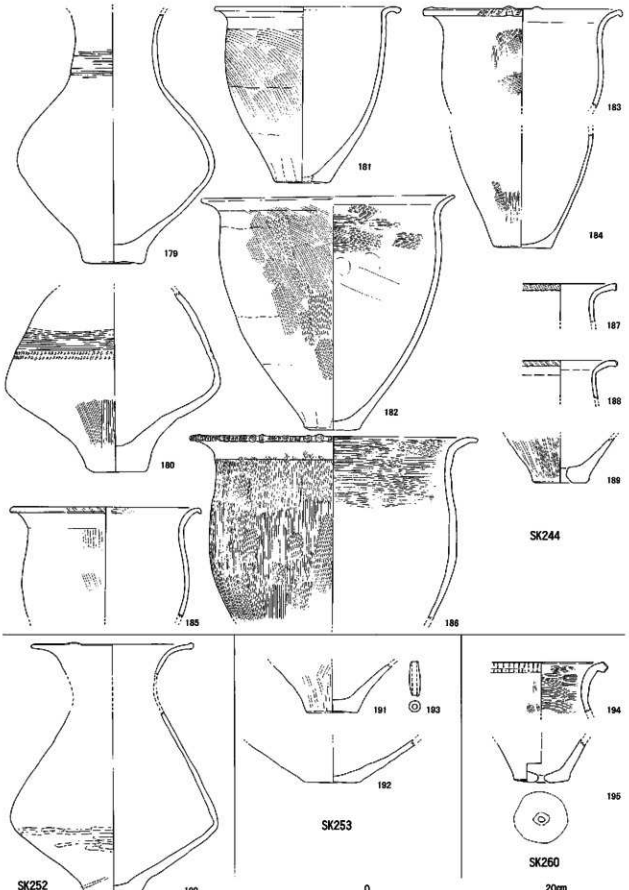
第215図　出土遺物実測図（131～134は１：２、その他１：４）



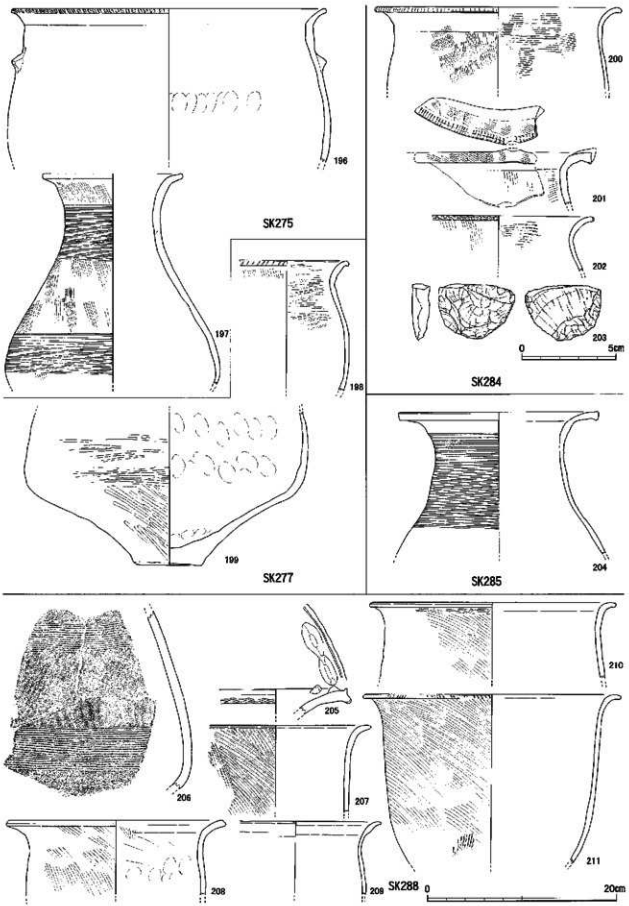
第216図　出土遺物実測図（137～141・151～153は１：２、その他１：４）



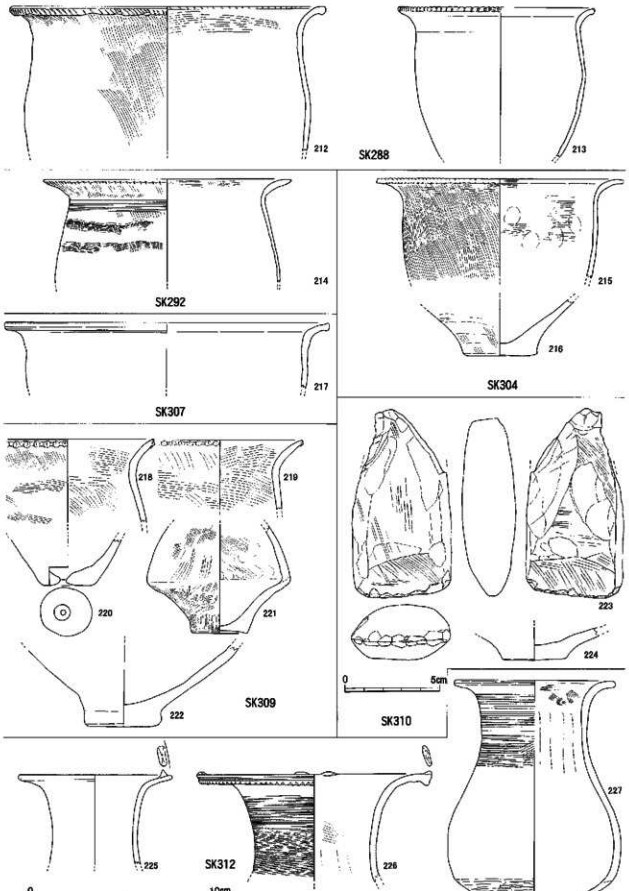
第217図　出土遺物実測図（158・174・177・178は１：２、その他１：４）



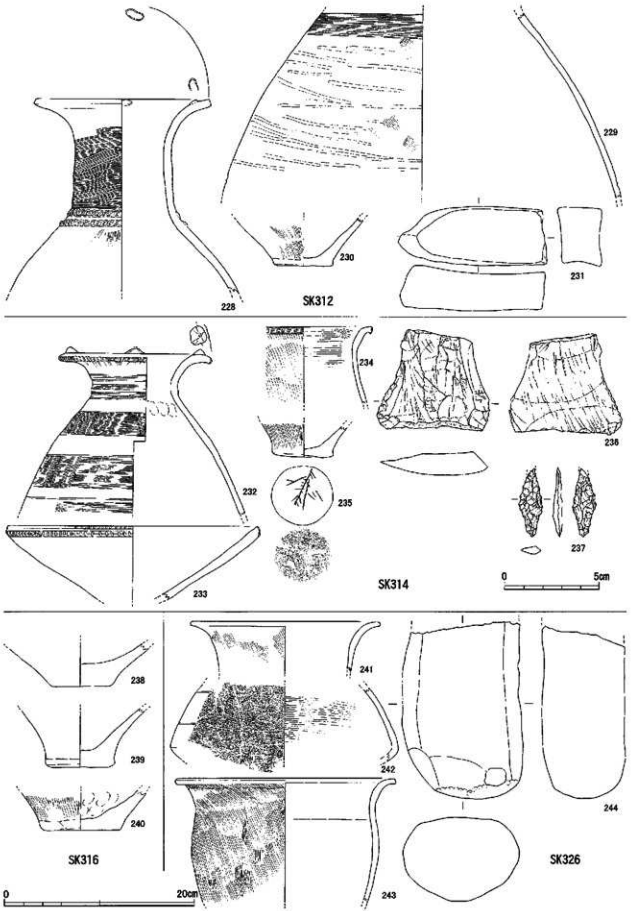
第218図　出土遺物実測図（1：4）



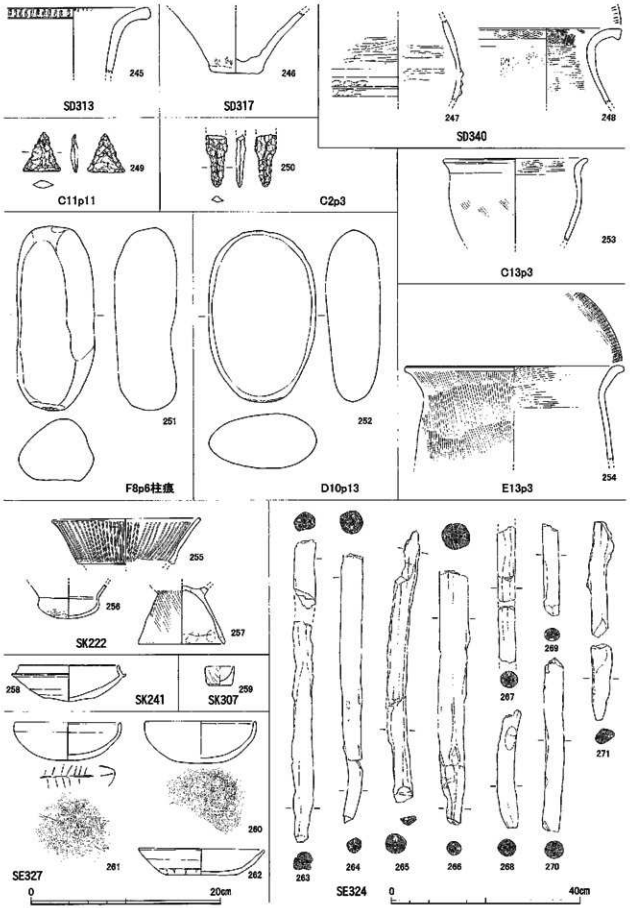
第219図　出土遺物実測図（203のみ１：２、その他１：４）



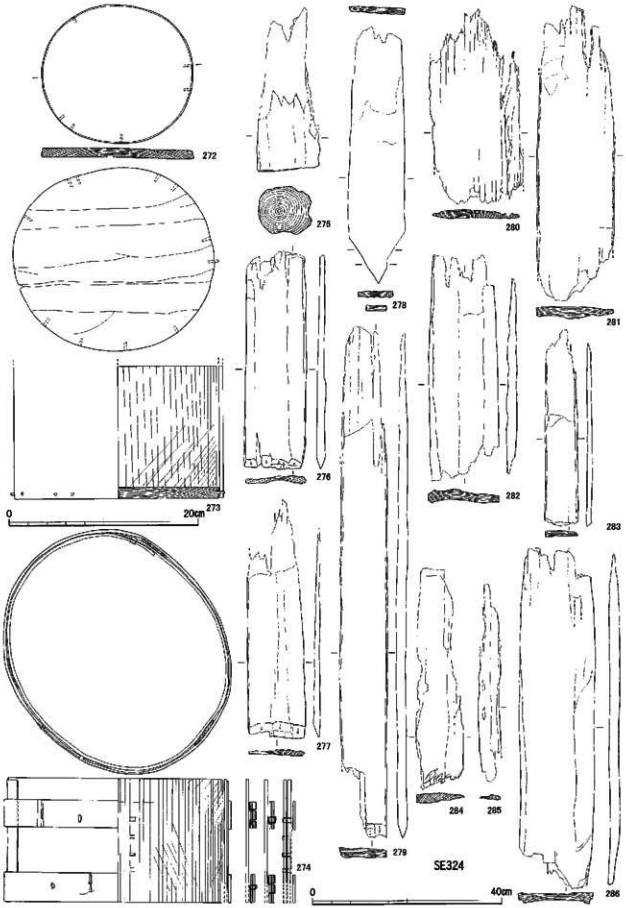
第220図　出土遺物実測図（223のみ１：２、その他１：４）



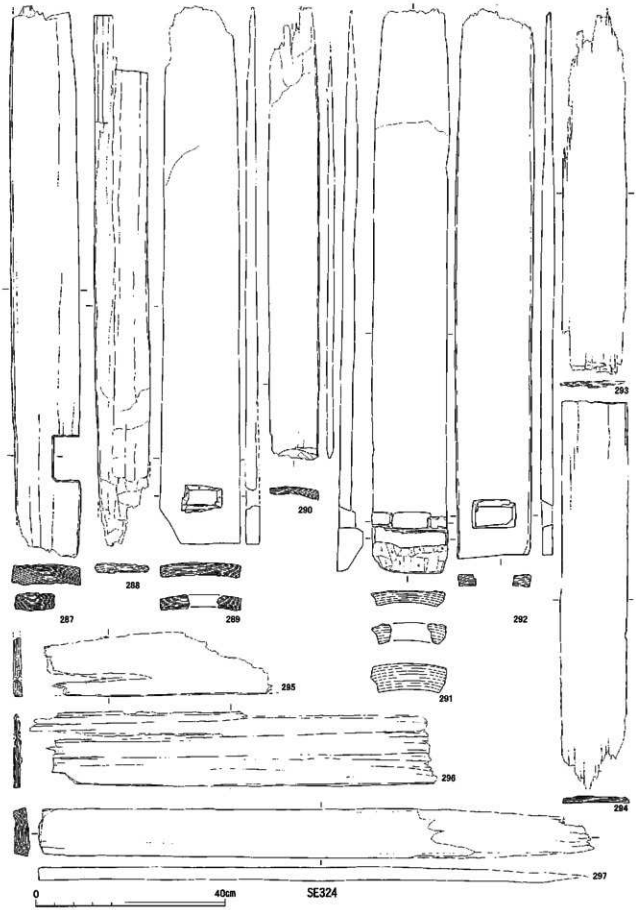
第221図　出土遺物実測図（236・237・244は１：２、その他１：４）



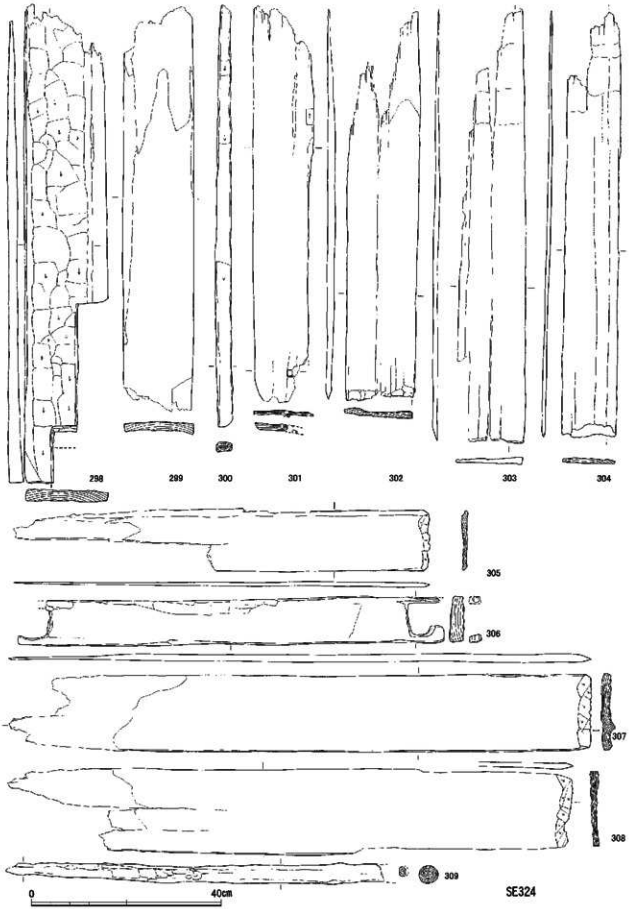
第222図　出土遺物実測図（249～252は１：２、263～271は１：８、その他１：４）



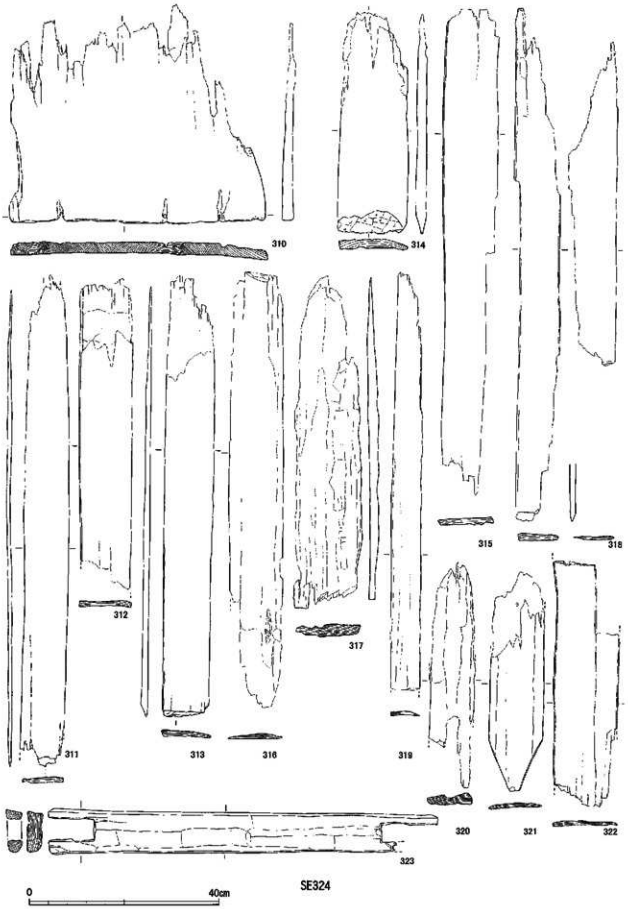
第223図　出土遺物実測図（272・273は１：４、その他１：８）



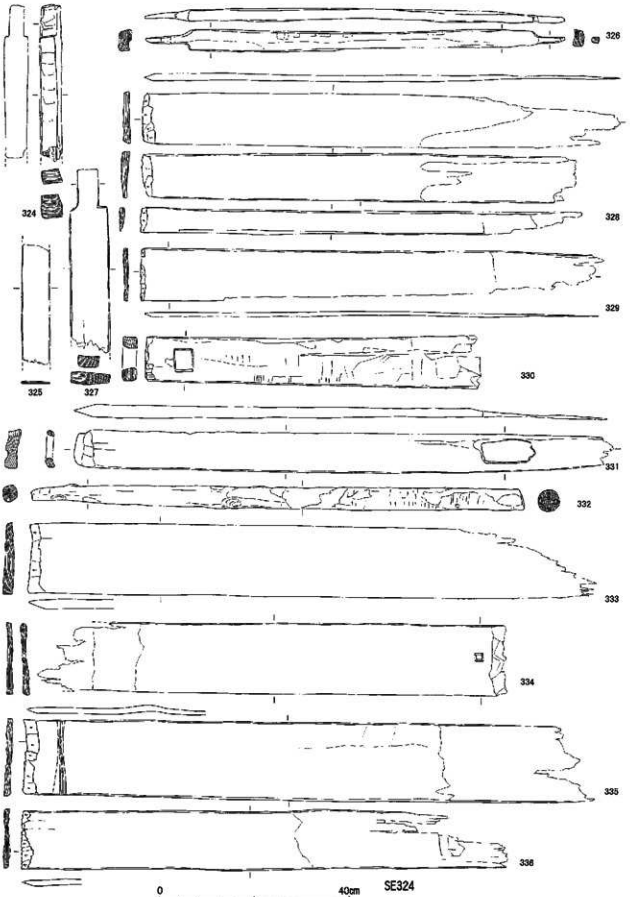
第224図　出土遺物実測図（1：8）



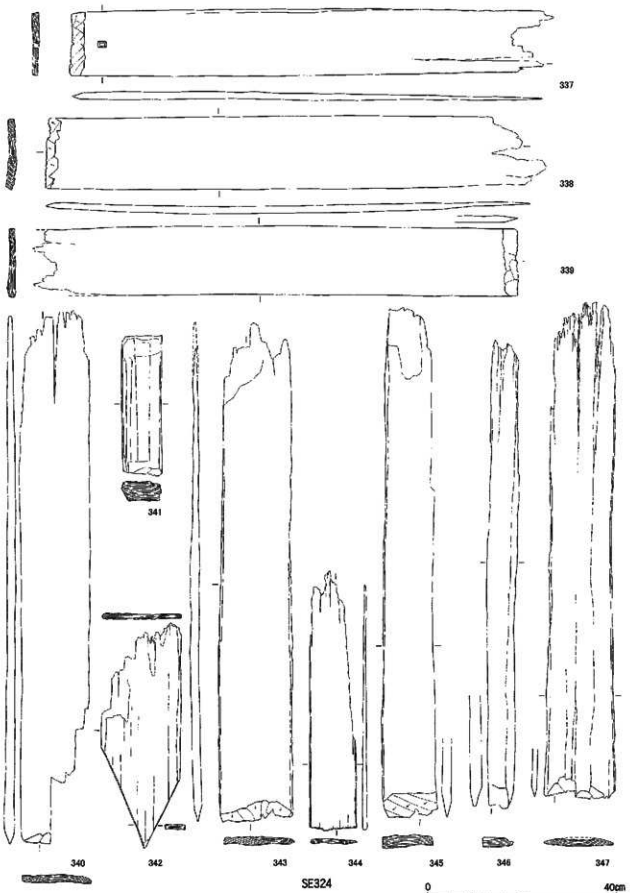
第225図　出土遺物実測図（1：8）



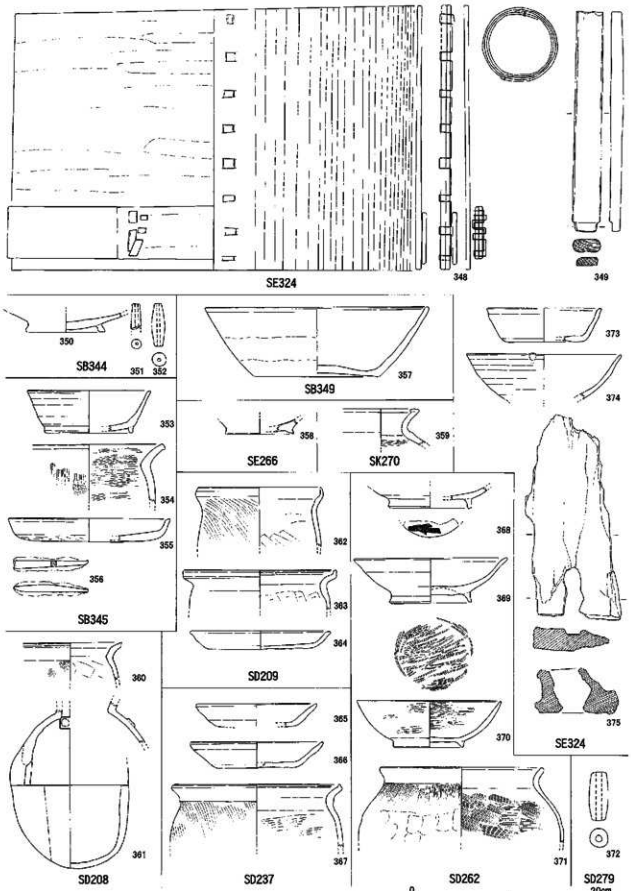
第226図　出土遺物実測図（1：8）



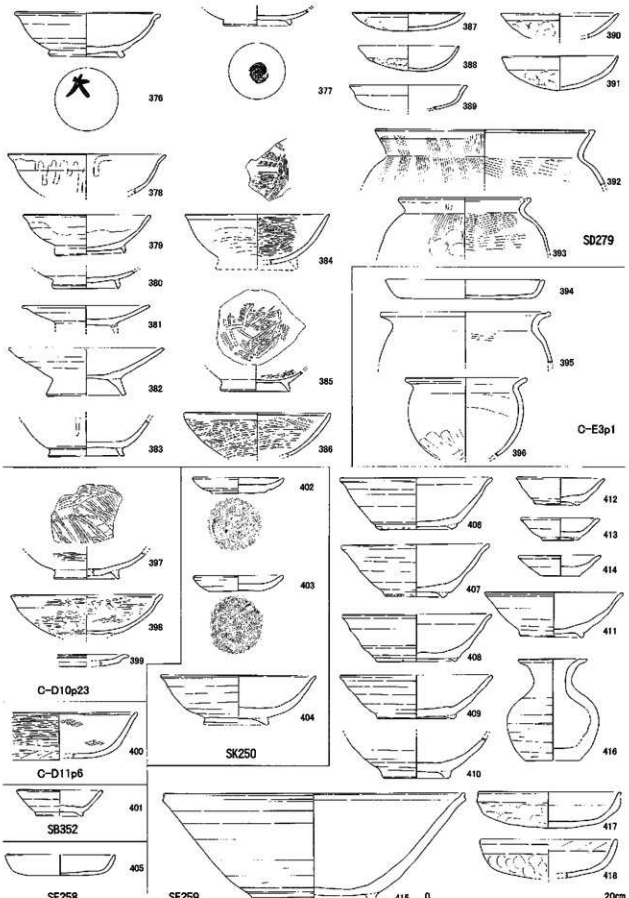
第227図　出土遺物実測図（1：8）



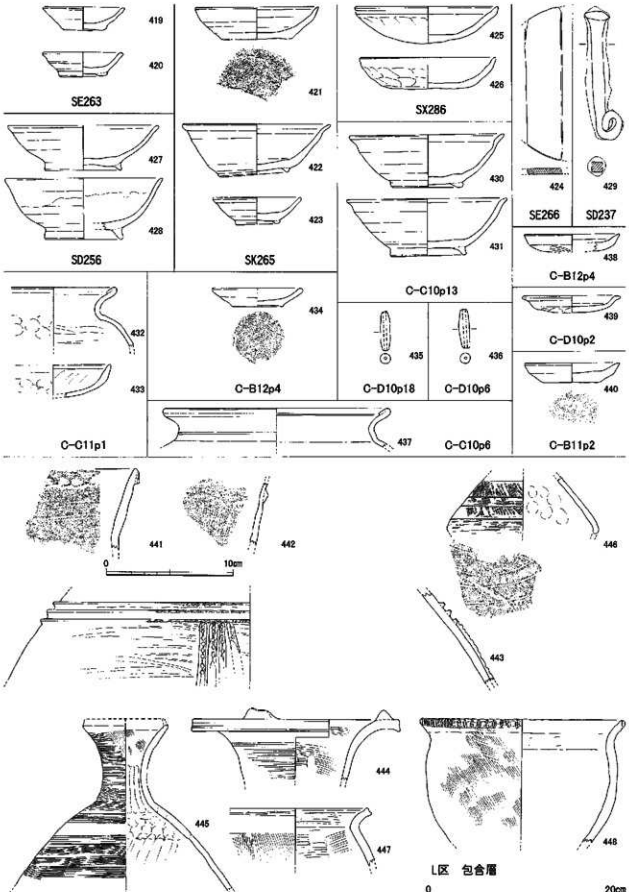
第228図　出土遺物実測図（1：8）



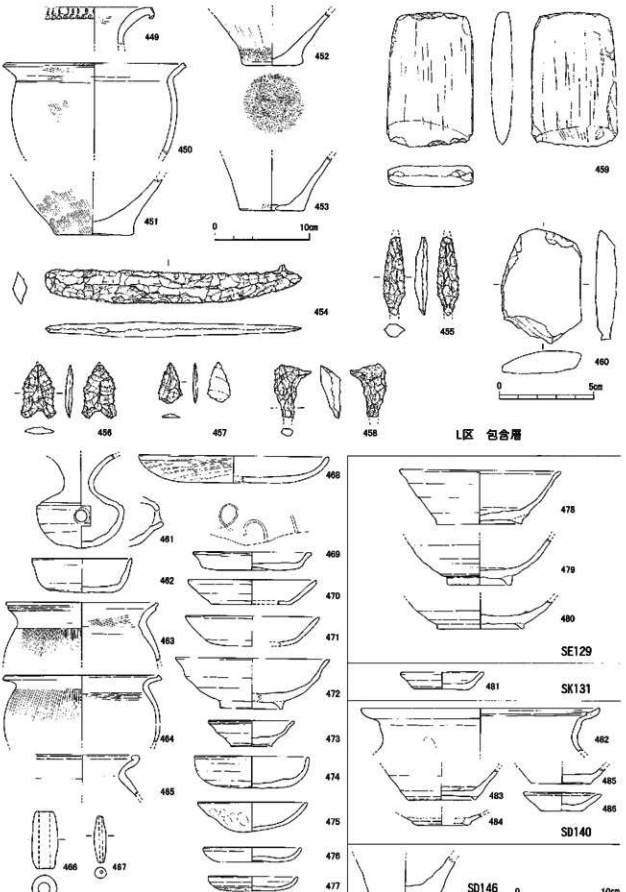
第229図　出土遺物実測図（1：4）



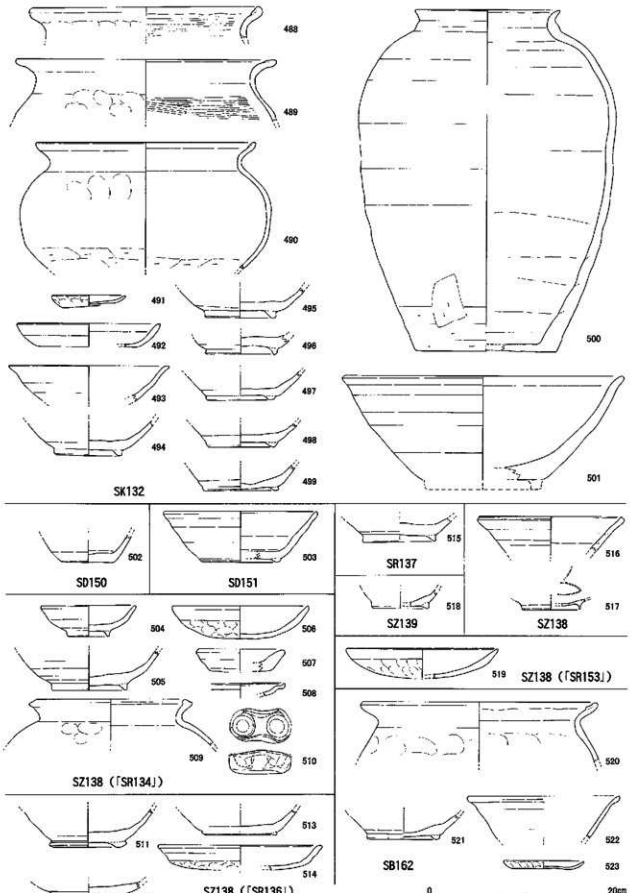
第230図　出土遺物実測図（1：4）



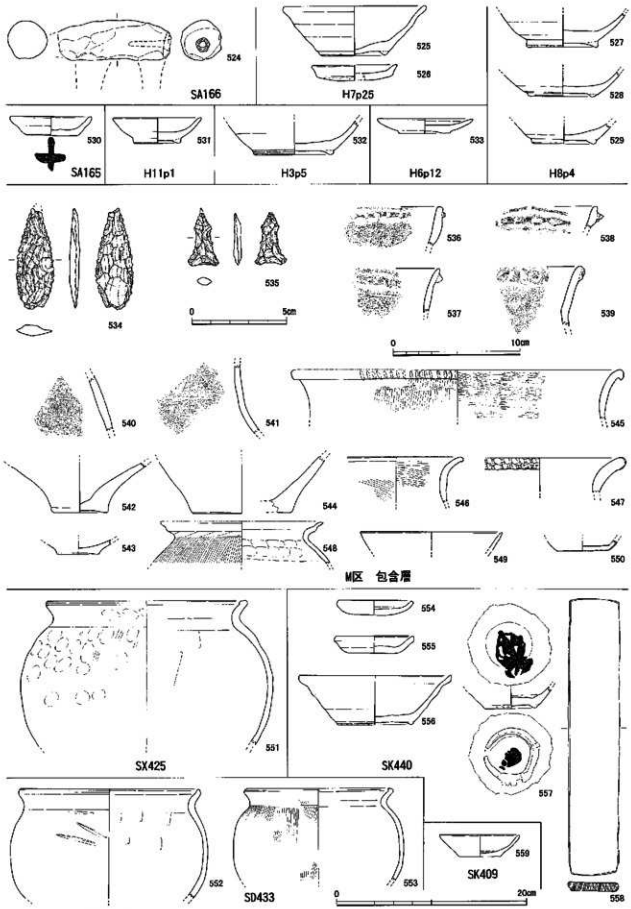
第231図　出土遺物実測図（1：4）



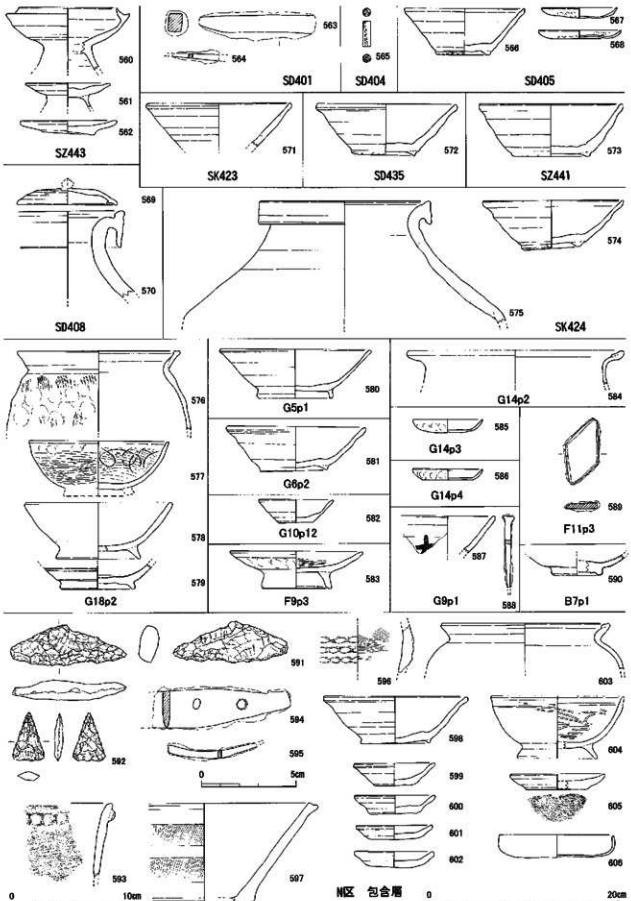
第232図　出土遺物実測図（454～460は１：２、その他１：４）



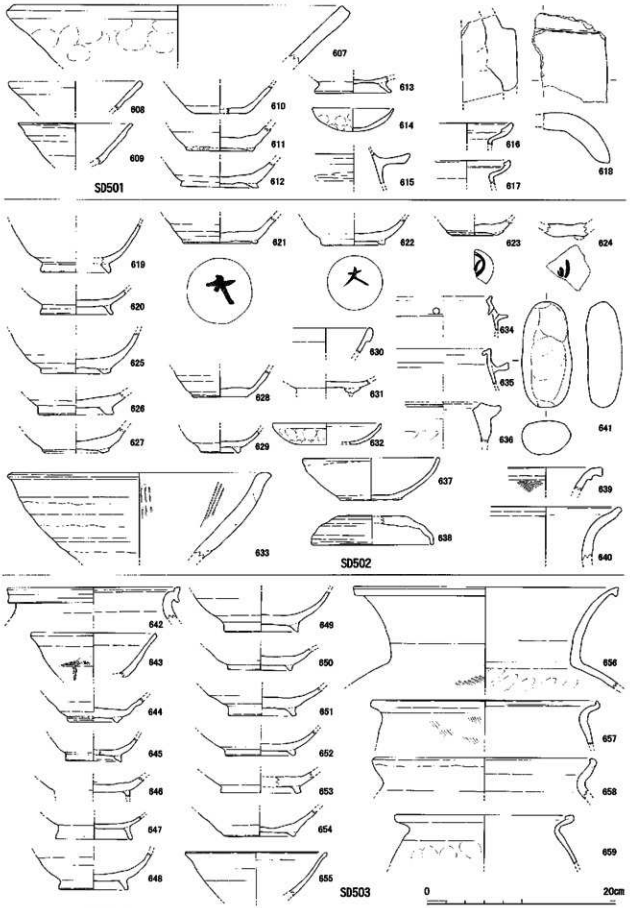
第233図　出土遺物実測図（1：4）



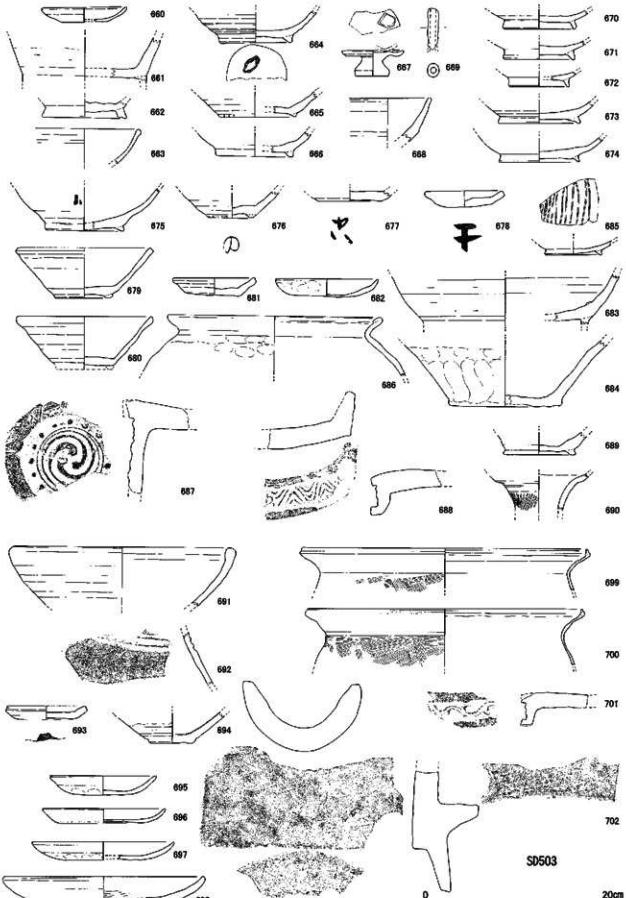
第234図　出土遺物実測図（534・535は１：２、その他１：４）



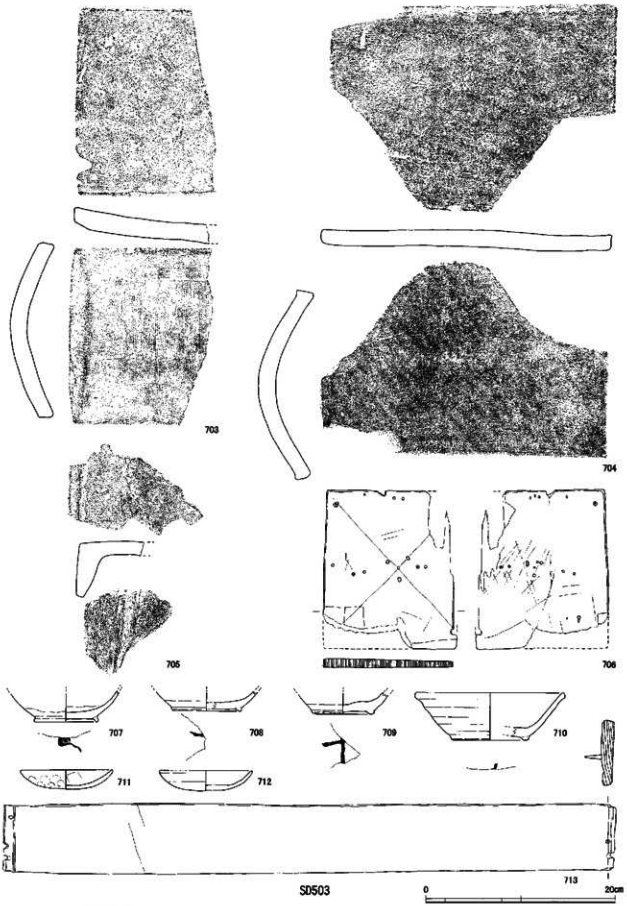
第235図　出土遺物実測図（563・564・588・589・591～595は１：２、その他１：４）



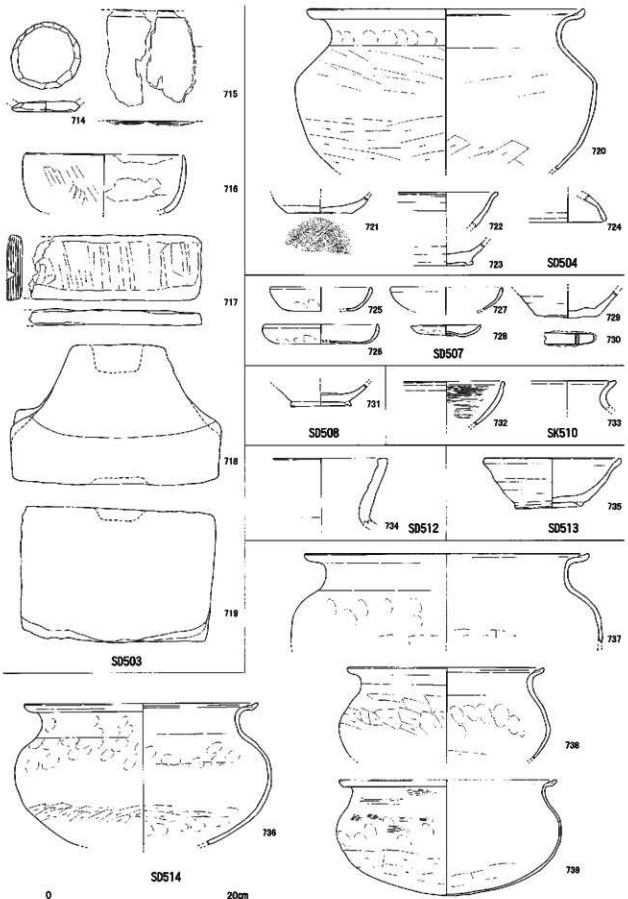
第236図　出土遺物実測図（1：4）



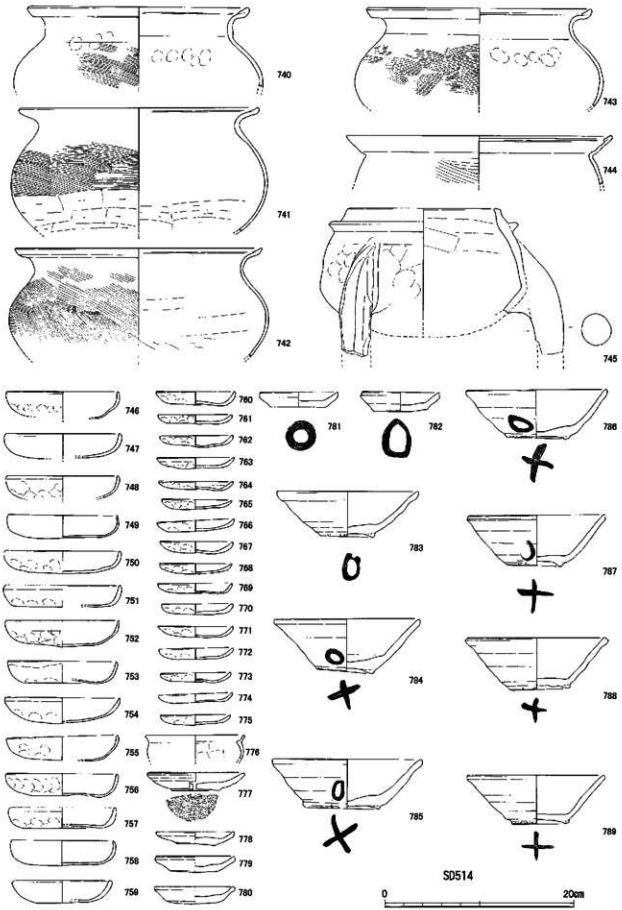
第237図　出土遺物実測図（1：4）



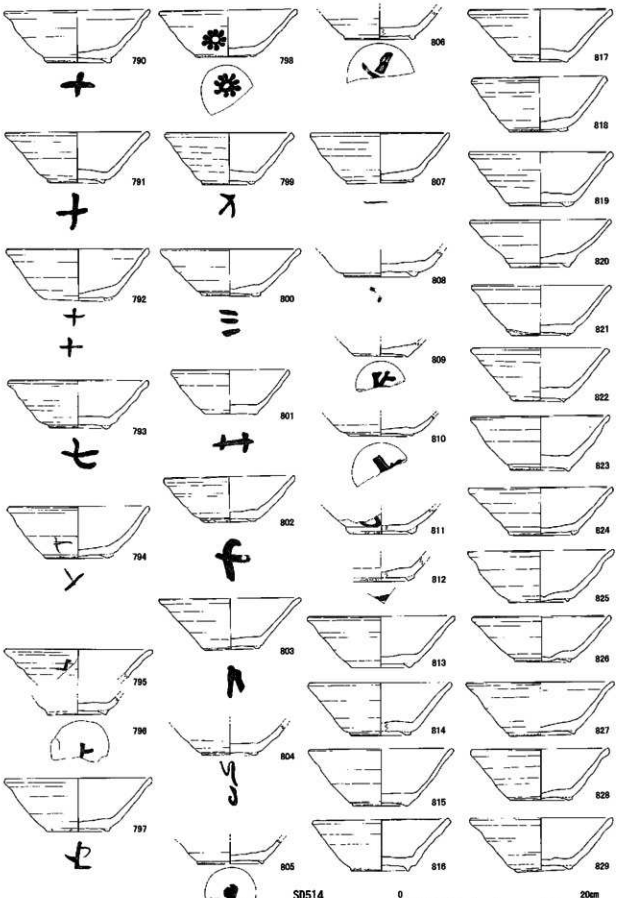
第238図　出土遺物実測図（1：4）



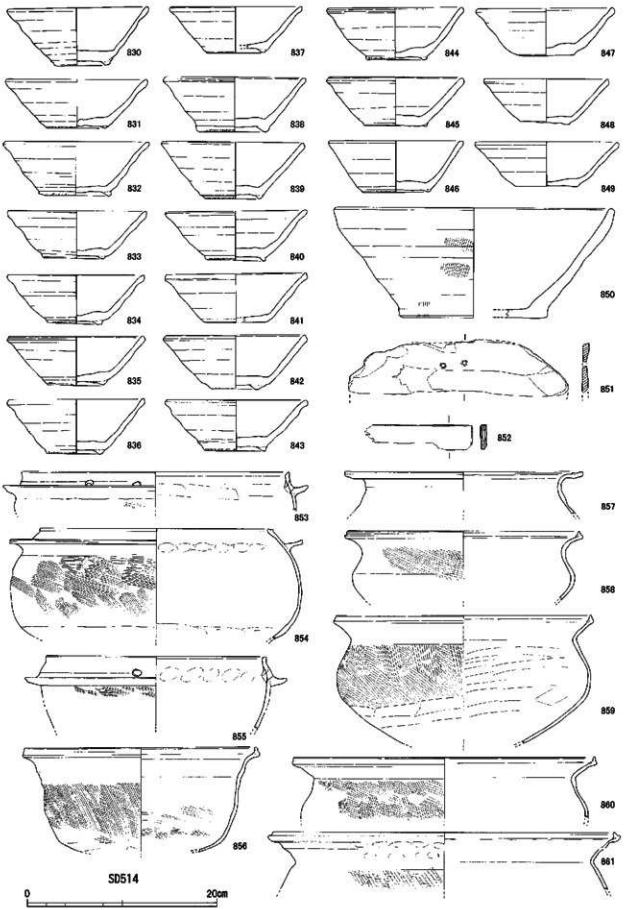
第239図　出土遺物実測図（1：4）



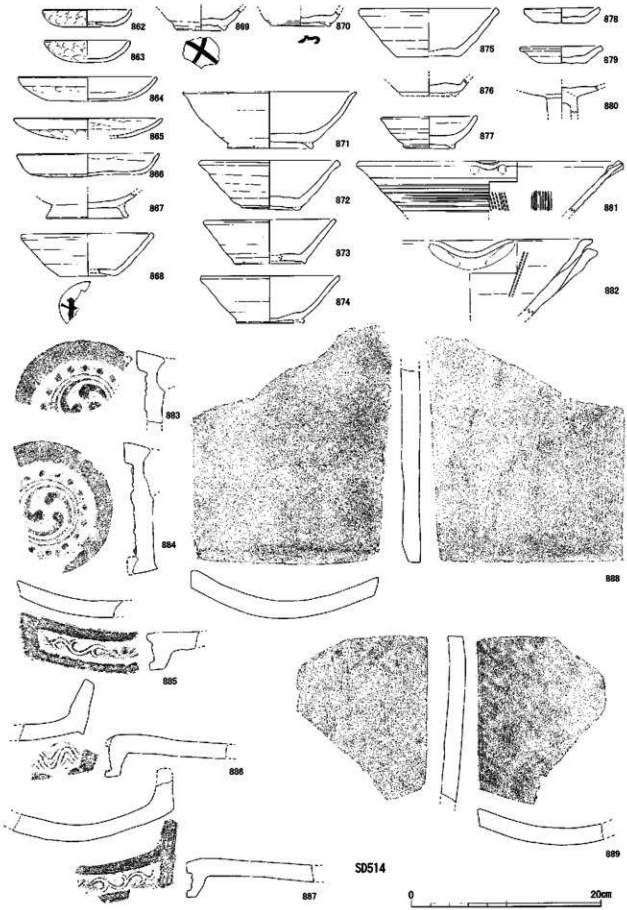
第240図　出土遺物実測図（1：4）



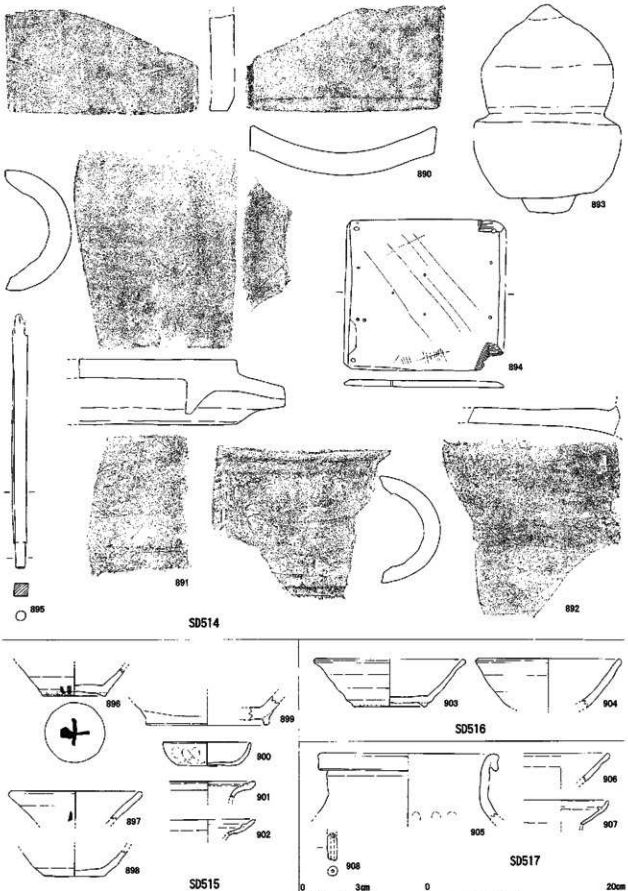
第241図　出土遺物実測図（1：4）



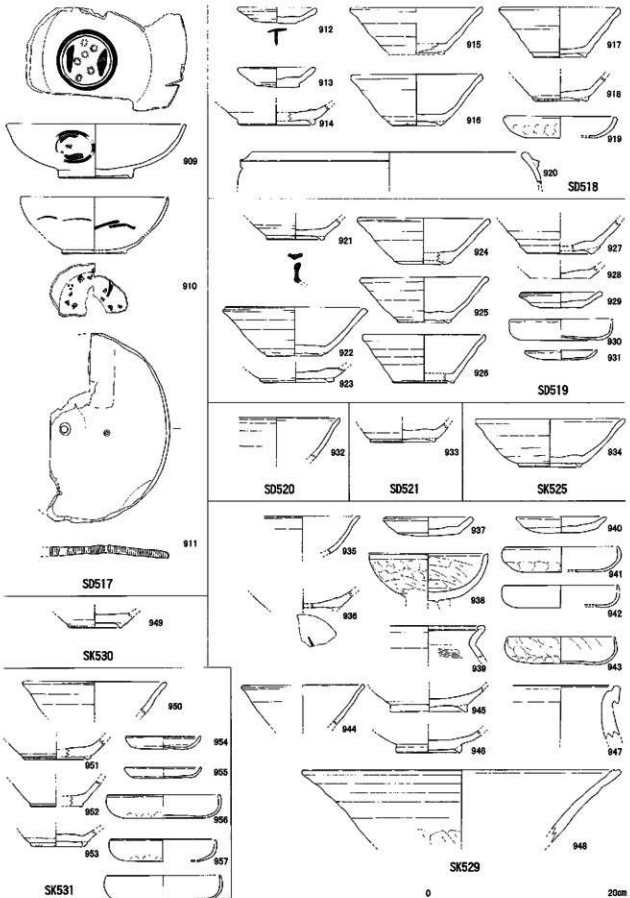
第242図　出土遺物実測図（1：4）



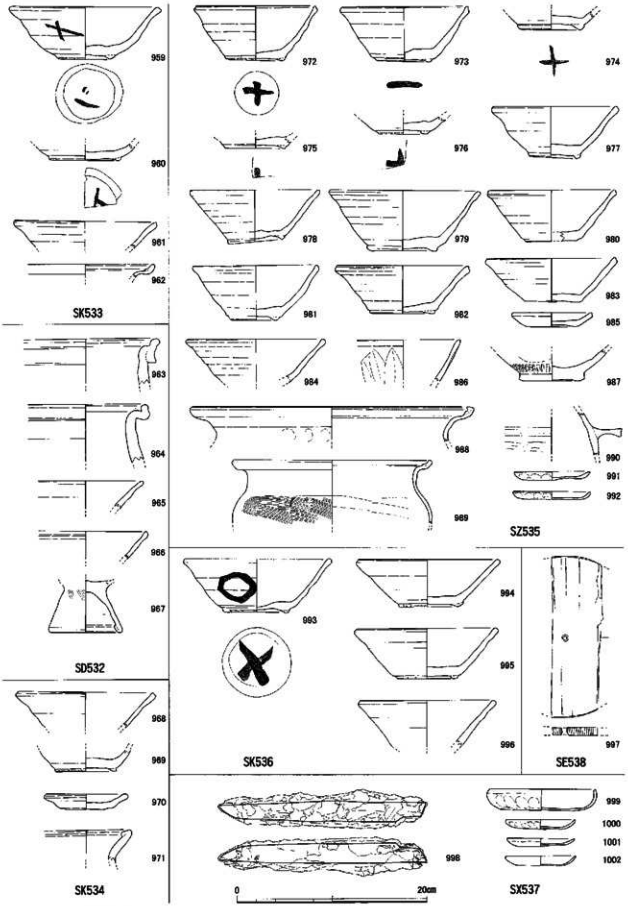
第243図　出土遺物実測図（1：4）



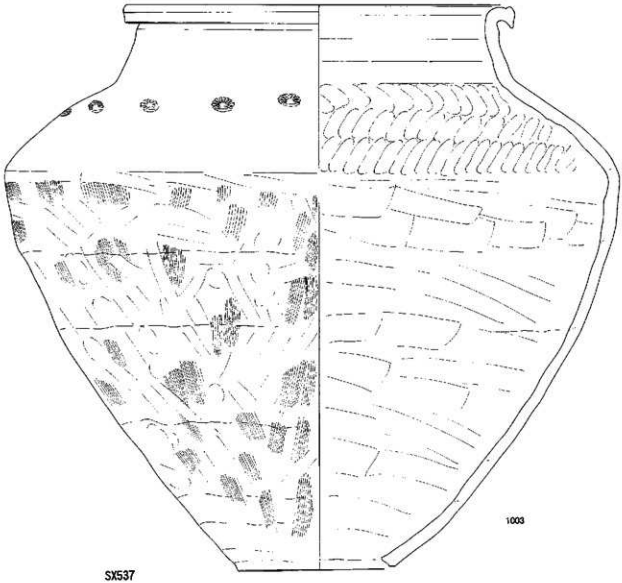
第244図　出土遺物実測図（908は１：２、その他１：４）



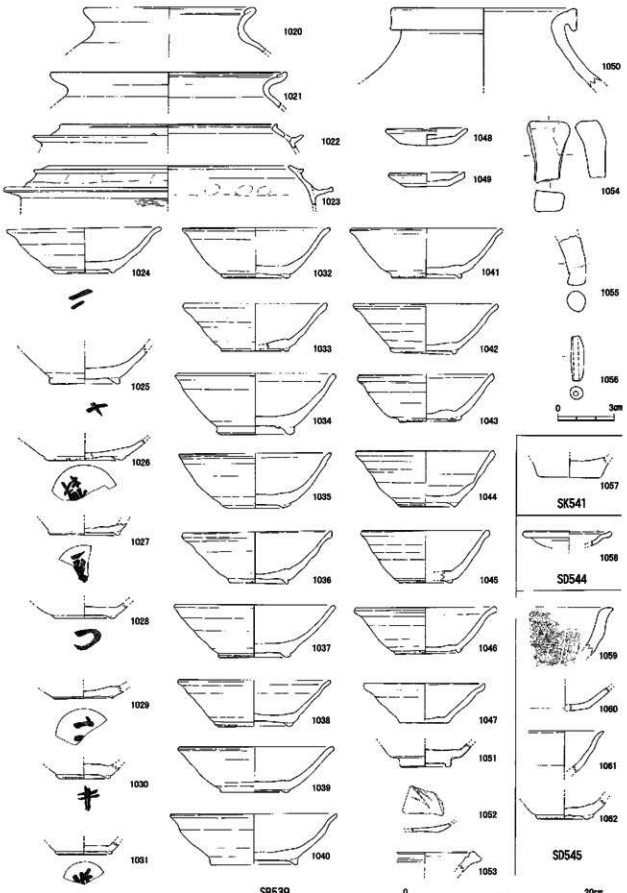
第245図　出土遺物実測図（1：4）



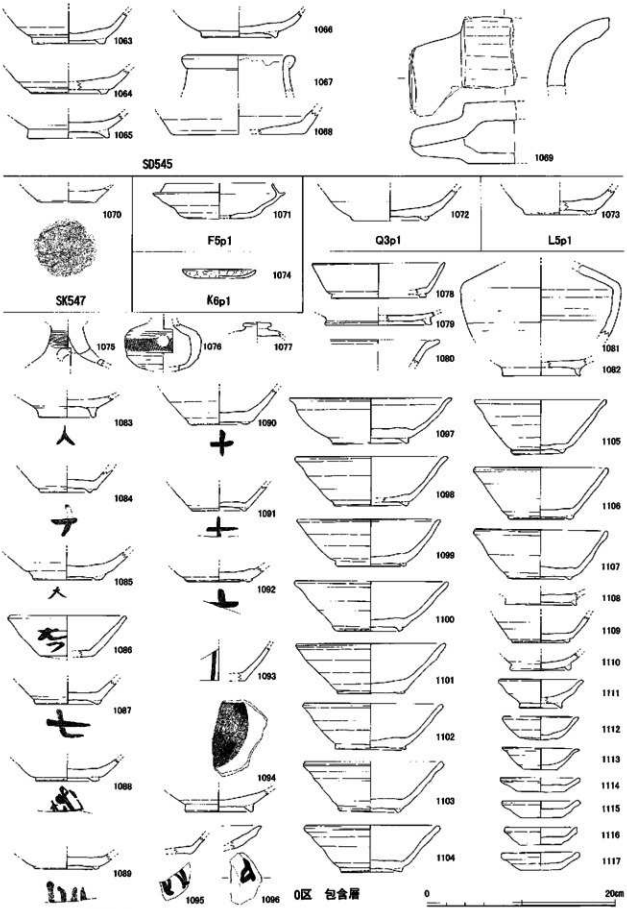
第246図　出土遺物実測図（1：4）



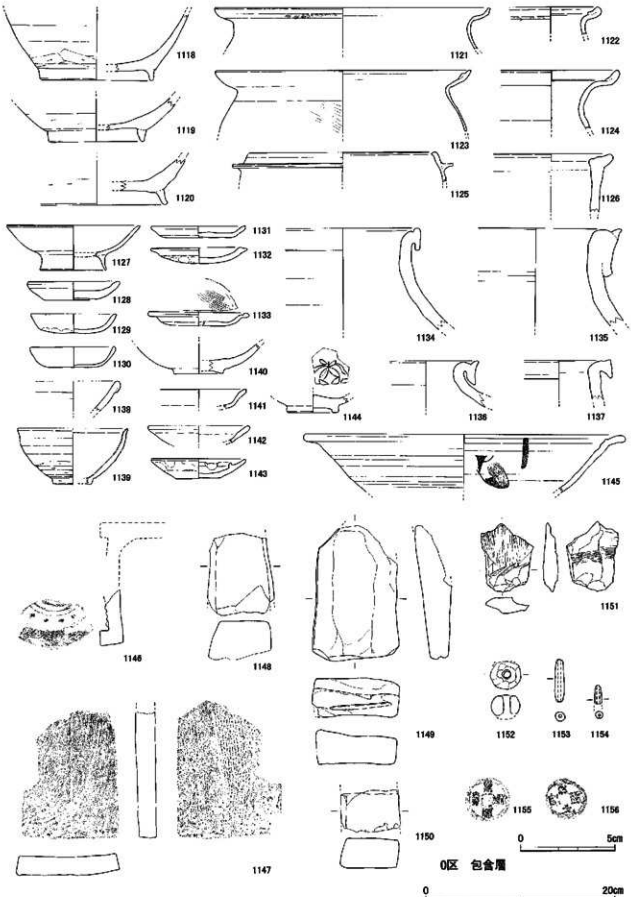
第247図　出土遺物実測図（1：4）



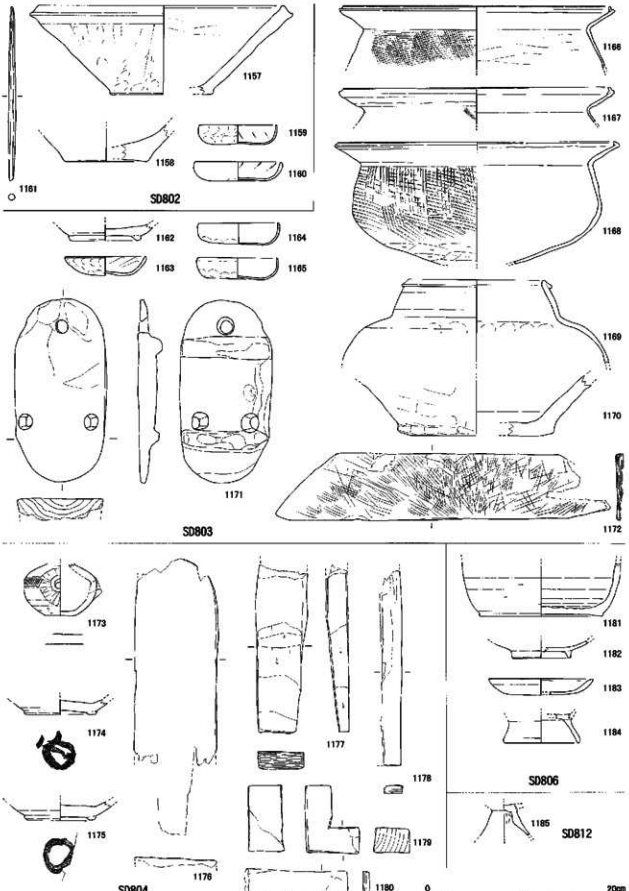
第248図　出土遺物実測図（1056のみ１：２、その他１：４）



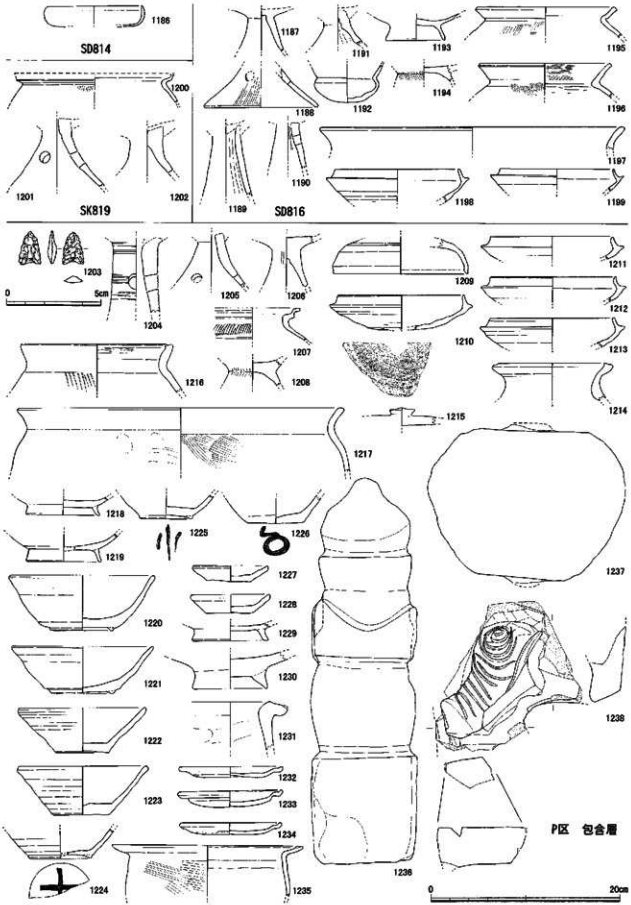
第249図　出土遺物実測図（1：4）



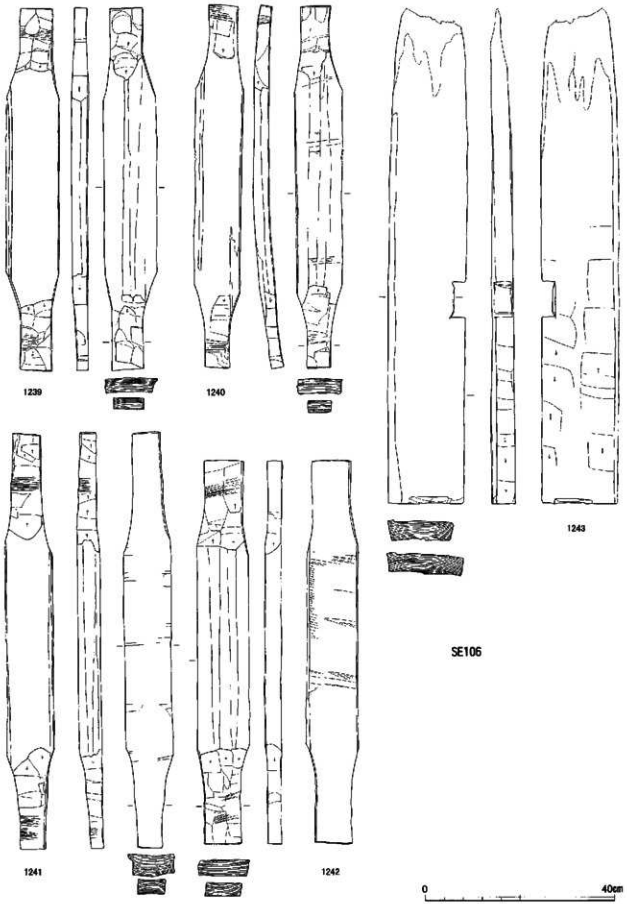
第250図　出土遺物実測図（1155・1156は１：２、その他１：４）



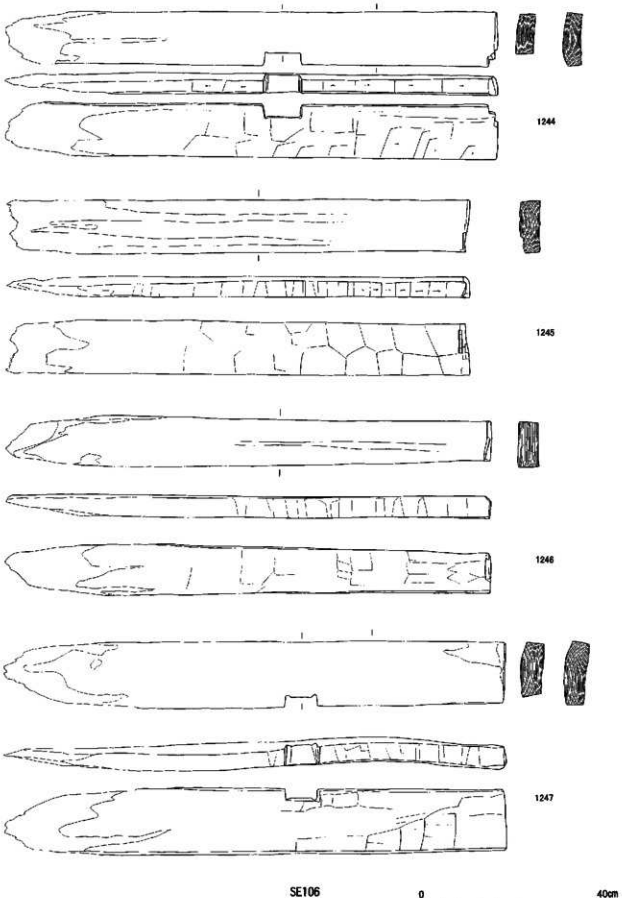
第251図　出土遺物実測図（1：4）



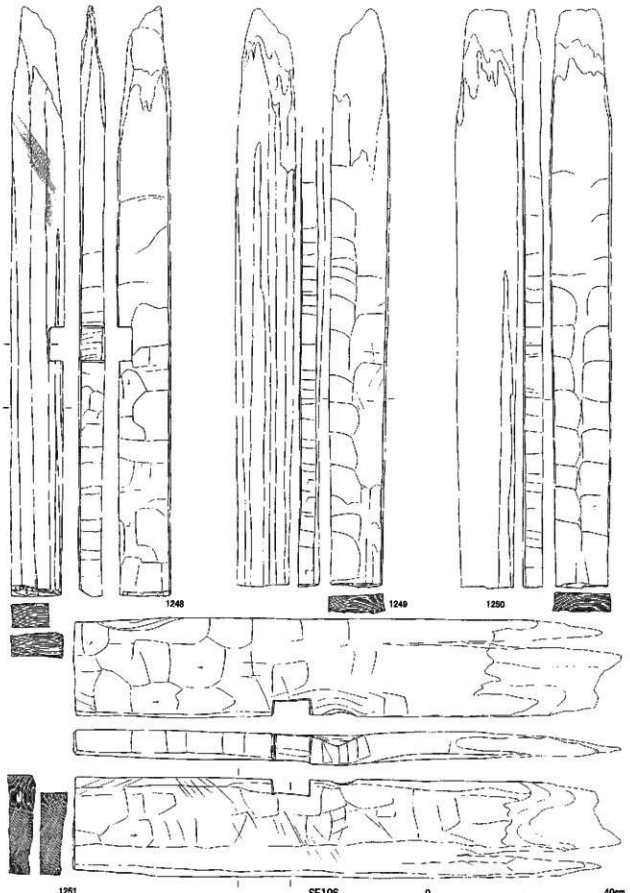
第252図　出土遺物実測図（1203のみ１：２、その他１：４）



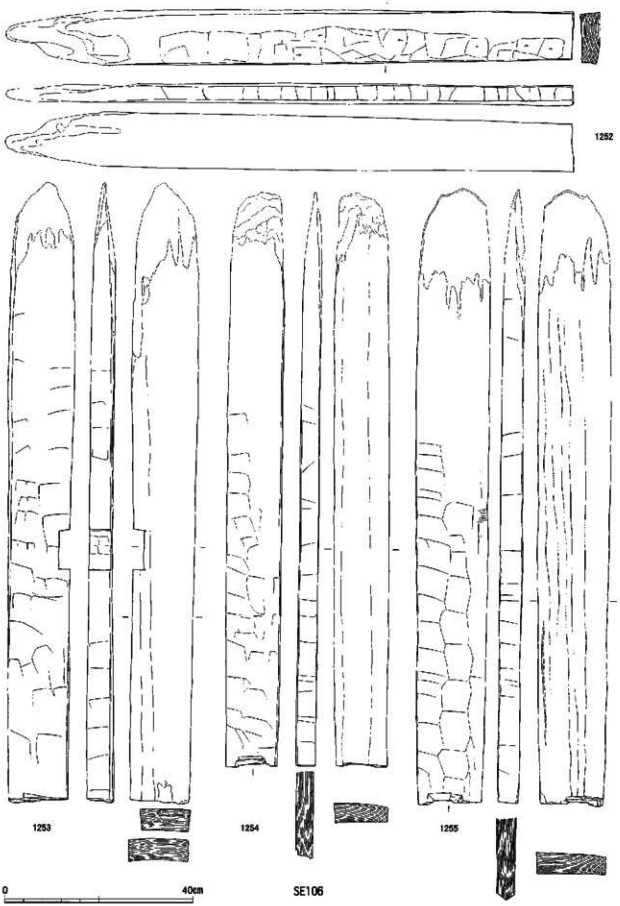
第253図　出土遺物実測図（1：8）



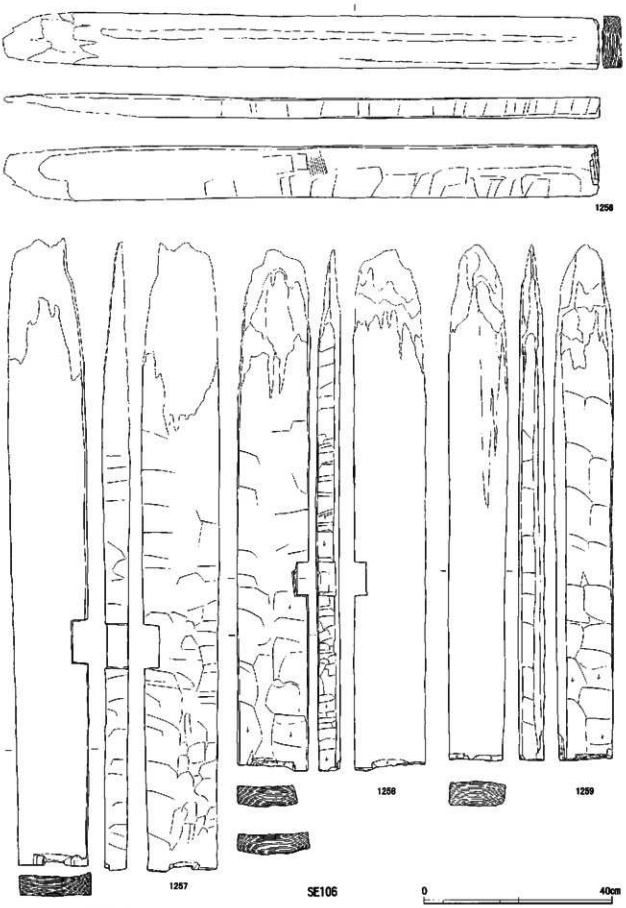
第254図　出土遺物実測図（1：8）



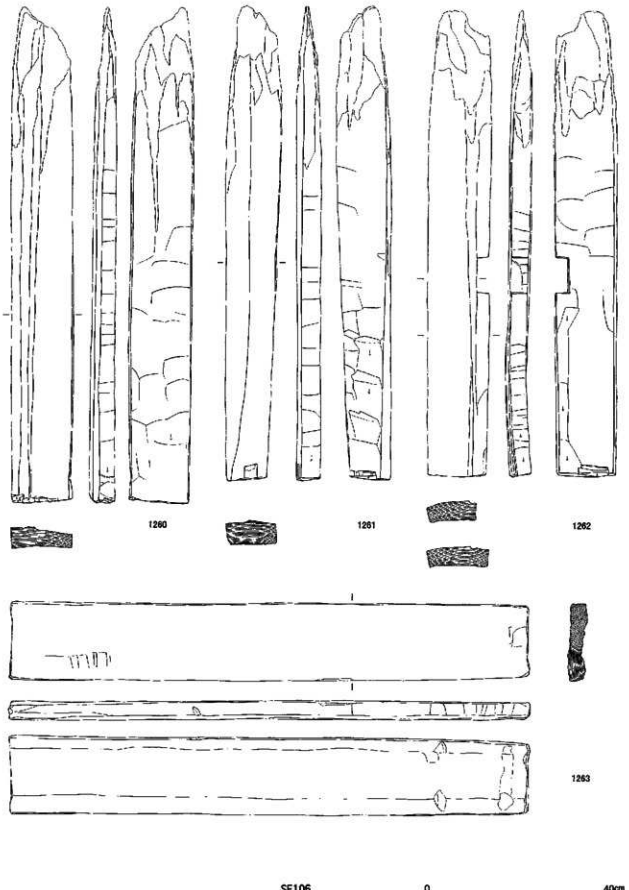
第255図　出土遺物実測図（1：8）



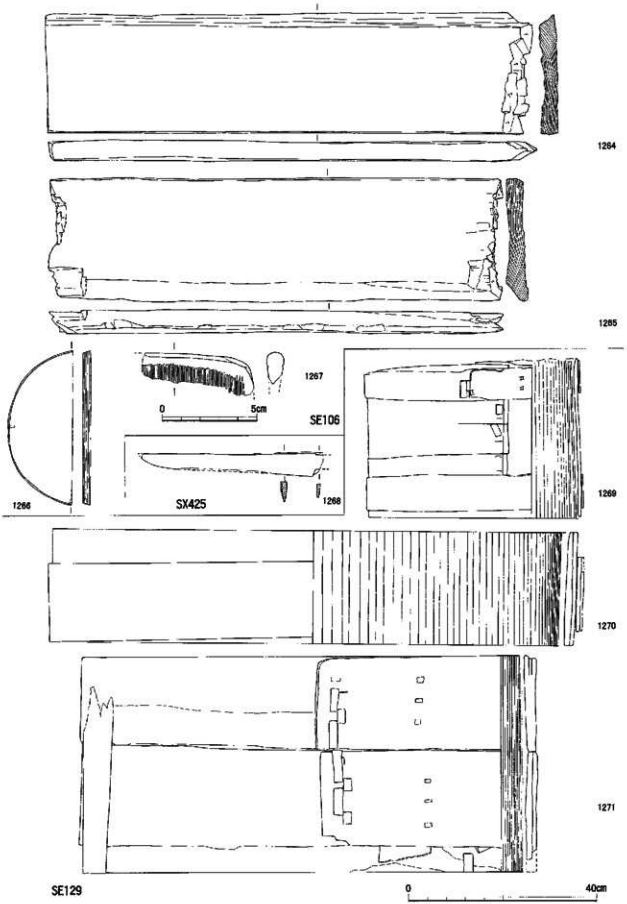
第256図　出土遺物実測図（1：8）



第257図　出土遺物実測図（1：8）



第258図　出土遺物実測図（1：8）



第259図　出土遺物実測図（1267のみ１：２、1266・1268は１：４、その他１：８）

報告番号	R No.	仮番号	質	部形	遺構	計測値			胎土	色調		残存	特記事項
						口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)					
1	5-4-2	542	弥生土器	壺	SR601	11.0			やや密	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部3/12	
2	5-5-1	551	弥生土器	壺	SR601	25.8			やや粗(~2.0mmの砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部2/12	
3	5-5-2	552	弥生土器	壺	SR601				やや粗(~2.0mmの砂粒)	褐	7.5YR4/3		
4	5-16-4	5164	弥生土器	広口壺	SR606	17.1			やや粗	橙	5YR6/6	口縁部1/12	
5	5-18-2	5182	弥生土器	壺	SR606				やや粗(~2.0mmの砂粒)	暗灰	N3/0	小片	
7	5-5-4	554	須恵器	壺	SR606	7??径	3.4		やや密	灰	N5/0	7??部3/12	内面に同心円あて具痕あり
8	5-17-1	5171	弥生土器	壺	SR607		18.0		やや粗(~4.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部1/12	
9	5-17-5	5175	弥生土器	壺	SK113	底径	4.7~5.0		粗(~3.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	底部完存	
10	5-16-1	5161	弥生土器	壺	SD116		22.6		やや粗(~2.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部4/12	外面に煤付着
11	5-17-6	5176	弥生土器	壺	SD116				やや粗(~2.0mmの砂粒)	灰	N6/0	体部片	
12	5-13-4	5134	須恵器	杯蓋	SD116	12.3	3.60		やや密	青灰	5B6/1	全体の9/12	
13	5-13-3	5133	土師器	杯	SD116	11.5	3.90		やや密	浅黄橙	7.5YR8/3	全体の6/12	底部に木の葉痕あり
14	5-13-2	5132	土師器	杯	SD116	14.3	3.40		やや粗(~3.0mmの砂粒)	灰白	5Y8/1	全体の9/12	
15	5-18-3	5183	弥生土器	壺	SD117				やや粗(~2.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	小片	
16	5-18-1	5181	弥生土器	壺	SX122				やや密	にぶい黄橙	10YR7/2	小片	
17	5-4-1	541	土師器	皿	SK103	底径	8.0		やや密	浅黄橙	10YR8/3		
18	5-6-1	561	土師器	二重口縁壺	SK103		16.3	28.60	密(~5.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/4	口縁部2/12	
19	5-6-3	563	土師器	小形S字甕	SK103		12.7		密(~2.5mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部2/12	外面に煤付着
20	5-6-2	562	土師器	高杯	SK103		17.0		密(~1.5mmの砂粒)	灰黄褐	10YR5/2	口縁部3/12	
21	5-6-5	565	土師器	高杯	SK103	基部径	3.8		密(~2.0mmの砂粒)	灰黄褐	10YR6/2	基部完存	
22	5-6-4	564	土師器	小型平底壺	SK103	底径	5.0		密(~1.5mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	底部5/12	
23	5-11-1	5111	土師器	二重口縁壺	SE105		27.0		密(~4.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部1/12	
24	5-11-5	5115	土師器	二重口縁壺	SE105		15.9		密(~1.0mmの砂粒)	にぶい橙	5YR6/4	口縁部2/12	
25	5-12-3	5123	土師器	二重口縁壺	SE105		12.8					口縁部2/12	
26	5-12-4	5124	土師器	高杯	SE105	脚部	5.2		密(~3.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	脚部6/12	
27	5-11-2	5112	土師器	小型丸底壺	SE105		8.1	9.70	密(~2.5mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部8/12	穿孔あり
28	5-10-5	5105	土師器	小型丸底壺	SE105	体部	9.9		密(~1.5mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	体部11/12	
29	5-8-3	583	土師器	小型平底壺	SE105	底径	4.3		やや密	にぶい橙	7.5YR7/4	底部完存	
30	5-10-4	5104	土師器	高杯	SE105		18.0		密(~2.0mmの砂粒)	明赤褐	2.5YR5/6	口縁部3/12	外面に煤付着
31	5-12-1	5121	土師器	高杯	SE105		15.8		密(~2.0mmの砂粒)	橙	7.5YR7/6	口縁部3/12	
32	5-9-3	593	土師器	高杯	SE105		16.7~16.2		やや密	灰白	10YR8/2	口縁部ほぼ完存	
33	5-10-1	5101	土師器	高杯	SE105	基部径	4.6		密(~2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	基部完存	
34	5-8-2	582	土師器	高杯	SE105	台径	14.2		やや粗(~3.0mmの砂粒)	橙	2.5YR6/6	台部3/12	
35	5-10-3	5103	土師器	高杯	SE105	底径	12.1		密(~1.5mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR6/4	底部2/12	
36	5-11-3	5113	土師器	高杯	SE105	底径	10.9		密(~1.5mmの砂粒)	にぶい橙	5YR7/4	底部2/12	
37	5-7-2	572	土師器	S字甕	SE105		13.4		密(~2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部完存	外面に煤付着 D類以降
38	5-9-2	592	土師器	S字甕	SE105		14.1		やや粗(~2.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部2/12	D類以降
39	5-9-1	591	土師器	S字甕	SE105		15.9		やや粗(~2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部5/12	D類以降
40	5-7-1	571	土師器	S字甕	SE105		15.7		密(~3.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR6/3	口縁部完存	内面に炭化物付着 D類以降
41	5-8-1	581	土師器	S字甕	SE105		15.0		やや密	黒褐	10YR3/1	口縁部3/12	外面に煤付着 D類以降
42	5-12-2	5122	土師器	S字甕	SE105				密(~2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR5/3		外面に煤付着 D類以降
43	5-11-4	5114	土師器	S字甕	SE105	底径	9.2		密(~2.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	底部完存	D類以降
44	5-10-2	5102	土師器	S字甕	SE105	底径	12.0		密(~2.0mmの砂粒)	橙	5YR6/6	底部2/12	外面に煤付着 D類以降
45	5-14-4	5144	土師器	杯	SD118		14.6		やや密(長石含む)	にぶい橙	5YR6/4	口縁部2/12	
46	5-14-5	5145	須恵器	杯身	SR121	受部径	13.2		密	灰白	N7/0	口縁部2/12	
47	5-16-3	5163	土師器	皿	SK114		16.0		やや密	浅黄橙	10YR8/3	口縁部3/12	
48	5-17-4	5174	土師器	製塩土器	SK114		20.0		粗(~3.0mmの砂粒)	にぶい橙	2.5YR6/4	口縁部1/12	底厚式
49	5-1-4	514	土師器	皿	SE106		15.4		やや粗(~2.0mmの砂粒)	橙	2.5YR7/6		内面に模倣状痕文
50	5-2-4	524	土師器	皿	SE106		17.8	3.50	やや密(~1.0mmの微砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/3	口縁部1/12	
51	5-3-5	535	土師器	皿	SE106		16.2	2.70	やや密(~1.5mmの微砂粒)	橙	5YR7/8		
52	5-2-4	524	土師器	皿	SE106		16.8	1.40	やや粗(~1.5mmの微砂粒)	橙	5YR7/6	口縁部1/12	内面に煤付着
53	5-2-1	521	土師器	杯	SE106		16.2	4.10	やや密(~2.0mmの砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部完存	
54	5-2-5	525	土師器	杯	SE106		13.8	4.00	やや粗(~1.5mmの微砂粒)	橙	5YR7/8	口縁部2/12	
55	5-2-3	523	土師器	杯	SE106		12.6	3.10	やや粗(~1.0mmの微砂粒)	橙	5YR7/6	口縁部完存	
56	5-2-2	522	土師器	杯	SE106		13.0	3.00	やや粗(~1.5mmの微砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部完存	
57	5-2-7	527	土師器	杯	SE106		12.6	3.30	密(~1.0mmの微砂粒)	赤橙	10R6/6	口縁部2/12弱	
58	5-1-3	513	土師器	壺	SE106		15.0		やや密(~1.5mmの微砂粒)	黒褐	10YR3/2	口縁部2/12強	外面に煤付着
59	5-1-5	515	土師器	壺	SE106		15.4		やや密(~1.0mmの微砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部3/12	内面に煤付着
60	5-1-2	512	土師器	壺	SE106		16.0		やや密(~1.5mmの微砂粒)	灰白	10YR7/1	口縁部2/12強	内面に煤付着
61	5-1-1	511	土師器	甑	SE106		30.0		やや粗(~2.5mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部1/12強	外面黒い部分あり

第11表　遺物観察表

報告番号	R No.	仮番号	質	器形	遺構	計測値				胎土	色調		焼成	特記事項
						口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)						
62	5-3-1	531	土師器	鉢	SE106		22.4	6.40		やや密(～2.5mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/2	口縁部残りわずか	「型A」
63	5-3-4	534	黒色土器	円形板	SE106					密(～1.0mmの微砂粒)	灰黄褐	10YR6/2		縁の可能性あり
64	5-2-8	528	須恵器	杯蓋	SE106		17.6			やや密(～1.0mmの微砂粒)	灰白	N7/0		内面に墨痕
65	5-3-3	533	瓦質陶器	椀	SE106					密	灰白	5Y7/1	口縁部片	内面に灰釉 釉投
66	5-3-2	532	瓦質陶器	椀	SE106					やや密(～1.0mmの微砂粒)	灰白	N8/0	口縁部片	内面に灰釉 釉投
67	5-19-5	5195	土師器	皿口皇	J-F4p5		10.1	13.50		密	橙	5YR7/6	口縁部1/12	SA631をゆるどット
68	5-20-1	5201	土師器	椀	SB154		17.0	6.40		密	浅黄橙	7.5YR6/4	口縁部1/12	
69	5-19-3	5193	陶器	山茶椀	SB154		15.0			密	(釉)灰白 (素地)黄灰	2.5Y6/1 2.5Y6/1	口縁部1/12	釉投
70	5-20-3	5203	D90土師器	小皿	J-N1p2		9.4	2.50		密	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部1/12	
71	5-20-6	5206	D90土師器	不明	J-N1p4	底径	6.8			密	にぶい黄橙	10YR7/4	底部4/12	
72	5-19-1	5191	陶器	山茶椀	J-N5p5		16.8	5.60		密	灰	N7/0	口縁部7/12	黒戸・釉投
73	5-19-6	5196	土師器	小皿	J-N5p5		9.6	1.90		密	橙	5YR7/6	口縁部ほぼ完存	てのひら皿
74	5-19-2	5192	陶器	山茶椀	J-S4p10		17.4	5.90		密(～2.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	口縁部4/12	墨痕
75	5-20-5	5205	土師器	皿	J-S4p10		17.0			やや密(～2.0mmの砂粒)	にぶい橙	5YR7/4	口縁部3/12	
76	5-20-8	5208	土師器	皿	J-U7p2		13.2			密	にぶい橙	5YR7/4	口縁部2/12	
77	5-20-2	5202	D90土師器	皿	J-R4p17		14.9	3.70		密	褐灰	10YR5/1	口縁部3/12	
78	5-20-7	5207	黒色土器	椀	J-K3p14		15.0			密	にぶい黄橙	10YR7/4	口縁部1/12	A類
79	5-19-4	5194	瓦質陶器	椀	J-K2p15		15.0			密	灰白	5Y7/1	口縁部1/12	釉投
81	5-13-1	5131	弥生土器	壺	J区包		18.3	21.20		やや粗(～3.0mmの砂粒)	褐灰	10YR5/1	口縁部6/12	底部に穿孔あり
82	5-17-2	5172	弥生土器	壺	J区包		18.0			やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰黄褐	10YR6/2	口縁部2/12以下	
83	5-17-3	5173	弥生土器	壺	J区包		13.8			やや粗(～2.0mmの砂粒)	暗褐	10YR3/1	口縁部1/12	
84	5-16-2	5162	弥生土器	壺	J区包	底径	5～5.2			やや粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	底部完存	
85	5-18-4	5184	弥生土器	壺	J区包					やや粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/3	小片	
86	5-18-5	5185	弥生土器	壺	J区包					やや粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	小片	
87	5-17-7	5177	弥生土器	壺	J区包					やや粗(～2.0mmの砂粒)	暗褐	7.5YR3/2	頸・体部片	
89	5-4-3	543	土師器	杯	J区包		12.9			やや粗(～2.0mmの砂粒)	橙	7.5YR7/6	口縁部4/12	
90	5-15-3	5153	須恵器	杯身	J区包	受部径	10.8			密(～2.0mmの長石)	灰	N6/0	口縁部2/12	
91	5-14-1	5141	須恵器	大壺	J区包		34.6			密	灰	N7/0	口縁部2/12	
92	5-14-2	5142	土師器	杯	J区包		12.4	3.40		やや粗	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部3/12	
93	5-14-3	5143	土師器	杯	J区包		14.1			密	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部2/12	
94	5-15-4	5154	青磁	香炉	J区包		11.0			密	明緑(素地)灰白	7.5GY6/1 7.5Y7/1	口縁部1/12	胴部に花文状の透かし
95	5-15-1	5151	陶器	山茶椀	J区包	底径	7.1			密	灰白	N8/0	底部4/12	黒戸
96	5-15-2	5152	陶器	山茶椀	J区包	底径	7.1			密	灰白	5Y8/1	底部6/12	胴部痕 知多・釉投
97	5-31-9	5319	鉄製品	釘	J区包		(長)2.7	(幅)0.4	(厚)0.4					
98	5-31-10	53110	鉄製品	釘	J区包		(長)4.0	(幅)0.5	(厚)0.4					
99	5-31-8	5318	鉄製品	釘	J区包		(長)4.4	(幅)0.5	(厚)0.4					
100	5-35-4	5354	土師質	土師	SK123		(長)6.0	(幅)2.8	31.54	やや密(～3.0mmの砂粒)	褐灰	10YR5/1		
101	5-35-5	5355	土師質	土師	SK123		(長)5.0	(幅)2.3	21.03	やや密(～4.0mmの小石)	にぶい黄橙	10YR7/4		
102	5-37-2	5372	弥生土器	広口壺	SD124		22.5			やや密(～4.0mmの小石)	灰黄褐	10YR5/2	口縁部ほぼ完存	
103	5-37-1	5371	弥生土器	壺	SD124					やや粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR6/3	体部片	
104	5-36-7	5367	弥生土器	細頸壺	SD124					やや粗(～2.0mmの砂粒)	橙	5YR6/6	頸部片	
105	5-36-3	5363	弥生土器	壺	SD124	底径	7.0			やや密(～4.0mmの小石)	灰黄褐	10YR6/2		
106	5-36-4	5364	弥生土器	壺	SD124	底径	4.4			やや粗(～3.0mmの砂粒)	橙	7.5YR6/6	底部はほぼ完存	
107	5-36-5	5365	弥生土器	壺	SD124	底径	8.8			やや粗(～3.0mmの砂粒)	灰黄褐	10YR6/2	底部1/4	
108	5-36-6	5366	弥生土器	壺	SD124	底径	5.7			やや密(～5.0mmの小石)	灰黄褐	10YR5/2	底部は完存	
109	5-35-3	5353	弥生土器	壺	SD124	底径	5.0			やや密(～6.0mmの小石)	にぶい褐	7.5YR5/4	底部は完存	
110	5-35-1	5351	須恵器	杯蓋	K区包		13.0	3.60		やや密	にぶい黄橙	10YR7/4	口縁部わずか	
111	5-35-2	5352	須恵器	転用硯	K区包					密	灰	N6/0		
112	5-35-7	5357	土師質	土師	K区包		(長)4.5	(幅)2.3	20.67	やや密(～4.0mmの小石)	黄灰	2.5Y5/1		
113	5-35-6	5356	土師質	土師	K区包		(長)5.8	(幅)2.1	17.91	やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1		
114	5-36-2	5362	土師質	土師	K区包		(長)5.6	(幅)3.0	44.50	やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1		
115	5-36-1	5361	土師質	土師	K区包		(長)5.6	(幅)2.6	35.60	やや密	黄灰	2.5Y4/1		
116	6-68-1	6681	弥生土器	中頸壺	SH207		13.1			密(～5.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR6/3	口縁部2/12	
117	6-39-1	6391	弥生土器	中頸壺	SH207					粗(～4.0mmの小石)	暗褐	10YR3/2	体部片	
118	6-50-1	6501	弥生土器	広口壺	SH207		11.4			やや粗(～3.5mmの小石・砂粒)	にぶい橙	5YR7/4	口縁部4/12	
119	6-69-1	6691	弥生土器	広口壺	SH207	体部径	40.0			密(～2.5mmの砂粒)	橙	7.5YR7/6	体部片	
120	6-50-2	6502	弥生土器	壺	SH207	底径	8.3			やや粗(～4.0mmの小石・砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/4	底部完存	
121	6-66-4	6664	弥生土器	細頸壺	SH207					密(～5.0mmの砂粒)	灰黄褐	10YR6/2	体部片	
122	6-69-2	6692	弥生土器	細頸壺	SH207	体部径	18.0			密(～2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	体部片	
123	6-36-3	6363	弥生土器	壺	SH207		21.0			粗(～5.0mmの砂粒)	灰黄褐	10YR5/2	口縁部1/6	
124	6-38-1	6381	弥生土器	壺	SH207		21.2			やや密(～2.0mmの砂粒)	黄灰	2.5Y5/1	口縁部1/12	外面に煤付着
125	6-70-1	6701	弥生土器	壺	SH207		12.4			粗(～5.0mmの小石)	にぶい橙	5YR6/4	口縁部6/12	外面に煤付着

第12表　遺物観察表

報告番号	R No.	板番号	質	器形	遺構	計測値				胎土	色調		残存	特記事項
						口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)						
126	6-70-1	6701	弥生土器	壺	SH207	底径	6.0			粗(～5.0mmの小石)	にぶい橙	5YR6/4	底部完存	No.125と同一個体の可能性あり
127	6-48-2	6482	弥生土器	壺	SH207		21.1			粗(～4.0mmの砂粒)	橙	5YR6/6	口縁部1/4	
128	6-37-3	6373	弥生土器	壺	SH207					やや粗(～4.0mmの砂粒)	灰褐	7.5YR6/2	口縁部小片	
129	6-37-2	6372	弥生土器	壺	SH207		15.1			やや密(～2.5mmの砂粒)	灰褐	7.5YR6/2	口縁部1/4	
130	6-68-2	6682	弥生土器	壺	SH207		10.7			密(～2.0mmの砂粒)	褐灰	10YR4/1	口縁部2/12	
131	6-39-2	6392	弥生土器	広口壺	SH230					粗(～5.0mmの小石)	褐灰	10YR6/1	口縁部小片	
136	6-60-6	6606	弥生土器	壺	SH230					粗(～2.0mmの砂粒)	灰褐	7.5YR4/2	体部片	
142	6-35-2	6352	弥生土器	鉢状壺	SH203		8.9			粗(～3.0mmの砂粒)	橙	7.5YR6/6	口縁部片	
143	6-65-1	6651	弥生土器	鉢状壺	SH203					密	にぶい黄橙	10YR5/3	体部片	
144	6-84-2	6842	弥生土器	鉢状壺	SH203					密	灰黄褐	10YR6/2	体部片	
145	6-40-1	6401	弥生土器	壺	SH203		26.0			粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい褐	7.5YR6/3	口縁部6/12	
146	6-40-2	6402	弥生土器	壺	SH203	底径	4.2			粗(～4.0mmの小石)	灰黄	2.5Y7/2	底部のみ完存	
147	6-35-3	6353	弥生土器	広口壺	SH211		17.8			粗(～3.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部1/2	口縁内面に段状突起4ヵ所3方向残
148	6-36-1	6361	弥生土器	鉢状壺	SH211		10.3			粗(～2.5mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部2/3	
149	6-37-1	6371	弥生土器	壺	SH211	底径	5.8			粗(～2.5mmの砂粒)	にぶい橙	2.5YR/4	底部完存	
150	6-36-2	6362	弥生土器	壺	SH211					粗(～3.0mmの砂粒)	灰黄褐	10YR6/2	口縁部小片	
154	6-31-5	6315	弥生土器	壺	SK201					やや粗(～2.5mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部片	
155	6-34-4	6344	弥生土器	鉢状壺	SK204		10.4			やや粗(～2.5mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部1/4	
156	6-56-4	6564	土師質	土鍋	SK205		(長)4.5	(幅)1.3	5.7	密	暗灰	N3/0		
157	6-56-5	6565	土師質	土鍋	SK205		(長)2.8	(幅)1.5	2.0	密	黒	7.5YR2/1		
159	6-32-1	6321	弥生土器	壺	SK211		23.0			粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部5/12	外面に煤付着
160	6-28-4	6284	弥生土器	壺	SK221					粗(～4.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部片	
161	6-33-2	6332	弥生土器	広口壺	SK223		15.1			やや粗(～1.5mmの砂粒)	灰黄褐	10YR6/2	口縁部1/4	
162	6-47-1	6471	弥生土器	壺	SK223		25.0			粗(～2.5mmの砂粒)	にぶい橙	5YR6/4	口縁部1/3	外面に煤付着
163	6-31-1	6311	弥生土器	壺	SK233		26.0			粗	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部1/5	
164	6-35-1	6351	弥生土器	壺	SK233		40.0			粗(～5.0mmの砂粒)	橙	2.5YR6/6	口縁部1/6	外面に煤内面に炭化物付着
166	6-30-1	6301	弥生土器	鉢状壺	SK238		10.8			粗(～2.0mmの砂粒)	黒褐	10YR3/2	口縁部ほぼ完存	
167	6-64-3	6643	弥生土器	壺	SK238					密	灰黄褐	10YR5/2	体部片	No.166と同一個体か
168	6-69-3	6693	弥生土器	壺	SK238					密(～2.5mmの砂粒)	灰黄褐	10YR6/2	体部片	No.166と同一個体か
169	6-69-3	6693	弥生土器	壺	SK238					密(～2.5mmの砂粒)	灰黄褐	10YR6/2	体部片	No.166と同一個体か
170	6-29-2	6292	弥生土器	壺	SK238		8.1			粗(～3.0mmの砂粒)	橙	7.5YR6/6	底部完存	
171	6-30-6	6306	弥生土器	壺	SK239					粗(～2.5mmの砂粒)	にぶい褐	7.5YR6/3	口縁部片	
172	6-30-5	6305	弥生土器	壺	SK239					粗(～4.0mmの小石)	浅黄橙	7.5YR8/3	口縁部片	
173	6-29-1	6291	弥生土器	壺	SK240		28.1			粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部1/5	
175	6-27-4	6274	弥生土器	鉢状壺	SK242		10.0			粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部片	
176	6-31-3	6313	弥生土器	壺	SK242					粗(～4.0mmの小石)	黒褐	10YR3/2	口縁部片	
179	6-71-1	6711	弥生土器	広口壺	SK244	底径	6.0			粗(～5.0mmの小石)	明赤褐	5YR5/6	底部完存	
180	6-46-1	6461	弥生土器	広口壺	SK244	底径	6.0			粗(～5.0mmの小石)	黒	10YR1/2	底部2/3	
181	6-72-1	6721	弥生土器	壺	SK244		19.6	18.60		密(～2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR6/3	口縁部2/12	内面に炭化物付着
182	6-74-1	6741	弥生土器	壺	SK244		26.8	24.70		粗(～3.0mmの砂粒)	灰黄褐	10YR5/2	口縁部2/12	外面に一部煤付着
183	6-77-1	6771	弥生土器	壺	SK244		21.0			粗(～2.0mmの砂粒)	灰黄褐	10YR4/2	口縁部7/12	外面に煤付着
184	6-77-1	6771	弥生土器	壺	SK244	底径	6.0			粗(～2.0mmの砂粒)	灰黄褐	10YR4/2	底部完存	No.183と同一個体
185	6-33-1	6331	弥生土器	壺	SK244		20.2			粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部1/3	
186	6-76-1	6761	弥生土器	壺	SK244		30.3			やや密(～2.0mmの砂粒)	灰黄褐	10YR5/2	口縁部2/12	外面に煤付着
187	6-32-3	6323	弥生土器	壺	SK244					粗(～1.5mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR6/3	口縁部片	
188	6-32-2	6322	弥生土器	壺	SK244					粗(～1.5mmの砂粒)	褐灰	10YR5/1	口縁部片	
189	6-30-2	6302	弥生土器	壺	SK244	底径	5.9			粗(～5.0mmの小石)	灰黄褐	10YR6/2	底部完存	底部に穿孔
190	6-78-1	6781	弥生土器	広口壺	SK252		17.1			粗(～3.0mmの砂粒)	橙	2.5YR6/6	口縁部6/12	口縁内面に突起あり(2ヶ所確認)
191	6-54-4	6544	弥生土器	壺	SK253	底径	5.6			粗(～3.0mmの砂粒)	灰褐	7.5YR5/2	底部完存	
192	6-55-2	6552	弥生土器	壺	SK253	底径	5.8			粗(～7.0mmの石)	にぶい橙	7.5YR6/4	底部完存	
193	6-30-7	6307	土師質	土鍋	SK253		(長)3.7	(幅)1.1	3.2	やや粗(～1.0mmの微砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2		
194	6-31-4	6314	弥生土器	壺	SK260					粗(～2.5mmの砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部片	
195	6-27-5	6275	弥生土器	壺	SK260	底径	5.8			粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい橙	5YR6/4	底部完存	底部に焼成後穿孔
196	6-75-1	6751	弥生土器	壺	SK275		33.2			やや粗	橙	7.5YR6/6	口縁部4/12	体部に一列複状隆起
197	6-72-1	6721	弥生土器	広口壺	SK275		14.7			粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部2/12	
198	6-57-1	6571	弥生土器	壺	SK277					粗(～2.5mmの砂粒)	灰褐	7.5YR6/2	全体に残少量	
199	6-79-1	6791	弥生土器	壺	SK277	底径	7.0			粗(～10.1mmの小石)	にぶい橙	7.5YR7/4	底部完存	
200	6-31-2	6312	弥生土器	壺	SK284		26.0			粗(～3.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部1/4	
201	6-33-3	6333	弥生土器	壺	SK284					粗(～1.5mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR6/4	口縁部片	
202	6-27-3	6273	弥生土器	壺	SK284					粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部片	
204	6-72-2	6722	弥生土器	広口壺	SK285		21.1			粗(～5.0mmの小石・砂粒)	橙	5YR7/6	口縁部6/12	

第13表　遺物観察表

報告番号	R No.	板番号	質	部形	遺構	計測値				胎土	色調	残存	特記事項
						口径（cm）	器高（cm）	重量（g）					
205	6-13-4	6134	弥生土器	広口壺	SK288					粗(～4.0mmの小石)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部片 口縁内面に擬状突起
206	6-61-2	6812	弥生土器	広口壺	SK288					やや粗(～4.0mmの小石・砂粒)	褐灰	2.5YR4/1	体部片
207	6-16-2	6162	弥生土器	壺	SK288					やや粗(～2.0mmの砂粒)	黄橙	7.5YR7/8	口縁部片
208	6-58-1	6581	弥生土器	壺	SK288		23.1			粗(～4.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR6/3	口縁部1/4
209	6-16-1	6161	弥生土器	壺	SK288					やや粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい黄	2.5Y6/4	口縁部片
210	6-58-2	6582	弥生土器	壺	SK288		26.0			粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR6/3	口縁部1/8
211	6-23-1	6231	弥生土器	壺	SK288		27.1			やや粗(～3.0mmの砂粒・小石)	暗灰黄	2.5Y5/2	口縁部4/12 外面に煤付着
212	6-24-1	6241	弥生土器	壺	SK288		33.0			やや粗(～1.5mmの小石・雲母)	オリーブ黒	5Y3/1	口縁部3/12
213	6-45-1	6451	弥生土器	壺	SK288		20.8			粗(～3.5mmの小石・砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部4/5
214	6-56-1	6561	弥生土器	壺	SK292		26.0			粗(～5.0mmの小石)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部1/6強
215	6-55-1	6551	弥生土器	壺	SK304		26.0			粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部1/2 外面に煤付着
216	6-34-3	6343	弥生土器	壺	SK304	底径	7.8			粗(～5.0mmの小石・砂粒)	褐灰	10YR5/1	
217	6-28-1	6281	弥生土器	壺	SK307		34.2			粗(～3.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部1/7
218	6-23-3	6233	弥生土器	壺	SK309					やや粗(～4.0mmの小石)	にぶい黄橙	10YR6/3	口縁部片
219	6-23-2	6232	弥生土器	壺	SK309					やや粗(～3.5mmの小石・砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部片
220	6-15-3	6153	弥生土器	壺	SK309	底径	5.7			粗(～4.0mmの小石・砂粒)	橙	5YR6/8	底部完存 焼成後底部穿孔
221	6-11-5	6115	弥生土器	小形壺	SK309	底径	5.8			粗(～3.0mmの砂)	灰白	10YR8/1	底部は完存 一部赤彩か
222	6-15-1	6151	弥生土器	壺	SK309	底径	7.8			粗(～8.0mmの小石・砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	底部完存
224	6-55-3	6553	弥生土器	壺	SK310	底径	6.6			粗(～5.5mmの小石)	にぶい橙	7.5YR6/4	底部完存
225	6-14-1	6141	弥生土器	広口壺	SK312		16.2			粗(～8.0mmの小石)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部片 口縁内面に擬状突起
226	6-19-1	6191	弥生土器	広口壺	SK312		25.0			粗(～3.0mmの砂粒)	橙	5YR6/6	口縁部のみ残存 口縁内面に擬状突起
227	6-17-1	6171	弥生土器	広口壺	SK312		17.0			やや粗(～4.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/4	口縁部1/8
228	6-18-1	6181	弥生土器	広口壺	SK312		18.7			粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい橙	5YR6/4	口縁部3/4 口縁内部に突起あり
229	6-80-1	6801	弥生土器	広口壺	SK312					やや粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	体部片
230	6-15-2	6152	弥生土器	壺	SK312	底径	6.1			粗(～4.0mmの小石・砂粒)	黄橙	7.5YR7/8	底部完存
232	6-25-1	6251	弥生土器	広口壺	SK314		16.0			やや粗(～5.0mmの砂粒・小石)	橙	5YR6/6	全体の3/12 口縁内面に擬状突起
233	6-26-1	6261	弥生土器	鉢	SK314		26.7			粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部1/4
234	6-54-5	6545	弥生土器	壺	SK314					やや粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR6/3	口縁部片
235	6-56-3	6563	弥生土器	壺	SK314	底径	6.3			やや粗(～5.0mmの小石)	にぶい橙	5YR6/4	底部完存 底部に木の葉痕跡
236	6-55-4	6554	弥生土器	壺	SK316	底径	6.0			粗(～3.5mmの小石)	にぶい黄橙	10YR7/2	底部完存
239	6-28-3	6283	弥生土器	壺	SK316	底径	7.0～7.3			粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい橙	5YR7/4	底部は欠完存
240	6-56-2	6562	弥生土器	壺	SK316	底径	8.0			やや粗(～4.5mmの小石)	にぶい橙	7.5YR7/3	底部完存
241	6-55-5	6555	弥生土器	壺	SK326		20.0			粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/3	口縁部1/6
242	6-84-1	6841	弥生土器	壺	SK326	体部径	24.0			密(～2.5mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR6/3	体部片
243	6-49-2	6492	弥生土器	壺	SK326		23.2			やや粗(～1.0mmの砂粒)	灰褐	7.5YR4/2	口縁部4/12 外面に煤付着
245	6-13-3	6133	弥生土器	壺	SD313					粗(～4.0mmの小石)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部片
246	6-8-5	685	弥生土器	壺	SD317	底径	5.6			やや密(～5.0mmの小石)	浅黄橙	10YR8/3	底部完存
247	6-60-2	6602	弥生土器	壺	SD340					やや粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	体部片 胴部に刺目隆帯
248	6-13-2	6132	弥生土器	壺	SD340					粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい橙	5YR6/4	口縁部片
253	6-57-2	6572	弥生土器	小形鉢	C13p3		15.3			粗(～5.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部1/3
254	6-62-1	6621	弥生土器	壺	E13p3		23.1			粗(～2.0mmの砂粒)	灰黄褐	10YR6/2	口縁部3/12
255	6-45-2	6452	土師器	広口壺	SK222		15.2			やや密(微砂粒)	浅黄橙	7.5YR6/6	口縁部2/3
256	6-68-3	6683	土師器	小形丸底鉢	SK222	体部径	6.5			密(～1.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	体部5/12
257	6-46-2	6462	土師器	S字甕	SK222	底径	9.1			やや密	橙	2.5YR6/6	底部4/5
258	6-30-4	6304	須恵器	杯身	SK241		10.5	3.70		やや密(～2.5mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部1/3
259	6-54-6	6546	土師器	手捏ね土器	SK307		2.1	1.95		やや密(～2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部残少量
260	6-34-5	6345	土師器	杯	SE327		11.8	4.40		やや粗(～1.5mmの砂粒)	明褐	7.5YR5/6	底部に小片 底部に木の葉痕あり
261	6-51-2	6512	土師器	杯	SE327		11.3	4.00		やや粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部小片 底部に木の葉痕ちあり
262	6-51-1	6511	土師器	杯	SE327		13.2	2.70		やや密	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部7/8
350	6-30-3	6303	土師器	椀	SB344	底径	8.3			やや密(～1.5mmの微砂粒)	にぶい橙	5YR7/4	底部完存
351	6-62-7	6627	土師質	土師	SB344	残存	(長)2.7	(幅)1.0	2.7	やや粗(～1.0mmの砂粒)	黄灰	2.5Y6/1	
352	6-62-6	6626	土師質	土師	SB344	残存	(長)4.5	(幅)1.4	7.6	密	にぶい橙	5YR6/4	
353	6-60-7	6607	須恵器	杯	SB345		13.0	4.45		密	灰白	N7/0	口縁部2/12
354	6-60-5	6605	土師器	皿	SB345					やや粗(～1.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/1	口縁部片
355	6-60-3	6603	土師器	皿	SB345		17.0	2.35		やや密(～1.0mmの砂粒)	橙	5YR7/6	口縁部2/12
356	6-88-3	6883	鉄製品	釘	SB345	残存	(長)4.9	(幅)0.4	(厚)0.3				
357	6-57-3	6573	黒色土器	鉢	SB349		23.6	7.35		やや密(～5.0mmの砂粒)	橙	5YR6/6	口縁部1/4
358	6-62-3	6623	緑釉陶器	椀	SE266	高台径	7.2			やや密(～2.0mmの砂粒)	オリーブ	7.5Y5/3	底部残少量
359	6-32-4	6324	土師器	壺	SK270					やや密	褐灰	10YR4/1	口縁部片

第14表　遺物観察表

報告番号	R No.	板番号	質	器形	遺構	計測値				胎土	色調		残存	特記事項
						口径（cm）		器高（cm）	重量（g）					
360	6-8-1	681	土師器	壺	SD208					やや密(～1.0mmの砂粒・雲母)	橙	5YR7/6	口縁部片	
361	6-81-1	6811	須恵器	提瓶	SD208					やや密	灰白	N7/0	体部片	
362	6-7-6	676	土師器	壺	SD209		13.4			やや粗(3.0mmの小石・砂粒・雲母)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部2/12	
363	6-8-2	682	土師器	壺	SD209		16.2			密(～1.0mmの砂粒・小石・雲母)	橙	2.5YR7/6	口縁部2/12	
364	6-7-7	677	土師器	杯	SD209		14.8	2.00		やや密(～1.0mmの砂粒)	橙	7.5YR7/6	全体の3/12	
365	6-7-3	673	土師器	杯	SD237		12.8			やや密(～1.0mmの砂粒)	橙	5YR7/6	口縁部4/12	
366	6-7-4	674	土師器	杯	SD237		14.0	2.70		やや密(～1.0mmの砂粒・2.5mmの小石)	橙	5YR7/6	全体の6/12	
367	6-7-5	675	土師器	壺	SD237		18.0			やや密(～1.5mmの砂粒・小石)	にぶい黄橙	10YR7/3	全体の2/12	
368	6-11-1	6111	灰釉陶器	椀	SD262	高台径	8.8			密	灰白	2.5Y7/1	高台部1/8	底面に判読不明墨痕
369	6-11-3	6113	灰釉陶器	椀	SD262		16.2	4.70		やや密	灰白	10YR8/2	口縁部3/8弱	生焼け
370	6-12-2	6122	黒色土器	椀	SD262		15.2			海黄橙	10YR8/3		口縁部残りわずか	
371	6-11-4	6114	土師器	壺	SD262		17.8			密	灰白	2.5Y8/1	口縁部1/4	
372	6-14-3	6143	土師質	土鍋	SD279		(長)5.1	(幅)2.0	22.2	やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1		
373	6-27-1	6271	須恵器	杯	SE324		12.1	3.50		やや粗(～2.0mmの砂粒)	褐灰	10YR6/1	口縁部1/9	
374	6-27-2	6272	灰釉陶器	椀	SE324		16.3			密	(釉)オリーブ灰(素地)灰白	2.5GY7/1 N8/0	口縁部1/4	
376	6-16-3	6163	灰釉陶器	椀	SD279		15.3	4.60		密	灰白	2.5Y7/1	口縁部1/4	底部墨書「大」
377	6-8-4	684	灰釉陶器	椀	SD279	高台径	7.2			密(微砂粒)	灰白	N8/0	高台部完存	底部墨書「中」
378	6-9-3	693	灰釉陶器	椀	SD279		16.6			密	(釉)灰オリーブ(素地)灰白	5Y6/2 N7/0	口縁部1/4	
379	6-9-1	691	灰釉陶器	椀	SD279		13.4	4.20		密	(釉)灰白(素地)灰白	2.5Y8/1 5Y8/1	口縁部1/2	
380	6-8-3	683	灰釉陶器	椀	SD279	高台径	7.2			密	灰白	5Y7/1	高台部残6/12	
381	6-9-4	694	DIO土師器	皿	SD279		13.4			やや密	灰白	10YR8/2	口縁部1/4	
382	6-9-5	695	DIO土師器	台付皿	SD279		16.3	5.10		やや密	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部1/2	
383	6-12-4	6124	緑釉陶器	椀	SD279	高台径	8.0			密	(釉)灰オリーブ(素地)灰	7.5Y4/2 5Y5/1	高台部1/4	
384	6-12-3	6123	黒色土器	椀	SD279		15.2			密	灰白	10YR8/2	口縁部1/5	
385	6-12-1	6121	黒色土器	椀	SD279	高台径	7.4			密	灰白	10YR8/2	高台部は完存	
386	6-9-6	696	黒色土器	椀	SD279		15.4			やや密	浅黄橙	10YR8/3	口縁部1/2弱	
387	6-11-2	6112	土師器	皿	SD279		11.9	2.00		密(～2.0mmの砂)	灰白	10YR8/1	口縁部9/16	
388	6-47-3	6473	土師器	杯	SD279		10.7	2.75		密(～1.0mmの砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部2/3	
389	6-10-3	6103	土師器	杯	SD279		12.4			やや密	浅黄橙	10YR8/3	口縁部1/3	
390	6-10-4	6104	土師器	杯	SD279		12.4			やや密(微砂粒)	灰白	2.5Y8/2	口縁部1/3	
391	6-10-5	6105	土師器	杯	SD279		12.3	3.60		やや密	灰白	10YR8/2	口縁部1/4	
392	6-10-1	6101	土師器	壺	SD279		23.2			やや密(微砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部1/4	
393	6-10-2	6102	土師器	壺	SD279		14.0			やや密(微砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部1/4	
394	6-60-2	6602	土師器	皿	C-E3p1		16.8	2.05		やや密	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部4/12	
395	6-62-2	6622	土師器	壺	C-E3p1		18.0			やや密	にぶい橙	5YR7/4	口縁部4/12	
396	6-60-4	6604	土師器	壺	C-E3p1		12.8			やや粗(～2.0mmの砂粒)	黒褐	7.5YR3/1	口縁部3/12	
397	6-59-5	6595	黒色土器	椀	C-D10p23	高台径	7.0			密(～1.0mmの砂粒)	にぶい橙	5YR7/4	高台部1/8	
398	6-59-2	6592	黒色土器	椀	C-D10p23		16.0			密(～1.5mmの砂粒)	橙	5YR6/6	口縁部1/2強	
399	6-59-4	6594	土師器	小皿	C-D10p23					密(～1.5mmの砂粒)	橙	5YR7/6	全体に残少量	
400	6-59-3	6593	土師器	杯	C-D11p6					密(～1.0mmの砂粒)	橙	5YR7/6	全体に残少量	
401	6-61-3	6613	陶器	小椀	SB352		9.0	2.70		密	灰白	2.5Y7/1	口縁部5/12	
402	6-54-3	6543	DIO土師器	小皿	SK250		9.6	1.70		やや密(～1.5mmの砂粒)	浅橙	5YR8/4	口縁部ほぼ完存	
403	6-54-2	6542	DIO土師器	小皿	SK250		9.5	1.70		やや密(～1.5mmの砂粒)	灰白	10YR8/1	口縁部完存	
404	6-54-1	6541	陶器	山茶椀	SK250		16.4	5.30		やや密(～7.0mmの砂粒・小石)	灰白	N8/0	口縁部ほぼ完存	
405	6-28-2	6282	土師器	杯	SE258		11.6	2.20		やや密	橙	5YR7/6	口縁部1/4	
406	6-51-3	6513	陶器	山茶椀	SE259		16.0	5.40		密	灰白	5Y7/1	口縁部1/10	鉄釉痕
407	6-53-1	6531	陶器	山茶椀	SE259		15.7	5.50		やや密	灰	N6/0	高台部は完存	鉄釉痕 内面に煤付着
408	6-52-2	6522	陶器	山茶椀	SE259		15.6	5.00		やや密(～3.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	高台部1/2	鉄釉痕
409	6-66-3	6663	陶器	山茶椀	SE259		16.1	4.60		密(～2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部1/12	鉄釉・知多
410	6-66-2	6662	陶器	山茶椀	SE259	高台径	7.1			密(～1.0mmの砂粒)	灰黄	2.5Y7/2	高台部完存	
411	6-52-3	6523	陶器	山茶椀	SE259		14.5	5.70		密	灰白	N8/0	口縁部1/2弱	
412	6-53-5	6535	陶器	小椀	SE259		9.2	2.80		やや密(～1.5mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	口縁部1/3	鉄釉痕
413	6-53-6	6536	陶器	小椀	SE259		8.3	2.30		密	灰白	2.5Y8/1	口縁部3/4	
414	6-86-1	6861	陶器	小皿	SE259		8.7	2.20		密(～1.5mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部4/12	墨痕 内面に墨付着
415	6-52-1	6521	陶器	鉢	SE259		32.0	12.00		やや密(～4.0mmの小石・砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部1/6	
416	6-53-2	6532	陶器	小皿	SE259		7.7	10.70		密	灰白	5Y7/1		
417	6-53-3	6533	土師器	杯	SE259		15.1	3.80		密	灰白	2.5Y8/2	口縁部1/2	
418	6-53-4	6534	土師器	杯	SE259		14.5			やや密(微砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部1/3	

第15表　遺物観察表

報告番号	R No.	板番号	質	器形	遺構	計測値				胎土	色調		残存	特記事項
						口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)						
419	6-34-1	6341	陶器	小皿	SE263		8.6	2.40		密	灰白		口縁部完存	
420	6-34-2	6342	陶器	小皿	SE263		8.5	2.60		やや密(～2.5mmの砂粒)	灰白		口縁部完存	砂痕
421	6-38-2	6382	2次土師器	杯	SK265		13.1	3.40		やや密(～1mmの砂粒)	灰黄褐	10YR6/2	口縁部1/4	
422	6-38-3	6383	陶器	山茶椀	SK265		15.6	5.30		やや粗	灰白	2.5Y7/1	口縁部1/2	刷毛痕
423	6-36-4	6364	陶器	小皿	SK265		9.3	2.90		密(～1.0mmの砂粒)	灰白	N6/0	口縁部1/2	刷毛痕
425	6-78-2	6782	土師器	杯	SX286		15.0～15.5	3.90		やや密	浅黄橙	7.5YR6/3	口縁部ほぼ完存	
426	6-78-3	6783	土師器	杯	SX286		14.3～14.6	3.30		やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部10/12	
427	6-80-3	6803	陶器	山茶椀	SD256		16.0	4.70		密	灰白	N6/0	口縁部1/12	施釉・知多
428	6-9-2	692	灰釉陶器	椀	SD256		16.7	6.50		密	(胎)灰白 (表面)灰黄	5Y7/1 2.5Y7/2	口縁部1/5	
429	6-88-7	6887	鉄製品	釘	SD237		(長)7.0	(幅)0.7	(厚)0.5					
430	6-61-2	6612	陶器	山茶椀	C-010p13		16.2	5.60		密	灰白	5Y7/1	口縁部2/12	
431	6-61-1	6611	陶器	山茶椀	C-010p13		16.1～16.6	6.00		やや密(～3.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部ほぼ完存	刷毛痕
432	6-57-4	6574	土師器	鍋	C-011p1					やや粗(～1.5mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR6/3	全体に残少量	外面に煤付着
433	6-58-3	6583	土師器	杯	C-011p1					密(～1.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	全体に残少量	
434	6-61-4	6614	2次土師器	小皿	C-012p4		9.6	1.90		やや密(微砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部6/12弱	
435	6-62-5	6625	土師質	土鍋	D-010p18		(長)4.2	(幅)1.1	4.2	やや密	にぶい黄橙	10YR7/3		
436	6-62-4	6624	土師質	土鍋	C-010p6		(長)4.1	(幅)1.1	4.6	やや密(微砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/4		
437	6-59-1	6591	土師器	鍋	C-010p6		24.0			やや密(～2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR6/3	口縁部1/7	外面に煤付着
438	6-61-6	6616	土師器	小皿	C-012p4		10.0			やや密	灰白	2.5Y7/1	口縁部2/12	
439	6-62-3	6623	土師器	小皿	C-010p2		10.3	1.70		やや密(微砂粒)	橙	5YR7/6	口縁部8/12	
440	6-61-5	6615	2次土師器	小皿	C-011p2		10.0	2.00		やや密	灰白	2.5Y7/1	口縁部小片	
441	6-63-1	6631	縄文土器	深鉢	L区包					粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部片	縄文後期堀之内式
442	6-63-3	6633	縄文土器	深鉢	L区包					粗(～2.5mmの砂粒)	灰黄褐	10YR4/2	体部？片	縄文後期堀之内式 口縁直下刷目施帯
443	6-82-1	6821	弥生土器	壺	L区包					やや粗(～4.0mmの小石)	にぶい黄橙	10YR6/3	体部片	刷目施帯
444	6-43-1	6431	弥生土器	広口壺	L区包		22.0			粗(～5.5mmの小石)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部1/2	口縁内面に磨状突起
445	6-48-3	6483	弥生土器	細頸壺	L区包		9.0			粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部1/3	
446	6-83-4	6834	弥生土器	壺	L区包	体部径	16.0			やや粗(～4.0mmの小石)	にぶい黄橙	10YR6/3	体部片	
447	6-90-1	6901	弥生土器	壺	L区包					やや粗(～2.0mmの砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部片	
448	6-44-1	6441	弥生土器	壺	L区包		21.6			粗(～4.0mmの小石)	橙	7.5YR6/6	口縁部わずか	
449	6-13-1	6131	弥生土器	壺	L区包					粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部片	
450	6-48-1	6481	弥生土器	壺	L区包		19.8			粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR6/4	口縁部1/3	外面に煤付着
451	6-43-2	6432	弥生土器	壺	L区包		8.1			粗(～5.0mmの小石)	にぶい橙	5YR7/4	底部完存	
452	6-42-1	6421	弥生土器	壺	L区包	底径	6.5			やや粗(～2.0mmの砂粒)	褐灰	10YR4/1	底部完存	底部に木の痕圧痕あり
453	6-44-2	6442	弥生土器	壺	L区包	底径	6.3			粗(～5.0mmの小石)	にぶい橙	7.5YR7/4	底部完存	
461	6-44-3	6443	須恵器	甕	SE327	体部径	9.2			やや粗(～1.5mmの微砂粒)	灰	N6/	体部は完存	一方透かしあり
462	6-42-5	6425	須恵器	杯身	L区包		10.6	3.60		密	灰白	N7/0	口縁部5/12	
463	6-41-2	6412	土師器	皿	L区包		16.0			やや粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部1/8	
464	6-41-5	6415	土師器	皿	L区包		16.7			やや粗(～2.0mmの砂粒)	橙	2.5YR7/6	口縁部1/4	
465	6-41-7	6417	土師器	皿	L区包					やや粗(～2.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部片	
466	6-41-3	6413	土師質	土鍋	L区包		(長)6.1	(幅)2.7	40.5	やや密	褐灰	10YR5/1		
467	6-41-4	6414	土師質	土鍋	L区包		(長)4.85	(幅)1.3	6.5	やや密	浅黄橙	7.5YR8/4		
468	6-41-1	6411	土師器	皿	L区包		20.1	2.80		やや粗(～2.0mmの砂粒)	橙	5YR7/6	口縁部1/5	
469	6-41-6	6416	土師器	杯	L区包		12.5	1.90		やや粗(～2.0mmの砂粒)	橙	5YR7/6	口縁部1/5	
470	6-43-4	6434	土師器	杯	L区包		13.6			やや粗(～1.5mmの微砂粒)	橙	5YR7/6	口縁部1/4	
471	6-42-4	6424	土師器	杯	L区包		14.2	3.10		やや密	灰白	10YR8/2	口縁部2/12	
472	6-82-2	6822	陶器	山茶椀	L区包		16.2	5.30		密(～1.5mmの微砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部残少量	施釉系
473	6-42-6	6426	陶器	小皿	L区包		9.1	2.70		密(3.0mmの小石一つ)	灰白	N6/0	口縁部3/12	刷毛痕
474	6-42-7	6427	須恵器	杯身	L区包		12.1	3.30		密	灰白	N7/0	口縁部1/12	杯蓋の可能性もあり
475	6-43-3	6433	土師器	杯	L区包		11.6	3.10		やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白	2.5YR6/6	口縁部2/3	
476	6-42-3	6423	土師器	小皿	L区包		10.4	1.50		やや密(～2.0mmの砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部3/12	
477	6-42-2	6422	土師器	小皿	L区包		9.5	1.55		密	浅黄橙	10YR8/3	口縁部5/12	
478	5-27-1	5271	陶器	山茶椀	SE129		17.0	5.70		やや密	灰白	7.5Y8/1	口縁部8/12	刷毛痕 知多・猿投
479	5-27-3	5273	陶器	山茶椀	SE129	高台径	6.8			やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白	N7/0		刷毛痕 猿投・瀬戸
480	5-27-4	5274	陶器	山茶椀	SE129	高台径	9.1			やや密	灰白	N6/0	高台部4/12	猿投・瀬戸 内面一部研磨
481	5-28-6	5286	陶器	小皿	SK131		8.6	1.80		やや粗(～3.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	完形	知多・猿投
482	5-28-1	5281	土師器	鍋	SD140		12.7			やや粗	明褐灰	7.5YR7/2	口縁部2/12	内外面に煤付着
483	5-27-5	5275	陶器	山茶椀	SD140	高台径	7.0			やや密	灰白	N7/0	高台部4/12	刷毛痕 猿投・知多
484	5-28-9	5289	白磁	椀	SD140	底径	6.0			密	(胎)灰白	2.5Y8/2	底部2/12	内外面施釉
485	5-28-4	5284	陶器	山茶椀	SD140	底径	6.2			密	灰白	7.5Y8/1		猿投・知多
486	5-28-8	5288	陶器	小皿	SD140		8.2			密	灰白	N6/0	口縁部3/12	瀬戸
487	5-32-1	5321	弥生土器	壺	SD146	底径	7.1～7.2			粗(～5.0mm砂粒)	灰白	10YR8/2	底部完存	

第16表　遺物観察表

報告番号	R No.	収容号	質	部形	遺構	計測値			土	色調	残存	特記事項
						口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)				
488	5-23-2	S232	土師器	鍋	SK132		24.5		やや密(~1.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR4/3	口縁部2/12
489	5-23-1	S231	土師器	鍋	SK132		27.4		やや密	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部1/12
490	5-21-2	S212	土師器	鍋	SK132		23.2		やや粗(~1.0mmの砂粒)	浅黄	2.5Y7/3	口縁部2/12
491	5-23-5	S235	土師器	小皿	SK132		7.7	1.30	やや密	灰白	10YR8/2	口縁部9/12
492	5-23-4	S234	土師器	皿	SK132		15.1	2.45	やや粗(~2.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部2/12
493	5-23-3	S233	陶器	山茶椀	SK132		16.8		密(~2.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部1/12
494	5-22-1	S221	陶器	山茶椀	SK132	高台径	7.2		密(~4.0mmの小石)	灰白	5Y7/1	高台部完存
495	5-22-2	S222	陶器	山茶椀	SK132	高台径	7.5		密	灰白	5Y7/1	高台部完存
496	5-22-5	S225	陶器	山茶椀	SK132	高台径	7.6		やや密	灰白	5Y7/1	高台部ほぼ完存
497	5-22-3	S223	陶器	山茶椀	SK132	高台径	7.2		やや密(~2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部完存
498	5-22-6	S226	陶器	山茶椀	SK132	高台径	7.3		密(~3.0mmの小石)	灰白	5Y7/1	高台部ほぼ完存
499	5-22-4	S224	陶器	山茶椀	SK132	高台径	8.0		やや密	灰白	2.5Y7/1	高台部8/12
500	5-24-1	S241	陶器	壺	SK132		15.7	36.10				口縁部3/12
501	5-21-1	S211	陶器	鉢	SK132		29.6	10.90	やや密(~2.0mmの小石・砂粒)	灰	7.5Y5/1	口縁部5/12
502	5-29-5	S295	陶器	山茶椀	SD150	底径	5.5		密(~4.0mmの小石)	灰白	N8/0	底部7/12
503	5-27-7	S277	陶器	山茶椀	SD151		16.2	8.60	密(~1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部2/12
504	5-25-7	S257	陶器	小鍋	SK134		10.1	3.20	密(~1.5mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部2/12
505	5-25-3	S253	陶器	山茶椀(転用硯)	SK134	高台径	8.0		密(~1.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	高台部7/12
506	5-25-2	S252	土師器	皿	SK134		14.5	3.40	密(~1.0mmの砂粒)	灰褐	7.5YR5/2	口縁部3/12
507	5-25-4	S254	DTO土師器	小皿	SK134		9.4		密(~1.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	口縁部3/12
508	5-25-5	S255	土師器	小皿	SK134				密(~1.0mmの砂粒)	淡赤橙		口縁部小片
509	5-25-1	S251	土師器	壺	SK134		17.2		密(~2.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部1/12
510	5-26-6	S266	土師質	土製小型鍋	SK134	長径6.4	短径3.6	2.50	密(~3.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	
511	5-26-2	S262	陶器	山茶椀	SK136	高台径	8.1		密(~2.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	高台部完存
512	5-26-5	S265	陶器	山茶椀	SK136	高台径	7.3		密(~1.5mmの砂粒)	灰白	N7/0	高台部完存
513	5-26-3	S263	陶器	山茶椀	SK136	高台径	7.9		密(~1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部完存
514	5-26-1	S261	土師器	皿	SK136		17.3	2.60	密(~3.5mmの砂粒)	にぶい橙	5YR7/4	口縁部2/12
515	5-26-4	S264	陶器	山茶椀	SK137	高台径	7.7		密(~1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部6/12
516	5-27-2	S272	陶器	山茶椀	SK138		15.4		やや密	灰白	N7/0	口縁部4/12
517	5-29-3	S293	瓦器	椀	SK138	高台径	6.1		密	暗灰	N3/0	高台部2/12
518	5-29-4	S294	緑釉陶器	椀	SK139	底径	6.0		密	(釉)オリーブ灰(素地)浅黄橙	10Y5/2 7.5YR8/3	底部2/12
519	5-27-6	S276	土師器	皿	SR153		16.0		やや密(金雲母含)	浅黄橙	7.5YR8/3	口縁部4/12
520	5-31-2	S312	土師器	壺	SB162		25.0		密	灰白	10YR8/2	口縁部1/12
521	5-30-3	S303	陶器	山茶椀	SB162	高台径	7.3~7.8		密	灰白	2.5Y7/1	高台部完存
522	5-31-3	S313	陶器	山茶椀	SB162		16.0		密	灰白	N8/0	口縁部1/12
523	5-31-4	S314	土師器	小皿	SB162		8.5	0.80	密	灰白	10YR8/2	口縁部2/12
524	5-29-2	S292	土師質	土鳥	SA166	長さ12	幅4.2		やや粗	浅黄橙	7.5YR8/3	胴体部分残存
525	5-30-1	S301	陶器	山茶椀	H7p25		15.2	5.20	密(~3.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部4/12
526	5-31-5	S315	土師器	小皿	H7p25		9.0		密	橙	2.5YR6/6	口縁部3/12
527	5-30-4	S304	陶器	山茶椀	H8p4	高台径	7.5		密	灰白	5Y7/1	高台部7/12
528	5-30-2	S302	陶器	山茶椀	H8p4	高台径	7.0		密(~5.0mmの小石・砂粒)	灰白	5Y7/1	高台部完存
529	5-30-5	S305	陶器	山茶椀	H8p4	高台径	6.7		密(~3.0mm砂粒)	灰白	5Y7/1	高台部5/12
530	5-30-8	S308	陶器	小皿	SA165		8.7	2.00	密(微砂粒)	灰白	N7/0	口縁部9/12
531	5-30-6	S306	陶器	小壺	H11p1		9.3	2.70	密	灰白	N7/0	口縁部4/12
532	5-27-8	S278	陶器	山茶椀	H3p5	高台径	8.4		やや密	灰白	N8/0	高台部7/12
533	5-28-7	S287	DTO土師器	小皿	H6p12		10.1	1.50	やや密	にぶい橙	7.5YR7/3	口縁・底部5/12
536	5-33-4	S334	縄文土器	深鉢	W3区				粗(~2.0mmの砂粒)	明褐灰	7.5YR7/2	口縁部片
537	5-33-2	S332	縄文土器	深鉢	W3区				粗(~3.0mmの砂粒)	褐灰	N3/0	口縁部片
538	5-33-3	S333	縄文土器	深鉢	W3区				粗(~2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部片
539	5-33-5	S335	縄文土器	深鉢	W3区				粗(~5.0mmの砂粒)	にぶい褐	7.5YR6/3	口縁部片
540	5-33-7	S337	弥生土器	壺	W3区				やや粗(~2.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/3	小片
541	5-33-6	S336	弥生土器	壺	W3区				粗(~3.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	小片
542	5-32-3	S323	弥生土器	壺	W3区	底径	5.5~6.0		粗(~3.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	底部完存
543	5-25-6	S256	弥生土器	壺	W3区	底径	4.4		粗(~1.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR6/3	底部隆起
544	5-32-2	S322	弥生土器	壺	W3区	底径	10.5		粗	にぶい橙	7.5YR7/3	底部4/12
545	5-33-1	S331	弥生土器	壺	W3区		35.0		粗(~2.0mmの砂粒)	にぶい橙	5YR6/4	口縁部1/12
546	5-32-4	S324	弥生土器	壺	W3区				粗(~2.0mmの砂粒)	にぶい褐	7.5YR5/3	口縁部片
547	5-32-5	S325	弥生土器	壺	W3区				粗(~3.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部片
548	5-31-1	S311	土師器	甕	W3区		17.0		密(微砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部3/12
549	5-31-7	S317	青磁	椀	W3区		15.0		密	(釉)灰オリーブ(素地)灰白	5Y6/2 5Y7/1	口縁部1/12

第17表　遺物観察表

報告番号	R. No.	遺構番号	質	器形	遺構	計測値				胎土	色調		残存	特記事項
						口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)						
550	5-31-6	5316	白磁	小皿	NB区	底径	5.5			密	(釉)灰白	7.5Y7/1	底部4/12	
551	6-47-2	6472	土師器	甕	SX425		21.3			やや粗(～3.5mmの砂粒)	灰白	2.5YR/1	口縁部1/4	外面に煤付着
552	6-21-2	6212	土師器	甕	SD433		19.2			やや粗(～1.5mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR6/3	口縁部1/8	
553	6-21-1	6211	土師器	甕	SD433		15.8			やや密(～1.0mmの砂粒)	橙	5YR7/6	口縁部1/3	
554	6-1-6	616	陶器	小皿	SK440		8.2	1.60		やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	全体の5/6	
555	6-1-5	615	陶器	小皿	SK440		8.4	1.80		やや密	灰白	5Y7/1	完存	
556	6-1-1	611	陶器	山茶椀	SK440		16.2	5.20		やや密	灰白	5Y7/1		内外面に煤付着 釉剥痕
557	6-1-3	613	陶器	山茶椀 (転用硯)	SK440	底径	5.4			やや粗	灰白	N6/0	底部のみ残存	釉剥痕
559	6-1-4	614	陶器	皿	SK409		8.4	2.30		やや密	灰白	5Y7/1	全体の1/2	
560	6-1-2	612	須恵器	高杯	SZ443		10.2			やや密	灰	N6/0	口縁部5/12	
561	6-6-1	661	20C土師器	台付皿	SZ443		8.9			やや密(～0.5mmの砂粒)	褐灰	10YR5/1	口縁部ほぼ完存	
562	6-6-2	662	20C土師器	小皿	SZ443		10.2			やや粗(～1.0mmの砂粒)	浅黄橙	7.5YR6/4	口縁部9/12	
563	6-88-4	6884	鉄製品	釘	SD401		(長)6.1	(幅)0.9	(厚)0.7					
564	6-88-1	6881	鉄製品	釘	SD401	残存	(長)2.5	(幅)0.3	(厚)0.2					
566	6-22-2	6222	陶器	山茶椀	SD405		12.7	4.90		やや密(～1.5mmの砂粒・小石)	灰白	N6/0	全体の3/12	釉剥痕
567	6-7-2	672	土師器	小皿	SD406		8.0	1.05		密	灰白	10YR8/2	ほぼ完形	
568	6-7-1	671	土師器	小皿	SD405		8.7	0.90		密	灰白	10YR8/2	完形	
569	6-21-3	6213	須恵器	杯蓋	SD408		10.5			密(～1.0mmの砂粒)	灰	N6/0	口縁部1/3	宝珠つまみ欠損
570	6-20-2	6202	陶器	大甕	SD408								口縁部小片	常滑
571	6-20-4	6204	陶器	山茶椀	SK423		15.4			やや粗(～2.5mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	口縁部1/4	
572	6-20-3	6203	陶器	山茶椀	SD435		14.5～15.2	4.6～6.1		やや粗(～2.5mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部9/10	釉剥痕
573	6-20-5	6205	陶器	山茶椀	SZ441		15.2	5.50		粗(～2.5mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部1/3	口縁内一部炭化 釉剥痕
574	6-22-1	6221	陶器	山茶椀	SK424		14.7	5.00		やや粗(～1.0mmの砂粒)	灰白	N6/0	口縁部1/8	釉剥痕
575	6-20-1	6201	陶器	大甕	SK424		18.2			やや粗(～4.0mmの砂粒)	褐灰	7.5YR5/1	口縁部1/4	常滑
576	6-5-2	652	土師器	皿	G18p2		17.1			密(～1.0mmの微砂粒)	にぶい橙	5YR7/4	口縁部1/6強	
577	6-49-3	6493	黒色土器	椀	G18p2		14.6			密(微砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	全体の8/12	
578	6-4-3	643	黒色土器	椀	G18p2		15.6	5.90		密(～2.5mmの砂粒)	橙	5YR7/6	口縁部1/4強	
579	6-4-5	645	緑釉陶器	椀	G18p2	底径	7.8			密	(釉)緑 (素地)浅黄橙	7.5YR6/4	底部1/2	
580	6-4-2	642	陶器	山茶椀	G5p1		16.0	5.10		密(～1.0mmの微砂粒)	灰白	N6/0	口縁部1/4	
581	6-4-1	641	陶器	山茶椀	G6p2		14.8	4.60		粗(～2.5mmの砂粒)	灰白	N6/0	口縁部ほぼ完存	釉剥痕
582	6-5-3	653	陶器	皿	G10p12		7.9	2.40		密(～1.0mmの微砂粒)	灰白	N6/0	口縁部1/3	
583	6-4-4	644	20C土師器	台付皿	F9p3		14.0	3.90		密(～1.5mmの微砂粒)	浅黄橙	7.5YR6/4	口縁部わずか	
584	6-5-1	651	土師器	鍋	G14p2		22.8			粗(～2.5mmの砂粒)	浅黄橙	7.5YR6/3	口縁部1/4	南伊勢系
585	6-4-7	647	土師器	小皿	G14p3		7.3	1.30		密	浅黄橙	10YR8/3	口縁部1/2弱	南伊勢系
586	6-5-4	654	土師器	小皿	G14p4		7.4	1.10		密	灰白	2.5Y8/2		
587	6-5-5	655	陶器	山茶椀	G9p1					やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1		暴露(大)?
588	6-88-8	6888	鉄製品	釘	G9p1	残存	(長)3.8	(幅)0.3	(厚)0.2					用途不明
589	6-88-6	6886	鉄製品	刺器?	F11p3	残存	(長)3.5	(幅)2.0	(厚)0.3					
590	6-4-6	646	骨蝶?	椀	B7p1	底径	5.4			密(～1.0mmの微砂粒)	(釉)明緑灰 (素地)灰白	7.5GY7/1 N6/0	底部1/3	
593	6-63-2	6632	純文土器	深鉢	NB区					粗(～3.5mmの小石)	灰白	10YR8/2	口縁部片	晩期突帯文土器
594	6-88-5	6885	鉄製品	小刀	NB区	残存	(長)7.4	(幅)2.0	(厚)0.4					
595	6-88-2	6882	鉄製品	釘	NB区	残存	(長)4.7	(幅)0.4	(厚)0.2					
596	6-65-2	6652	弥生土器	壺	NB区					密(～1.5mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	体部片	押圧隆帯
597	6-3-1	631	陶器	鉢	NB区					やや粗(～3.5mmの砂粒)	褐灰	7.5YR6/1	胴少量	
598	6-2-1	621	陶器	山茶椀	NB区		15.5～15.9	4.7～5.2		やや粗(～3.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部完存	釉剥痕
599	6-2-4	624	陶器	小皿	NB区		8.6	2.30		やや密(～1.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部1/3	
600	6-2-5	625	陶器	小皿	NB区		8.5	2.10		粗(～2.0mmの砂粒・1.0cm大の小石混じる)	灰白	N7/0	口縁部7/8	
601	6-2-3	623	陶器	小皿	NB区		8.1	1.50		やや粗(～1.5mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部少量欠く	
602	6-2-2	622	陶器	小皿	NB区		8.4	1.75		やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部3/4	
603	6-3-2	632	土師器	甕	NB区		17.8			粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい橙	5YR6/4		
604	6-3-3	633	黒色土器	椀	NB区		14.1	6.50		やや密(～1.0mmの砂粒)	浅黄橙	7.5YR6/3	口縁部1/8	黒色土器A類
605	6-2-6	626	20C土師器	小皿	NB区		10.1	1.70		やや密(～1.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部1/3	
606	6-49-1	6491	土師器	小皿	NB区		12.0			密	灰白	10YR8/2	口縁部4/12	南伊勢系
607	7-51-1	7511	陶器	壺鉢	SD501		36.2			やや密(～5.0mmの小石)	にぶい橙	2.5YR6/3	口縁部2/12	常滑
608	7-50-2	7502	陶器	山茶椀	SD501		14.1			やや密	灰白	5Y7/1	口縁部3/12	知多
609	7-50-1	7501	陶器	山茶椀	SD501		11.9			やや密(～5.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	口縁部3/12	瀬戸
610	7-49-6	7496	陶器	山茶椀	SD501	底径	5.7			やや密(～4.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	底部6/12	瀬戸
611	7-50-3	7503	陶器	山茶椀	SD501	高台径	7.1			やや粗	灰白	5Y7/1	高台部6/12	釉剥痕 知多
612	7-50-4	7504	陶器	山茶椀	SD501	高台径	8.0			やや密	灰白	N7/0	高台部8/12	渥美

第18表　遺物観察表

報告番号	R No.	収容号	質	部位	遺構	計測値				胎土	色調	焼成	特記事項
						口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)					
613	7-49-4	7494	黒色土器	椀	SD501	高台径	8.1			やや密	黒	N2/0	高台部4/12
614	7-49-5	7495	土師器	皿	SD501		8.6	2.5		やや密	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部2/12
615	7-50-5	7505	土師器	羽釜	SD501					やや粗(~2.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	小片
616	7-49-2	7492	土師器	鍋	SD501					やや密(~5.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部片
617	7-49-3	7493	土師器	鍋	SD501					やや密	にぶい黄橙	10YR7/4	口縁部片
618	7-51-2	7512	瓦		SD501	残存	長9.5	幅7.6		やや密	灰白	N6/0	
619	7-52-5	7525	灰釉陶器	椀	SD502	高台径	7.4			やや密	灰	N6/0	高台部4/12
620	6-9-7	897	灰釉陶器	椀	SD502	高台径	7.6			密	灰白	N8/0	高台部5/12
621	7-26-5	7265	陶器	山茶椀	SD502	高台径	7.8			やや密(~2.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部片
622	7-25-4	7254	陶器	山茶椀	SD502	高台径	6.7			やや密	灰白	5Y7/1	底面墨書「大」
623	7-27-1	7271	陶器	山茶椀	SD502	高台径	4.9			やや密	灰白	10YR8/1	底面墨書判読不明
624	7-27-3	7273	陶器	山茶椀	SD502					やや密	灰白	N8/0	底部小片
625	7-54-3	7543	陶器	山茶椀	SD502	高台径	7.4			やや密	灰白	N7/0	高台部8/12
626	7-54-2	7542	陶器	山茶椀	SD502	高台径	8.0			やや密	灰白	N8/0	完存
627	8-23-3	8233	陶器	山茶椀	SD502	高台径	7.0			やや密	灰白	N8/0	高台径5/12
628	7-54-6	7546	陶器	山茶椀	SD502	底径	5.8			やや密	灰白	N8/0	底部完存
629	7-54-7	7547	陶器	小皿	SD502	高台径	4.2			密	灰白	N8/0	高台部10/12
630	7-13-9	7139	白磁	椀	SD502					密	灰白	N8/0	口縁部片
631	7-13-2	7132	緑釉陶器	椀	SD502	底径	6.8			密	浅黄橙	10YR8/3	
632	8-23-4	8234	土師器	小皿	SD502		11.4			やや密	灰白	2.5Y8/1	口縁部2/12
633	7-52-1	7521	陶器	擂鉢	SD502		27.8			やや粗(~4.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/2	口縁部2/12
634	7-53-1	7531	土師器	羽釜	SD502					やや粗(~2.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部片
635	7-53-2	7532	土師器	羽釜	SD502					やや粗(~2.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部片
636	8-19-2	8192	土師器	鍋	SD502					やや粗(~2.0mmの砂粒)	灰黄褐	10YR5/2	口縁部片
637	8-10-2	8102	黒色土器	椀	SD502		14.5			やや密	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部3/12
638	7-54-1	7541	須恵器	杯蓋	SD502		12.9	3.1		密	灰	N5/0	口縁部小片
639	7-52-3	7523	須恵器	壺	SD502					やや密	灰	N6/0	口縁部片
640	7-52-4	7524	須恵器	壺	SD502					密	灰白	N7/0	口縁部片
642	5-29-2	5292	陶器	壺	SD503		9.2			密	灰褐	7.5YR5/2	口縁部2/12
643	5-29-1	5291	陶器	山茶椀	SD503		13.2			やや密(~2.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	口縁部1/12
644	5-29-3	5293	陶器	山茶椀	SD503	高台径	5.1			やや密	灰白	N8/0	高台部7/12
645	7-13-5	7135	緑釉陶器	椀	SD503	高台径	6.0			密	灰白	N7/0	高台部1/12
646	7-13-1	7131	緑釉陶器	椀	SD503	底径	7.9			密	淡橙	5YR8/4	
647	7-82-6	7826	灰釉陶器	椀	SD503	高台径	8.2			密(~1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部1/12
648	7-82-1	7821	陶器	山茶椀	SD503	高台径	7.3			密(~1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部8/12
649	7-82-3	7823	陶器	山茶椀	SD503	高台径	7.8			やや密(~1.5mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部4/12
650	7-82-2	7822	陶器	山茶椀	SD503	高台径	6.7			やや密(~1.5mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部ほぼ完存
651	7-81-3	7813	陶器	山茶椀	SD503	高台径	7.2			やや密(~3.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部9/12
652	7-81-4	7814	陶器	山茶椀	SD503	高台径	7.2			やや密(~3.5mmの小石)	灰白	N8/0	高台部完存
653	7-82-5	7825	陶器	山茶椀	SD503	高台径	8.4			やや密(~1.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	高台部2/12
654	7-81-5	7815	陶器	山茶椀	SD503	高台径	7.6			やや密(~2.5mmの砂粒)	灰白	5Y8/1	高台部完存
655	7-83-4	7834	陶器	山茶椀	SD503		15.0			密(~1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部1/12
656	7-81-1	7811	須恵器	大壺	SD503		28.0			やや密(~1.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部1/12
657	7-83-1	7831	土師器	壺	SD503		24.2			やや粗(~2.0mmの砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部小片
658	7-83-2	7832	土師器	壺	SD503		23.8			粗(~2.5mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/2	口縁部1/12
659	7-83-3	7833	土師器	鍋	SD503		19.0			粗(~2.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部1/12
660	7-83-5	7835	土師器	小皿	SD503		9.0	1.55		やや密(~1.0mmの砂粒)	淡赤橙	2.5YR7/4	口縁部3/12
661	7-81-2	7812	陶器	鉢	SD503	底径	26.0			やや密(~2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	底部3/12
662	7-82-7	7827	須恵器	壺or杯	SD503	高台径	9.0			やや粗(~1.5mmの砂粒)	灰黄褐	10YR5/2	高台部1/12
663	7-14-2	7142	白磁	椀	SD503					密	(釉)灰白 (素地)灰	7.5Y7/1 N7/0	口縁部片
664	7-26-1	7261	陶器	山茶椀	SD503	高台径	7.9			やや密	灰白	10YR8/1	底面墨書「○」
665	7-49-1	7491	陶器	山茶椀	SD503	高台径	8.0			やや密	灰白	2.5Y7/1	高台部4/12
666	7-48-8	7488	陶器	山茶椀	SD503	高台径	8.0			やや密	灰白	2.5Y7/1	高台部5/12
667	7-48-7	7487	陶器	小型鉢付皿	SD503		6.4	2.7		やや密(~5.0mmの小石・砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部3/12
668	7-48-4	7484	陶器	鉢	SD503					やや密(~5.0mmの小石・砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部片
669	7-48-3	7483	土師質	土鍋	SD503	残存	(長)4.4	(幅)1.1	6.73	やや密	橙	7.5YR7/6	
670	8-9-6	896	灰釉陶器	椀	SD503	高台径	7.7			密	灰白	N8/0	高台部完存
671	8-16-1	8161	灰釉陶器	椀	SD503	高台径	7.5			密(微砂粒)	灰白	2.5Y7/1	高台部3/12

第19表　遺物観察表

報告番号	R No.	遺構番号	質	器形	遺構	計測値				胎土	色調	残存	特記事項
						口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)					
672	8-16-2	8162	土師器	椀	SD503	高台径	6.4			密(～2.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	高台部2/12
673	8-9-5	895	陶器	山茶椀	SD503	高台径	8.7			密	灰白	N8/0	高台部4/12
674	8-5-4	854	陶器	山茶椀	SD503	高台径	8.5			密	灰白	5Y7/1	高台部1/12
675	8-9-4	894	陶器	山茶椀	SD503	高台径	8.3			密	灰白	N8/0	重ね焼成 焼歪・黒戸
676	8-1-6	816	陶器	山茶椀	SD503	高台径	5.0			密(～3.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	高台部3/12
677	8-1-5	815	陶器	山茶椀	SD503	底径	6.8			密(～1.0mmの砂粒)	灰白	5Y8/1	底部3/12
678	5-44-2	5442	陶器	小皿	SD503		8.4	1.60		密	灰白	N8/0	口縁部完存
679	8-9-2	892	陶器	山茶椀	SD503		14.5	5.30		やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部1/12
680	8-9-1	891	陶器	山茶椀	SD503		14.4			やや密	灰白	N8/0	口縁部5/12
681	8-9-3	893	陶器	小皿	SD503		8.8	1.90		やや密	灰白	N8/0	口縁部5/12
682	8-9-6	896	土師器	小皿	SD503		10.8	1.90		やや密	灰白	10YR8/2	口縁部10/12
683	8-7-1	871	陶器	鉢	SD503	底径	17.4			やや粗(～3.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	底部小片
684	8-5-1	851	陶器	大甕	SD503	底径	12.0			密	青灰	5PB5/1	底部5/12
685	8-10-1	8101	瓦器	椀	SD503	高台径	6.0			密	灰白	10YR8/1	高台部10/12
686	8-6-3	863	土師器	鍋	SD503		22.6			やや粗	橙	2.5YR7/6	口縁部2/12
687	8-37-2	8372	瓦	軒丸瓦	SD503	残存	長9.8			密	灰	N4/0	
688	8-28-2	8282	瓦	軒平瓦	SD503	残存	長7.5	幅9.0	厚2.2	密(～2.0mmの砂粒)	灰	N4/0	
689	8-5-3	853	須恵器	壺	SD503	高台径	7.6			密	灰	N5/0	高台部3/12
690	8-6-4	864	須恵器	瓶	SD503	頸部径	5.0			密	灰白	N7/0	頸部片
691	8-12-5	8125	須恵器	鉢	SD503		24.0			密	灰白	5Y7/1	口縁部2/12
692	8-7-4	874	須恵器	器台?	SD503					密	灰	N5/0	体部小片
693	8-1-1	811	陶器	小皿	SD503		8.6	1.40		やや密(～2.5mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部4/12
694	8-10-3	8103	陶器	椀	SD503	高台径	4.9			やや密	(釉)オリーブ黄(素地)灰白	7.5Y6/3 N8/0	高台部完存
695	8-8-3	883	土師器	小皿	SD503		11.2	2.05		やや密	灰白	2.5Y8/1	口縁部4/12
696	8-7-2	872	土師器	皿	SD503		13.1	1.60		やや密(～3.0mmの砂粒)	灰白	5Y8/1	口縁部3/12
697	8-8-2	882	土師器	皿	SD503		15.0	1.90		やや密	灰白	10YR8/1	口縁部3/12
698	8-8-1	881	土師器	皿	SD503		21.3	2.85		やや密(～2.0mmの砂粒)	にぶい橙	5YR7/4	口縁部2/12
699	8-6-1	861	土師器	鍋	SD503		30.6			やや密	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部5/12
700	8-6-2	862	土師器	鍋	SD503		29.6			やや密	灰黄褐	10YR4/2	口縁部5/12
701	8-37-1	8371	瓦	軒平瓦	SD503	残存	長7.0	幅幅3.4		やや密	灰	N4/0	
702	8-31-1	8311	瓦	丸瓦	SD503	残存	長16.2			密(～1.5mmの砂粒)	灰	N5/0	
703	8-30-1	8301	瓦	平瓦	SD503	残存	長15.0	幅18.4	厚2.0	やや粗(～4.0mmの砂粒)	灰	N6/0	
704	8-36-1	8361	瓦	平瓦	SD503	残存	長30.6	幅19.9	厚1.8	やや粗(～3.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	
705	8-7-3	873	瓦	瓦	SD503	残存	長7.1	厚1.4		やや粗	灰	10Y5/1	小片
707	8-10-4	8104	灰釉陶器	椀	SD503	高台径	6.8			密	灰白	2.5Y7/1	高台部7/12
708	8-1-3	813	陶器	山茶椀	SD503	高台径	7.3			やや密(～1.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	高台部3/12
709	8-1-2	812	陶器	山茶椀	SD503	高台径	6.6			密(～1.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	高台部4/12
710	8-1-4	814	陶器	山茶椀	SD503		15.9	5.00		密(～1.5mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部12/12
711	8-8-5	885	土師器	小皿	SD503		9.4～9.7	2.05		やや密	灰白	10YR8/2	口縁部完存
712	8-8-4	884	土師器	小皿	SD503		9.8	2.10		やや粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部3/12
714	8-10-5	8105	陶器	加工円盤	SD503	直径	7.3	厚1.2	60.0	やや密	灰白	N7/0	知多
720	7-68-2	7682	土師器	鍋	SD504		29.4			やや密	黄灰	2.5Y4/1	口縁部5/12
721	7-48-2	7482	DTU土師器	椀	SD504	底径	6.8			やや密	橙	5YR7/6	底部4/12
722	7-49-5	7495	陶器	山茶椀	SD504					やや密	灰白	2.5Y8/1	口縁部片
723	7-49-1	7491	陶器	山茶椀	SD504					やや密	灰白	2.5Y7/1	高台部片
724	7-49-6	7496	須恵器	杯蓋	SD504					やや密	灰	N6/0	口縁部片
725	7-53-6	7536	土師器	皿	SD507		10.9	2.55		やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部5/12
726	7-53-5	7535	土師器	皿	SD507		12.3	2.0		やや密	灰白	10YR8/2	口縁部2/12
727	7-53-7	7537	土師器	皿	SD507		11.8			やや密(～1.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部3/12
728	7-53-8	7538	土師器	小皿	SD507		7.4	1.25		やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部4/12
729	7-54-5	7545	陶器	山茶椀	SD507	底径	6.6			やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	底部完存
730	7-54-8	7548	鉄製品	刺器柄	SD507		長5.5	幅1.4	厚0.8				
731	7-13-4	7134	緑釉陶器	椀	SD508	高台径	6.4			密	灰白	N7/0	高台部4/12
732	7-52-6	7526	瓦器	椀	SK510					密	灰白	N8/0	口縁部片
733	7-53-3	7533	土師器	鍋	SK510					やや粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部片
734	7-52-2	7522	須恵器	壺	SD512					密	灰白	N7/0	口縁部片
735	7-42-2	7422	陶器	山茶椀	SD513		14.5	5.2		やや密(～2.0mmの砂粒)	黄灰	2.5Y6/1	口縁部2/12

第20表　遺物観察表

報告番号	R No.	収容号	質	器形	遺構	計測値 口径 (cm)	計測値 器高 (cm)	計測値 重量 (g)	胎土	色調		焼成	特記事項
736	7-31-1	7311	土師器	鍋	SD514	24.6			やや粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	ロ縁部3/12	外面に煤付着 南伊勢系
737	7-32-2	7322	土師器	鍋	SD514	30.0			やや密(～2.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	ロ縁部3/12	南伊勢系
738	7-34-1	7341	土師器	鍋	SD514	20.7			粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	ロ縁部9/12	外面に煤付着 南伊勢系
739	7-35-1	7351	土師器	鍋	SD514	22.9	12.2		やや密(～2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	ロ縁部4/12	外面に煤付着 南伊勢系
740	7-34-2	7342	土師器	鍋	SD514	23.3			やや密(～1.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	ロ縁部4/12	外面に煤付着 南伊勢系
741	7-33-1	7331	土師器	鍋	SD514	25.3			やや粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	ロ縁部3/12	外面に煤付着 南伊勢系
742	7-32-1	7321	土師器	鍋	SD514	26.0			やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰褐	7.5YR4/2	ロ縁部2/12	外面に煤付着 南伊勢系
743	7-34-3	7343	土師器	鍋	SD514	23.6			やや粗(～1.5mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	ロ縁部2/12	外面に煤付着 南伊勢系
744	7-45-1	7451	土師器	鍋	SD514	28.0			やや密(微砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	ロ縁部3/12	外面に煤付着 南伊勢系
745	7-45-2	7452	瓦質	鍋付土鍋	SD514	16.0			やや密(微砂粒)	灰白	5Y8/1	ロ縁部2/12	
746	7-36-7	7367	土師器	皿	SD514	12.0			密(～1.5mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	ロ縁部ほぼ完存	南伊勢系
747	7-36-5	7365	土師器	皿	SD514	12.4			やや密(～1.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	ロ縁部5/12	南伊勢系
748	7-36-6	7366	土師器	皿	SD514	11.0			密(～1.5mmの砂粒)	灰白	10YR8/1	ロ縁部5/12	南伊勢系
749	7-36-3	7363	土師器	皿	SD514	12.3	2.5		密(～1.5mmの砂粒)	灰白	10YR8/1	ロ縁部完存	南伊勢系
750	7-37-1	7371	土師器	皿	SD514	12.4	2.4		密	灰白	7.5YR8/2	ロ縁部5/12	南伊勢系
751	7-38-1	7381	土師器	皿	SD514	12.6	2.3		やや密	灰白	10YR8/2	ロ縁部3/12	南伊勢系
752	7-36-1	7361	土師器	皿	SD514	12.0	2.8		やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/2	ロ縁部10/12	南伊勢系
753	7-38-2	7382	土師器	皿	SD514	11.6	2.3		やや密	灰白	10YR8/2	ロ縁部4/12	南伊勢系
754	7-36-4	7364	土師器	皿	SD514	12.2	2.7		密(～1.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	ロ縁部完存	南伊勢系
755	7-35-3	7353	土師器	皿	SD514	11.8	2.7		やや粗(～5.0mmの砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/3	ロ縁部6/12	南伊勢系
756	7-35-2	7352	土師器	皿	SD514	12.0	2.3		密	灰白	2.5Y8/1	ロ縁部11/12	南伊勢系
757	7-37-2	7372	土師器	皿	SD514	11.4	2.15		密	灰白	7.5YR8/2	ロ縁部3/12	南伊勢系
758	7-36-2	7362	土師器	皿	SD514	11.0	2.7		密(～1.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/4	ロ縁部3/12	南伊勢系
759	7-38-3	7383	土師器	皿	SD514	10.6	2.35		やや密	橙	2.5YR6/6	ロ縁部5/12	南伊勢系
760	7-37-10	73710	土師器	小皿	SD514	8.3	1.5		やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/1	ロ縁部11/12	南伊勢系
761	7-37-7	7377	土師器	小皿	SD514	8.3	1.0		やや密	浅黄	2.5Y8/3	ロ縁部ほぼ完存	南伊勢系
762	7-37-8	7378	土師器	小皿	SD514	7.8	1.3		やや密	灰白	10YR8/2	ロ縁部完存	南伊勢系
763	7-38-6	7386	土師器	小皿	SD514	8.2	1.2		やや密	灰白	10YR8/2	ロ縁部ほぼ完存	南伊勢系
764	7-37-4	7374	土師器	小皿	SD514	7.9	1.0		やや密(～2.0mmの砂粒)	にぶい橙	5YR7/4	ロ縁部完存	南伊勢系
765	7-37-9	7379	土師器	小皿	SD514	7.6	1.1		やや密	灰白	10YR8/2	ロ縁部完存	南伊勢系
766	7-38-8	7388	土師器	小皿	SD514	8.1	1.35		やや密	灰白	10YR8/2	ロ縁部7/12	南伊勢系
767	7-37-6	7376	土師器	小皿	SD514	8.0	1.3		やや粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	ロ縁部11/12	南伊勢系
768	7-37-11	73711	土師器	小皿	SD514	7.6	1.1		やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	ロ縁部4/12	南伊勢系
769	7-37-3	7373	土師器	小皿	SD514	8.2	1.1		やや粗(～2.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	ロ縁部完存	南伊勢系
770	7-38-5	7385	土師器	小皿	SD514	7.8	1.1		やや密	灰白	10YR8/2	ロ縁部10/12	南伊勢系
771	7-38-9	7389	土師器	小皿	SD514	7.5	1.2		やや密	灰白	10YR8/2	ロ縁部完存	南伊勢系
772	7-38-7	7387	土師器	小皿	SD514	7.8	1.2		やや密	浅黄橙	7.5YR8/3	ロ縁部8/12	南伊勢系
773	7-38-4	7384	土師器	小皿	SD514	7.4	1.1		やや密	灰白	2.5Y8/2	ロ縁部7/12	南伊勢系
774	7-38-10	73810	土師器	小皿	SD514	7.9	1.25		やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/2	ロ縁部8/12	南伊勢系
775	7-38-11	73811	土師器	小皿	SD514	7.4	1.1		やや密	浅黄橙	7.5YR8/3		穿孔 南伊勢系
776	7-45-3	7453	土師器	小型鍋	SD514	10.5			やや密	灰白	5Y8/1	ロ縁部2/12	南伊勢系
777	7-37-5	7375	的場土師器	皿	SD514	10.3	1.85		やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	ロ縁部に穿孔	
778	7-46-6	7466	陶器	小皿	SD514	8.2	1.3		やや密(～2.5mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	ロ縁部5/12	猿投・知多
779	7-46-4	7464	陶器	小皿	SD514	8.5	1.7		やや密(～3.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	ロ縁部完存	知多・猿投
780	7-46-5	7465	陶器	小皿	SD514	8.4	1.8		やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	ロ縁部5/12	
781	7-18-4	7184	陶器	小皿	SD514	8.3	2.1		やや粗(～3.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	ロ縁部完存	底溝墨書
782	7-18-3	7183	陶器	小皿	SD514	8.3	2.0		やや密(～4.0mmの小石・砂粒)	灰白	2.5Y7/1	ロ縁部完存	底溝墨書
783	7-20-3	7203	陶器	山茶椀	SD514	15.0	4.8		やや密	灰白	N7/0	ロ縁部2/12	底溝墨書 糸切痕
784	7-17-4	7174	陶器	山茶椀	SD514	15.4	5.5		粗	灰白	5Y7/1	ロ縁部5/12	底面「十」or「×」刻印に「O」墨書 糸切痕
785	7-17-1	7171	陶器	山茶椀	SD514	16.0	5.2		やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	ロ縁部完存	底溝墨書 糸切痕
786	7-17-2	7172	陶器	山茶椀	SD514	14.9	5.1		やや粗(～5.0mmの小石・砂粒)	灰白	2.5Y7/1	ロ縁部9/12	底溝墨書 糸切痕
787	7-17-3	7173	陶器	山茶椀	SD514	14.6	5.3		やや密(微砂粒)	灰白	5Y7/1	ロ縁部7/12	底溝墨書 糸切痕
788	7-19-2	7192	陶器	山茶椀	SD514	15.1	5.5		やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	ロ縁部3/12	底溝墨書 糸切痕
789	7-19-1	7191	陶器	山茶椀	SD514	14.6	5.1		やや粗(～3.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	ロ縁部11/12	底溝墨書 糸切痕
790	7-16-2	7162	陶器	山茶椀	SD514	15.4	5.5		やや粗(～4.0mmの小石・砂粒)	灰白	2.5Y7/1	ロ縁部完存	底溝墨書 糸切痕
791	7-15-1	7151	陶器	山茶椀	SD514	15.3	5.4		やや粗(～6.0mmの小石・砂粒)	灰白	2.5Y7/1	ロ縁部完存	底溝墨書 糸切痕
792	7-16-1	7161	陶器	山茶椀	SD514	15.1	5.6		粗(～2.5mmの砂粒)	灰白	N6/0	ロ縁部7/12	底溝墨書 糸切痕

第21表　遺物観察表

報告番号	R No.	収容号	質	器形	遺構	計測値				胎土	色調	焼成	特記事項
						口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)					
793	7-15-3	7153	陶器	山茶椀	SD514		14.9	5.1		やや密(～3.0mm小砂粒)	灰白	2. 5Y7/1	口縁部4/12 底面墨書 釉蝕痕
794	7-16-3	7163	陶器	山茶椀	SD514		15.0	5.5		やや粗(～8.0mm小石・砂粒)	灰白	N8/0	口縁部10/12 底面墨書 釉蝕痕
795	7-19-6	7196	陶器	山茶椀	SD514	高台径	15.6			やや粗(～2.0mm小砂粒)	灰白	N7/0	口縁部2/12 外面墨書
796	7-19-5	7195	陶器	山茶椀	SD514	高台径	6.2			やや粗(～2.0mm小砂粒)	灰白	N8/0	高台部5/12 底面墨書 釉蝕痕
797	7-20-2	7202	陶器	山茶椀	SD514		16.1	5.6		やや粗(～2.0mm小砂粒)	灰白	N8/0	口縁部11/12 底面墨書 釉蝕痕
798	7-18-1	7181	陶器	山茶椀	SD514		14.6	4.9		やや粗(～1.5mm小砂粒)	灰白	7. 5Y7/1	口縁部4/12 底面墨書 釉蝕痕
799	7-15-2	7152	陶器	山茶椀	SD514		13.7	5.4		やや粗(～8.0mm小石・砂粒)	灰白	N8/0	口縁部完存 底面墨書 釉蝕痕
800	7-18-2	7182	陶器	山茶椀	SD514		14.8	4.9		粗(～12.0mm小石・砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部7/12 底面墨書 釉蝕痕
801	7-23-2	7232	陶器	山茶椀	SD514		12.3	4.65		やや粗(～6.0mm小石)	灰白	N8/0	口縁部2/12 底面墨書
802	7-20-1	7201	陶器	山茶椀	SD514		13.9	4.75		やや密	灰白	N8/0	口縁部1/12 底面墨書 釉蝕痕
803	7-19-3	7193	陶器	山茶椀	SD514		15.0	5.4		やや粗(～2.0mm小砂粒)	灰白	N8/0	口縁部6/12 底面墨書 釉蝕痕
804	7-19-4	7194	陶器	山茶椀	SD514	高台径	5.8			やや粗(～3.0mm小砂粒)	灰白	N8/0	高台部10/12 底面墨書 釉蝕痕
805	7-23-1	7231	陶器	山茶椀	SD514	高台径	7.0			やや粗(～5.5mm小石・砂粒)	灰	N8/0	高台部6/12 底面墨書 釉蝕痕
806	7-22-4	7224	陶器	山茶椀	SD514	高台径	7.4			やや粗(～1.0mm小砂粒)	灰白	5Y8/1	高台部3/12 底面墨書 釉蝕痕
807	7-40-6	7406	陶器	山茶椀	SD514		14.7	5.4		やや密(～1.5mm小砂粒)	灰白	N7/0	口縁部完存 底面墨書 釉蝕痕 内面煤 知多・猿投
808	7-21-3	7213	陶器	山茶椀	SD514	高台径	7.6			密(～2.0mm小砂粒)	灰白	N8/0	高台部完存
809	7-23-4	7234	陶器	山茶椀	SD514	高台径	5.6			やや粗(～2.0mm小砂粒)	灰白	5Y7/1	高台部6/12 底面墨書 釉蝕痕
810	7-22-2	7222	陶器	山茶椀	SD514	高台径	7.0			やや粗(～2.5mm小砂粒)	灰白	2. 5Y7/1	高台部4/12 底面墨書 釉蝕痕
811	7-23-3	7233	陶器	山茶椀	SD514	高台径	7.3			やや粗(～3.0mm小砂粒)	灰白	2. 5Y7/1	高台部4/12 釉蝕痕
812	7-20-4	7204	陶器	山茶椀	SD514					やや粗(～2.0mm小砂粒)	灰白	N7/0	高台部片 底面墨書 釉蝕痕
813	7-42-4	7424	陶器	山茶椀	SD514		15.6	5.4		やや密(微砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部5/12 知多・猿投
814	7-47-5	7475	陶器	山茶椀	SD514		15.2	5.4		密	灰白	5Y7/1	口縁部1/12 釉蝕痕 知多・猿投
815	7-42-6	7426	陶器	山茶椀	SD514		15.3	6.0		やや粗(～5.0mm小石・砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部小片 釉蝕痕 内面煤 知多・猿投
816	7-43-4	7434	陶器	山茶椀	SD514		14.6	5.5		やや粗(～2.0mm小砂粒)	灰	5Y8/1	口縁部10/12 釉蝕痕 知多・猿投
817	7-44-2	7442	陶器	山茶椀	SD514		15.2	5.6		やや粗(～10.0mm小石・砂粒)	灰白	7. 5Y8/1	口縁部5/12 釉蝕痕 知多・猿投
818	7-39-3	7393	陶器	山茶椀	SD514		14.4	5.7		やや密(～2.0mm小砂粒)	灰白	N7/0	口縁部10/12 釉蝕痕 猿投・知多
819	7-40-3	7403	陶器	山茶椀	SD514		15.3	5.8		やや粗(～8.0mm小石・砂粒)	灰白	N7/0	口縁部完存 釉蝕痕 知多・猿投
820	7-47-2	7472	陶器	山茶椀	SD514		15.0	5.0		やや粗(～5.0mm小石・砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部4/12 釉蝕痕 猿投・瀬戸
821	7-47-1	7471	陶器	山茶椀	SD514		14.7	5.3		やや密(～1.5mm小砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部2/12 釉蝕痕 知多・猿投
822	7-43-2	7432	陶器	山茶椀	SD514		14.6	5.9		やや密(～1.5mm小砂粒)	灰白	N8/0	口縁部完存 釉蝕痕 猿投・知多
823	7-41-1	7411	陶器	山茶椀	SD514		14.7	5.7		やや粗(～12.0mm小小石)	灰白	5Y7/1	口縁部7/12 釉蝕痕
824	7-44-3	7443	陶器	山茶椀	SD514		15.3	5.0		やや粗(～4.0mm小砂粒)	灰白	N8/0	口縁部4/12 知多・猿投
825	7-42-7	7427	陶器	山茶椀	SD514		15.4	5.9		やや密(～3.5mm小石・砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部4/12 釉蝕痕 猿投・知多
826	7-44-1	7441	陶器	山茶椀	SD514		14.7	4.85		やや密(～3.5mm小砂粒)	灰白	N7/0	口縁部4/12 釉蝕痕
827	7-43-3	7433	陶器	山茶椀	SD514		15.6	5.7		やや粗(～3.0mm小砂粒)	灰白	N8/0	口縁部4/12 釉蝕痕 猿投・知多
828	7-39-2	7392	陶器	山茶椀	SD514		14.7	5.4		密	灰白	5Y7/1	口縁部11/12 口縁部に煤付着 釉蝕痕 知多・猿投
829	7-39-6	7396	陶器	山茶椀	SD514		15.1	5.5		やや密(微砂粒)	灰白	5Y7/1	内外面煤付着 知多・猿投 口縁部4/12
830	7-40-1	7401	陶器	山茶椀	SD514		15.0	6.1		やや粗(～2.0mm小砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部10/12 釉蝕痕 知多・猿投
831	7-47-4	7474	陶器	山茶椀	SD514		15.0	5.2		やや密(～1.5mm小砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部2/12 釉蝕痕 知多
832	7-39-1	7391	陶器	山茶椀	SD514		15.4	5.7		やや密(～2.0mm小砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部完存 釉蝕痕 猿投・知多
833	7-42-3	7423	陶器	山茶椀	SD514		14.7	4.9		やや密(～3.0mm小砂粒)	灰白	2. 5Y7/1	口縁部5/12 内外面に煤付着 釉蝕痕
834	7-39-5	7395	陶器	山茶椀	SD514		14.5	5.1		やや粗(～5.0mm小小石・砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部11/12 釉蝕痕 知多・猿投
835	7-40-5	7405	陶器	山茶椀	SD514		15.2	5.7		やや粗(～3.0mm小砂粒)	灰白	N8/0	口縁部10/12 釉蝕痕 知多・猿投
836	7-39-4	7394	陶器	山茶椀	SD514		14.5	5.8		やや粗(～2.0mm小砂粒)	灰白	2. 5Y7/1	口縁部11/12 釉蝕痕 猿投・知多
837	7-46-2	7462	陶器	山茶椀	SD514		14.0	4.8		やや粗(～2.0mm小砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部2/12 釉蝕痕 瀬戸北部
838	7-41-2	7412	陶器	山茶椀	SD514		15.0	5.8		やや粗(～4.0mm小砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部ほぼ完存 釉蝕痕
839	7-42-5	7425	陶器	山茶椀	SD514		15.2	6.0		やや密	灰白	2. 5Y7/1	口縁部5/12 内面に煤付着 釉蝕痕 知多・猿投
840	7-41-3	7413	陶器	山茶椀	SD514		15.0	5.1		密(～4.0mm小砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部ほぼ完存 釉蝕痕
841	7-47-3	7473	陶器	山茶椀	SD514		15.1	5.1		やや密	灰白	5Y7/1	口縁部4/12 知多・猿投
842	7-40-4	7404	陶器	山茶椀	SD514		15.2	5.7		やや粗(～10.0mm小石・砂粒)	灰白	2. 5Y7/1	口縁部完存 内面に煤付着 釉蝕痕 知多？
843	7-41-6	7416	陶器	山茶椀	SD514		15.0	5.1		密	黄灰	2. 5Y6/1	口縁部10/12 釉蝕痕
844	7-41-4	7414	陶器	山茶椀	SD514		14.4	5.4		やや粗(～5.0mm小砂粒)	黄灰	2. 5Y6/1	口縁部ほぼ完存 釉蝕痕
845	7-41-5	7415	陶器	山茶椀	SD514		14.4	5.1		やや粗(～4.0mm小砂粒)	灰白	2. 5Y7/1	口縁部11/12 釉蝕痕
846	7-42-1	7421	陶器	山茶椀	SD514		14.2	5.4		密	灰白	5Y7/1	口縁部12/12 内面に煤付着 釉蝕痕 知多・猿投
847	7-40-2	7402	陶器	山茶椀	SD514		14.6	5.1		密(～1.5mm小砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部10/12 知多・猿投 高台なし
848	7-43-1	7431	陶器	山茶椀	SD514		13.2	4.8		粗(～4.0mm小砂粒)	灰白	N8/0	口縁部9/12 瀬戸

第22表　遺物観察表

報告番号	R No.	板番号	質	器形	遺構	計測値				胎土	色調		残存	特記事項
						口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)						
849	7-43-5	7435	陶器	山茶椀	SD514		15.2	4.2		やや密(~2.0mmの砂粒)	灰	5Y6/1	口縁部4/12	猿投？
850	7-46-1	7461	陶器	鉢鉢	SD514		29.6	11.6		やや密	(胎)灰褐(表)黄灰	5YR4/2 N7/0	口縁部1/12	鉢類 常滑
853	8-13-2	8132	土師器	羽釜	SD514		28.2			密(~0.5mmの砂粒・雲母)	灰黄	2.5Y7/2	口縁部3/12	穿孔1対(2)焼 外面に煤付着 中北勢系
854	8-15-1	8151	土師器	羽釜	SD514		24.6			密	灰黄褐	10YR4/2	口縁部4/12	外面に煤 内面炭化物付着 南伊勢系
855	8-13-1	8131	土師器	羽釜	SD514		23.2			密(~1.5mmの小石・雲母)	灰黄褐	10YR5/2	口縁部2/12	穿孔1つ焼 外面に煤付着 中北勢系
856	8-4-2	842	土師器	鍋	SD514		25.0			密	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部3/12	外面に煤付着 南伊勢系か畿
857	8-13-3	8133	土師器	鍋	SD514		25.0			やや密(~1.0mmの砂粒・雲母)	褐灰	7.5YR4/1	口縁部2/12	外面に煤付着 南伊勢系か畿
858	8-14-2	8142	土師器	鍋	SD514		25.0			密(雲母)	にぶい黄橙	10YR6/4	口縁部3/12	外面に煤付着 南伊勢系か畿
859	8-4-1	841	土師器	鍋	SD514		27.4			密	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部3/12	外面に煤付着 南伊勢系か畿
860	8-14-3	8143	土師器	鍋	SD514		32.0			密(~1.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR6/4	口縁部3/12	外面に煤付着 南伊勢系か畿
861	8-14-1	8141	土師器	鍋	SD514		37.0			密(~1.0mm砂粒・雲母)	にぶい黄橙	10YR6/3	口縁部2/12	外面に煤付着 南伊勢系か畿
862	8-16-10	81610	土師器	皿	SD514		9.4	1.80		密(~1.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部5/12	
863	8-16-9	8169	土師器	皿	SD514		9.0	2.40		密(~1.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部5/12	
864	8-12-2	8122	土師器	皿	SD514		14.6	2.60		やや密	灰白	10YR8/2	口縁部3/12	
865	8-12-1	8121	土師器	皿	SD514		15.6			密	灰白	2.5Y8/1	口縁部4/12	内面に油煙
866	8-12-3	8123	土師器	皿	SD514		14.8	2.40		やや密	灰白	10YR8/2	口縁部3/12	
867	8-16-8	8168	灰釉陶器	椀	SD514	高台径	8.6			密(~1.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	高台部4/12	猿投
868	8-17-7	8177	陶器	山茶椀	SD514		14.0	4.50		密(~2.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	口縁部3/12	底面墨書 瀬戸
869	8-2-5	823	陶器	山茶椀	SD514	高台径	5.3			密(~3.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	高台部3/12	底面墨書 釉薬痕 瀬戸
870	8-2-4	824	陶器	山茶椀	SD514	高台径	6.4			密(~1.5mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	高台部4/12	底面墨書 釉薬痕 瀬戸 猿投
871	8-12-4	8124	陶器	山茶椀	SD514		18.2	5.90		密	黄灰	2.5Y6/1	口縁部3/12	釉薬痕 猿投・知多
872	8-17-1	8171	陶器	山茶椀	SD514		14.9	5.30		密(~2.5mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部4/12	釉薬痕 猿投・瀬戸
873	8-17-5	8175	陶器	山茶椀	SD514		14.0	4.60		密(~2.5mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部1/12	釉薬痕 知多・猿投
874	8-17-4	8174	陶器	山茶椀	SD514		14.6	4.95		やや密(~2.5mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部1/12	知多・猿投
875	8-16-7	8167	陶器	山茶椀	SD514		14.8	5.10		やや密(~5.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	口縁部2/12	知多 猿投
876	8-17-2	8172	陶器	山茶椀	SD514	底径	6.5			やや密(~4.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	底部完存	知多
877	8-17-8	8178	陶器	小皿	SD514		10.2	3.40		密(~4.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部11/12	猿投・知多
878	8-17-3	8173	陶器	小皿	SD514		8.0	1.70		やや密(~1.5mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部7/12	知多・猿投
879	8-17-6	8176	陶器	小皿	SD514		8.7	1.80		密(~2.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部10/12	知多・猿投
880	8-11-3	8113	須恵器	高杯	SD514	脚柱上部径	3.2			密	灰白	N7/0	脚柱上部完存	
881	8-11-1	8111	陶器	擂鉢	SD514		28.0			密	(胎)にぶい赤褐(断面)灰白	2.5YR5/3 2.5Y8/12	口縁部1/12	古瀬戸(鉄釉)
882	8-11-2	8112	陶器	擂鉢	SD514					やや密	灰白	2.5Y8/1	口縁部片	信楽
883	8-34-3	8343	瓦	軒丸瓦	SD514	残存	長7.6		厚1.9	密	灰	N4/0		
884	8-30-2	8302	瓦	軒丸瓦	SD514	瓦当部径	14.0			密(~5.0mmの砂粒)	暗灰	N3/0		
885	8-34-1	8341	瓦	軒平瓦	SD514	残存	長11.0	顎幅4.0		密	灰	N4/0	小片	
886	8-29-1	8291	瓦	軒平瓦	SD514	残存	長17.5	幅7.5	厚2.0	密(~1.5mmの砂粒)	灰	N5/0		
887	8-34-2	8342	瓦	軒平瓦	SD514	残存	長13.4	顎幅4.1		密	灰	N4/0		
888	8-33-1	8331	瓦	平瓦	SD514	残存	長20.5	幅19.0	厚1.8	密	灰	N4/0		
889	8-28-1	8281	瓦	平瓦	SD514	残存	長17.6	幅13.2	厚1.8	やや密(~3.0mmの砂粒)	暗灰	N3/0		
890	8-29-2	8292	瓦	平瓦	SD514	残存	長11.0	幅19.7	厚2.6	やや密(~2.0mmの砂粒)	灰	N5/0		
891	8-32-1	8321	瓦	丸瓦	SD514	残存	長21.7	幅12.6	厚2.0	やや密	灰白	N4/0		
892	8-35-1	8351	瓦	丸瓦	SD514	残存	長16.0	幅11.2	厚1.7	やや密(~2.0mmの砂粒)	灰	N5/0		
896	7-26-3	7263	陶器	山茶椀	SD515	高台径	6.6			やや密(~5.0mmの小石)	灰白	2.5Y8/1	高台部4/12	底面墨書(十) 釉薬痕
897	7-55-2	7552	陶器	山茶椀	SD515		14.2			密	灰白	5Y7/1	口縁部3/12	外面に墨書 知多
898	7-56-2	7562	陶器	山茶椀	SD515	底径	6.3			やや密(~4.0mmの小石・砂粒)	灰白	5Y7/1	底部5/12	猿投・知多
899	7-56-3	7563	陶器	鉢	SD515	高台径	13.0			やや密	灰	5Y6/1	高台部2/12	瀬戸
900	7-56-7	7567	土師器	皿	SD515		9.2	2.4		やや密(~2.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	口縁部5/12	
901	7-56-4	7564	土師器	鍋	SD515					やや密	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部片	外面に煤付着
902	7-56-6	7566	土師器	鍋	SD515					やや密	褐灰	10YR5/1	口縁部小片	外面に煤付着
903	7-56-1	7561	陶器	山茶椀	SD516		16.0	5.0		やや密(~3.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部1/12	釉薬痕 猿投・瀬戸
904	7-55-6	7556	陶器	山茶椀	SD516		15.4			やや密	灰白	2.5Y7/1	口縁部2/12	内外面に煤付着 知多・猿投
905	7-55-1	7551	陶器	壺	SD517		19.1			密	灰白	N7/0	口縁部2/12	常滑
906	7-55-4	7554	陶器	山茶椀	SD517					やや密(~2.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	口縁部片	瀬戸
907	7-56-5	7565	土師器	鍋	SD517					やや密(~2.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/12	口縁部片	南伊勢系
908	7-55-7	7557	土師質	土錘	SD517	残存	長2.9	幅1.1	1.94	やや密	黄褐	2.5Y5/3		

第23表　遺物観察表

報告番号	R No.	板番号	質	器形	遺構	計測値				胎土	色調		残存	特記事項
						口径 (cm)	底高 (cm)	重量 (g)						
912	7-25-3	7253	陶器	小皿	SD518		8.4	1.6		やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白	7.5Y7/1	口縁部3/12	底部墨書「T」字形
913	7-59-4	7594	陶器	小皿	SD518		8.2	2.1		やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部8/12	知多・猿投
914	7-59-5	7595	陶器	山茶椀	SD518	高台径	8.0			やや密(～3.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部2/12	瀬戸・猿投
915	7-57-4	7574	陶器	山茶椀	SD518		14.0			やや密(～1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部3/12	知多・猿投
916	7-57-5	7575	陶器	山茶椀	SD518		14.0	5.5		やや密(～3.5mmの小石)	灰白	7.5Y7/1	口縁部4/12	知多
917	7-57-3	7573	陶器	山茶椀	SD518		12.8	5.2		粗(～8.0mmの小石)	灰白	N8/0	口縁部2/12	猿投産・猿投
918	7-58-3	7583	陶器	山茶椀	SD518	高台径	5.9			やや密(～2.5mmの砂粒)	灰白	10YR8/7	高台部完存	猿投産 猿戸？
919	7-59-7	7597	土師器	皿	SD518		12.0	2.3		密(～1.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部4/12	
920	7-58-1	7581	土師器	羽釜	SD518		29.0			粗(～2.0mmの砂粒)	浅黄	2.5Y8/3	口縁部1/12	
921	7-26-2	7262	陶器	山茶椀	SD519	高台径	6.0			やや密	灰白	2.5Y8/1	高台部10/12	底部墨書 朝倉産
922	7-57-2	7572	陶器	山茶椀	SD519		15.2	5.1		やや密(～1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部3/12	猿投・瀬戸
923	7-58-2	7582	陶器	山茶椀	SD519	高台径	7.8			密(～1.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	高台部完存	瀬戸
924	7-59-1	7591	陶器	山茶椀	SD519		14.0	4.85		粗(～3.5mmの小石)	灰白	5Y8/1	口縁部1/12	瀬戸
925	7-57-1	7571	陶器	山茶椀	SD519		13.5	4.8		やや粗(～3.5mmの小石)	灰白	N8/0	口縁部4/12	朝倉産 知多・猿投
926	7-58-5	7585	陶器	山茶椀	SD519		13.0	5.05		粗(～3.0mmの砂粒)	灰白	5Y8/1	口縁部1/12	内面に煤付着 朝倉産 瀬戸
927	7-58-4	7584	陶器	山茶椀	SD519	高台径	7.0			やや粗(～2.5mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部4/12	瀬戸・猿投
928	7-59-2	7592	陶器	山茶椀	SD519	底径	6.2			やや粗(～1.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	底部完存	知多？
929	7-59-3	7593	陶器	小皿	SD519		8.8	1.6		粗(～7.5mmの小石)	灰白	5Y7/1	口縁部3/12	猿投・瀬戸
930	7-59-6	7596	土師器	皿	SD519		10.8	2.2		密(～1.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部3/12	
931	7-59-8	7598	土師器	小皿	SD519		7.6	1.0		やや粗(～1.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部ほぼ完存	
932	7-61-3	7613	陶器	山茶椀	SD520					粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部小片	知多
933	7-62-2	7622	陶器	山茶椀	SD521	高台径	6.9			やや粗(～3.5mmの砂粒)	灰白	N7/0	高台部10/12	朝倉産 知多
934	7-61-2	7612	陶器	山茶椀	SK525		15.8	5.1		やや粗(～1.5mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部4/12	朝倉産 知多
935	7-61-4	7614	陶器	山茶椀	SK529					密(微砂粒)	灰白	N7/0	口縁部小片	猿投・知多
936	7-24-4	7244	陶器	山茶椀	SK529	底径	7.8			やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	底部片	底部墨書
937	7-62-5	7625	陶器	小皿	SK529		9.5	2.0		やや粗(～1.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部1/12	瀬戸？
938	7-60-5	7605	土師器	台付小形鍋	SK529		12.6			密(～1.0mmの砂粒)	にぶい橙	5YR7/4	口縁部2/12	
939	7-60-6	7606	土師器	鍋	SK529					やや粗(～1.5mmの砂粒)	灰白	10YR8/1	口縁部小片	南伊勢系
940	7-60-4	7604	土師器	小皿	SK529		9.6	1.9		密(～1.5mmの砂粒)	灰白	10YR8/1	口縁部8/12	中北勢系
941	7-60-2	7602	土師器	皿	SK529		12.0	2.7		密(微砂粒)	灰白	10YR8/1	口縁部4/12	南伊勢系
942	7-60-3	7603	土師器	皿	SK529		12.2	2.3		密(微砂粒)	灰白	2.5Y8/1	口縁部4/12	南伊勢系
943	7-60-1	7601	土師器	皿	SK529		11.3	2.9		密(～1.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	口縁部5/12	南伊勢系
944	7-61-5	7615	陶器	山茶椀	SK529		13.0			やや粗(～3.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部10/12	瀬戸か猿？
945	7-62-1	7621	陶器	山茶椀	SK529	高台径	8.2			やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	高台部8/12	猿投・瀬戸
946	7-62-3	7623	陶器	山茶椀	SK529	高台径	7.0			密(微砂粒)	灰白	N7/0	高台部10/12	瀬戸・猿投
947	7-62-6	7626	陶器	大壷	SK529					やや粗(～1.5mmの砂粒)	灰	N6/0	口縁部小片	常滑
948	7-61-1	7611	陶器	鉢か	SK529		33.7			やや粗(～1.0mmの砂粒)	灰	N6/0	口縁部2/12	瀬戸？
949	7-62-4	7624	陶器	山茶椀	SK530	高台径	5.9			やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	高台部片	朝倉産 瀬戸
950	7-64-2	7642	陶器	山茶椀	SK531		15.2			密	灰白	5Y7/1	口縁部1/12	知多・猿投
951	7-63-7	7637	陶器	山茶椀	SK531	高台径	7.0			やや粗(～2.0mmの砂粒)	黄灰	2.5Y6/1	高台部2/12	朝倉産 知多
952	7-65-2	7652	陶器	山茶椀	SK531	底径	5.5			やや粗(～3.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	底部3/12	内面に煤付着 瀬戸
953	7-63-6	7636	陶器	山茶椀	SK531	高台径	5.6			やや粗(～5.0mmの小石)	灰白	2.5Y8/1	高台部1/12	朝倉産 瀬戸
954	7-63-2	7632	土師器	小皿	SK531		7.9	1.3		密	浅黄橙	10YR8/2	口縁部11/12	南伊勢系
955	7-63-3	7633	土師器	小皿	SK531		8.1	1.2		やや密(～2.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部4/12	南伊勢系
956	7-65-4	7654	土師器	皿	SK531		11.9	2.5		密	浅黄	2.5Y8/3	口縁部8/12	南伊勢系
957	7-65-6	7656	土師器	皿	SK531		11.0	2.3		密	灰白	2.5Y8/2	口縁部5/12	南伊勢系
958	7-65-5	7655	土師器	皿	SK531		12.1	2.6		密	灰白	2.5Y8/2	口縁部3/12	南伊勢系
959	7-25-2	7252	陶器	山茶椀	SK533		15.9	5.5		やや粗(～3.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	口縁部完存	底外面墨書 朝倉産
960	7-27-2	7272	陶器	山茶椀	SK533	高台径	7.3			やや密	灰白	N7/0	高台部4/12	底面墨書 朝倉産 知多・猿投
961	7-64-1	7641	陶器	山茶椀	SK533		15.1			密	灰	N6/0	口縁部1/12	知多
962	7-64-7	7647	土師器	鍋	SK533					やや粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR4/3	口縁部小片	外面に煤付着 南伊勢系
963	7-64-5	7645	陶器	壷	SD532					やや密(～4.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部小片	常滑
964	7-64-6	7646	陶器	壷	SD532					やや密(～10.0mmの小石)	灰褐	7.5YR4/2	口縁部小片	
965	7-64-3	7643	陶器	山茶椀	SD532					密	灰白	5Y7/1	口縁部小片	内面に煤付着 猿投・知多
966	7-64-4	7644	陶器	山茶椀	SD532					やや粗(～5.0mmの小石)	灰白	2.5Y8/1	口縁部小片	瀬戸
967	7-63-4	7634	土師器	台平皿	SD532	底径	7.7			やや粗(～4.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	底部片	
968	7-63-8	7638	陶器	山茶椀	SK534		14.7			粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部1/12	知多
969	7-63-5	7635	陶器	山茶椀	SK534	高台径	6.4			やや密	灰白	2.5Y8/1	高台部10/12	朝倉産 知多・猿投
970	7-63-1	7631	陶器	小皿	SK534		8.8	1.6		密(～5.0mmの小石)	灰白	5Y7/1	口縁部3/12	
971	7-65-1	7651	土師器	鍋	SK534					やや密(～3.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部小片	

第24表　遺物観察表

報告番号	R No.	板番号	質	器形	遺構	計測値				胎土	色調		焼成	特記事項
						口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)						
972	7-26-4	7264	陶器	山茶椀	SZ535		13.0	5.7		やや密(~4.0mmの小石)	灰白	5YR/1	口縁部5/12	産業遺書 鞍鉢痕
973	7-28-1	7281	陶器	山茶椀	SZ535		13.6	5.8		やや粗(~5.0mmの小石・砂粒)	灰白	5YR/1	口縁部4/12	産業遺書 鞍鉢痕
974	7-30-1	7301	陶器	山茶椀	SZ535	高台径	6.5			やや密(微砂粒)	灰白	5Y7/1	高台部小片	産業遺書 鞍鉢痕
975	7-30-3	7303	陶器	山茶椀	SZ535	高台径	6.3			やや密	灰白	5Y7/1	高台部2/12	産業遺書
976	7-29-5	7295	陶器	山茶椀	SZ535	高台径	5.2			やや密(~3.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1		産業遺書 鞍鉢痕
977	7-67-3	7673	陶器	山茶椀	SZ535		13.5	5.5		やや密(~3.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部4/12	鞍鉢痕 産声
978	7-66-4	7664	陶器	山茶椀	SZ535		13.7	5.2		やや粗(~4.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部10/12	産声
979	7-66-2	7662	陶器	山茶椀	SZ535		16.0	6.3		やや粗(~2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部1/12	産声・鞍投
980	7-67-2	7672	陶器	山茶椀	SZ535		13.5	5.4		やや粗(~2.0mmの砂粒)	灰白	5YR/1	口縁部2/12	産声
981	7-67-4	7674	陶器	山茶椀	SZ535		13.3	5.8		やや粗(~6.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部完存	産声
982	7-66-1	7661	陶器	山茶椀	SZ535		14.2	5.05		やや密	灰白	N7/0	口縁部5/12	鞍鉢痕 鞍投？
983	7-66-3	7663	陶器	山茶椀	SZ535		13.8	4.65		やや密	灰白	N8/0	口縁部完存	産声・鞍投
984	7-67-1	7671	陶器	山茶椀	SZ535		14.8			やや粗(~2.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部3/12	産声・鞍投
985	7-70-4	7704	陶器	小皿	SZ535		8.5	1.5		やや粗(~4.0mmの小石・砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部7/12	鞍投・知多
986	7-14-8	7148	青磁	椀	SZ535					密	(釉)明オリーブ灰(素地)灰白	2.5GY7/1 N8/0	口縁部片	
987	7-13-7	7137	白磁	椀	SZ535	高台径	6.9			密	(釉)灰白(素地)灰白	10YR/1 N8/0	高台部3/12	
988	7-69-1	7691	土師器	鍋	SZ535		30.0			やや密(微砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部2/12	外面に煤付着 南伊勢系
989	7-68-1	7681	土師器	鍋	SZ535		21.1			やや密	黒褐	10YR3/2	口縁部3/12	外面に煤付着 南伊勢系
990	7-69-2	7692	土師器	羽釜	SZ535					やや粗(~2.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	体部小片	中北勢系
991	7-69-4	7694	土師器	小皿	SZ535		8.0	0.9		やや密	灰白	10YR8/2		南伊勢系
992	7-69-3	7693	土師器	小皿	SZ535		8.2	0.8		やや密(微砂粒)	浅黄橙	10YR8/3		南伊勢系
993	7-25-1	7251	陶器	山茶椀	SK536		15.6	5.6		やや粗(~4.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部完存	側面(下)に外面「×」 産業遺書 鞍鉢痕
994	7-70-1	7701	陶器	山茶椀	SK536		15.2	5.0		やや粗(~6.0mmの小石・砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部4/12	鞍鉢痕 知多・鞍投
995	7-70-2	7702	陶器	山茶椀	SK536		15.2	5.3		やや密	灰白	5Y7/1	口縁部3/12	鞍鉢痕 鞍投・産声
996	7-70-3	7703	陶器	山茶椀	SK536		14.5			密	灰白	5Y7/1	口縁部4/12	内外面に煤付着 知多・鞍投
998	7-88-1	7881	鉄	小刀	SX537	推存	長22.0	幅3.4						木質付着
999	7-78-1	7781	土師器	皿	SX537		13.0	2.0		密(~1.0mmの砂粒)	灰白	5YR/0	口縁部ほぼ完存	南伊勢系
1000	7-79-4	7794	土師器	小皿	SX537		7.3	1.0		やや密(~1.0mmの砂粒)	灰白	2.5YR/2	口縁部完存	南伊勢系
1001	7-78-2	7782	土師器	小皿	SX537		8.1	0.9		密(~1.5mmの砂粒)	灰白	10YR/1	口縁部完存	南伊勢系
1002	7-78-3	7783	土師器	小皿	SX537		7.4	1.0		やや粗(~1.0mmの砂粒)	灰白	2.5YR/2	口縁部完存	南伊勢系
1003	7-84-1	7841	陶器	大甕	SX537		41.3	60.0		やや密	(釉)赤褐(素地)灰白	7.5YT/1 10R5/3	口縁部10/12	常滑
1004	7-77-5	7775	須恵器	杯蓋	SR539		17.6			やや密(~2.5mmの砂粒)	灰	N5/0	口縁部1/12	
1005	7-77-6	7776	須恵器	杯身	SR539	受部径	15.6			密(~1.5mmの砂粒)	灰	N5/0	受部部1/12	
1006	7-21-4	7214	須恵器	杯身	SR539		11.6	3.4		やや密(~1.5mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部3/12	
1007	7-73-4	7734	須恵器	杯身	SR539		13.7	5.1		やや粗(~2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部小片	
1008	7-77-4	7774	須恵器	杯身	SR539	高台径	8.2			密	灰	N6/0	高台部4/12	
1009	7-75-6	7756	黒色土器	椀	SR539	高台径	10.0			やや密(~2.0mmの砂粒)	灰	N5/0	高台部4/12	
1010	7-75-4	7754	黒色土器	椀	SR539	高台径	7.6			やや密(~2.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	高台部5/12	
1011	7-78-5	7785	黒色土器	椀	SR539	高台径	7.8			密	暗灰	N3/0	高台部2/12	
1012	7-74-3	7743	陶器	小皿	SR539		8.7	1.6		やや密	灰白	N7/0	口縁部2/12	鞍投・知多
1013	7-75-3	7753	DTD土師器	小皿	SR539		10.0	2.65		やや粗(~2.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4		
1014	7-76-5	7765	土師器	小皿	SR539		8.0	1.0		密(~1.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部完存	南伊勢系
1015	7-76-6	7766	土師器	小皿	SR539		7.3	1.4		密(~3.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/1	口縁部7/12	中北勢系
1016	7-76-4	7764	土師器	小皿	SR539		7.4~7.9	0.9~1.95		やや密(~1.5mmの砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部完存	南伊勢系
1017	7-76-2	7762	土師器	鍋	SR539		26.0			粗(~2.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部1/12	外面に煤付着 南伊勢系
1018	7-75-2	7752	土師器	鍋	SR539		26.2			やや粗(~3.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部2/12	外面に煤付着 南伊勢系
1019	7-75-1	7751	土師器	鍋	SR539		27.9			粗(~3.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR6/3	口縁部2/12	外面に煤付着 南伊勢系
1020	7-76-3	7763	土師器	鍋	SR539		18.2			粗(~3.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部2/12	外面に煤付着 南伊勢系
1021	7-76-1	7761	土師器	鍋	SR539		25.0			やや粗(~2.5mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部3/12	外面に煤付着 南伊勢系
1022	7-77-2	7772	土師器	羽釜	SR539		23.0			やや粗(~3.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部2/12	鍔孔1ヶ所 外面に煤付着 中北勢系
1023	7-77-1	7771	土師器	羽釜	SR539		28.4			やや粗(~2.0mmの砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/3	口縁部1/12	外面に煤付着 南伊勢系
1024	7-21-1	7211	陶器	山茶椀	SR539		16.2	4.75		密(~1.0mmの砂粒)	灰白	5YR/1	口縁部1/12	産業遺書 鞍鉢痕
1025	7-21-2	7212	陶器	山茶椀	SR539	高台径	7.4			やや密(2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部11/12	産業遺書
1026	7-22-1	7221	陶器	山茶椀	SR539	高台径	8.6			やや粗(~2.5mmの砂粒)	灰白	5YR/1	高台部4/12	産業遺書 鞍鉢痕
1027	7-24-3	7243	陶器	山茶椀	SR539	高台径	5.4			やや密(~1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部2/12	産業遺書 鞍鉢痕

第25表　遺物観察表

報告番号	R No.	板番号	質	器形	遺構	計測値				胎土	色調		残存	特記事項
						口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)						
1028	7-22-3	7223	陶器	山茶椀	SR539	高台径	6.0			やや密(～1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部4/12	底面墨書
1029	7-24-1	7241	陶器	山茶椀	SR539	高台径	6.4			やや粗(～4.0mmの小石)	灰白	N8/0	高台部4/12	底面墨書 釉蝕痕
1030	7-24-2	7242	陶器	山茶椀	SR539	高台径	5.2			やや粗(～2.5mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部4/12	底面墨書 釉蝕痕
1031	7-24-5	7245	陶器	山茶椀	SR539	高台径	5.8			やや粗(～1.5mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部小片	底面墨書
1032	7-71-1	7711	陶器	山茶椀	SR539		15.7	5.3		やや粗(～1.5mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部完存	墨書
1033	7-74-2	7742	陶器	山茶椀	SR539		15.2	5.0		やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部1/12	知多-猿投
1034	7-72-4	7724	陶器	山茶椀	SR539		17.0	6.4		やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部3/12	墨書
1035	7-73-2	7732	陶器	山茶椀	SR539		16.1	5.7		やや密	灰白	N7/0	口縁部3/12	墨書
1036	7-73-1	7731	陶器	山茶椀	SR539		15.8	5.55		やや粗(～3.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部5/12	釉蝕痕 知多-猿投
1037	7-71-6	7716	陶器	山茶椀	SR539		17.1	5.5		やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	5Y8/1	口縁部2/12	釉蝕痕 瀬戸？
1038	7-72-2	7722	陶器	山茶椀	SR539		16.2	4.9		やや密	灰白	N8/0	口縁部4/12	釉蝕痕 猿投-瀬戸
1039	7-73-3	7733	陶器	山茶椀	SR539		16.4	4.8		やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部1/12	内面に煤付着 瀬戸
1040	7-72-1	7721	陶器	山茶椀	SR539		17.6	5.35		密	灰白	N8/0	口縁部1/12	瀬戸-猿投
1041	7-72-5	7725	陶器	山茶椀	SR539		16.1	5.25		やや粗(～5.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部2/12	釉蝕痕 知多-猿投
1042	7-71-5	7715	陶器	山茶椀	SR539		15.3	5.4		粗(～4.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	口縁部8/12	釉蝕痕 知多-猿投
1043	7-71-4	7714	陶器	山茶椀	SR539		14.5	5.0		やや密(～2.5mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部7/12	釉蝕痕 知多
1044	7-71-3	7713	陶器	山茶椀	SR539		14.8	5.8		やや粗(～2.5mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部5/12	釉蝕痕 知多
1045	7-74-1	7741	陶器	山茶椀	SR539		13.6	5.5		やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部5/12	釉蝕痕 知多-猿投
1046	7-71-2	7712	陶器	山茶椀	SR539		15.1	5.0		粗(～3.5mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部完存	釉蝕痕 知多
1047	7-72-3	7723	陶器	山茶椀	SR539		12.8	4.2		やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部5/12	内面に煤付着 瀬戸？
1048	7-74-5	7745	陶器	小皿	SR539		8.6	1.8		やや粗(～1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部5/12	知多-猿投
1049	7-74-4	7744	陶器	小皿	SR539		8.0	1.45		やや密	灰白	N7/0	口縁部完存	知多-猿投
1050	7-77-3	7773	陶器	壺	SR539		19.6			やや粗(～2.5mmの砂粒)	黄灰	2.5Y5/1	口縁部2/12	常滑
1051	7-14-6	7146	青磁	椀	SR539	高台径	5.5			密	(釉)オリーブ灰(素地)灰白	5GY6/1 N7/0	高台部7/12	
1052	7-14-4	7144	青磁	椀	SR539					密	(釉)明オリーブ 灰(素地)灰白	2.5GY7/1 N7/0	底部片	
1053	7-75-5	7755	陶器	鉢鉢	SR539					やや粗(～3.5mmの砂粒)	灰	N5/0	口縁部小片	瀬戸
1055	7-78-11	77811	土師質	支脚	SR539	残存	長5.1	径2.2						
1056	7-78-10	77810	土師質	土鍋	SR539		長4.7	径1.3	6.45					
1057	7-78-7	7787	弥生土器	壺	SK541	底径	6.6			粗(～5.0mmの小石-砂粒)	にぶい橙	10YR7/3	底部完存	
1058	7-78-6	7786	土師器	小皿	SD544		9.5			密	橙	2.5YR7/6	口縁部1/12	ての字小皿(京都系)
1059	7-80-2	7802	陶器	擂鉢	SD545					やや密	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部片	信楽
1060	7-13-8	7138	緑釉陶器	椀	SD545					密	灰白	N7/0	小片	
1061	7-79-1	7791	陶器	山茶椀	SD545					密	灰白	5Y7/1	口縁部片	猿投-瀬戸
1062	7-79-3	7793	陶器	山茶椀	SD545	高台径	6.0			密	灰白	5Y7/1	高台部8/12	釉蝕痕 知多
1063	7-79-2	7792	陶器	山茶椀	SD545	高台径	7.6			密	灰白	5Y7/1	高台部完存	釉蝕痕 瀬戸-猿投
1064	7-79-5	7795	陶器	山茶椀	SD545	高台径	8.1			密	灰白	5Y7/1	高台部4/12	知多？
1065	7-79-7	7797	陶器	山茶椀	SD545	高台径	8.6			密	灰白	5Y7/1	高台部4/12	猿投-瀬戸
1066	7-79-4	7794	陶器	山茶椀	SD545	高台径	8.0			密	灰白	5Y7/1	高台部3/12	猿投-知多
1067	7-80-3	7803	陶器	壺	SD545		12.0			密	(釉)褐(素地)灰白	7.5YR4/3 5Y7/1	口縁部3/12	瀬戸美濃系
1068	7-79-6	7796	陶器	壺	SD545	底径	14.0			密	灰	N6/0	底部2/12	
1069	7-80-1	7801	瓦	丸瓦	SD545	残存	長11.4	厚1.8		やや粗(～3.0mmの砂粒)	灰	N5/0		
1070	7-78-9	7789	20Cと部器	鉢or皿	SK547	底径	6.4			やや粗(～2.5mmの砂粒)	橙	5YR7/6	底部完存	
1071	7-83-7	7837	須恵器	杯身	FSp1		11.4	3.7		密	灰白	N7/0	口縁部小片	
1072	7-82-4	7824	陶器	山茶椀	G3p1	高台径	8.2			やや粗(～4.0mmの小石)	灰白	N8/0	高台部3/12	知多-猿投
1073	7-82-8	7828	陶器	山茶椀	L5p1	高台径	7.6			やや粗(～2.5mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部3/12	釉蝕痕 知多-猿投
1074	7-83-6	7836	土師器	小皿	K6p1		7.7	0.9		やや粗(～1.5mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	口縁部8/12	
1075	7-2-6	726	土師器	高杯	G区包	基底部径	3.3			やや粗(～2.5mmの砂粒)	浅黄	5YR8/4	基底部ほぼ完存	三方透かし 東海系
1076	7-4-7	747	須恵器	鉢	G区包	体部径	8.0			やや粗(～2.5mmの砂粒)	灰	N6/0	体部5/12	穿孔
1077	7-4-8	748	須恵器	杯蓋	G区包	つまみ径	3.1			密(～1.0mmの砂粒)	灰	N6/0		
1078	7-6-3	763	須恵器	杯身	G区包		14.0	3.6		やや密(微砂粒)	灰	N5/0	口縁部2/12	
1079	7-3-6	736	須恵器	杯身	G区包	高台径	11.3			やや粗(～1.5mmの砂粒)	灰黄	2.5Y7/2	高台部2/12	
1080	7-4-6	746	須恵器	鉢	G区包					粗(～4.0mmの砂粒)	灰	7.5Y6/1	口縁部小片	
1081	7-2-4	724	須恵器	長頸壺	G区包	胴部径	16.8			やや粗(～2.5mmの砂粒)	灰白	N8/0	胴部2/12	
1082	7-13-3	7133	緑釉陶器	椀	G区包	底径	8.2			密	灰	N6/0		
1083	7-28-5	7285	陶器	山茶椀	G区包	高台径	6.0			密	灰白	5Y7/1	高台部小片	底面墨書
1084	7-28-6	7286	陶器	山茶椀	G区包	高台径	5.6			密	灰白	5Y7/1		底面墨書 釉蝕痕
1085	7-28-2	7282	陶器	山茶椀	G区包	高台径	7.4			密	灰白	2.5Y7/1	高台部完存	底面墨書
1086	7-28-4	7284	陶器	山茶椀	G区包		12.6			やや粗(～4.0mmの小石-砂粒)	灰白	2.5Y8/1	口縁部3/12	外面墨書 1083と同一個体か
1087	7-29-1	7291	陶器	山茶椀	G区包	高台径	6.7			やや密	灰白	5Y7/1	高台部3/12	底面墨書 釉蝕痕
1088	7-29-2	7292	陶器	山茶椀	G区包	高台径	6.7			やや密	灰白	5Y7/1	高台部5/12	底面墨書 釉蝕痕

第26表　遺物観察表

報告番号	R No.	収容号	質	器形	遺構	計測値				地土	色調		残存	特記事項
						口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)						
1089	7-29-4	7294	陶器	山茶椀	0区包	高台径	6.7			やや密(～3.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	高台部4/12	底部墨書 釉鉄点
1090	7-29-3	7293	陶器	山茶椀	0区包	高台径	6.4			密	灰白	2.5Y7/1		底部墨書 釉鉄点
1091	7-29-3	7293	陶器	山茶椀	0区包	高台径	5.7			密	灰白	5Y7/1	高台部5/12	底部墨書 釉鉄点
1092	7-30-2	7302	陶器	山茶椀	0区包	高台径	7.0			やや密(微砂粒)	灰白	5Y7/1	高台部4/12	底部墨書 釉鉄点
1093	7-30-4	7304	陶器	山茶椀	0区包					やや粗(～5.0mmの小石・砂粒)	灰白	5Y8/1	体部小片	外面墨書 1998元同一個体か
1094	7-5-8	758	陶器	山茶椀	0区包	高台径	7.2			密(～1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部5/12	内面底部に黒炭
1095	7-30-5	7305	陶器	山茶椀	0区包					やや粗(～2.5mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	底部小片	底部墨書
1096	7-30-6	7306	須恵器	不明	0区包					密	灰白	N7/0	体部小片	外面墨書
1097	7-12-1	7121	陶器	山茶椀	0区包		17.1	4.8		やや密	黄灰	2.5Y6/0	口縁部4/12	内面に炭化物付着
1098	7-10-5	7105	陶器	山茶椀	0区包		16.1	5.1		密	灰白	7.5Y7/1	口縁部2/12	
1099	7-10-6	7106	陶器	山茶椀	0区包		15.1	4.9		密	灰白	5Y7/1	口縁部4/12	
1100	7-11-2	7112	陶器	山茶椀	0区包		16.2	5.2		やや密(～7.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	口縁部8/12	釉鉄点
1101	7-10-7	7107	陶器	山茶椀	0区包		15.8	5.2		密	灰白	2.5Y7/1	口縁部1/12	
1102	7-11-1	7111	陶器	山茶椀	0区包		14.8	4.8		密	灰	N6/0	口縁部2/12	釉鉄点
1103	7-1-2	712	陶器	山茶椀	0区包		14.9	5.3		粗(～3.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	口縁部3/12	釉鉄点
1104	7-1-4	714	陶器	山茶椀	0区包		14.3	4.9		やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部5/12	釉鉄点
1105	7-1-1	711	陶器	山茶椀	0区包		14.0	5.8		粗(～5.0mmの小石)	灰白	N8/0	口縁部完存	釉鉄点
1106	7-6-1	761	陶器	山茶椀	0区包		14.3	5.4		やや密(～1.5mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部10/12	釉鉄点
1107	7-1-3	713	陶器	山茶椀	0区包		14.3	5.2		やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部1/12	釉鉄点
1108	7-4-4	744	陶器	山茶椀	0区包	高台径	7.6			密(～1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部完存	釉鉄点
1109	7-11-3	7113	陶器	山茶椀	0区包	高台径	6.2			密(～3.0mmの砂粒)	灰白	7.5Y7/1	高台部4/12	釉鉄点
1110	7-10-3	7103	陶器	小椀	0区包	高台径	6.5			やや密	灰白	2.5Y8/1	高台部11/12	
1111	7-4-1	741	陶器	小椀	0区包		9.0	3.0		密(～1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部4/12	
1112	7-4-2	742	陶器	小皿	0区包		8.0	2.45		やや粗(～1.5mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部7/12	
1113	7-10-1	7101	陶器	小皿	0区包		8.1	2.3		密	灰白	2.5Y8/1	口縁部7/12	
1114	7-10-2	7102	陶器	小皿	0区包		8.4	1.5		密(～4.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	口縁部5/12	
1115	7-10-4	7104	陶器	小皿	0区包		8.3	1.8		やや密(～3.0mmの砂粒)	灰白	5Y8/2	口縁部2/12	
1116	7-4-3	743	陶器	小皿	0区包		7.8	1.9		やや密(～1.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部9/12	
1117	7-1-6	716	陶器	小皿	0区包		8.4	1.9		やや密(～4.0mmの小石)	灰白	N8/0	口縁部5/12	
1118	7-6-2	762	陶器	鉢	0区包	高台径	12.0			やや密(～4.0mmの小石・砂粒)	灰白	5Y7/1	高台部3/12	
1119	7-11-4	7114	陶器	鉢	0区包	高台径	10.4			やや密	灰	N6/0	高台部3/12	
1120	7-12-2	7122	陶器	鉢	0区包					粗(～4.0mmの砂粒)	灰白	5Y8/1	高台部片	
1121	7-7-2	772	土師器	鍋	0区包		29.0			やや密(微砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部1/12	外面に煤付着
1122	7-5-3	753	土師器	鍋	0区包					やや密(～1.5mmの砂粒)	灰黄褐	10YR6/2	口縁部小片	外面に煤付着
1123	7-2-2	722	土師器	鍋	0区包		27.0			やや密(～2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部2/12	
1124	7-7-1	771	土師器	鍋	0区包					やや粗(～4.0mmの小石・砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部片	
1125	7-5-4	754	土師器	羽釜	0区包		19.6			やや粗(～1.5mmの砂粒)	橙	5YR7/6	口縁部2/12	
1126	7-12-3	7123	土師器	鍋	0区包					やや粗(～3.0mmの砂粒)	褐	7.5YR4/3	口縁部片	清掃型
1127	7-2-5	725	DTO土師器	椀	0区包		14.0	4.7		やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部1/12	
1128	7-5-1	751	DTO土師器	小皿	0区包		9.8	2.0		やや粗(～1.5mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR6/4	口縁部4/12	
1129	7-7-4	774	土師器	小皿	0区包		9.0	2.1		やや密	灰白	2.5Y8/1	口縁部4/12	口縁内側油脂付着
1130	7-1-7	717	土師器	小皿	0区包		9.0	2.1		やや粗(～5.5mmの小石)	灰白	2.5Y8/1	口縁部6/12	
1131	7-5-2	752	土師器	小皿	0区包		10.0	1.2		やや粗(～1.5mmの砂粒)	橙	2.5YR7/6	口縁部2/12	
1132	7-7-3	773	土師器	小皿	0区包		10.2	1.7		やや密	浅黄橙	10YR8/3	口縁部3/12	
1133	7-1-5	715	土師器	小皿	0区包		10.7	1.4		密	灰白	10YR8/2	口縁部3/12	ての字小皿(京都系)
1134	7-6-5	765	陶器	大壺	0区包					やや密(微砂粒)	黄灰	2.5Y4/1	口縁部片	常滑
1135	7-6-4	764	陶器	大壺	0区包					やや粗(～4.0mmの小石・砂粒)	にぶい橙	5YR6/4	口縁部片	常滑
1136	7-3-1	731	陶器	大壺	0区包					やや粗(～4.0mmの砂粒)	(胎)暗赤褐 (表地)灰褐	2.5YR3/3 5YR6/2	口縁部小片	常滑
1137	7-3-2	732	陶器	壺	0区包					やや密(～1.5mmの砂粒)	灰褐	5YR4/2	口縁部小片	常滑
1138	7-14-1	7141	白磁	椀	0区包					密	(胎)灰白 (表地)灰白	2.5GY8/1 N8/0	口縁部片	
1139	7-3-3	733	陶器	天目茶椀	0区包		11.7	5.9		密(微砂粒)	(胎)褐 (表地)灰白	7.5YR4/3 10YR8/2	口縁部4/12	
1140	7-14-5	7145	白磁	椀	0区包	底径	5.2			密	(胎)明オリーブ灰 (表地)灰白	5GY7/1 N8/0		
1141	7-14-3	7143	青磁	皿	0区包					密	(胎)オリーブ灰 (表地)灰白	2.5GY6/1 N7/0	口縁部片	
1142	7-3-4	734	陶器	緑釉小皿	0区包		10.7			密(微砂粒)	(胎)オリーブ黄 (表地)灰白	5Y6/3 5Y7/1	口縁部2/12	
1143	7-1-6	716	陶器	灯明皿	0区包		10.0	2.1		やや粗(～1.0mmの砂粒)	(胎)暗褐 (表地)灰褐	7.5YR3/3 2.5Y7/2	口縁部11/12	
1144	7-14-7	7147	青磁	椀	0区包	高台径	5.5			密	(胎)明緑灰 (表地)灰白	10GY7/1 N7/0	高台部2/12	花文印刻
1145	7-2-1	721	陶器	鉢	0区包		34.0			密	灰	5Y6/1	口縁部2/12	

第27表　遺物観察表

報告番号	R No.	板番号	質	器形	遺構	計測値				胎土	色調		焼成	特記事項
						口径（cm）	器高（cm）	重量（g）						
1146	7-9-2	792	瓦	軒丸瓦	GB区	残存	長5.9		厚1.4	やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白			
1147	7-9-1	791	瓦	平瓦	GB区	残存	長14.5	幅10.8	厚2.0	粗(～6.0mmの小石・砂粒)	灰	N6/0		
1152	7-5-7	757	土師質	土玉	GB区	残存	(幅)3.15	(厚)2.2	18.8	やや密(～1.5mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4		
1153	7-5-5	755	土師質	土師	GB区		(長)4.5	(幅)1.0	3.8	密(～1.0mmの砂粒)	橙	5YR7/6		
1154	7-5-6	756	土師質	土師	GB区	残存	(長)2.0	(幅)0.8	0.9	密(～1.0mmの砂粒)	浅黄橙	7.5YR6/4		
1155	7-65-1	7651	銅	銅鏡	GB区	直径	2.3							「皇宋通宝」
1156	7-65-2	7652	銅	銅鏡	GB区	直径	2.2							「景德元宝」
1157	8-19-1	8191	陶器	鉢鉢	SB002		26.0	9.40		密(～2.0mmの砂粒)	橙	2.5YR6/6		底部に煤付着 底漁具？ 常滑
1158	8-5-2	852	弥生土器	壺	SB002	底径	9.0			やや密(～3.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	底部4/12	弥生中期後半～後期前半
1159	8-18-4	8184	土師器	小皿	SB002		8.0	2.00		密	灰白	10YR8/2	口縁部完存	刷伊勢系
1160	8-18-3	8183	土師器	小皿	SB002		9.6	2.10		密	灰白	10YR8/2	口縁部完存	刷伊勢系
1162	8-16-4	8164	陶器	山茶椀	SB003	高台径	7.6			密(～1.5mmの砂粒)	灰白	N7/0	高台径11/12	瀬戸系
1163	8-16-3	8163	土師器	皿	SB003		8.7	1.90		密(～1.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	口縁部4/12	中北勢系 (角伊勢桃鹿)
1164	8-16-5	8165	土師器	皿	SB003		8.5	2.40		密(～3.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部5/12	刷伊勢系
1165	8-16-6	8166	土師器	皿	SB003		8.6	2.40		密(～3.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/2	口縁部5/12	刷伊勢系
1166	8-18-2	8182	土師器	鍋	SB003		29.0			密	灰白	10YR8/2	口縁部1/12	外面に煤付着 刷伊勢系4b類
1167	8-23-1	8231	土師器	鍋	SB003		29.0			やや密	灰白	10YR8/2	口縁部3/12	外面に煤付着 刷伊勢系2b類
1168	8-44-1	8441	土師器	鍋	SB003		30.0			密	灰白	10YR8/1～2	口縁部3/1～2	外面に煤付着 刷伊勢系4c類
1169	8-18-1	8181	土師器	茶釜	SB003		15.8			密	灰白	10YR8/2	口縁部5/12	外面に煤付着 中北勢系？
1170	8-18-5	8185	陶器	壺	SB003	底径	16.5			密(～8.0mmの小石・砂粒)	にぶい褐	7.5YR6/3	底部2/12	常滑
1173	8-19-3	8193	須恵器	甕	SB004	胴部径	7.6			密	灰白	N7/0	口縁部欠	
1174	8-2-2	822	陶器	山茶椀	SB004	高台径	7.6			密(～1.5mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	高台部5/12	底部墨書略押状記号 瀬戸
1175	8-2-1	821	陶器	山茶椀	SB004	高台径	7.5			密(～1.0mmの砂粒)	灰白	N6/0	高台部6/12	底部墨書「○」瀬戸
1181	8-23-2	8232	灰釉陶器	壺	SB006	底径	13.0			やや密	灰白	10Y8/1	底部5/12	
1182	8-22-3	8223	灰釉陶器	椀	SB006	高台径	6.2			密	灰白	N6/0	高台部5/12	
1183	8-23-6	8236	土師器	小皿	SB006		11.0			やや粗(～0.5mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部2/12	
1184	8-22-1	8221	DN土師器	台付皿	SB006	高台径	8.1			やや密	灰白	2.5Y8/1	高台部8/12	外面に煤付着
1185	8-21-9	8219	土師器	高杯	SB012	基底部径	2.6			やや粗(～1.5mmの砂粒)	橙	5YR6/6	基底部完存	
1186	8-23-5	8235	土師器	皿	SB014		10.6			やや密	灰白	10YR8/1	口縁部2/12	刷伊勢系
1187	8-20-6	8206	弥生土器	高杯	SB016	脚柱上部径	2.7			やや密(～1.5mmの砂粒)	橙	5YR7/6		透かしあり
1188	8-20-1	8201	弥生土器	高杯	SB016	底径	12.0			粗(～1.5mmの砂粒)	にぶい橙	2.5YR7/4	底部2/12	三方透かし
1189	8-20-3	8203	弥生土器	高杯	SB016	脚柱上部径	2.9			粗(～4.5mmの小石)	淡赤橙	2.5YR7/3		
1190	8-20-7	8207	弥生土器	高杯	SB016	脚柱上部径	2.4			密(～1.0mmの砂粒)	橙	5YR6/6		透かし1つ確認
1191	8-20-5	8205	土師器	高杯	SB016	脚柱上部径	2.7			やや粗(～1.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2		
1192	8-21-7	8217	土師器	小形丸底鉢	SB016	胴部径	6.1			粗(～1.0Dの砂粒)	橙	2.5YR7/6	胴部6/12	
1193	8-22-2	8222	土師器	壺	SB016	底部径	6.2			やや密	浅黄橙	10YR8/3	底部完存	
1194	8-21-6	8216	土師器	壺	SB016	直径 基部径	5.6			粗(～2.0mmの砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/4	底部基部完存	
1195	8-21-2	8212	土師器	壺	SB016		14.8			やや密(～1.5mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部小片	
1196	8-21-1	8211	土師器	壺	SB016		14.0			粗(～3.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部1/12	
1197	8-20-4	8204	土師器	壺	SB016		32.0			やや密(～1.0mmの砂粒)	淡橙	5YR8/4	口縁部1/12	
1198	8-21-4	8214	須恵器	杯身	SB016		13.0			やや粗(～1.5mmの砂粒)	灰	N6/0	口縁部1/12	
1199	8-21-5	8215	須恵器	杯身	SB016		12.0			やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	口縁部2/12	
1200	8-21-3	8213	土師器	S字甕	SK819		16.7			やや粗(～1.5mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部小片	C類
1201	8-21-8	8218	土師器	高杯	SK819	脚部径	3.0			粗(～1.5mmの砂粒)	橙	5YR7/6		三方透かし 有稜高杯
1202	8-20-2	8202	土師器	高杯	SK819	脚柱上部径	3.3			やや粗(～3.0mmの砂粒)	橙	5YR7/6		有稜高杯
1204	8-25-1	8251	弥生土器	高杯	PB区	脚柱部径	4.8			やや密(～2.5mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	脚柱部完存	透かし孔1つ
1205	8-27-4	8274	土師器	高杯	PB区	脚柱上部径	2.8			やや密	橙	5YR6/8	脚柱上部完存	三方透かし
1206	8-26-4	8264	土師器	高杯	PB区	脚柱上部径	3.0			やや密	橙	5YR6/6	脚柱上部完存	透かし
1207	8-27-2	8272	土師器	S字甕	PB区					やや密(微砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部片	B類
1208	8-25-3	8253	土師器	S字甕	PB区	頸部径	4.9			やや密	にぶい橙	7.5YR6/4		C類？
1209	8-26-5	8265	須恵器	杯蓋	PB区		14.2			密	灰	N6/0	口縁部4/12	
1210	8-44-3	8443	須恵器	杯身	PB区		13.4			密	灰	N6/0	口縁部1/12	
1211	8-25-6	8256	須恵器	杯身	PB区		12.9			密	灰	N6/0	口縁部1/12	
1212	8-25-5	8255	須恵器	杯身	PB区		13.3			密	灰	N6/0	口縁部1/12	
1213	8-37-4	8374	須恵器	杯身	PB区		13.1			やや密	褐灰	5YR5/1	口縁部2/12	
1214	8-25-7	8257	須恵器	横瓶	PB区		12.7			密	灰	N6/0	口縁部4/12	

第28表　遺物観察表

報告番号	R No.	収容号	質	器形	遺構	計測値				胎土	色調	残存	特記事項
						口径（cm）	器高（cm）	重量（g）					
1215	8-27-5	8275	須恵器	有蓋高杯蓋	P区包	つまみ径	2.5			密	灰白	N7/0	
1216	8-27-3	8273	土師器	甕	P区包		16.0			密	にぶい橙	7.5YR7/4	外面に煤付着
1217	8-26-3	8263	土師器	大型鉢	P区包		34.3			密	橙	5YR7/6	把手付鍋か？
1218	8-26-1	8261	灰釉陶器	椀	P区包	高台径	7.8			密	灰白	5Y8/1	高台部10/12	瀬戸・猿投
1219	8-27-8	8278	灰釉陶器	椀	P区包	高台径	8.0			密	灰白	5Y7/1	高台部3/12	猿投・瀬戸
1220	8-24-3	8243	陶器	山茶椀	P区包		15.4	6.80		やや密	灰白	N7/0	口縁部3/12	炭化物付着 渥美
1221	8-24-2	8242	陶器	山茶椀	P区包		15.0	5.00		やや密	灰白	N8/0	口縁部2/12	猿投・瀬戸
1222	8-24-4	8244	陶器	山茶椀	P区包		13.6	4.70		やや粗	灰白	N8/0	口縁部3/12	瀬戸or型式
1223	8-24-1	8241	陶器	山茶椀	P区包		14.0	5.20		密	灰白	N8/0	口縁部8/12	瀬戸
1224	8-2-5	825	陶器	山茶椀	P区包	高台径	6.7			密(～4.0mmの砂粒)	灰白	5Y8/1	高台部1/12	底部墨書「十」 砂粒痕 瀬戸
1225	8-3-2	832	陶器	山茶椀	P区包	高台径	5.6			密(～1.5mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部10/12	底部墨書「丁」 瀬戸・猿投
1226	8-3-1	831	陶器	山茶椀	P区包	底径	6.0			密(～2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0		底面墨書あり 瀬戸・猿投
1227	8-25-4	8254	陶器	小皿	P区包		8.0	1.60		密	灰白	2.5Y7/1	口縁部4/12	猿投・瀬戸
1228	8-24-9	8249	陶器	小皿	P区包		8.5	2.00		やや密(～4.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部8/12	知多・猿投
1229	8-27-1	8271	20%土師器	椀	P区包	高台径	8.0			やや密	浅黄橙	7.5YR8/4	高台部10/12	
1230	8-24-5	8245	20%土師器	椀	P区包	高台径	7.9			やや粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい橙	5YR7/4	高台径2/12	
1231	8-27-6	8276	土師器	鍋	P区包					やや密(～3.0mmの砂粒)	にぶい赤褐		口縁部片	清郷型
1232	8-24-7	8247	土師器	小皿	P区包		10.9	1.10		やや密	橙	5YR7/6	口縁部7/12	ての字小皿(中北弥高)
1233	8-24-8	8248	土師器	小皿	P区包		11.1	1.65		やや密	灰白	10YR8/2	口縁部3/12	ての字小皿(中北弥高)
1234	8-24-6	8246	土師器	小皿	P区包		11.0	1.30		やや密	橙	5YR7/6	口縁部9/12	ての字小皿(中北弥高)
1235	8-37-3	8373	土師器	鍋	P区包		20.2			やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/1	口縁部1/12	外面に煤付着
1236	8-38-1	8381	瓦	鬼瓦	P区包	残存	16.4×15.9		厚3.8	密	灰白	N8/0		
1268	6-89-1	6891	鉄製品	刀子	SX425	残存	(長)20	(幅)2.5	(厚)0.5					
1273			鉄製品	鉄滓	SD614									写真のみ
1274			鉄製品	鉄滓	SK265									写真のみ
1275			鉄製品	鉄滓	LBS包(83)									写真のみ
1276				釜	SE259									写真のみ

第29表　遺物観察表

報告番号	RNo.	報告地区	遺構名	出土地区等	調査時遺構名	器種	法量（cm）			重量（g）	石材	備考
							長さ	幅	厚さ			
6	5-18-07	J	SR606	5次J地区Q2	流路中	有孔円板	2.2	1.3	0.35	1.575	滑石	
80	5-20-04	J	J—M3p7	5次J地区M3	Pit7	砥石	5.7	4.1	1.1	53	凝灰岩	
88	5-18-06	J	J区包	5次J地区R7	包	石包丁	11.7	3.4	0.8	40.660	塩基性岩	
131	6-67-02	L	SH207	6次C地区G2	SH7—Ⅳ	石鹸	1.9	1.2	0.3	0.450	サヌカイト	ほぼ完形
132	6-67-01	L	SH207	6次C地区H2	SH7北東	石鹸	2.2	1.6	0.4	0.920	サヌカイト	
133	6-66-02	L	SH207	6次C地区3G	SH7アゼ	石鹸	3.55	1.15	0.7	3.060	サヌカイト	
134	6-67-11	L	SH207	6次C地区G3	SH7	RF	4.5	3.65	0.4	8.710	サヌカイト	
137	6-67-04	L	SH251	6次C地区C8	SH51-Ⅲ中層	石鹸	2.7	1.7	6.0	2.660	サヌカイト	完形
138	6-31-06	L	SH251	6次C地区D8	SK51—Ⅲ	石鹸	2.2	1.2	0.25	0.720	サヌカイト	未製品
139	6-65-01	L	SH251	6次C地区D8	SH51	柱状片刃石斧	15.4	1.85	1.9	113	ハイアロクラスタイト	完形
140	6-67-10	L	SH251	6次C地区C8	SH51-Ⅶ上層	スクレイパー	3.2	4.1	0.9	18.150	サヌカイト	
141	6-64-03	L	SH251	6次C地区D8	SH51	敲石	16.1	9.2	5.5	1.180	安山岩	ほぼ完形
151	6-67-05	L	SH311	6次C地区D13	P3(SH111内)	石鹸	1.8	1.4	0.45	0.900	サヌカイト	完形
152	6-67-03	L	SH311	6次C地区D14	SH111南側溝	石鹸	2.0	1.1	0.3	0.650	サヌカイト	
153	6-67-03	L	SH311	6次C地区D13	SH111—Ⅳ	両刃石斧	8.3	6.0	2.2	78.300	ハイアロクラスタイト	
158	6-65-03	L	SK211	6次C地区G3	SK11—Ⅰ	打製石器	10.1	7.0	2.1	235	ホルンフェルス	完形
165	6-85-03	L	SK234	6次C地区7G	SK34アゼ	軽石	10.7	7.1	5.5	120	軽石	
174	6-67-06	L	SK240	6次C地区C7	SX40西	石錘	2.8	1.6	0.9	3.170	サヌカイト	
177	6-29-04	L	SK242	6次C地区F9	SK42	石鹸	2.7	1.5	0.45	1.560	サヌカイト	完形
178	6-29-03	L	SK242	6次C地区F9	SK42	石鹸	2.2	1.5	0.3	0.770	サヌカイト	完形
203	6-67-08	L	SK284	6次C地区B8	SK84—Ⅱ	スクレイパー	2.9	4.0	0.9	12.150	サヌカイト	
223	6-65-04	L	SK310	6次C地区D11	遺構直上	両刃石斧	10.0	5.2	2.85	240	ハイアロクラスタイト	
231	6-14-02	L	SK312	6次C地区F11	SD112	砥石	15.1	6.2	4.6	690	凝灰質砂岩	
236	6-67-07	L	SK314	6次C地区E10	SK314	剥片	5.3	9.0	1.3	47.490	サヌカイト	
237	6-63-02	L	SK314	6次C地区F10	P1	石鹸	3.6	1.3	0.5	1.700	サヌカイト	
244	6-64-04	L	SK326	6次C地区A-B12	遺構直上	敲石	9.3	6.4	4.4	470	閃緑岩	
249	6-63-01	L	C11p11	6次C地区C11	P11	石鹸	2.05	2.0	0.4	1.110	サヌカイト	完形
250	6-58-04	L	C2p3	6次C地区C2	P3	石錘	2.75	1.1	0.5	1.320	サヌカイト	
251	6-64-02	L	F8p6	6次C地区F8	P6柱痕	敲石	9.7	4.15	3.3	215	砂岩	完形
252	6-64-01	L	D10p13	6次C地区D10	P13	敲石	8.05	5.65	2.9	230	泥岩	完形
454	6-66-01	L	L区包	6次C地区D—E12—13	遺構直上	石小刀	13.5	2.0	0.8	20	サヌカイト	完形
455	6-43-06	L	L区包	6次C地区D14	包	石鹸	4.1	1.1	0.7	3.090	サヌカイト	
456	6-42-08	L	L区包	6次C地区C5	第4層	石鹸	2.8	1.8	0.35	1.610	サヌカイト	完形
457	6-43-05	L	L区包	6次C地区C13	包	石鹸	2.1	1.2	0.25	0.580	サヌカイト	未製品
458	6-67-09	L	L区包	6次C地区B13	包	石錘	2.8	1.9	1.0	4.050	サヌカイト	
459	6-65-02	L	L区包	6次C地区F5	遺構直上	片刃石斧	7.1	4.55	1.1	75	ハイアロクラスタイト	完形品
460	6-62-04	L	L区包	6次C地区D11	遺構直上	磨製石斧	6.1	4.3	1.1	44.640	ハイアロクラスタイト	転用品
534	5-34-01	M	M区包	5次I地区H4	Pit1	石鹸	5.2	2.0	0.55	5.525	サヌカイト	
535	5-34-02	M	M区包	5次I地区H12	SR7	石鹸	2.75	1.6	0.4	1.405	サヌカイト	
565	6-21-04	N	SD404	6次B2地区G3	SD304	管玉	2.6	0.85	2.15	3.530		
591	6-66-03	N	N区包	6次B2地区G3	SD306	スクレイパー	2.2	6.05	1.1	12.510	サヌカイト	ほぼ完形
592	6-03-04	N	N区包	6次B2地区G6	側溝	石鹸	2.5	1.7	0.45	1.550	サヌカイト	完形
641	8-03-03	P	SD502	8次J4	SD13	磨石?	11.1	5.3	3.5	330		
718	8-40-01	P	SD503	8次N4	SD1下層	五輪塔(火)	14.8	22.3	—	12.0 (kg)	花崗岩	
719	8-39-01	P	SD503	8次V5	SD1下層	五輪塔(地)	14.3	20.0	—	15.5 (kg)	花崗岩	
893	8-43-01	P	SD514	8次I3	SD8	五輪塔(空・風)	22.0	15.5	—	6.1 (kg)	花崗岩	
1054	7-78-08	O	SR539	7次N3	SR39	砥石	6.2	4.4	2.2	92	凝灰岩	
1148	7-08-02	O	O区包	7次W3	包	砥石	8.6	6.9	4.1	341	凝灰質砂岩	
1149	7-08-01	O	O区包	7次西区	包	砥石	14.4	9.2	3.6	610	砂質凝灰岩	
1150	7-08-03	O	O区包	7次L5	包	砥石	4.4	6.2	3.1	129	凝灰岩	
1151	7-07-05	O	O区包	7次C5	包	砥石	7.2	5.3	1.6	71	泥岩	
1203	8-27-07	P	P区包	8次M7	包	石鹸	1.8	1.1	0.3	0.645	サヌカイト	
1236	8-41-01	P	P区包	8次N3	機械掘削	五輪塔(一石)	40.8	11.0	—	6.4 (kg)	凝灰質砂岩	
1237	8-42-01	P	P区包	8次D4	機械掘削	五輪塔(水)	16.8	20.8	—	8.9 (kg)	花崗岩	

第30表　遺物観察表（石器・石製品）

報告番号	RNo.	報告地区	遺構名	出土地区等	調査時遺構名	器種	残存法量（cm）			樹種	備考
							全長	幅	厚さ		
263	6-09-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	杭	61.0	4.6	4.4		
264	6-09-02	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	杭	57.0	4.9	4.6	ブナ科シイ属	
265	6-16-03	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	杭	56.0	4.2	4.0		
266	6-10-02	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	杭	53.4	6.8	5.2	ブナ科シイ属	
267	6-16-02	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	杭	27.9	3.5	3.4		
268	6-09-07	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	杭	24.8	5.2	3.6		
269	6-09-05	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	杭	19.4	3.3	2.4		
270	6-09-06	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	杭	36.9	4.5	3.2	ツツジ科スノキ属 シャシャンポ	
271	6-09-03	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	杭	16.1	4.5	3.2	ツバキ科サカキ属 サカキ	
	6-09-04		SE324				24.5	5.8	7.6		
272	6-32-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	曲物	口径21.0	－	1.0		完存
273	6-31-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	曲物	口径21.2	高さ14.0	－		孔11個確認
274	6-18-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	楕円形曲物	口径52.0	高さ27.0	－		
275	6-03-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	棒状材	34.6	13.2	9.9		
276	6-12-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	46.0	13.0	1.8		
277	6-05-02	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	49.8	12.0	1.2		
278	6-10-03	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	53.5	11.8	1.6	スギ	
279	6-37-03	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	107.0	9.8	2.3		
280	6-13-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	39.9	18.4	1.8		
281	6-22-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	61.8	16.4	2.4		
282	6-05-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	47.3	14.8	2.2		
283	6-07-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	41.0	7.0	1.2		
284	6-14-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	46.5	10.0	2.0		
285	6-04-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	41.5	5.8	1.0		
286	6-21-03	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	71.7	15.8	2.6	マツ科モミ属	
287	6-06-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	113.5	14.3	4.0	スギ	
288	6-25-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	111.2	11.3	1.9	スギ	
289	6-35-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	112.5	17.0	2.6	スギ	
290	6-36-03	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	95.0	10.3	2.6	スギ	
291	6-17-02	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	118.8	16.0	6.0	スギ	
292	6-39-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	114.8	16.0	3.3	スギ	
293	6-22-03	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	77.0	13.4	1.4		
294	6-06-02	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	81.5	14.0	1.3		
295	6-20-03	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	48.6	13.3	2.8		
296	6-06-03	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	83.0	15.4	1.7		
297	6-37-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	116.2	10.2	3.1	スギ	
298	6-20-02	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	100.2	17.5	3.5	スギ	
299	6-28-02	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	84.7	14.9	2.4	マツ科モミ属	
300	6-08-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	89.8	3.3	2.2		
301	6-38-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	83.8	12.7	1.5	スギ	
302	6-33-03	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	80.5	14.5	1.5		
303	6-33-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	85.7	13.8	1.5		
304	6-33-02	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	88.5	11.0	1.0		
305	6-28-03	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	87.0	11.5	1.3		
306	6-17-03	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	89.5	9.5	3.1	スギ	
307	6-34-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	120.7	16.3	2.0	スギ	
308	6-34-02	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	118.0	18.0	1.5	スギ	
309	6-16-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	79.2	4.4	4.0		
310	6-41-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	46.2	54.0	3.1	スギ	
311	6-40-02	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	103.6	9.3	1.1		
312	6-22-02	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	65.1	11.5	1.4		
313	6-38-03	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	92.5	10.5	1.5	スギ	
314	6-11-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	46.7	14.6	2.3	スギ	
315	6-40-03	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	101.7	11.5	1.5		
316	6-10-04	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	91.0	10.5	1.0	スギ	

第31表　遺物観察表（木製品）

報告番号	RNo.	報告地区	遺構名	出土地区等	調査時遺構名	器種	残存法量（cm）			樹種	備考
							全長	幅	厚さ		
317	6-21-02	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	69.8	13.5	2.8		
318	6-39-03	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	108.3	8.5	1.8		
319	6-27-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	87.9	6.4	1.1		
320	6-26-02	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	47.2	9.5	2.5		
321	6-08-02	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	46.3	11.2	1.1	スギ	
322	6-08-03	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	51.9	13.6	1.1		
323	6-38-02	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	81.5	8.5	3.3	スギ	
324	6-15-02	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	棒状材	33.1	5.2	4.2	スギ	
325	6-32-02	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	25.2	6.0	0.3		
326	6-10-05	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	棒状材	87.9	4.5	2.6	スギ	
327	6-15-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	38.6	8.1	2.6	スギ	
328	6-20-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	A 100.0	11.0	1.8		
328	6-20-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	B 91.0	10.0	1.7		
328	6-20-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	C 92.5	5.3	1.1		
329	6-36-02	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	97.0	11.0	1.0		
330	6-21-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	70.1	9.7	2.8	スギ	
331	6-40-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	112.9	8.2	2.6	スギ	
332	6-10-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	棒状材	103.2	4.8	4.4	クスノキ科クスノキ属ヤブニッケイ	
333	6-35-02	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	118.6	15.0	2.0	スギ	
334	6-25-02	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	97.8	15.0	1.3	スギ	
335	6-17-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	119.5	16.5	1.3	スギ	
336	6-37-02	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	101.6	12.8	1.5		
337	6-39-02	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	101.2	13.8	1.6	スギ	
338	6-36-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	104.9	15.0	2.2	スギ	
339	6-25-03	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	101.1	14.5	1.5	スギ	
340	6-34-03	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	112.1	14.9	2.0		
341	6-30-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	29.7	8.2	4.1	スギ	
342	6-29-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	48.0	17.0	1.2	スギ	
343	6-28-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	105.0	75.3	1.9	スギ	
344	6-26-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	54.6	9.6	1.0		
345	6-35-03	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	107.3	11.0	2.5	マツ科モミ属	
346	6-23-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	96.7	6.3	2.1		
347	6-23-02	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	104.0	15.0	1.6	スギ	
348	6-19-01	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	曲物	口径42.9	高さ27.5	－		
349	6-01-03	L	SE324	6次C地区A11－12	SE127	板材	23.2	2.8	1.3	ヒノキ科アスナロ属	
375	6-02-01	L	SE324	6次C地区A10－11	SE124	板状具	21.4	7.8	2.4		
424	6-01-01	L	SE266	6次C地区		曲物底板				スギ	
558	6-01-02	N	SK440	6次B2地区F14	SK340 南端下層	板材	29.4	5.3	0.9	ヒノキ科アスナロ属	
706	8-02-02	P	SD503	8次J4	SD1上層	方形有孔薄板材	16.6	13.7	0.9		
713	8-07-01	P	SD503	8次L4	SD1下層	組合せ部材	64.4	7.4	1.7		
715	8-05-03	P	SD503	8次O4	SD1下層	漆器椀	10.2	－	0.4		
716	8-01-01	P	SD503	8次M4	SD1下層	漆器椀	口径16.6	－	0.5		
717	8-05-02	P	SD503	8次P4	SD1下層	板材	18.2	7.0	1.8		
851	7-87-03	O	SD514	7次	SD14	薄板材	24.2	5.2	0.6		
852	7-87-02	O	SD514	7次W3－W4	SD14	薄板材	11.3	2.6	0.7		
894	8-04-01	P	SD514	8次M3	SD8	方形有孔板材	16.9	16.0	0.7		完存
895	8-02-01	P	SD514	8次I3	SD8	枘付き角棒材	26.6	1.5	1.5		

第32表　遺物観察表（木製品）

報告番号	RNo.	報告地区	遺構名	出土地区等	調査時遺構名	器種	残存法量（cm）			樹種	備考
							全長	幅	厚さ		
909	7-86-01	O	SD517	7次V2	SD17	漆器椀	口径18.6	器高5.7	底径7.8		
910	7-86-02	O	SD517	7次V2	SD17	漆器椀	口径15.4	器高6.0	底径6.8		
911	7-87-01	O	SD517	7次V2	SD17	漆器椀	径20.0	－	1.0		
997	7-87-04	O	SE538	7次	SE38	曲物の底板	径17.0	－	0.9		
1161	8-01-02	P	SD802	8次W4	SD2	棒状材	18.4	7.0	6.0		
1171	8-03-01	P	SD803	8次W4	SD3	下駄	19.3	9.7	2.6		完存
1172	8-04-02	P	SD803	8次V4	SD3	薄板材	35.2	7.2	0.8		
1176	8-06-02	P	SD804	8次Q3	SD4	薄板材	29.0	8.7	1.0		
1177	8-05-01	P	SD804	8次R3	SD4	棋状木製品	17.6	5.4	2.3		
1178	8-06-01	P	SD804	8次Q3	SD4	部材片or残材	20.5	2.2	0.8		
1179	8-01-03	P	SD804	8次R3	SD4	部材片or残材	5.7	7.0	3.7		
1180	8-01-04	P	SD804	8次P3	SD4	部材片or残材	10.8	2.8	0.7		
1239	5-23-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸横桟	77.4	11.4	3.4		東側
1240	5-26-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸横桟	77.5	10.2	3.3		北側
1241	5-25-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸横桟	88.5	10.0	4.8		南側
1242	5-24-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸横桟	81.4	11.0	3.7		西側
1243	5-13-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	105.6	16.1	5.0		東側
1244	5-14-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	104.5	11.3	4.0		東側
1245	5-15-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	98.5	11.1	4.4		東側
1246	5-16-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	103.0	9.7	4.4		東側
1247	5-17-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	106.7	13.6	5.4		東側
1248	5-03-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	125.0	11.5	5.0		南側
1249	5-04-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	122.5	12.5	5.0		南側
1250	5-05-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	122.8	13.0	4.0		南側
1251	5-07-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	116.0	21.0	5.5		南側
1252	5-06-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	120.5	11.5	4.0		南側
1253	5-18-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	131.6	14.1	4.4		北側
1254	5-19-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	121.7	11.6	4.2		北側
1255	5-20-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	130.8	15.4	4.4		北側
1256	5-21-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	127.4	11.0	4.0		北側
1257	5-22-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	133.2	15.9	5.8		北側
1258	5-08-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	110.0	15.0	5.0		西側
1259	5-09-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	109.5	11.0	5.5		西側
1260	5-10-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	105.5	13.0	5.0		西側
1261	5-11-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	101.0	11.5	5.0		西側
1262	5-12-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	99.0	13.0	4.5		西側
1263	5-27-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	底板	105.0	11.5	4.0		
1264	5-28-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	底板	103.0	25.0	3.5		
1265	5-29-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	底板	96.0	2.6	5.0		
1266	5-30-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	曲物底板	径16.0	－	0.8		
1267	5-30-02	J	SE106	5次J地区U5	SK6	横梯	5.7	1.8	0.9		梯由40本残
1269	5-02-01	M	SE129	5次I地区E2－F2	SE	曲物底板	45.7	34.0	－		井戸枠
1270	5-01-01	M	SE129	5次I地区E2－F2	SE	井戸枠曲物	57.0	12.0	－		井戸枠
1271	5-01-02	M	SE129	5次I地区E2－F2	SE	井戸枠曲物	48.5	22.9	－		井戸枠

第33表　遺物観察表（木製品）

第５章　まとめ

第１節　遺構の変遷と画期

替田遺跡で本格的な集落形成が開始されるのは弥生時代中期初頭以降である。ここでは、発掘調査の全体的なまとめとして、替田遺跡の消長を大まかに捉えていきたい。以下、弥生時代以前の断片的な土器の出土にはじまり、途中衰退や断絶を経ながら近世まで続く遺跡の盛衰を周辺の遺跡動向も踏まえながら簡単に確認する。

前１期　縄文時代晩期

Ｌ区やＮ区で晩期の突帯文土器が確認され、詳細は不明なものの、替田遺跡もしくは周辺部での人間活動の存在が示唆される。

替田遺跡周辺では、安濃川北岸の蔵田遺跡で晩期の自然河道が確認されているほか、下流の納所遺跡でも浮線文土器など晩期の遺物の出土がある。弥生時代前期に納所遺跡で大規模な開発が開始されるが、その前史として断片的ではあるが当地域での晩期遺物の出土が注意されており、替田遺跡に残された痕跡もこの流れと軌を一にするものであろう。

第１期　弥生時代中期前葉～中葉

今回報告したＪ区・Ｌ区を中心に、中期前葉の遺構・遺物が出土し、替田遺跡の本格的な遺構形成が始まる。今回報告分には、明瞭な前期の遺物は出土しておらず、中期初頭をもって集落形成の開始期と捉えられる。第２節で詳述するが、中勢道路調査区やＬ区を中心に竪穴住居による居住域が存在した。ただし、明瞭な墓域は未確認である。

替田遺跡の周辺では、納所遺跡が伊勢湾西岸部を代表する前期遺跡として成立したほか、岩田川南岸の台地部に所在する上村遺跡でも前期土器が多数出土している。替田遺跡は、安濃川北岸の蔵田遺跡や松ノ木遺跡が中期初頭から集落や墳墓の形成を開始する動向と軌を一にしており、納所遺跡から分派した集団によって新たに拓かれた集落と推定される。時代は少し異なるが山籠遺跡などと比べて伐採・加工用磨製石斧類の出土が少ないことも特徴のひとつで、替田遺跡では施設材以外の木器は専ら他遺跡からの搬入によっていた可能性がある。替田遺跡からは凹線文土器の出土はなく、集落は中期中葉のうちに廃絶したものと捉えられる。

第２期　古墳時代前期

Ｊ区やＬ区などで土坑や溝などの遺構がみられるが、その量は少なく、出土遺物も少ない。具体的な集落構成を論ずるほどではないが、一応、替田遺跡でも人間活動が存在したことを確認しておきたい。

第３期　古墳時代後期～奈良時代

古墳時代後期から断片的な遺構形成がはじまり、Ｌ区を中心にでは奈良時代の掘立柱建物なども成立する。遺構数は少なく、やや散在した状況ではありが、この時期にも集落形成が存在した。

第４期　平安時代末～中世

遺跡全体に遺構・遺物がみられるが、遺跡東部のＬ区・Ｎ区・Ｍ区・Ｏ区・Ｐ区を中心とした字「結縁寺」部分の遺構密度が特に濃く、溝から大量の遺物が出土している。調査区の制約から掘立柱建物の確認数は多くないが、かなり大規模な集落が存在したものと推定される。Ｏ区とＰ区を通す溝ＳＤ503やＳＤ514などからは大量の墨書山茶椀類のほか、室町期では香炉（94）や瓦類など寺院に関係するのではと推定される遺物も出土した。本期に関わる問題点や集落の詳細な盛衰は、第５節及び第７節を参照されたいが、今後、「結縁寺」の字句が示唆する寺院と、その成立年代等が問題となろう。

第５期　近世

少量の土器の出土はあるものの、遺構としてはごく少数の遺構が確認されたにすぎない。しかも、これらの多くは第４期に形成された溝などの埋没過程で遺物が入り込んだものと思われ、遺構形成としてはかなり低調であったと推定される。もっともこのことは、この時期以降、土地利用の形態が、集落・宅地から耕地へと大きく改変されたことを示唆するものと思われ、遺構がないことがすなわち当地での人間活動自体がなかったことを意味しないことはいうまでもない。

（穂積）

第２節　替田遺跡における弥生集落の様相

替田遺跡Ｊ区やＬ区では、弥生時代の竪穴住居や方形周溝墓の可能性のある溝などが検出されている。これらはいずれも弥生時代中期前葉～中葉の比較的まとまった時期に営まれている。また替田遺跡では、これまでの調査でも同様の時期に属すると考えられる竪穴住居や溝、土坑などの遺構が多数検出されている。これらの資料からは、替田遺跡における弥生時代中期の集落の全体像をある程度把握することができよう。

１　集落の構造

弥生時代中期の遺構がまとまって検出されているのは１次調査Ｂ地区、Ｌ区である。これらからは、合計14棟の住居のほか、溝や土坑なども多く検出されている。また、替田遺跡に南接する弐ノ坪遺跡からも同時期の遺構が検出されている。弐ノ坪遺跡の中でも替田遺跡と接する北半部に集中して、焼失住居１棟（ＳＨ64）をはじめとする弥生時代中期前葉～中葉の遺構が検出されており、替田遺跡とともに一連の集落を形成していたものと考えられる。

弥生時代の遺構が密に分布する１次調査Ｂ地区やＬ区は、地形的にみて最も高くなっている部分であるが、Ｏ区・Ｐ区などその東側では低くなっている。南側も、弐ノ坪遺跡の調査区南半で次第に地形が低くなっていく。また、替田遺跡の西側には三泗川が流れており、この三泗川沿いは地形も低く不安定な土地であったとみられる。こうした点を示すように、Ｊ区北部では弥生時代中期に存在していたとみられる小規模な自然流路がいくつか検出されており、弥生時代の遺構はほとんど認められない。

こうした地形条件に加え、２次調査Ｃ地区[23]で検出されている東西にのびる溝は、その北側で弥生時代中期の遺構密度がかなり下がることから、集落域の北側を画する機能を持っていたとも考えられる。同様に、弐ノ坪遺跡ＳＨ64周辺では東西にのびる溝が３条検出されており、この溝が集落域の南側を画する機能を持っていたものと考えられる。

このようにみれば、替田遺跡と弐ノ坪遺跡の弥生時代中期集落は、安濃川の自然堤防上に存在する微高地上に営まれており、その南北は溝によって画され、東西は主に河川や小規模な自然流路などの自然地形によって画されていたものと考えられる。その範囲は、南北200m、東西120mほどであるものと思われる。

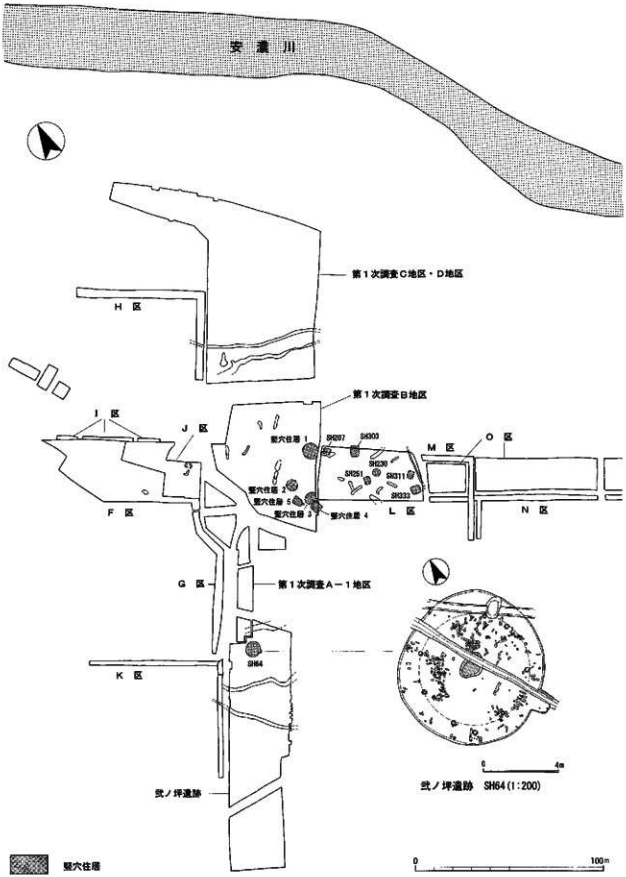
以上からみても弐ノ坪遺跡は替田遺跡と一連の集落と考えられるが、１次調査Ｂ地区・Ｌ区の住居のまとまりとは少し離れていることは確かである。第１次調査Ｂ地区と弐ノ坪遺跡の間のＧ区では弥生時代中期中葉の土器がややまとまって検出されたことから遺構が存在する可能性もあり[24]、両者の間の連続性が窺える。しかしながら、Ｇ区に隣接する１次調査Ａ－１～３区ではやや規模の大きな自然流路の痕跡と思われる砂層が検出されており、弐ノ坪遺跡の居住域と替田遺跡の居住域は、自然流路などによって区別されていた可能性がある。

また、弐ノ坪遺跡ＳＨ64の規模は１次調査Ｂ地区・Ｌ区において検出された住居の規模より一回り大きく、また張り出し部が付属している。このように住居の規模や構造にも違いが認められることには注意しておかなくてはならないだろう。

こうした点からみれば、替田遺跡と弐ノ坪遺跡は一連の集落を形成しつつも、その内部の居住域はいくつかのまとまりに区別されていたと推定できる。そして、このような複数の居住域のまとまりは、替田遺跡・弐ノ坪遺跡の集落内における複数の集団の存在を示している可能性も考えられよう。

替田遺跡・弐ノ坪遺跡では、以上のような住居や溝などの居住域に関連する遺構のほか、土壙墓あるいは方形周溝墓の溝の可能性が指摘されるような小規模な溝や土坑が多数検出されている。

これらの溝・土坑の分布範囲は、居住域が営まれている範囲とほぼ同じであり、時期的にも居住域が営まれた時期とほとんど差はない。したがって、これらが墓とすると居住域内に墓が造営されていたこととなる。伊勢湾西岸地域では、弥生時代中期前葉～中葉には方形周溝墓や土壙墓が一定の区域にまとまってつくられて墓域を形成し、居住域とは近接していても明瞭に区分されている例が多い。こうしたことから、住居と混在して存在する替田遺跡の溝や



第260図　替田遺跡弥生時代遺構配置図（１：2000）

土坑を埋葬に関連する遺構とは断定できない[5]。

Ｊ区のＳＸ115やＳＸ122などは住居が集中する区域からやや西に離れており、居住域と分離された墓域と考えることも可能であるが、これらの遺構に関しても方形周溝墓と考えるには一辺が２～３ｍとかなり小型であることが問題である。

こうしたことから、現状では替田遺跡・弐ノ坪遺跡では明確な墓域の存在は認めがたい。数次にわたる調査によってほぼ集落の東西南北の範囲が把握できていることを考えれば、墓域は居住域とは別の場所に設けられていた可能性が高いものと思われる。

２　竪穴住居の平面形態

替田遺跡の弥生時代竪穴住居の平面形態には、円形と方形の２種類がある。伊勢湾西岸地域では中期前葉までは円形が主体であるが、中期中葉を境として方形が主体となっていき、中期後葉にはほぼ方形に統一される。出土土器からみれば、替田遺跡はその過渡期にあたる時期に営まれたと考えられる。

円形住居から出土した土器を第３節での替田遺跡弥生土器の整理にしたがってみていくと、ＬＩ区ＳＨ230出土の広口壺は、形状や口縁端部への波状文の施文などからみてⅢ様式期に属する可能性が高い。１次調査Ｂ地区竪穴住居１から出土した土器も短頸の広口壺や受口状口縁細頸壺を含んでおり、Ⅲ期に属する。また、弐ノ坪遺跡ＳＨ64から出土した土器もⅢ様式期に属する可能性が高い。したがって、円形住居が方形住居に先行して作られたとはいえず、替田遺跡・弐ノ坪遺跡では同じ集落内に円形住居と方形住居とが混在していたという景観が復元できる。

替田遺跡以外にも、東庄内Ｂ遺跡[6]や中尾山遺跡[7]などで円形住居と方形住居が一緒に検出されている。これらの遺跡についても、出土した土器や遺構の重なりあい方から見る限り、円形住居が必ずしも方形住居に先行して構築されていないようである。

円形と方形の住居は、平面形態の違いのみではなく、その構造にも違いがみられる。方形住居では、替田遺跡のＳＨ311では４箇所の主柱穴を持ち、１次調査の竪穴住居４では２箇所の主柱穴を持つと考えられる。それに対して円形住居では、１次調査の竪穴住居１では８箇所の主柱穴を持ち、弐ノ坪遺跡のＳＨ64は７箇所の主柱穴を持つなど、方形住居にくらべて主柱穴の数が多い。このように、住居の平面形態の違いは決して単なる平面形の違いではなく、上屋の構造にも差があると推定される。

住居の平面形態が何に規定されるのかは定かではないが、当該期の小規模な集落には、平田古墳群[8]のように円形住居ばかりのものや、中ノ垣外遺跡[9]のように方形住居ばかりのものがある。これらの例を参考にすれば、家族など小規模な集団のなかで営む住居の形態が決まっていた可能性が考えられる。

こうした想定に従えば、替田遺跡では円形住居が少数派であることからみて、替田遺跡の集落では方形住居を営む集団が中心的であり、その中に円形住居を営む集団が少数派として存在していたと考えることもできる。先述のように、替田遺跡では時間的な円形から方形へという平面形態の変化は追いがたく、伊勢湾西岸地域全体が方形住居を作るようになっていく流れの中で、円形住居を作り続けていた人々も同じ集落の中で共存していたと考えられよう。

こうした住居形態の差は先の居住域の区分とは対応していないが、このことは集落内部の集団構成の複雑さを示しているものととらえておきたい。

３　小結

替田遺跡・弐ノ坪遺跡は、弥生時代中期前葉～中葉の居住域であり、その内部には複数の集団の存在が推定される。しかしながら、検出された住居数は決して多いものではない。また、中期後葉の遺構・遺物がほとんど出土していないことから、ごく限られた時期に営まれた集落であるとみられる。

近くに安濃川が流れ、調査でも自然流路や旧河道がいくつか検出されていることを考えれば、微高地であるとはいえ、決して安定した土地ではなかったであろう。そうした土地に、短い期間に複数集団からなる居住域が営まれたことは、当該期の社会を考える上で重要である。その背景を考える上で、柱状片刃石斧や石小刀など替田遺跡周辺では当該期の出土例が少ない精良な作りの石器が出土していることは一つの手がかりになるかもしれない。安濃川流域のみではなく、近畿地方や濃尾平野などとの関係も視野に入れておく必要があろう。　（石井）

註

（1）三重県埋蔵文化財センター「Ⅵ．替田遺跡（第１次）」

『一般国道23号中勢道路　埋蔵文化財発掘調査概報Ⅸ』1997
（2）三重県埋蔵文化財センター『弐ノ坪遺跡発掘調査報告』2005
（3）三重県埋蔵文化財センター「Ⅲ．替田遺跡（第2次）」『一般国道23号中勢道路　埋蔵文化財発掘調査概報Ⅹ』1998
（4）三重県埋蔵文化財センター『替田遺跡（第４次）発掘調査報告』2004
（5）完形に近い土器の出土から土壙墓との推定がなされることがあるが、弥生時代中期には土器を埋葬施設に入れることはまれである。したがって、逆に完形に近い土器が数個体出土するような場合は墓との認定を慎重に行うべきであろう。
（6）日本道路公団名古屋支社・三重県教育委員会「東庄内Ｂ遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』1970
（7）新田剛「中尾山遺跡」『三重県史』資料編考古１　三重県　2005
（8）安濃町教育委員会『平田古墳群』1987
（9）三重県教育委員会「伊勢市佐八町　中ノ垣外遺跡」『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財調査報告』1984

第３節　弥生土器について

中期前葉から中葉にかけての弥生土器が、弥生時代の遺構が集中するＬ区を中心に出土している。

ここでは、Ｌ区で確認された遺構一括資料を中心に特徴を把握したい。

１　時期

壺を指標にすると、いわゆる朝日式の壺が出土するＳＫ312・244は上村氏編年[1]（以下、省略）のⅡ様式の範疇に包含されるものであり、単純口縁の細頸壺が確認できないてんからⅡ-１様式に相当する。ＳＫ312には、壺体部上半にヘラ描き沈線文で区画された直線文帯をもつ土器が存在する。

単純口縁の細頸壺が出土しているＳＫ238はⅡ-２様式に相当する。ＳＫ238からは流水文の描かれた壺体部が出土している。

受口状口縁の細頸壺が出土しているＳＨ311・207・303はⅢ-1様式に相当する。ＳＨ207・303出土資料は、文様帯が複数段で構成されている点と調和的である。壺体部の文様帯は上下がヘラ描き沈線文で区画されており、直線文の施文された資料と縄文の施文された資料が共伴する。最も資料の充実するＳＨ207では、波状文（壺・甕）が出現しており、無文の広口壺も組成する。

また、短頸の広口壺232（ＳＫ314出土）も文様帯が多条化していない点から、Ⅲ-１様式に位置づけた。頸胴部境が明瞭な点が特徴的である。

体部の直線文帯の上下を区画するヘラ描き沈線文が省略された壺が出土しているＳＫ288は、Ⅲ-２様式以降に相当する。

以上の点から、概ねⅡ-１～Ⅲ-２様式にかけての所産に相当し、ピークはⅢ-１様式にあることが分かる。

２　壺

土器そのものが劣化しており観察の困難な土器もあるが、土器の系統を検討することを目的として、壺体部内面の壁面調整と体部外面のヘラミガキの単位を観察した。

凹線文系土器の波及が認められるⅣ-１式の土器が出土している松阪市筋違遺跡[2]では、２系統の土器が存在するが、凹線文系土器の波及以前の状況は明らかでない。このため、筋違遺跡出土土器の検討に用いた分類を用いて、凹線文系土器の波及以前の資料による検討を行った。分類の詳細は、筋違遺跡発掘調査報告を参照されたい。

観察した結果、壺の体部内面の壁面調整はナデ消しで仕上げられており、筋違遺跡分類でのａ手法に相当した。また、体部外面のヘラミガキはランダムな仕上げであり、この点でも筋違遺跡分類のａ手法に相当し、明らかに分割された単位の分かるｂ手法に相当する土器は存在していない。

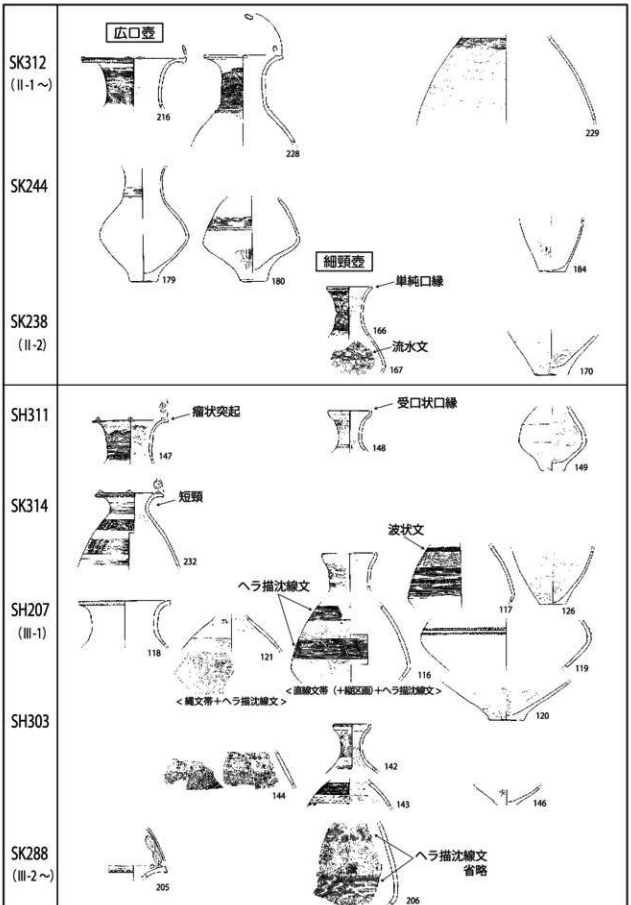
以上によって、凹線文系土器の波及する以前の替田遺跡にはａ系土器しか存在していないことが明らかになった。

３　甕

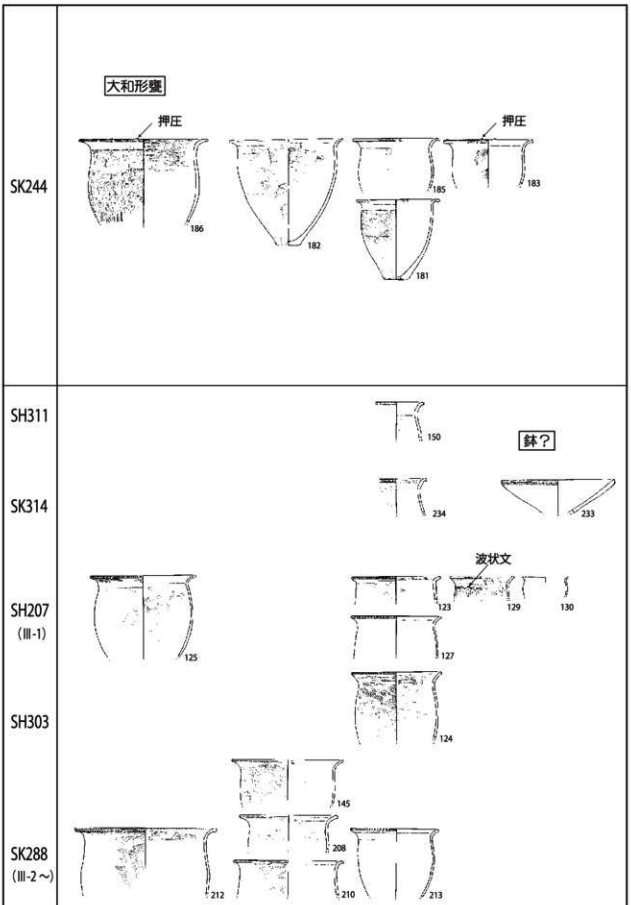
甕は、口縁部内面にヨコハケ・体部外面にタテハケ・口縁端部に刻目を施文する大和形甕が一貫して主体的に存在し、口縁部内面のヨコハケが欠落するものや口縁端部の刻目の欠落するものも存在する。

初期のものは、口縁部の屈曲がゆるやかで上方に広がっていき、端部の巻き込みが少ないが、次第に体部が張り出し、口縁部の巻き込むようになる傾向がみられる。

また、口縁端部の数カ所に押圧が施される例がⅡ-１様式から存在する。　（川崎）



第261図　替田遺跡出土弥生土器の変遷（1）



第262図　替田遺跡出土弥生土器の変遷（2）

註

（1）上村安生「伊勢・伊賀地域」『弥生土器の様式と編年』木耳社　2002

（2）三重県埋蔵文化財センター『筋違遺跡－第１分冊－』2005、川崎志乃「土器の様相」『筋違遺跡－第２分冊－』三重県埋蔵文化財センター　2005

第４節　替田遺跡出土古式土師器の位置付け

替田遺跡における古式土師器は、出土点数こそ少ないものの、比較的の一括性の高い資料がある。小節では、替田遺跡出土古式土師器の編年的位置を明らかにするために、弥生時代後期末から古墳時代の土器がほぼ一連に出土している雲出島貫遺跡[1]の資料と比較検討する。そのうえで、同時期の資料である堀田遺跡出土資料にもふれてみたい。

１　替田遺跡出土資料の特徴

当遺跡において古式土師器はＪ区ＳＫ103、ＳＥ105、Ｌ区ＳＫ222等から出土している。小節ではこれらの中でも比較的まとまった資料であるＳＫ103およびＳＥ105出土土器を対象とする。

なお、ＳＫ103とＳＥ105は遺物の内容が似ていることから、ほぼ同時期のものであると思われる。また、須恵器の共伴はなく、古墳時代前期後半から中期初頭に相当すると考えられる。出土した資料としては、高杯、台付甕、二重口縁壺、小形壺といった基本的な器種は一通り揃っているが、完形資料はほとんどなく、出土点数も少ない。従って、本来ならば、出土資料を分類し、その分類を元に考察するところであるが、個々の器種を細分することは特にせず、器種ごとにその特徴をあげてみたい。

高杯　完形資料はないが、杯部はいずれも有稜である。近畿地方からの影響を強く受けたものと考えられ、島貫分類では高杯Ｃに相当する。脚部の形態は屈折して開くものと、外反して開くものがある。

台付甕　実測をすることができた甕は全て前代から続くＳ字状口縁台付甕に基本的な系統をもつものである。台付甕はその口縁部の形態から２者に分類できる。

①台付甕Ａ　前代までのＳ字状口縁台付甕の系統上にあるもの。口縁部のヨコナデが弱まっているものの、まだＳ字形が残っている。また、頸部外面にヘラ状のもので沈線を施している。赤塚氏による廻間遺跡分類[2]ではＤ類に相当する。

②台付甕Ｂ　口縁部のＳ字形が崩れ、その名残がわずかに口縁部外面の段などに見られる。頸部外面の沈線も省略されているものがある。

二重口縁壺　実測をすることができた壺はすべて二重口縁を呈する。広口壺の上に二重口縁部が付加される型式であり、いわゆる伊勢型二重口縁壺である。島貫分類では壺Ｂbに相当する。また、擬口縁の突出が大きく、突帯のようにみえるものもある。

小形壺　いわゆる小形丸底壺に含まれるものであるが、当地では丸底のほかに平底を呈しているものも多い。島貫分類では小形坩Ｂaに相当する。

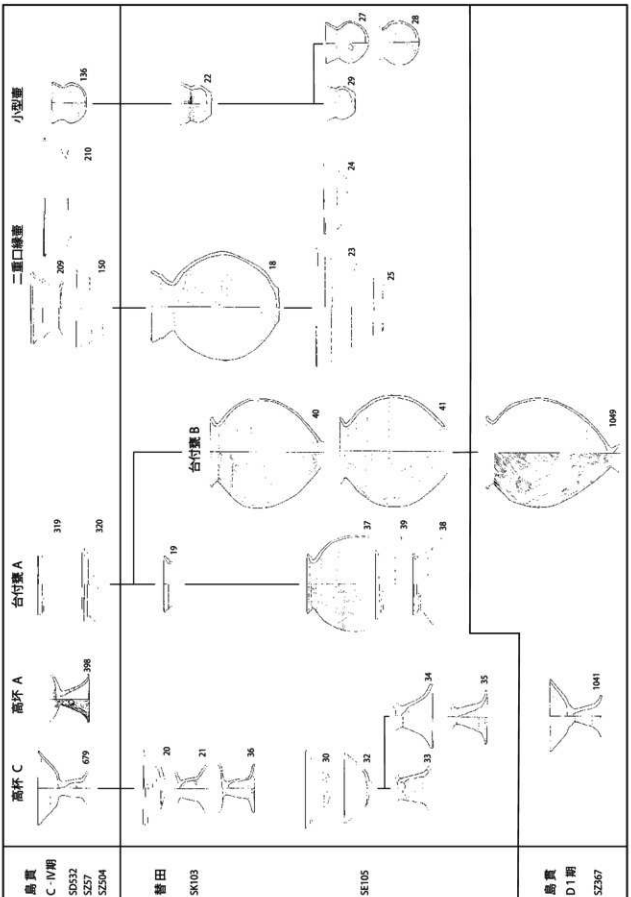
２　雲出島貫遺跡出土資料との比較検討

雲出川下流域に位置する雲出島貫遺跡では、縄文時代晩期から近世をＡ～Ｈ期の８期に区分されている。さらに弥生時代後期末から古墳時代前期にあたるＣ期はⅠ～Ⅳ期[3]、古墳時代中後期にあたるＤ期は１～２期[4]に細分されている。なお、雲出島貫遺跡のＤ１期は陶邑田辺編年ＴＫ208～ＴＫ10型式併行期と位置づけされている。このことから、須恵器が共伴しない替田遺跡の資料は雲出島貫遺跡Ｄ１期以前の資料であると考えられる。以下、器種ごとに雲出島貫遺跡出土資料[5]と比較検討していく。

高杯　高杯の形態や手法は島貫Ｃ-Ⅳ期、Ｄ１期出土資料と大きな差はない。一方、島貫Ｃ-Ⅳ期では、近畿地方からの影響を受けた高杯Ｃの他に、前代からの系譜をひく高杯Ａ（脚部に透孔を有する有稜高杯）の最終段階が存在するが、替田遺跡では当該時期に高杯Ａの系統をもつ資料は認められない。

台付甕Ａ　口縁端部に明瞭な肥厚した面をもつことや、頸部外面に沈線を施すことなどの特徴は、島貫分類Ⅳ段階ａとほとんど変わらない。

台付甕Ｂ　島貫Ｃ-Ⅳ期ではＳ字形の崩れた口縁部をもつ台付甕は出土していない。むしろ島貫Ｄ１期において形態の近いものが出土しているが、かなり長胴化が進んでいる。また、口縁部も肥厚した端部をもっているものの、「Ｓ」字形というより、「く」の字形に近く、ほぼ直線的に延びている。



第263図　替田遺跡出土古式土師器の編年的位置（1：8）

二重口縁壺　島貫C-Ⅳ期では、擬口縁を持たず、内面のヨコナデにより二重口縁状にみせているものがすでに確認されている。当遺跡出土資料でも同様の形状のものが出土しているが、ヨコナデがさらに弱くなっており、二重口縁の痕跡を残す程度のものもある。なお、島貫Ｄ１期では二重口縁壺は認められない。

小形壺　島貫C-Ⅳ期では平底状になっているが、当遺跡では丸底のものも出土している。当遺跡の資料は非常に粗雑化が進んでおり、島貫Ｄ１期では認められないことから、最終段階に相当すると考えられる。

小結

以上のように、替田遺跡出土資料の特徴は東海地方に特徴的な高杯Ａの消失、台付甕Ａと台付甕Ｂの共伴等の点があげられ、島貫C-Ⅳ期とは区別される土器群と考えられる。従って、当遺跡出土の古式土師器は、島貫C-Ⅳ期と島貫Ｄ１期の間を補完する資料と言えよう。すなわち、須恵器が出現、普及する直前の土師器として位置づけることができると思われる。

最後に、今後の課題を提示しておく。今回、比較対象を雲出川流域の雲出島貫遺跡の資料としたが、当遺跡は安濃川流域に立地し、地域差を含んでいる可能性があることに注意しなければならない。

また、島貫C-Ⅳ期と併行する資料として堀田遺跡の資料があげられる[6]。伊藤裕偉氏によって「堀田式」と設定された土器群[7]は、布留系と在地系の融合した台付甕や丸底甕の出現等に見られるように、「近畿地方の布留式土器を様相上受容する一方、東海地方としての伝統性も保持される段階」とされている。この「堀田式」に続く資料として「河曲Ｂ群土器」が提示されている[8]。

本来ならばこれらの資料を含めた総合的な比較検討が必要であるが、ここでは現時点での所見を概述するにとどめる。まず、Ｓ字状口縁台付甕の口縁部や高杯の形態をみると、「堀田式」よりも替田遺跡の資料の方がやや新しい形態である。また、当遺跡では「堀田式」に特徴的な台付甕や丸底甕は出土していない。特に、丸底甕は「狭く見ても雲出川下流域」に存在することが指摘されている[9]。このことから、安濃川流域に立地する替田遺跡の古式土師器と雲出川流域に存在する「堀田式」の土器群は時期的な差異だけでなく、地域的な差異が認められよう。

今後は、編年観だけの検討でなく、安濃川流域や雲出川流域のほか、鈴鹿川流域などを含めたより広域な資料を対象として、時間的、空間的な検討を進めていく必要があろう。　（野為）

註

（1）三重県埋蔵文化財センター『鳴抜Ⅲ』2001
（2）赤塚次郎『廻間式土器』『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター　1990
（3）川崎志乃「古墳時代前期の雲出島貫遺跡」『鳴抜Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター　2001
（4）伊藤裕偉「雲出島貫遺跡における古墳時代中後期の土師器」『鳴抜Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター　2001
（5）ＳＺ57の資料は、雲出島貫遺跡第１次調査出土資料である。三重県埋蔵文化財センター『鳴抜』1998
（6）三重県埋蔵文化財センター『堀田第３～５次調査』2002
（7）伊藤裕偉「伊勢における古墳時代前期後半の土師器に関する覚書」『研究紀要』14　三重県埋蔵文化財センター　2005
（8）伊藤裕偉「古墳時代前・中期における伊勢の土器相」『研究紀要』15-1　三重県埋蔵文化財センター　2006
（9）註(7)に同じ

第５節　微地形と土地利用の変化について

第３章のとおり、替田遺跡周辺の地形はＪ区北東部の現水路地点に谷状地形が存在しており、そこから氾濫した洪水堆積物によって形成されていることが明らかになった。それは弥生時代中期前葉までに開始されると同時に土地の利用も行われており、圃場整備以前まで続いていた。

各地区における遺構密度の格差や遺構面の高低差は、元来の微地形と関連していることが考えられるため、ここでは1964年撮影の空中写真の判読を行い、替田遺跡の特徴を把握することにする。また、Ｏ・Ｐ区は、「字結縁寺」に相当する地点が含まれていることから、圃場整備前の字切図を用いて遺構との関連を検討するために、第264図を作成した。

１　空中写真の判読による微地形

替田遺跡付近について、1964年撮影の空中写真より読み取ることのできた点を挙げてみる。

① 条里地割を乱し、北西方向から南東方向に向かうやや暗い色調を呈する地点がある。

② 条里地割の中に、円形に地割が乱れている場所があり、そこはやや白く浮きあがっている。

③ 整然とした条里地割が広域にわたって広がっている。

④ 安濃川と岩田川をつなぐ三泗川は条里地割に則して、直角に流れている。

⑤ 安濃川に沿って地割が乱れており、右岸では細かな地割になる地点がある。

おおむね上記５点の特徴が見られた。

①に相当する地点は、今回の調査における替田遺跡の基本層序の検討によって、Ｊ区北東部の現水路地点に谷状地形が存在することが明らかとなった。また、そこから氾濫した洪水堆積物によって、替田遺跡の基本層序が形成されていることも明らかになった。なお、地下水位の高い地点が空中写真では暗色を呈していることが分かる。

2　微地形と弥生集落

②に相当する地点は、弐ノ坪遺跡[1]が立地している。弐ノ坪遺跡では、弥生時代中期の遺構と古代の遺構が現地表面から深さ20～30cmの高さで同時に検出されており、その間に土砂の堆積がさほど存在していない点から安定した土地であったことが知られる。弥生時代中期前葉から中葉にかけての遺物を包含する遺構は、空中写真でみとめられた微高地（地下水位が低いために白色を呈する）上で検出されている。具体的には、竪穴住居・土坑・溝が確認されている。

そのほかＪ区やＬ区でも中期前葉から中葉にかけての遺構が検出されており、Ｊ区北東部の谷状地形に伴う自然堤防上に遺構が立地していることが分かる。

3　条里遺構の検出

③は安濃郡条里であり、約N30°Ｅの方位に偏ることが知られている[2]。替田遺跡においても、巨視的には同方向を指向する遺構が確認されており、Ｏ・ＰＫＳＤ503・ＫＳＤ125・128などが相当する。ＬＫＳＤ210はＳＤ503の延長上に位置し、北へ蛇行するが存在するが、Ｌ区が自然堤防に相当する地点であるために蛇行していると考えられる。

時期的には、ＫＫＳＤ128が古代の可能性があり、ＳＤ503は中世前期の遺構である。なお、ＳＤ125・128の延長上には、弐ノ坪遺跡ＳＤ10・56・57が位置しており、平安時代初期と報告されている。また、弐ノ坪遺跡では条里方向を指向する掘立柱建物群が存在する。弥生時代以降安定した地点にのみ確認されている点が特徴的である。

4　替田遺跡と里前遺跡の関係

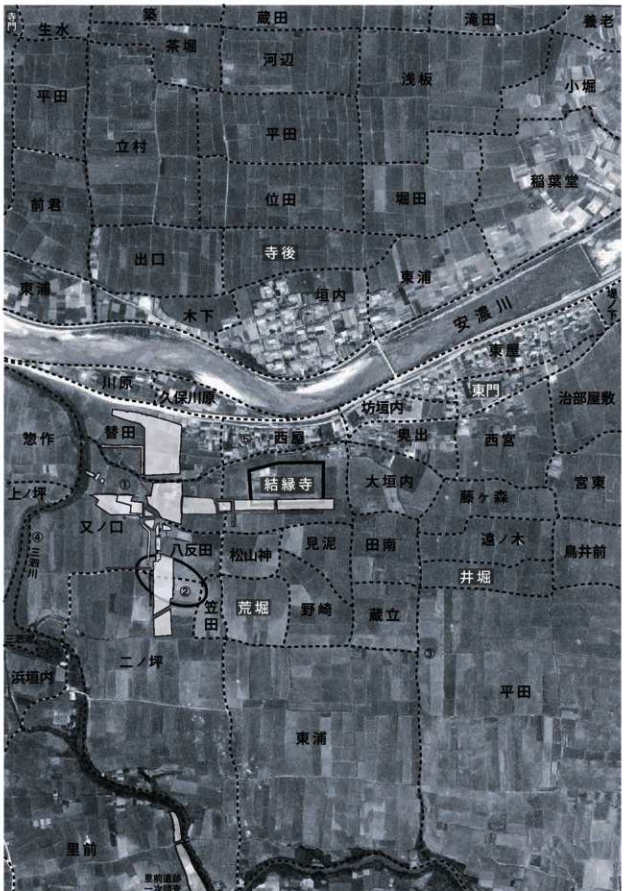
④については、条里地割に沿って三泗川が改修されており、条里型地割が施工されて以降に大規模な河川改修が実施されていることが分かる。この点について『津市史』[3]によると近世に改修が行われたことが知られる。しかし、里前遺跡１次調査[4]によってそれ以前にも谷状地形が存在しており、近世に新たに掘削された河川ではないことが証明されている。また、替田遺跡と里前遺跡１次調査区で筆跡の類似する同一墨書が確認された（第６節参照）点から、中世前期には三泗川が里前遺跡と替田遺跡を結ぶ導線として重要な機能を果たしていたと考えられる。

5　「字結縁寺」と関連遺構

⑤は安濃川の自然堤防上には現集落が位置している。また、現集落南部の「字結縁寺」には、白色を呈する微高地が存在しており、周辺と比較すると細かな地割となっている。

「結縁寺」は14世紀の安来郡専当沙汰文[5]に見える地名であり、第264図のように圃場整備以前まで「字結縁寺」およびそれを取り囲む地名「東門」「井堀」「荒堀」「寺後」「寺門」と地割が非常に良好な状態で残存していた。

替田遺跡Ｏ・Ｐ区は、字結縁寺に相当する地点が含まれており、墨書土器が多く出土しているＳＤ514とその延長上に位置するＳＤ521の位置に地割が認められる。この地割は字結縁寺地内で方形の区画をなしており、その内側の一部は現在も畠として周囲より一段高くなっている。また、その外部は暗色を呈していることから、地下水位が高いと推定でき、溝が検出されている点と一致する。従ってＳＤ514・521を一辺とする区画の中心は、調査区北部に存在すると推定される。なお、区画溝から瓦や五輪塔等の寺院関連の遺物が出土したが、これらは墨



第264図　替田遺跡調査区と周辺の小字

書土器の時期より後出する。　　（川崎）

註

（1）三重県埋蔵文化財センター『式ノ坪遺跡発掘調査』2005

（2）宮田勝功「方格地割と条里遺構－安濃川下流域を中心にして－」『研究紀要』第８号　1999

（3）津市役所『津市史』第３巻　1958

（4）三重県埋蔵文化財センター『里前遺跡発掘調査報告』2002

（5）『安来郡専当沙汰文』（『群書類従』第28輯雑部）

第６節　中世の墨書土器について

中世の墨書土器は、山茶椀と山皿に認められた。替田遺跡出土の墨書土器にみられる文字や記号は、合計で24種類を確認した。この中には、不鮮明のために識別不能なものや破片資料を含んでいないことから若干の変化があると思われるが、まとまった量が出土していることには変わりない。

さて近年、伊勢国内では墨書土器の出土傾向についての分析が多く行われており、各遺跡の「場」の特性を顕している[1]と考えられている。従って、今回も替田遺跡出土の墨書土器の特徴を把握することによって、遺跡理解の一助としたい。なお、近接する里前遺跡[2]から出土した墨書土器と同一・同筆跡と推定される墨書の施文された土器が存在することから、里前遺跡出土墨書土器との比較も検討する。

替田遺跡出土の墨書土器は概して達筆の墨書がないが、明瞭な非識字層による墨書と推定可能なものもない。この点では、筆遣いのこなれた達筆の墨書が存在する一方、明らかに非識字層が書いたと推定される[3]墨書も存在する里前遺跡での状況と異なる。

出土量では圧倒的に記号が多い。文字では平仮名の可能性が考えられるものも存在するが、漢字が多い。また、「七」「十八」といった漢数字を確認できたことは重要である。「一」「三」「十」といった画数が少ない墨書が出土しても漢数字として識別することが困難であったが、替田遺跡では漢数字の存在が明らかになったことから画数の少ない墨書についても漢数字である可能性が高まった。これまでに漢数字の確認されている遺跡は、岩出遺跡群[4]や安養寺跡[5]といった有力者の介在する居館や寺院である。

また、出土量の多い「大」「○」「十」「×」などは里前遺跡１次調査区でも出土量の多いものであり、なおかつ、県内の六大Ａ遺跡[6]や辻子遺跡[7]でも数多く確認されている（第35表）。従って、これらは当該期に普遍的にみられる墨書群であることが分かる。

「○」「×」が組み合わされる墨書と「 」は、筆跡の類似するものが里前遺跡１次調査区からも出土している。この墨書はこれまで三重県内では未確認であり、普遍的に存在する墨書とは異なることが考えられる。替田遺跡から三泗川沿いに下った地点に位置する里前遺跡は、物資集配機能を想定した河川際の里前遺跡１次調査区と居住空間である２次調査区で出土する墨書土器が質量ともに異なっており、各地点での機能差が反映されている可能性が考えられる。さらに、替田遺跡と里前遺跡１次調査区で筆跡の類似する同一墨書が確認された点から、里前遺跡１次調査区は隣接する居住空間である里前遺跡２次調査区だけでなく、河川を媒介として近接する替田遺跡とも密接に関わっていたことが考えられる。

次に、出土地点を検討していく。替田遺跡での墨書土器の出土傾向は、圧倒的にＯ区からの出土が多く、特にＯ区北東部に出土量が集中する。Ｏ区からの出土量が多い点は中世前期の山茶椀がＯ区に集中している点と共通する。詳細に出土地点を検討すると、区画溝ＳＤ514から最も量が多く出土している。ＳＤ514から出土する墨書は、「○×」漢数字等が多い。「○×」は、条里境に相当する地点に位置するＳＫ536からも出土している。

中世の墨書土器が条里境に集中して出土することについては、岐阜県内の出土例から可児光生氏が指摘[8]されており、里前遺跡においても酒井巳紀子氏によって指摘[9]されている。今回の替田遺跡においては、条里溝であるＳＤ503からもまとまった量の墨書土器が出土しており、他にも条里境に相当するＳＫ536からも墨書土器は出土している。しかし、最も出土量の多いＳＤ514は条里境ではなく、条里境であるＳＤ503から４ｍ地点に平行して位置する条里内の区画溝である。また、替田遺跡における墨書土器集中出土地点はＯ区北東部であり、この地点は条里溝ＳＤ503に区画された一角であり、字結縁寺に相当する地点でもある。　　（川崎）

墨書	数量	里前遺跡分類	墨書	数量	里前遺跡分類	墨書	数量	里前遺跡分類	墨書	数量	里前遺跡分類
376	4	A13	800	1	G5	1030	1		1225	1	G3
1086	1		793	2		801	1	C4	794	1	
1026	1		677	1		786	5	D1 G7	912	1	
797	1		791	10	G6	782	7	D1	959	1	
804	1		792	1		676	1	D3	798	1	I3
1174	1		1025	2	G7	973	1		377	2	

第34表　替田遺跡墨書一覧表

分類	墨書	里前1次	里前2次	替田	六大A	辻子	分類	墨書	里前1次	里前2次	替田	六大A	辻子	分類	墨書	里前1次	里前2次	替田	六大A	辻子	分類	墨書	里前1次	里前2次	替田	六大A	辻子	分類	墨書	里前1次	里前2次	替田	六大A	辻子
A1	372	2					C2	296	2					E7	370	1					G5	375	1		1	1		K5	1028	1				
A2	1039	3					C3	832	1					E8	416	1					G6	1012	12		10	15	8	K6	1051	2				
A3	1038	1					C4	1040	4	2	1		3	E9	400	3					G7	400	17		7	3	6	K7	36	8				
A4	1130	3	1		4	13	C5	250	2					E10	377	6					H1	377	2					K8	340	1				
A5	400	1					D1	1011	13		12	2	10	E11	1023	8					H2	1010	1					K9	1131	1	10			
A6	1042	1					D2	1034	1					E12	1160	1					H3	371	1					K10	404	4				
A7	1040	4	1				D3	400	6			2		E13	1160	12					H4	1033	1					K11	1	1				
A8	1032	1					D4	1147	4					E14	402	1					H5	1019	1					K12	240	1				
A9	1	1					D5	386	1					E15	1160	1					I1	1047	1					K13	324	1				
A10	1126	1					D6	420	6					E16	1160	1					I2	1049	1					K14	246	1				
A11	1030	1					D7	1016	1					E17	1160	1					I3	889	2		2			K15	1	1				
A12	1132	1					D8	427	2					F1	404	2					J1	1049	1					K16	1060	1				
A13	1032	20	1	4	4	3	D9	300	1					F2	404	1					J2	1037	1					K17	1130	1				
A14	1031	2					E1	1130	2					F3	1049	3					J3	1049	1					K18	1	1				
A15	1033	1					E2	390	25					F4	1138	1					J4	1138	1					K19	390	1				
A16	441	1					E3	1050	5					G1	1020	7	1		3		K1	401	8					K20	1032	3				
B1	1038	2					E4	390	3					G2	1	1					K2	1	4			1								
B2	1037	2					E5	390	1					G3	634	34		1			K3	1118	1											
C1	1030	11				1	E6	1160	3					G4	842	1					K4	1012	2											

第35表　里前遺跡ほか墨書一覧表

註
（1）竹田憲治「安養寺跡の墨書土器」『安養寺跡・豆谷山中世墓群・豆谷山経塚群・五峰山２号墳』二見町教育委員会2004
（2）三重県埋蔵文化財センター『里前遺跡発掘調査報告』2002
（3）川崎志乃「考察」『里前遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター2002
（4）三重県埋蔵文化財センター『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』1996
（5）二見町教育委員会『安養寺跡・豆谷山中世墓群・豆谷山経塚群・五峰山２号墳』2004
（6）穂積裕昌「中世の墨書土器について」『六大Ａ遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター2002
（7）角正淳子「辻子遺跡出土の古代末から中世の土器について」『辻子遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター2004
（8）可児光生「中世　第一章　文化の普及」『岐阜県教育史』通史編　岐阜県教育委員会　2003
（9）酒井已紀子「中世前期の墨書土器について」『里前遺跡（第２次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター2005

第７節　古代末から中世の替田遺跡

古代末から中世の替田遺跡出土遺物を概観する[1]。

古代末期　10世紀中葉から11世紀前葉頃にあたる。尾張産灰釉陶器、在来の系統下にある土師器皿類、南伊勢系統の土師器甕類が見られる。

中世Ⅰ期　11世紀後半から12世紀後半頃にあたる。この時期の土師器類は、広義の「京都系」と在来のものとがある。「て」の字状口縁小皿（73・1058ほか）や２段ナデの小皿（477）は、京都系の範疇に含まれる。それに対し、506は在来の系統下である。京都系土師器は、近隣では雲出島貫遺跡で多量に出土している[2]が、当遺跡では極めて少ない。

土師質土器（ロクロ土師器）では、柱状高台小皿（70）や小皿類（402ほか）があり、組成上は一定量占めると考えられる。黒色土器は、器壁の厚いものが多く、近隣での生産が考えられる。煮沸具では南伊勢系統が主体で、少量の清郷形甕を伴う。

陶器類は尾張産・三河（渥美）産の椀（山茶椀）のほか、尾張産の壺類が認められる。珍しいものでは、篠窯産と見られる鉢（691）がある。

中世Ⅱ期　13世紀初頃から15世紀初頭頃にかけての時期にあたる。前半代（Ⅱａ期、14世紀前半頃）の資料充実に対し、後半代のものは少ない。

土師器では京都系が消滅する。在来の系統下にある皿（417・418）は引き続き見られるが、南伊勢系（746～758など）の搬入量がそれを圧倒している。土師質土器と黒色土器は消滅している。煮沸具では引き続き南伊勢系が中心である。三足の付く瓦質羽釜（745）は珍しく、京都方面からの搬入と考えられる。

Ⅱａ期の陶器類は、椀を中心とした尾張産の搬入が継続する。

中世Ⅲ期　15世紀中葉から16世紀前半頃にあたる。

土師器皿類は南伊勢系のものがあるが、中北勢系は少なく、当遺跡の特徴といえる。煮沸具では中北勢系羽釜（855など）のほか、南伊勢系（854・858～861など）が確認できる。数値で示せないが、南伊勢系煮沸具の方が中北勢系よりも多そうである。

陶器類では、古瀬戸・常滑などの東海諸窯製品の他、信楽系の擂鉢（633・1059）も少量認められる。

貿易陶磁器は少量だが、香炉（94）の出土は特筆できる。同種のものは、県内では北畠氏館跡で出土が知られる[3]程度であり、当地に存在していた寺院との関連で把握できるものであろう。

この他に、当該期に特徴的な遺物として瓦類の出土が挙げられる。瓦の調整方法や軒丸瓦の様式から見て、15世紀代を中心としたものと考えられる。

動向　出土遺物からみた当遺跡は、14世紀前葉から15世紀初頭までの空白期をはさみ、前半期（中世Ⅰ・Ⅱａ期）と後半期（中世Ⅲ期）の２時期に大きく分かれる。最盛期は13世紀中葉であろう。

替田遺跡の前半期は、近隣の神戸遺跡・弐ノ坪遺跡等と一体となった荘園（安濃神戸）在家集落の一部と考えられる。全体として散村的景観をなしていたであろう当地の状況復元が考古学的に可能と思われる。後半期の動向は不明であるが、前半期の在家集落が変動するなかで、寺院のみ精神的紐帯の要として当地に残った可能性も考えられよう。　（伊藤）

註
（1）時期区分は、伊藤裕偉「中世後期における伊勢・志摩地域の土器相」『関東・東海における中世土器・陶器の最近における研究成果』陶磁器編年研究会・静岡大学2005による。
（2）三重県埋蔵文化財センター『鳴抜Ⅱ』2000
（3）美杉村教育委員会『北畠氏館跡９』2005

第６章　調査の総括と学術上の課題

大面積を調査した中勢道路部分の整理・報告書作成が今後に予定されている現段階では中間的な内容にならざるを得ないが、現状での替田遺跡調査の総括と学術上の課題を列挙し、今後の課題としたい。

集落域に関わる問題

行政的な遺跡名称「替田遺跡」として把握されている遺跡の小字名は替田遺跡であるが、替田遺跡として把握されている部分は、字「替田」以外にも字「結縁寺」や「又ノ口」にも広がり、特に今回の報告箇所は字「結縁寺」と「又ノ口」がほとんどである（字「替田」に相当する部分は中勢道路調査区の北側部分、第264図参照）。遺跡名称の付与方法は、当該遺跡が遺跡として把握された経緯とも関わり、小字が複数に広がる場合はそのなかのひとつを代表させて遺跡名称とする場合もあって必ずしも間違いではないが、替田遺跡の場合、これまでの研究史上の扱いと遺物注記を含む相当の整理が進んだ状態などを勘案して、替田遺跡のままとした。

弥生集落に関わる問題

遺構の分布密度は、弥生時代の遺構は字「又ノ口」に、古代末から中世前期の遺構は字「結縁寺」に中心がある。しかし、第５章第２節でも明らかなように、弥生時代中期前葉～中葉の集落は替田遺跡と南側の弐ノ坪遺跡に中心がある。両遺跡は、ほぼ同時期の集落であるが、両集落の間には河道が入り込んでおり（第３章及び第５章第５節参照）、同一の集落とはいいがたい。しかし、河路を挟んで相対する集落として、同一の集落群を構成していた可能性は高い。つまり、両集落は、「替田・弐ノ坪遺跡群」とも呼称しうる状況を呈している。

この集落群内部の住居構成は、現状では竪穴住居のみしか確認できなかったが、北側800mの蔵田遺跡では逆に掘立柱建物を中心に構成されており、替田遺跡に本当に掘立柱建物が存在しないのか、またないとすればその要因が立地条件なのか別の要因かなど、当地の中期初頭の集落構成を考えるうえでも重要な論点を孕んでいる。今後の課題としたい。

古代末～中世期の替田遺跡の性格

この時期の遺構は、字「結縁寺」に中心がある。この部分の遺構に関しては、第５章第５節で地籍図も交えて考察されているように、かつて存在したとされる寺院、「結縁寺」との関わりが注意される。ただし、遺物のうえでは中世前期までは寺院関連と推定されるものは乏しく、寺院の成立と地割の相関をどのように捉えていくのかが今後の課題である。

具体的には、Ｏ区のすぐ北側には、かつては周辺部よりも１段高くなった土壇状の区画が残存していた（第１図参照）。第５節も考察されているように、この部分を中心に据えると今回報告した溝の一部がこの土壇状施設の区画溝に相当する可能性がある。一方で、区画の成立が先にあり、それに規定されて後に寺院が成立した可能性も考えられる。いずれにせよ、現在、県内の中世寺院が発掘調査によって明確に把握された例は伊勢市の安養寺跡[1]など少数にとどまっており、この土壇状の施設とそれに地割を揃える溝（ＳＤ514・521）は、こうした中世寺院の具体的なあり方を示す遺構[2]である可能性は高い。

なお、これに関連して、替田遺跡からは瓦類の出土もある。出土した軒瓦類の一部（688・886）の文様は、これまで県内各地、例えば津市六大Ａ遺跡[3]、川北城跡、伊賀市観菩提寺[4]（正月堂）などで確認されているものと系統的にも共通している[5]。今後、その編年的位置の確定をしたうえで、分布と瓦の供給関係を確認することも課題であろう。

今回の調査成果によって、未解明な部分の多い当地の中世寺院・仏教史を多面的に考察するひとつの手掛りとなり、その解明に少しでも寄与できることがあればと祈念している。　（穂積）

註

（１）三重県二見町教育委員会『安養寺跡・豆石山中世墓群・豆石山経塚群・五峰山2号墳』2004

（２）替田遺跡との関連で結縁寺の性格を考察したものに下記文献。小倉整「三重県津市南河路「小字結縁寺」についての一考察」『Mie　history』vol.16　2005

（３）三重県埋蔵文化財センター『六大Ａ遺跡発掘調査報告』2002

（４）島ヶ原村史編纂委員会『島ヶ原村史』1983

（５）河北秀実氏のご教示による

写　真　図　版

遺跡全景（東から、正面は長谷山）

遺跡東半部全景（西から）

図版 2

調査前風景（L区・O区　東から）

H区北側全景（西から）

H区東側全景（北から）

I区全景（西から）

図版 4

J 区北西側全景（西から）

J 区南東側全景（北から）

K 区北側全景（東から）

L 区全景（東から）

図版 6

L 区全景（西から）

L 区西側近景（北東から）

L 区中央部近景（北から）

L 区東側近景（北から）

図版 8

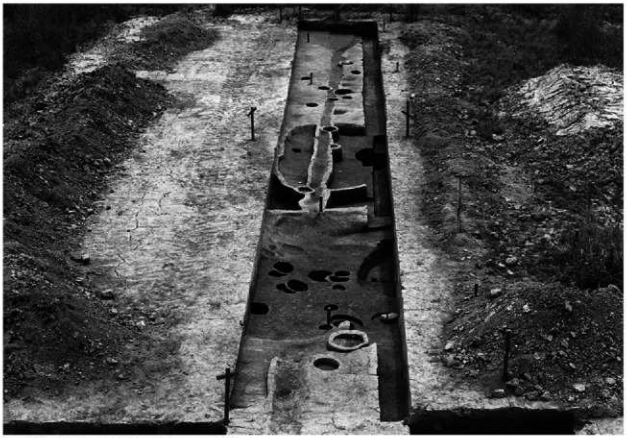
M区北側（東から）

M区東側（南から）

N区上層全景（西から）

N区下層全景（西から）

図版10



N区南への派生トレンチ上層全景（北から）

N区南への派生トレンチ下層近景（北から）

N区東端部全景（東から）

O区西側全景（東から）

図版12

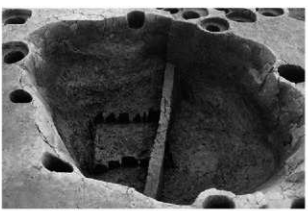
O区全景（東から）

P区全景（東から）

ＳＫ103（西から）

ＳＥ105（東から）

ＳＸ122（東から）


ＳＥ106枠材検出（北から）

ＳＥ106枠材埋土掘削（東から）

ＳＥ106掘形と枠材（東から）

ＳＥ106枠材内遺物出土状況（東から）

ＳＥ106横桟組方（北東から）

図版14

ＳＫ201（西から）

ＳＫ202（北から）

ＳＫ204（南から）

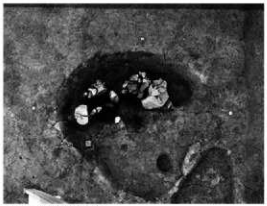
ＳＫ205（南から）

ＳＨ207（東から）

ＳＨ207近景（南から）

ＳＫ220（東から）

ＳＫ221（東から）


ＳＫ222（東から）

ＳＫ222近景（東から）

ＳＫ223（東から）

ＳＫ244（北西から）

ＳＫ244（北東から）

ＳＨ251石斧（139）出土状況（西から）

ＳＫ252（南から）

ＳＫ252遺物（190）出土状況（西から）

図版16

ＳＫ285（西から）

ＳＫ285遺物出土状況（北から）

ＳＫ304（東から）

ＳＤ340（北から）

ＳＥ327（左）・ＳＥ324（右）（南から）

ＳＥ324（東から）

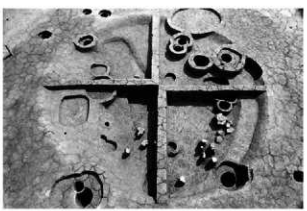
ＳＥ327（東から）

ＳＥ327完掘状況（東から）

L区全景（南東から）

ＳＫ204（南から）

ＳＸ229（北から）


ＳＨ230（東から）

ＳＫ233（東から）

ＳＫ233遺物出土状況（東から）

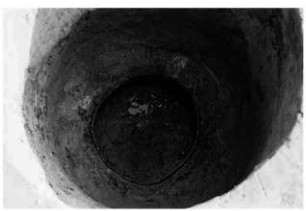
ＳＨ251（西から）

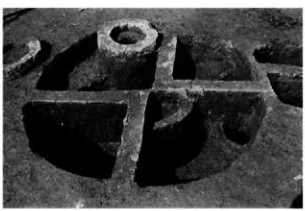
ＳＫ252（東から）

図版18

ＳＥ259埋土半截（北西から）

ＳＥ269（北から）

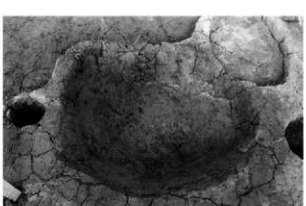

ＳＥ267（北から）


ＳＥ229（西から）

ＳＨ311（東から）

ＳＫ312（北から）

ＳＫ312遺物出土状況（東から）


ＳＫ315（南から）

ＳＥ324（東から）

ＳＥ327（東から）

ＳＥ327遺物出土状況（南から）

ＳＨ333（北東から）

ＳＫ335（北から）

ＳＢ343（東から）

ＳＫ234・235（東から）

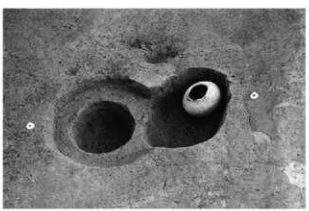
ＳＢ344（東から）

図版20

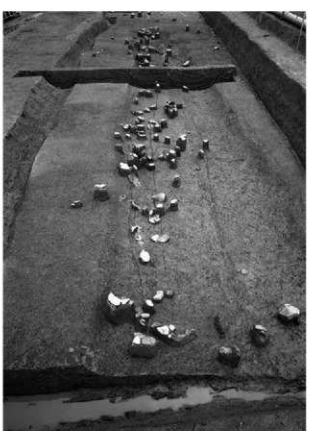
ＳＤ124（東南から）

Ｍ区南端調査区（北から）

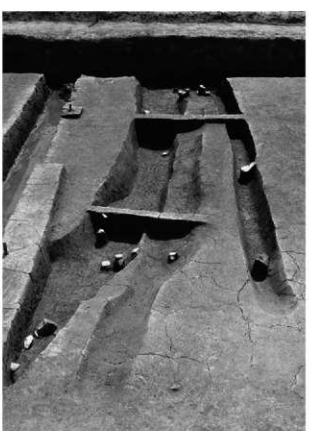
ＳＥ129（北から）



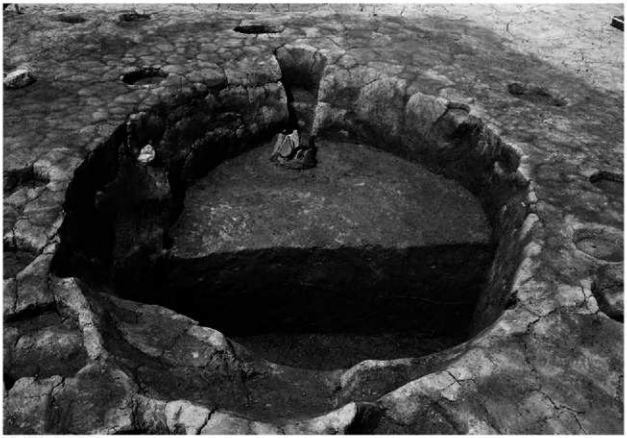
Ｊ区Ｐ４pit５遺物出土状況（西から）



ＳＤ514（東から）



ＳＤ516・518・519（北東から）



ＳＫ529（東から）

ＳＫ533（東から）

図版22

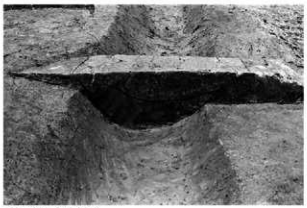
ＳＤ514遺物出土状況（西から）

ＳＸ537（東から）

ＳＸ537（東から）

ＳＫ525（北東から）

ＳＤ517網代出土状況（南から）



ＳＤ806（東から）

ＳＤ802（西から）

ＳＤ803下駄出土状況（南から）

ＳＤ802掘削中（西から）

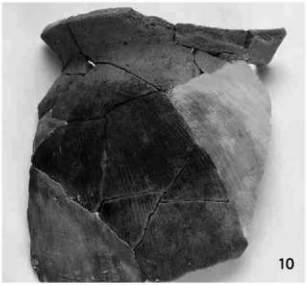
ＳＤ503東側（西から）

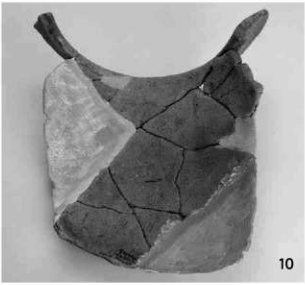
図版24

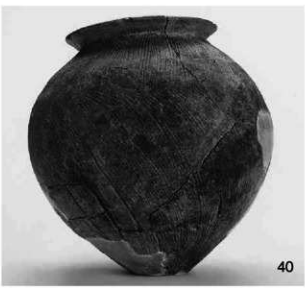
出土遺物18・81・116・179

出土遺物181・182・227・228

図版26



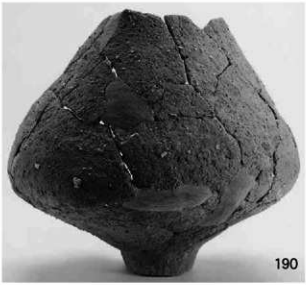


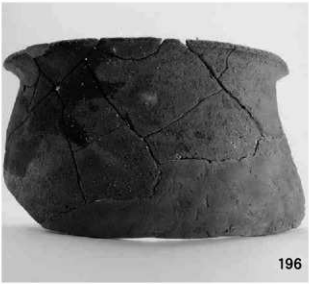


出土遺物10・10・37・40・67・117

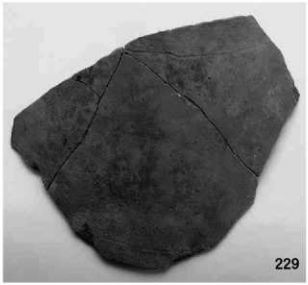
出土遺物124・125・149・180・183・186

図版28





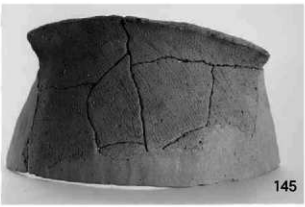
出土遺物190・196・197・199・204・211



出土遺物229・232・445・500・745・1003

図版30

出土遺物9・12・23・53・56・62・68・72・73・77



出土遺物91・118・119・121・122・143・144・145

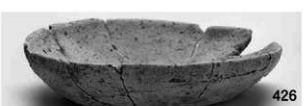
図版32

出土遺物147・148・162・163・164・164・167・168・169・189

出土遺物210・212・214・215・226・233・254・357

図版34

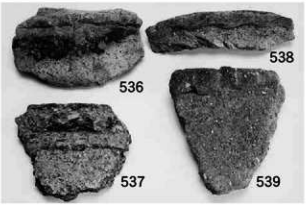
出土遺物369・370・371・376・379・382・383・402



出土遺物404・407・411・414・415・417・425・422・426・469

図版36

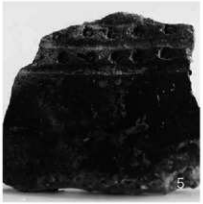
出土遺物430・431・443・444・448・490・501・510

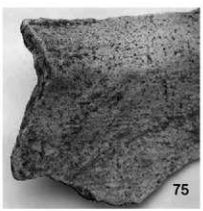


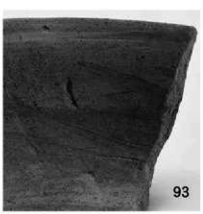
出土遺物536・537・538・539・547・548・551・560・575・667・686・700

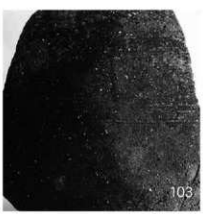
図版38

出土遺物720・736・739・741・854・856・859・1007



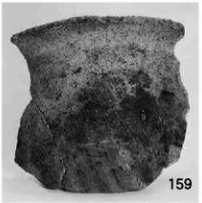


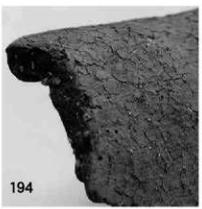


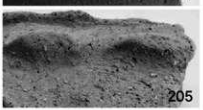


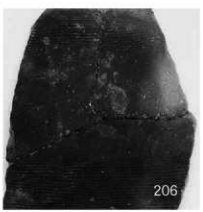
出土遺物1・4・5・11・27・34・36・63・75・93・103・129

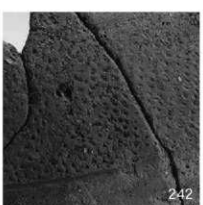
図版40



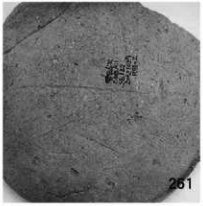


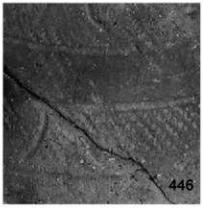






出土遺物142・159・161・166・194・201・205・206・207・221・225・242・243





出土遺物255・256・257・255・261・261・401・412・416・439・506・441・446・461・524

図版42

577

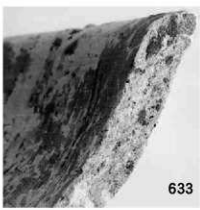
583

601

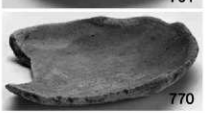
604

606

749


633

761


770

1144

840

842

出土遺物577・583・601・604・606・749・633・761・770・1144・840・842

687

883

884

688

701

885

886

887

1146

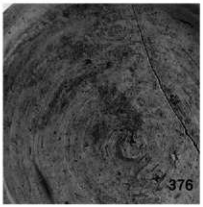
1147

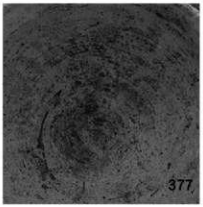
1238

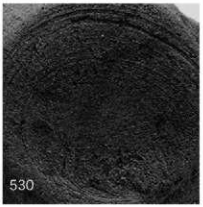
1238

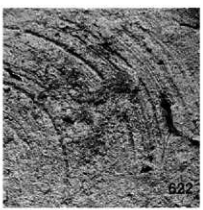
出土遺物687・883・884・688・701・885・886・887・1146・1147・1238・1238

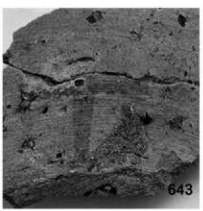
図版44

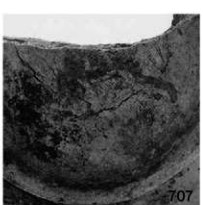


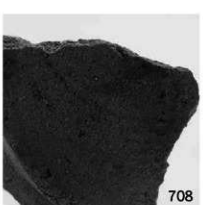


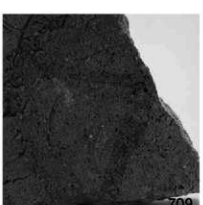




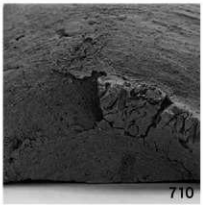


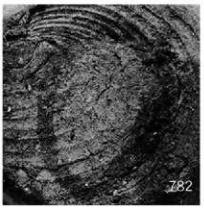


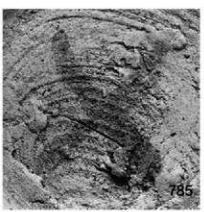


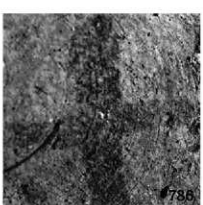


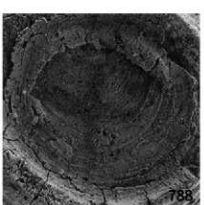
出土遺物376・377・530・622・623・624・643・676・677・678・707・708・709

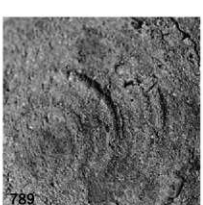


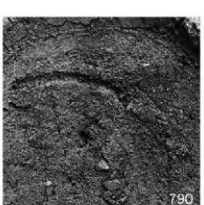






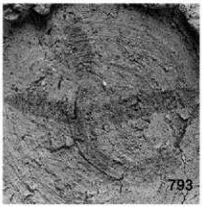


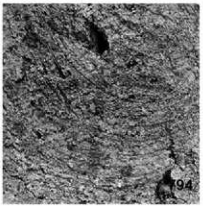


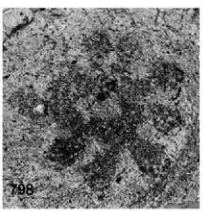


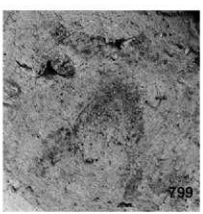
出土遺物710・781・782・783・784・785・786・787・788・789・790・791

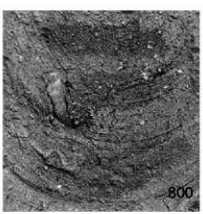
図版46

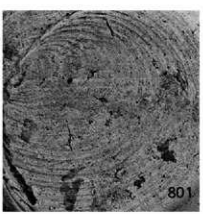


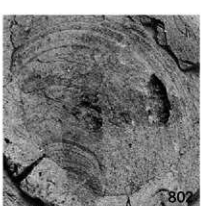


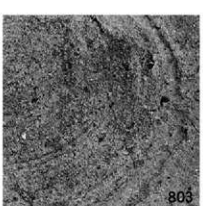




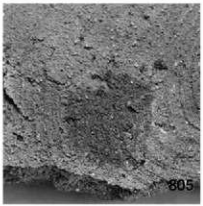


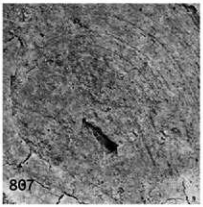


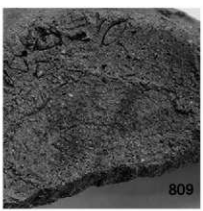


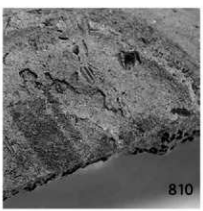


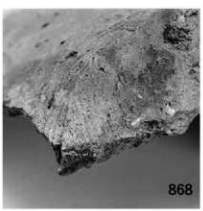
出土遺物792・793・794・795・796・797・798・799・800・801・802・803・804

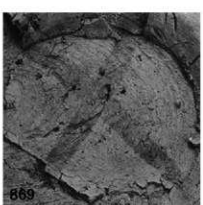


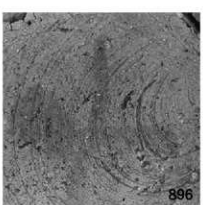


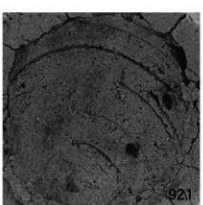


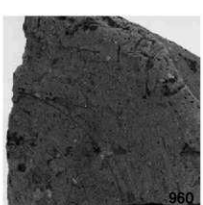


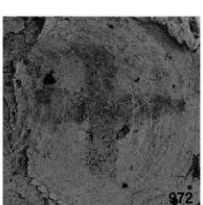


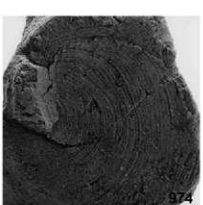






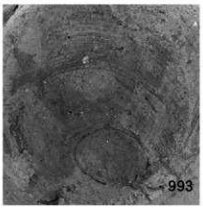


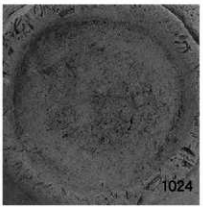


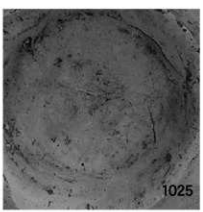


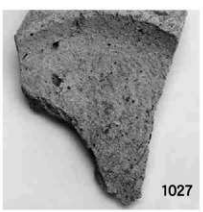
出土遺物805・806・807・809・810・868・869・896・921・960・972・974

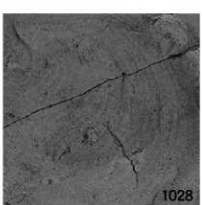
図版48

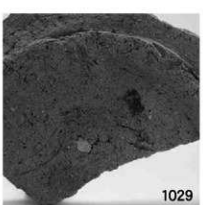


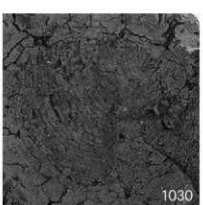


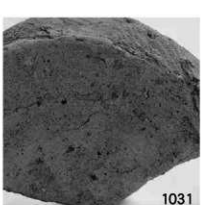


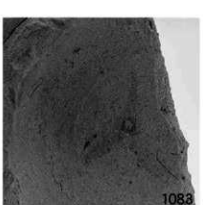


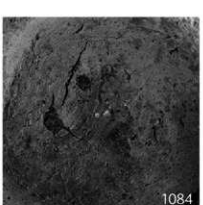




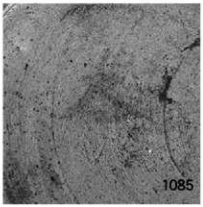


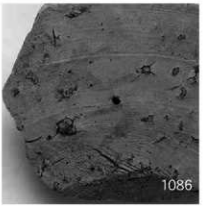


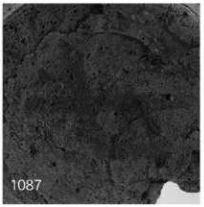


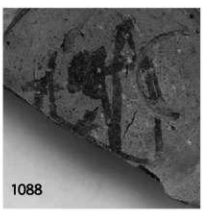


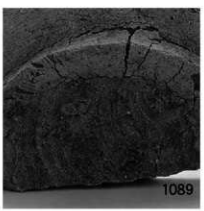
出土遺物976・993・1024・1025・1026・1027・1028・1029・1030・1031・1083・1084

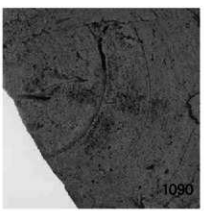


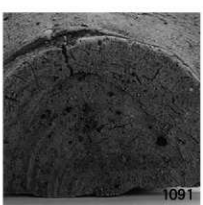


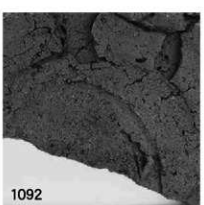


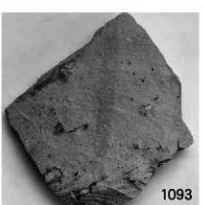


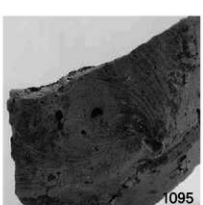


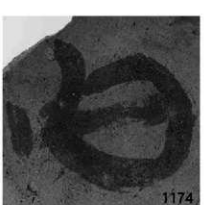






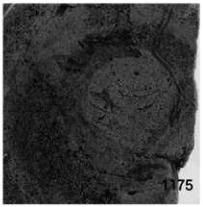


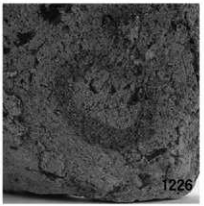




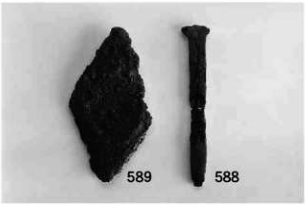
出土遺物1085・1086・1087・1088・1089・1090・1091・1092・1093・1095・1096・1174

図版50



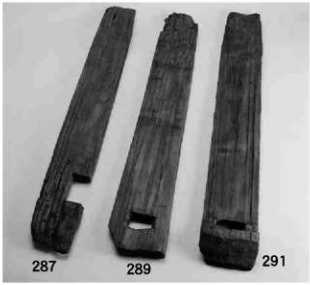


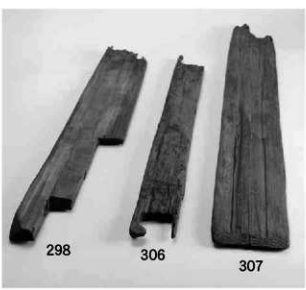
出土遺物1175・1225・1226・784・785・786・787・794・798

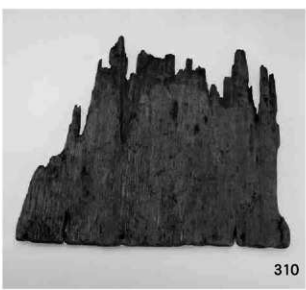


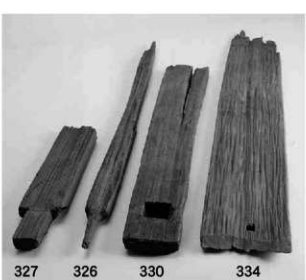
出土遺物589・588・1268・594・998・998・1155・1156・1273・1274・1275・1276

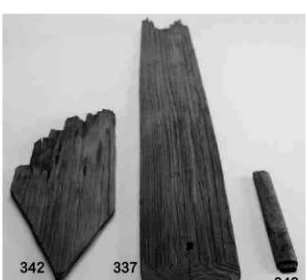
図版52







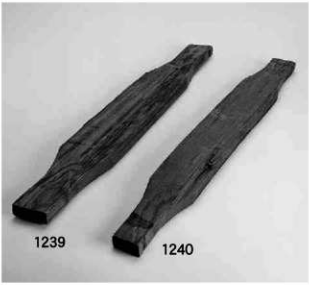


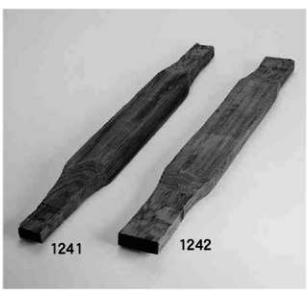


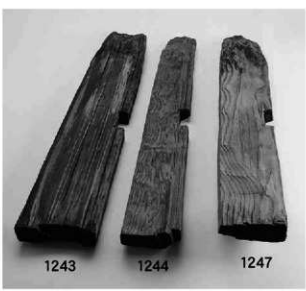
出土遺物273・287・289・291・298・306・307・310・327・326・330・334・342・337・349

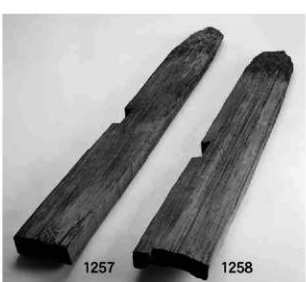
出土遺物348・713・909・909・910・910

図版54

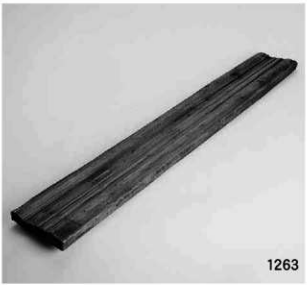






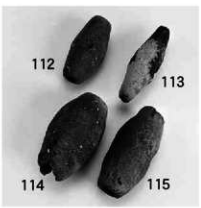


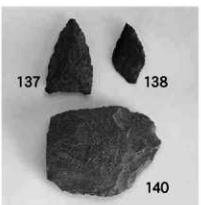
出土遺物1171・1239・1240・1241・1242・1243・1244・1247・1251・1257・1258

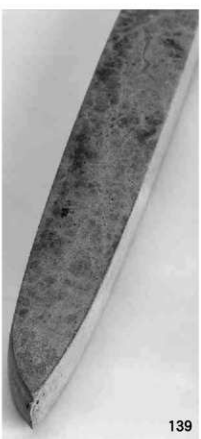


出土遺物1263・1264・1266・1267・1269・1272

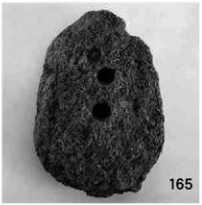
図版56







出土遺物6・80・88・112・113・114・115・131・132・133・134・137・138・140・139・141・151・152・153・158


165

174

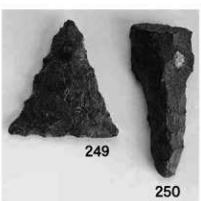
177 178

203

223

231

237


249 250

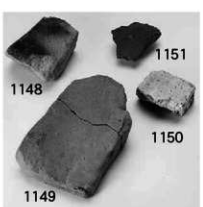
251

252

454

出土遺物165・174・177・178・203・223・231・237・249・250・251・252・454

図版58



出土遺物455・457・456・458・460・534・535・591・565・718・893・1148・1149・1150・1151・1152・1153・1154

報　告　書　抄　録

ふりがな	かえだいせき（だい５～だい８じ）はっくつちょうさほうこく
書名	替田遺跡（第５～第８次）発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	281
編著者名	穂積裕昌・伊藤裕偉・石井智大・野嶌美沙子・川崎志乃・酒井巳紀子
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒５１５－０３２５　三重県多気郡明和町竹川５０３　℡０５９６－５２－１７３２
発行年月日	西暦　２００７年　３月２８日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
かえだいせき 替田遺跡	つしみなみこうじ 津市南河路	24201	759	34度43分10～16秒	136度28分56～57秒	20011012～0020215・20020701～20021128・20030516～20030916・20040518～20040827	5,521㎡	国道163号バイパス整備事業（国道163号国補特殊道路改良事業、国道163号南河路ＢＰ国補特殊道路改良事業）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
替田遺跡	集落跡	弥生中期・古墳時代前期・古代・中世	竪穴住居・掘立柱建物・井戸・土坑・墓・流路・溝	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・山茶椀・常滑・青磁・白磁・瓦・木製品・鉄製品・石器・石製品	弥生中期前葉の集落と、古代末ないし中世前半の寺院周辺の集落

三重県埋蔵文化財調査報告281

替田遺跡（第５～第８次）発掘調査報告

2007（平成19）・3

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　㈲山文印刷